

## 11 宝城院

### (1) 沿革と配置

**沿革** 宝城院は、高野山山内の西部、壇上伽藍の北の高台に位置する。仁安4年(1169)、後白河法皇登嶺の際に阿闍梨を置かれた由緒ある坊で、かつては成佛院と称していた。寛永9年(1632)に改号し現在の宝城院とする。

**配置** 正面中央に表門が開き、表門を入った正面に玄関付の客殿及び庫裏が接続する。客殿の東方には、本堂及び護摩堂が西面して建ち、表門の東西には、昭和後期頃に建てられた座敷や会下などが建ち並ぶ。『名利誌』には享保年間の再建と記されるが、現存するもののうち、赤穂城から移築されたと伝わる表門は18世紀前期建立とみられ、本堂及び護摩堂と客殿及び庫裏は18世紀後期の様相を示す。

### (2) 本堂及び護摩堂

**構造形式** 本堂：桁行3間、梁間6間、入母屋造、銅板葺、北面護摩堂接続、護摩堂：桁行3間、梁間3間、切妻造、銅板葺

**建立年代** 18世紀後期(技法・意匠)

**概要** 本堂及び護摩堂は境内南東部に西面して建つ。本堂は桁行3間、梁間6間、入母屋造、銅板葺の奥行が深い建物で、正面中央に1間向拝が付く、北面に前面1間後退する位置に、桁行3間、梁間3間、切妻造、銅瓦葺の護摩堂が接続し、北端には客殿が接続する。本堂は3間四方の外陣の後方に3間四方の内陣が接続する平面構成をもち、正面に1間の切目縁を巡らし、正面中央に5級の木階を設ける。

建立年代を示す明確な史料はないが、後述する通り虹梁絵様の様式からみて18世紀後期の建物と考えられる。

**本堂基壇・基礎** 割石を外装とした低い基壇上に位置し、基壇上面は碎石を敷き詰める。さらに縁下に納まるコンクリート外装をもつ基壇を築き、礎石を据え、周囲に割石の縁東礎石を据える。

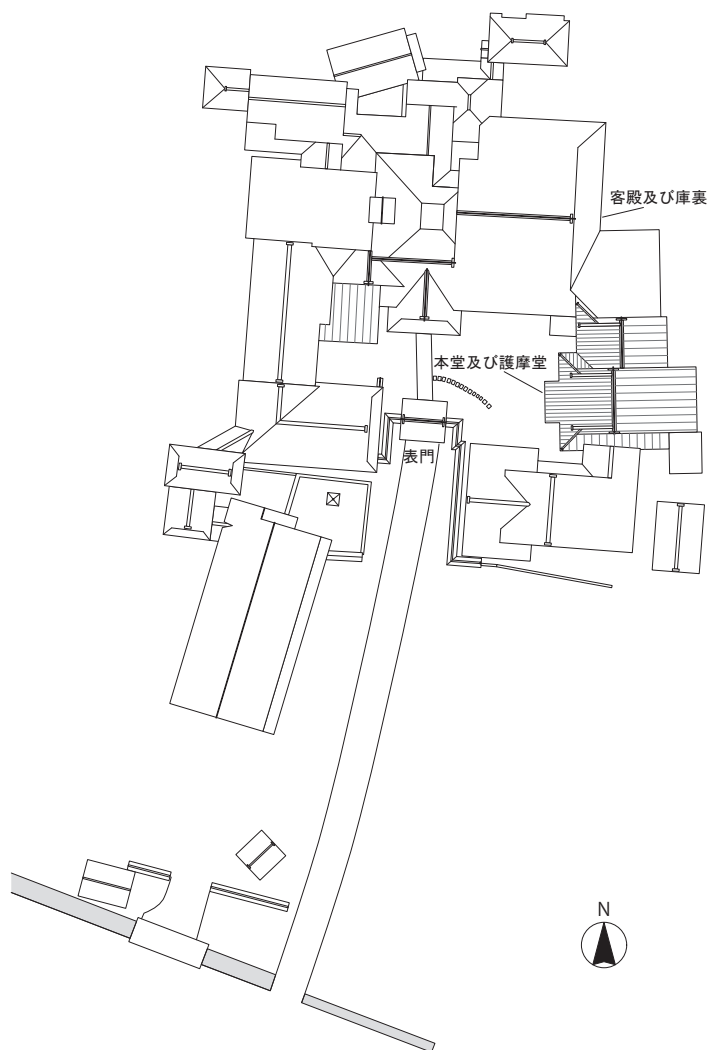


図 679 宝城院配置図 1:1000

**本堂側まわり** 礎石上に方196mmの糸面取角柱を立て、切目長押、内法長押、拳鼻付頭貫で固める。組物は出組で、実肘木を入れて出桁を受ける。内部に彫刻を嵌めた藁股を中備として、通肘木を受け、出桁間に雲文を施した板支輪を入れる。隅木は、地隅木・飛檐隅木ともに鼻先を拳鼻状に造る。軒は二軒繁垂木とする。縁には、擬宝珠高欄を巡らす。

**向拝** 向拝は礎石の上に礎盤を据え、上下端に棕を付けた角柱を立て、虹梁形頭貫で繋ぎ、丸彫りの象鼻を付ける。虹梁絵様は、正面は雲形で、背面を渦としており、18世紀後期の様相を示す。象鼻の頭部に皿斗付の送斗を乗せ、組物は実肘木付の連三斗で、向拝桁、手挟みを入れる。頭貫の中央には全体に龍の彫刻を施した藁股を乗せる。軒は、主体部

からの打越垂木の一軒とする。

**本堂外陣** 外陣は、背面中央間に虹梁形内法貫を入れ、背面中央間以外は内法長押を打ちつけ、柱天に直接、天井桁を据え、折上小組格天井を受ける。背面中央間の虹梁形内法貫は背面に内陣を増築した際の後補材で、当初は他の柱間と同様、内法長押が巡っていた。床は、24 畳半の畳敷である。

柱間装置は、正面外側の中央間に双折棧唐戸、脇間に薙戸を入れ、各間の内側に障子を入れる。両側面は、正面寄りの1間に引違いの板戸を入れ、それ

以外は現在、建具を入れていないものの、側面の背面側1間と、背面の脇間には腰長押と壁板の取り付け痕跡があり、当初この板壁だったことがわかる。また、背面中央間は、上述の通り虹梁形内法貫を入れ、開放としているが、当初は内法長押を巡らしていた。

**本堂内陣** 内陣は中央背面寄りに、来迎壁をもつ禅宗様須弥壇を据え、本尊として大日如来坐像を祀る。側面中央間以外の柱間寸法を2,100 mm程度とするのに対して、側面中央間のみ1450 mmと狭い。材は



図 680 宝城院本堂及び護摩堂正面



図 681 宝城院本堂軒下



図 682 宝城院本堂軒下見上げ



図 683 宝城院本堂軒まわり



図 684 宝城院本堂向拝詳細



図 685 宝城院本堂向拝持ち送り

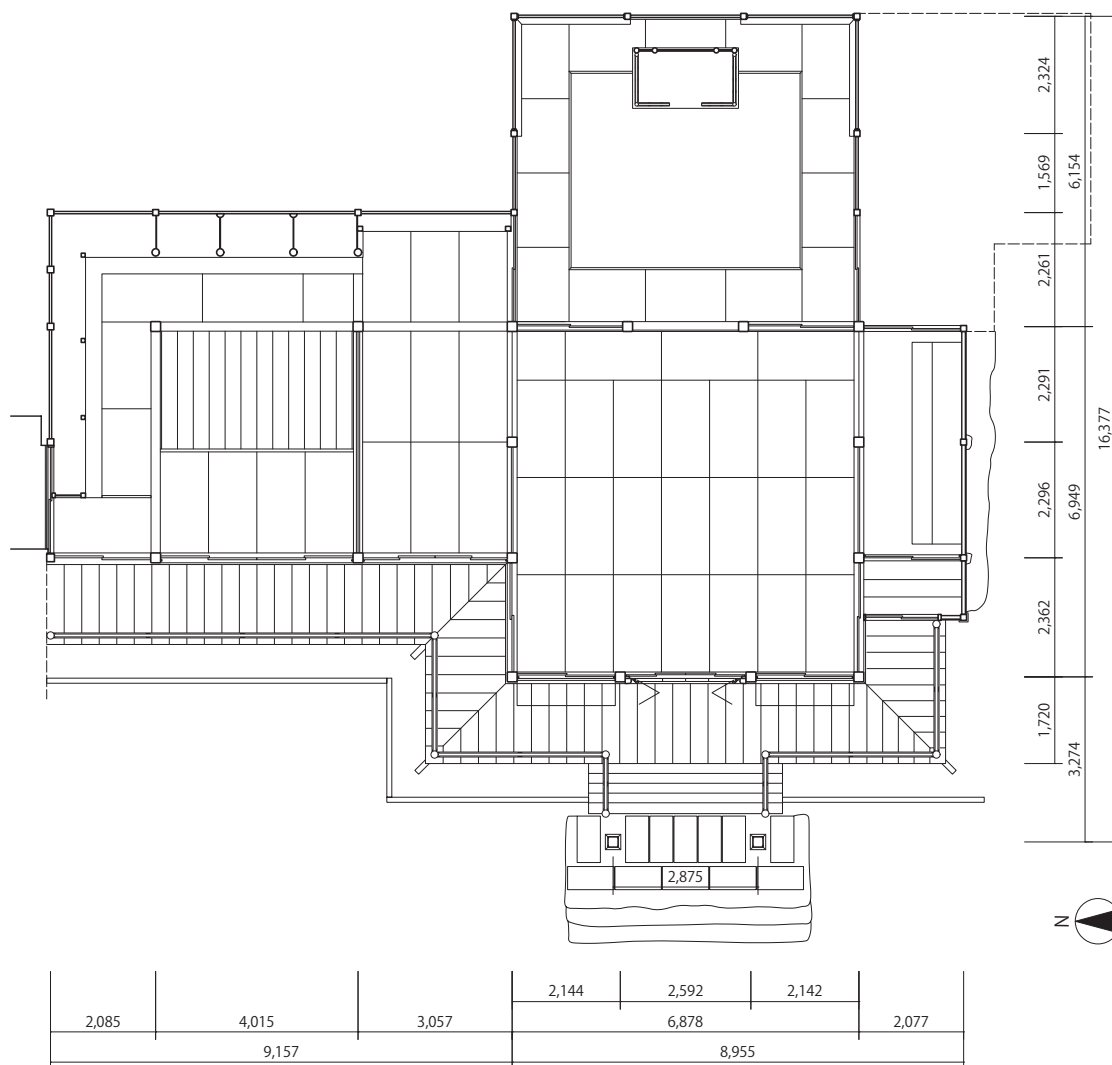


图 688 宝城院本堂及び護摩堂平面图 1:150



图 686 宝城院本堂外陣



图 687 宝城院本堂外陣背面中央間虹梁形内法貫

いずれも新しく、近代に増築されたものと考えられる。背面入隅各1間に奥行の深い腰長押をうち、八祖棚とし、壁面に真言八祖を祀る。

当初、外陣の背面入隅各1間設けていた八祖棚を、内陣の背面入隅各1間を同寸法とすることで、増築の際に移動したと考えられる。須弥壇も古いものであり、本堂建立当初のものを増築に際して、移動させたものとみられる。奥行全長の寸法は敷地形状の都合により桁行と同規模に取ることができず、側面中央間の柱間を短くして対応したのだろう。

軸部は柱天で直接、天井桁を据え、折上格天井を受ける。床はリノリウムで、各面に畳を敷きまわす。

小屋組をみると、背面側の内陣増築に際して、当初の棟木位置を変更せず、背面側の屋根勾配を緩くすることによって納めたことがわかる。

**護摩堂基壇・基礎** 本堂と一連の割石外装をもつ低い基壇上に、縁下に納まるコンクリート外装の基壇を築き、礎石を据え、前面に割石の縁束礎石を据える。

**護摩堂側まわり** 礎石上に、方約196mmの糸面取角



図 691 宝城院本堂内陣

柱を立て、切目長押及び内法長押、虹梁形頭貫で固める。組物は本堂と同じ出組とするが、中備位置にも出組を入れ、さらに組物間に彫刻入りの墓股を置いており、本堂よりも装飾が豊富である。軒は本堂と一連で、隅木の造形も同様である。

**内部** 護摩堂内部は、中央間に護摩壇を据え、その南の本堂との接続部分を1間半分取り、背面寄りに仏壇を構える。天井は折上格天井で、正面から2間目(本堂外陣の背面柱筋)に持送りを備えた虹梁形内法貫をいれる。護摩壇を据える方1間は虹梁形頭貫で固め、柱天及び頭貫に直接、天井桁を据えて二重折上格天井を受ける。北面及び東面の壁には位牌棚を造り付け、位牌を安置する。位牌棚まわりには、金欄卷や文様彩色を施し、黒漆及び朱漆で塗装する。

護摩堂は、本堂内陣との納まりに不自然な部分はなく、絵様の形式や部材の風食度合から建築年代に差もないことから、一連の造営によるものと考えられる。

**まとめ** 以上のように本堂及び護摩堂は、現在の本堂外陣と護摩堂が18世紀後期に建立されたもの



図 692 宝城院護摩堂相の間



図 689 宝城院護摩堂側まわり



図 690 宝城院護摩堂虹梁形頭貫

で、その後、近代に入り、本堂背面が増築されたものと考えられる。18世紀後期から近代にかけての高野山の寺院本堂のあり方を考える上で、重要な建物といえる。



図 693 宝城院護摩堂位牌棚



図 694 宝城院護摩堂相の間背面中備墓股



図 695 宝城院護摩堂位牌棚見上げ



図 696 宝城院護摩堂内陣



図 697 宝城院護摩堂内陣桁行虹梁形頭貫絵様



図 698 宝城院護摩堂内陣梁行虹梁形頭貫絵様



図 699 宝城院護摩堂仏壇見上げ

### (3) 客殿及び庫裏

**構造形式** 桁行 30.9 m、梁間 22.6 m、複合屋根、銅板葺

**建立年代** 18 世紀後期（技法・意匠）

**概要** 客殿及び庫裏は、表門を入った正面に南面して建つ。東に客殿、西に庫裏が建ち、客殿西寄り正面に玄関が取り付く。建立年代を明確に示す史料はないものの、後述する通り、様式からみて 18 世紀後期の建立とみられる。

**玄関** 玄関突出部は、入母屋造、銅板葺、妻入で、桁行 2 間、奥行 1 間の規模もつ。東西に延びる縁を挟んで、正面に 12 畳半大の板敷の間があり、式台と板敷の間を総称して「ゲンカン」と呼んでいる（以下、玄関とする）。玄関突出部の軸部は、方 215 mm の柱頂に粽付をもつ几帳面取角柱を立て、頭貫と台輪で柱間を繋ぐ。正面のみ、これらの代わりに上面

が肘木下端に達する成の高い虹梁形頭貫を渡す。したがって隅部分の木鼻は、装飾として付加されたものである。虹梁形頭貫の絵様は、18 世紀後期の様相を示す。柱上には、実肘木付の出三斗を据え、桁を受ける。内部は、桁高に格天井を張る。軒は二軒疎垂木で木舞を打つ。

**客殿** 玄関の式台を上がると、東西に延びる広縁があり、さらに前述した板敷の間が続く。広縁部分には竹の節欄間を入れる。板敷の間は縁に対して引き違いの腰高障子を入れ、その上部の小壁には虹梁型の差鴨居を間口いっぱい架ける。そのほかの三面は引き違いの杉板戸とする。内部は蟻壁を設け、内法長押、蟻壁長押を回す。天井は竿縁天井とする。式台の西側は 2 間幅の小玄関を設ける。

玄関の西は 8 畳大の部屋で、現在は寺務所として

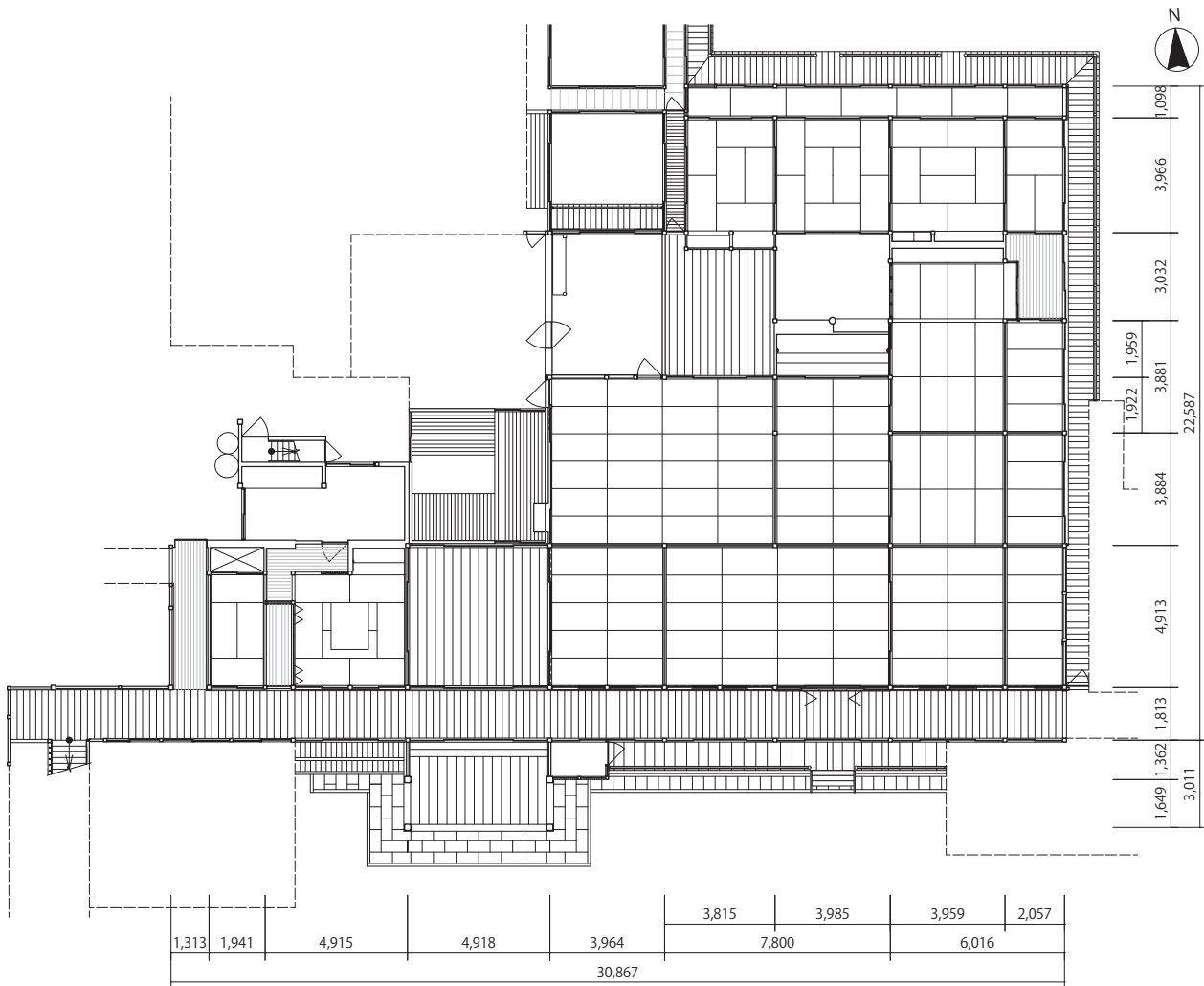


図 700 宝城院客殿及び庫裏平面図 1:250

いる。背面側に床を設け、内部は長押を回すが、近年大きく改修がおこなわれて、物置や天井などは新しい。

寺務所の北側は台所となる。台所まわりは近年大きく改修されており、間取りも変更され、壁や床はクロスやフローリングなどに変更されている。改変前の状況を示すものとして、かまどと神棚が残されている。

玄関より東は客殿となる。客殿は、南面に広縁と落縁を、東面と北面に半間の濡れ縁をとる。東面の



図 701 宝城院客殿及び台所

広縁は前述の通り玄関の式台を上がって東西に延びており、西は会下へ、東は護摩堂へと接続している。また、客殿の部分のみ半間の落縁をつくり、高欄を設け後述する「広間」の双折戸に対応して上がり段を設けている。東面及び北面の濡縁は、半間幅で、いずれも擬宝珠高欄をまわす。これらの縁に囲まれた内部を西から2間・2間・2間・2間・1間の5列に割り、南北方向は、西から3列を、南から2間半、3間、2間半、2間、東2列を2間半・2間・2間・1間半・2間に割り各室をつくり、北端の半



図 702 宝城院客殿板敷の間



図 703 宝城院客殿広縁



図 704 宝城院客殿玄関虹梁形頭貫



図 705 宝城院客殿板敷の間虹梁形飛貫



図 706 宝城院客殿寺務所

間は畳敷きの内縁とする。玄関の東隣りの東西3列、南北2列の6室分に仏壇の部屋を加えた7室は「広間」、東側の2列分、南北4列の8室分は「上段の間」、北面の列は東から「奥書院」「中書院」「裏書院」と称し、書院の列と広間の間は物置とする。

「広間」は、玄関のすぐ東に位置し、縁に面した南側の10畳大の部屋3室と、北側の12畳大の部屋3室、さらに西から3列目は仏壇の部屋1室を加えた7室で構成される。内部は南北の部屋境に柱を立て、東西は南列の西から1・2室の境、北列は2・1室

の境にのみ柱を立てており、実質は4室に分けている。間仕切りを用途に合わせて入れることにより、部屋の大きさを自在に変化させるためとみられる。建具は広縁に面して、外側に舞良戸、内側に明障子を入れるが、西から3列目のみ内法を高くして外側に双折棧唐戸を入れ、障子の上部には欄間を入れる。内部は外周を襖障子とする。蟻壁を設け、内法長押、蟻壁長押を回し、天井は、南2室は竿縁天井、北2室は船底天井とする。

「上段の間」は「広間」の東の部屋で、東に1間の



図 708 宝城院庫裏台所



図 709 宝城院客殿広間南列



図 710 宝城院広間北列



図 711 宝城院客殿上段の間



図 712 宝城院客殿奥書院

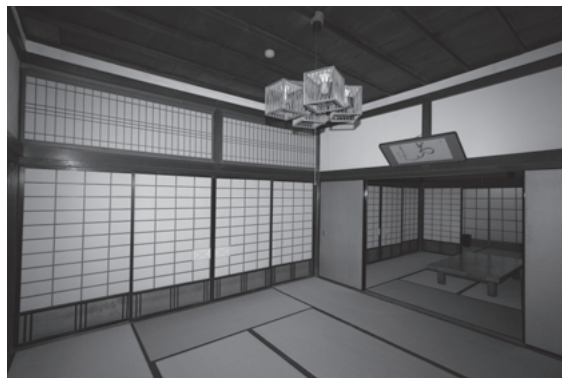


図 707 宝城院客殿中書院



鞘の間をともなった部屋が南北に3列並び、その北に一段床高を上げ上段とする。上段は、背面間口いっばいに床の間を構え、西面に帳台構え、東面に付書院を設ける。天井は格天井で、蟻壁を回し、内法長押、蟻壁長押を打つ。その南の2室は部屋境に箆欄間を入れ、天井は格天井とし、蟻壁をつくり、内法長押、蟻壁長押を回す。南端の1室と東の鞘の間はすべて竿縁天井で蟻壁を設けない。「広間」側の襖はすべて金箔が施されており、上段の間としてふさわしいように荘厳されている。

北側の内縁に面しては、座敷が3室東西に並ぶ。「奥書院」は、8畳大の部屋で、上段の間の背面に位置する。内部は南面に床と棚を構え、上部に蟻壁をつくり、内法長押、蟻壁長押を回し、天井は竿縁天井とする。建具は東面と南面は腰高障子とし、西面は襖障子とする。「奥書院」の西は8畳大の「中書院」とする。内部は内法長押、蟻壁長押を回し、建具の襖にも金箔を用い豪華な意匠とする。天井は竿縁天井とする。「中書院」の南の部屋は6畳大で、現在物置として使用されているが、南面に床を設けて

おり、「中書院」との部屋境は金箔を貼った源氏襖を入れ、上部にも箆欄間を入れており、当初はこの2室を合わせて書院として使用していたようである。「中書院」の西は「裏書院」で、6畳大の部屋の南面に床と棚をつくる。面皮付の床柱を用い、天井も小組天井とし、蟻壁も設けていない。前述の2室に比して、形式をやや崩して整えられている。

客殿まわりの柱は、糸面取角柱で見付幅は約140mmを基本とする。基本的な構造に大きな改変はないが、「広間」の船底天井や、その北側の物置部屋周辺は近年に改変されている。

**まとめ** 宝城院客殿及び庫裏は、建立年代は明確ではないものの、18世紀後期の建立とみられ、高野山の寺院のなかでも比較的規模が大きい。突出する玄関の正面に板敷間をもち、これを挟んで客殿と寺務所をもつ構成、客殿の平面構成など、東西の関係は逆転するものの、金剛峯寺大主殿の構成とも通じる。高野山の寺院客殿として、貴重な建物といえる。



図 713 宝城院客殿裏書院



図 714 宝城院客殿縁板戸



図 715 宝城院客殿奥書院



図 716 宝城院客殿小屋組

(4) 表門

**構造形式** 一間一戸四脚門、切妻造、銅板葺

**建立年代** 18世紀前期 (技法・意匠)

**概要** 表門は、境内の南面に開く、一間一戸四脚門で、切妻造、銅板葺の屋根をもつ。寺伝では、赤穂城の裏門を約200年前に移築したという。様式からみても後述する通り18世紀前期の建立とみられ、寺伝と合致する。

**構造・意匠** 低い切石を敷いた基礎の上に、石製の唐居敷を置き、丸柱の親柱を立て、控柱は、切石の礎石上に礎盤石を置き、その上に几帳面取角柱を立てる。柱は、腰貫、腰長押、木鼻付の頭貫で固め、親柱の柱上には冠木を乗せる。組物は実肘木付の出三斗で、控柱間の虹梁形頭貫の中央には、中備として彫刻を施した墓股を据えて、桁を受け、直行して虹梁を架け、虹梁上の大瓶束と冠木中央に乗せた束で棟木を受ける。虹梁の絵様は、18世紀前期の様相を示す。

親柱に方立を寄せ、扉は板棧戸とし、木製の蹴放を唐居敷間に嵌める。軒は二軒疎垂木で、垂木小口

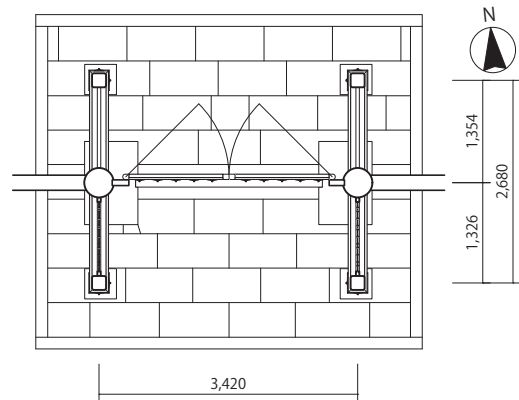


図 717 宝城院表門平面図 1:100

に胡粉を塗る。虹梁上の大瓶束は、足元が細く、蕾型をなした特徴的な形状をもつ。また、冠木中央の円束には、笈型として唐獅子と牡丹の彫刻が墓股に施された彫刻が付されている。中備の墓股の彫刻も含めて、彫刻の質は高い。

**まとめ** 宝城院表門は見ごたえのある架構をもつ本格的な四脚門である。赤穂城からの移築の真偽は明らかでないものの、様式からみて18世紀前期の建立とみられ、高野町の門建築としては比較的早く貴重である。(大林 潤)



図 718 宝城院表門正面



図 719 宝城院表門背側面



図 720 宝城院表門架構見上げ



図 721 宝城院表門虹梁形頭貫絵様

## 12 西南院

### (1) 沿革と配置

**沿革** 西南院は大門通りの南側西端付近に位置する。開基は真然大徳とされ、保延4年(1138)に平等房永厳が私堂を構えたことを草創とする平等心院と、文治5年(1189)に統合された。『名刹誌』によれば、明治3年(1870)に本堂や鐘楼など多くの建物を火災で焼失しており、その後再建された。本堂は明治34年(1901)に再建された。

現在の境内は、昭和50年代建立の表門が通りに北面して開き、表門をくぐった正面に本堂が北面する。本堂の西方には、渡廊下で坊舎群が繋がる。本堂及び坊舎で囲まれた中庭は重森三玲により作庭されたもので、その南の高台には経蔵が北面して建つ。また本堂の裏手、南東方には洋館が建つ。その他、境内に建つ多くの建物群は、昭和期以降に建てられたものである。

### (2) 本堂

**構造形式** 桁行6間、梁間4間、入母屋造、檜皮葺、一部銅板葺

**建立年代** 明治34年(聞き取り)

**概要** 西南院本堂は西南院の南東部に、北面して建つ桁行6間、梁間4間の入母屋造、檜皮葺の建物で、正面西寄りに向唐破風造の向拝を付ける。1970年代に建物の東隣に大広間が増築され、これにともない本堂の南・西部も、坊舎から大広間へ至る廊下に改造されている。

聞き取りによると現在の本堂は明治初頭より約



図 722 西南院本堂正面側面

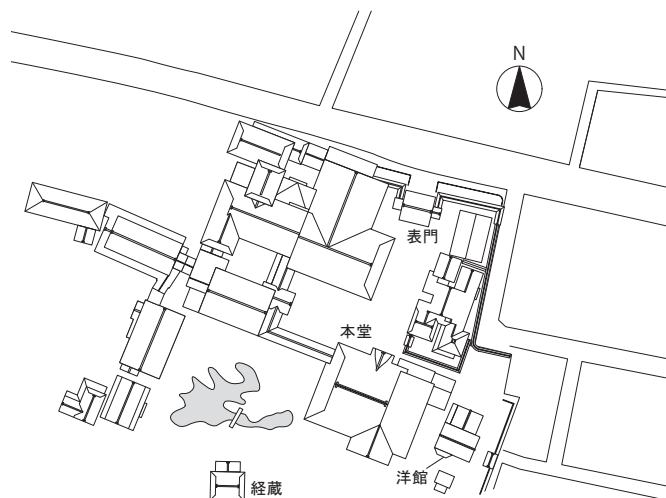


図 724 西南院配置図 1:2000

30年かけて建立し、明治34年(1901)に完成したものだという。『名刹誌』によると明治3年(1870)に本堂が焼失して仮本堂を建てており、明治24年(1891)成立の『高野山寺院明細帳』でも仮本堂がみられ、後述の通り、本堂の各所に入れられる虹梁形頭貫の絵様や彫刻の様相からも、この建立年代は妥当である。また、擬宝珠に昭和25年ないし26年の重森三玲による作庭を記念する銘があり、この時に本堂の縁まわりに改修が入れられた可能性がある。

**側まわり** 本堂は、東隣に大広間が増築され、西側面・南背面も縁が廊下に改造されるなど、正面とそれ以外で形式の違いが著しい。本項では、北正面と南背面・西側面に分けて述べる。

正面側の基礎は、乱石積基壇の上に自然石の礎石を据える。土台を巡らし、面取角柱を立て、土台と縁との間は格子でふさぐ。縁上は半長押付きの切目長押、半長押付きの内法長押、木鼻付の頭貫で固め、



図 723 西南院本堂側まわり

柱上には線形付きの台輪を載せ、実肘木・木鼻付きの平三斗を受け、中備は用いない。頭貫は、西から2間目と5間目のみ虹梁形とする。柱間装置は、正面に中折れの棧唐戸を藁座で吊り込み、東張出部のみ壁とする。基壇の周囲には切石礎石を巡らし、縁束を載せる。主屋正面には縁をもうけ、擬宝珠高欄を取り付ける。正面の東から3間目に4級の木階を付け、その下に1級の石階を取り付ける。軒は二軒繁垂木で反り増しはなく、飛檐垂木の扱きもない。飛檐隅木には風鐸を吊る。また木部には塗装を施し、



図 725 西南院本堂向拝軒下見上げ



図 726 西南院本堂高欄擬宝珠銘



図 727 西南院本堂外陣

とくに虹梁形頭貫や木鼻には極彩色を施す。垂木先には金具を付ける。

西側・南背面の基礎は自然石の礎石を据え、礎石間に地覆石を巡らす。礎石には角柱を立てるが、敷居・鴨居が入れられるのみで、軸部を固める部材は確認できない。また、柱上に桁は載せておらず、一部の垂木や隅木が挿されるのみである。一方で、柱の外周に桁が巡らされる。この桁を支える部材は外観では確認できないが、小屋裏の桔木などで吊っているものと推測される。柱間装置はガラス戸。軒は直材の一軒疎垂木で断面を六角形とする。妻は狐格子で、懸魚は燕懸魚を吊る。なお西側面の北半部は本堂の軒下に回廊を接続しているが、西側面の南半部、南背面部は軒を葺き下ろし、その下部を内部に取り込み、廊下としている。

**向 拝** 向拝は切石の礎石の上に石製礎盤を据え、上下に粽を付けた几帳面取角柱を立てる。柱上部で猿の彫刻を施した木鼻を付けた虹梁形頭貫で軸部を固め、柱上には皿斗・実肘木付きの連三斗を置き、桁と菖蒲桁を受ける。中備は実肘木付きの本藁股である。桁は柱間を虹梁形に造り出す。この桁より外側にのみ輪垂木が付され、主屋側は飛檐垂木を打越垂木としている。また、主屋との間には繋材はなく、菖蒲桁の後端を手挟に造り出して処理する。なお菖蒲棟と虹梁形の桁の間には小壁を入れて処理し、菖蒲棟を支える部材は外観に現れない。なお、虹梁形の頭貫や桁、藁股、木鼻、兎の毛通しは極彩色とし、菖蒲棟と虹梁形の桁の間には



図 728 西南院本堂外陣虹梁形内法貫絵様

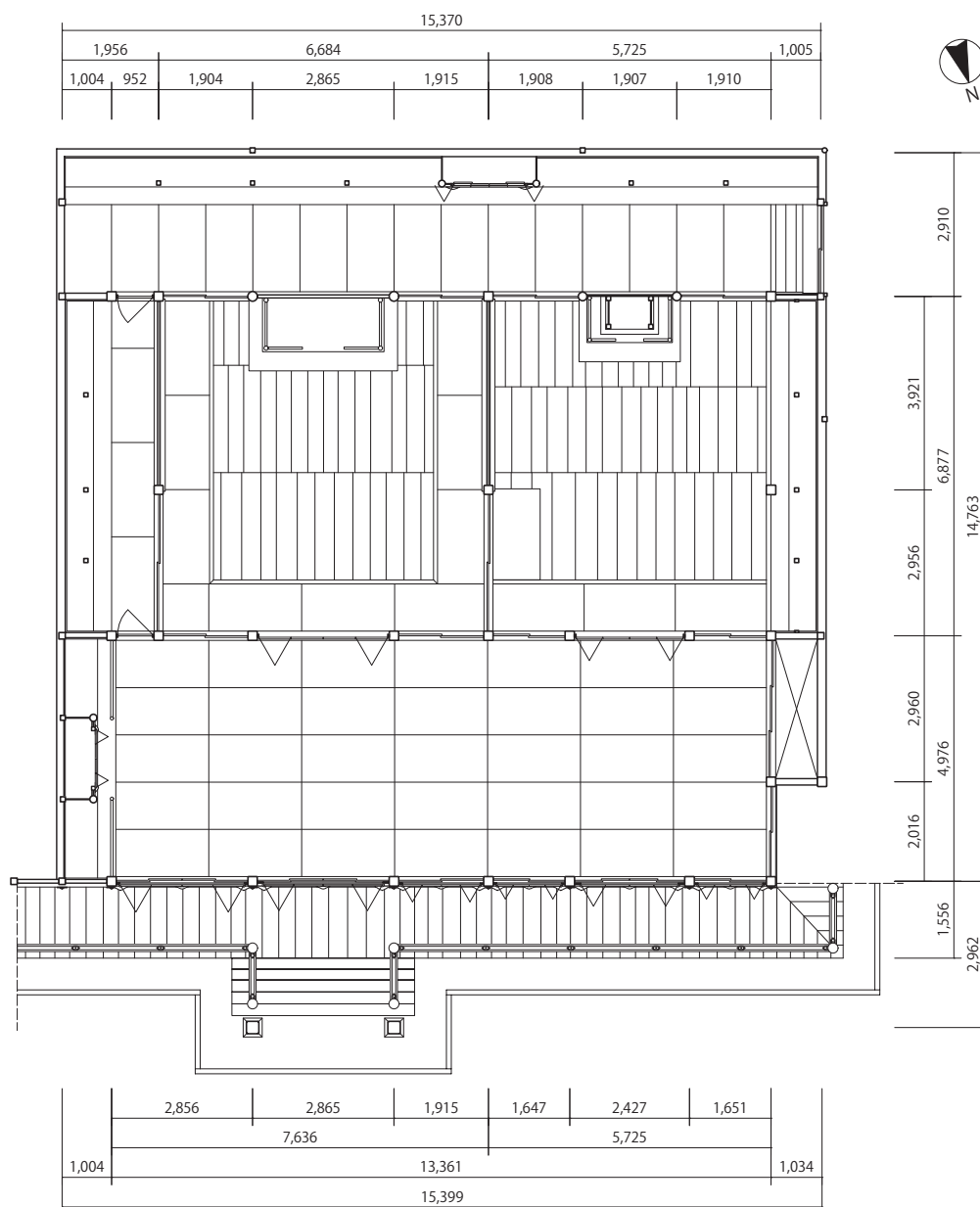


図 729 西南院本堂平面図 1:150

鳳凰を極彩色で描く。

**平面及び内部** 本堂の平面は特殊な構成をとっており、5室に大別できる。正面側2間を外陣とし、その後方2間分を内陣に、さらに奥に張出部を設け、後陣とする。内陣は東西2つに区別され、東の内陣には金剛界大日如来を、西の内陣には大元帥明王を安置する（便宜的にそれぞれ東内陣、西内陣と呼称する）。東内陣の東方には脇陣をもうける。

外陣は畳を敷き詰め、天井を格天井とする。東張出部を仏壇とし、厨子を造り付け、金剛界大日如来など諸仏を安置する。この仏壇上方には虹梁形内法貫を入れる。

東内陣は朱漆の拭板敷に、北・東・西の三方に畳

を追い廻しに敷く。中央後方には禅宗様須弥壇を置き、金剛界大日如来と厨子2基を安置する。須弥壇後方は、内陣後方の柱筋に粽付きの円柱を来迎柱として立て、虹梁形頭貫で固め、背面には半長押付の内法長押を打つ。柱上部には獅子鼻を入れる。柱上には木鼻・実肘木付きの平三斗載せ、実肘木付きの平三斗を載せ、桁を受ける。桁上には蟻壁を巡らし、折上格天井とする。なお来迎柱以外の柱は半長押付きの内法長押で固め、組物を介せず直接桁を受けている。両側面の奥寄りの柱間には、奥行の深い腰長押を打って、いわゆる八祖棚とし、壁面に真言八祖の図像を祀る。

西内陣は朱漆の拭板敷に、外陣と東内陣に寄せて

L字に畳を敷く。中央後方には禅宗様須弥壇を置き、向唐破風の宮殿を安置し、大元帥明王を祀る。須弥壇後方には、内陣後方の柱筋に円柱を来迎柱として立て、虹梁形頭貫で固め、背面には半長押付の内法長押を打つ。柱上部には草花の彫刻と波の彫刻を施した木鼻を付す。柱上には頭貫に平三斗を造り出し、木鼻を付し、実肘木を介して天井桁を受ける。なお来迎柱以外の柱は半長押付きの内法長押と頭貫で固め、組物を介さず直接天井桁を受けている。天井は格天井で、中央の護摩壇が安置されている周辺のみ折上小組格天井とする。また東側面に幅広の腰長押を打つが、壁面に図像は祀らない。宮殿は地覆を巡らし、蓮座を載せ、土台をまわす。その上に几帳面取角柱を立て、頭貫で固める。柱上には実肘木付きの出三斗を置き、桁を受ける。正面側の頭貫や桁は虹梁形に造り出し、柱上部には獅子鼻を付ける。虹梁形頭貫と桁の間には獅子と牡丹の彫刻を、桁より上には鳳凰と雲の彫刻を入れる。これらの彫刻には極彩色を施す。西内陣の西側には棚を造り付け、位牌壇とする。

脇陣は畳を敷き詰め、天井を棹縁天井とする。東側には棚を造り付け、位牌壇とする。

後陣は畳を敷き詰め、天井を棹縁天井とする。後方には棚を造り付け、位牌壇とする。その中央には厨子を造り付ける。厨子は粽付きの円柱を立て、飛貫、木鼻付きの頭貫で固め、柱上には繰形付きの台輪を載せる。台輪上には実肘木付きの平三斗を詰組とする（隅は出三斗）。飛貫と頭貫の間は弓連子を入れ、正面には藁座で中折れの棧唐戸を吊る。

**まとめ** 西南院本堂は、東西に内陣が並列するなど、平面では2つの仏堂を連結させたような構成をとる。その点で奥之院護摩堂と類似するが、外観では1つの仏堂の体裁をとる奥之院護摩堂と異なり、虹梁形頭貫を2箇所に入れ、向拝を東方に寄せるなど、2つの仏堂が連結した名残を外観に残す。また、要所には丁寧な彩色と彫刻が入れられる。改造された部分もあるが、主体部には影響が少なく、保存状態は良好である。近代再建の本堂として貴重な事例である。



図 730 西南院本堂東内陣



図 731 西南院本堂西内陣



図 732 西南院本堂西内陣須弥壇・厨子



図 733 西南院本堂後陣

### (3) 経蔵

**構造形式** 桁行 5.9 m、梁間 3.9 m、入母屋造、銅板葺、正面前室付、桁行 2.0 m、梁間 3.7 m、向唐破風造、妻入

**建立年代** 享和 3 年 (1803) (『名刹誌』)

**概要** 経蔵は、西南院の南端に北面して単独で建つ。桁行 3 間長、梁間 2 間長で、入母屋造銅板葺の土蔵造の建物で、向唐破風の前室を正面に取り付ける。以下では前室部分以外のことを主体部と呼ぶ。

『高野山名所図会』によると、徳川家康より黄金を下賜されて倉庫を建て、文殊菩薩の尊像を納めて文殊楼と称したのが経蔵の成立という。実際、西南院には元和 2 年 (1616) と元禄 7 年 (1694) の経蔵の棟札があり、17 世紀の前半から経蔵に相当する建物の存在が確認される。しかし、内部の風食の程度から類推すると、主屋部の年代は 17 世紀前半まで遡るとは考えにくい。『名刹誌』には、享和 3 年 (1803) に隆本学頭によって再築されたとあり、現建物の建立年代はこちらとした方が穏当であると考えられる。その一方で、前室部分の虹梁の絵様は古手のもので、組物や墓股、木鼻など装飾性に富む要素もみられる。前室部分については元和ないし元禄建立の前身建物の古材を流用している可能性が考えられる。

**側まわり** 基礎は花崗岩の縁石を巡らし、ごく低い基壇とし、自然石の礎石を据える。主体部は、礎石上に桁行方向に 7 本、梁間方向に 5 間本角柱を立てる。この柱は 2 階まで立ち上がる通柱となる。柱が外観に現れるのは床下までで、この範囲では柱を漆喰で塗籠める。床上は大壁となる。窓は、1 階は東側面に 1 箇所、2 階は東西側面に 1 箇所ずつ開く。この窓は外壁に扉などはなく、内側の板の引戸で閉

塞するのみである。鉢巻などはない。屋根は置屋根の入母屋造銅板葺。軒は一軒繁垂木。破風には蕪懸魚を吊り、妻壁には狐格子を嵌める。また屋根は木部に赤色塗装を、垂木先に黄色塗装を施す。

**内部** 経蔵の内部は 2 階建てとなっている。1 階は拭板敷で、壁内面に縦板を張り、天井は根太天井とする。正面中央には漆喰で塗籠められた扉がもうけられ、その奥に引戸が入れられる。階段は西方に寄せられ、2 階に至る開口部には引戸が入れられて閉塞することができるようになっている。2 階も床、壁面は 1 階と同様である。2 階では架構が露出しており、側桁と概ね上端を揃えて大梁を 2 箇所、東から 3 本目と 5 本目の柱上に渡し、束を置いて化粧棟木を受ける。化粧棟木の両端から隅へは化粧隅木を出す。化粧棟木・隅木には径の大きい化粧垂木を挿し、全体の形状を寄棟造状に納める。なお、東側の大梁は途中で切断され、後補の支柱と梁を挿入する。

**前室** 経蔵正面には前室が付く。自然石の礎石に角柱を立て、半長押付きの地長押、木鼻付きの頭貫で固め、柱上は大斗絵様肘木を載せて桁を受ける。中備も大斗絵様肘木を用いる。前室正面の虹梁の上に、板墓股を載せて菖蒲棟を受ける (ただし内側では間斗束で処理する)。垂木は疎垂木の輪垂木で、先端に繰形を付ける。屋根は向唐破風造である。破風には兎の毛通しを吊る。正面中央の地長押と頭貫の間には幣軸付きの板戸を吊り、奥に引戸を入れる。板戸上方には盲連子を入れる。地長押より下は開放とする。それ以外の柱間装置は横板壁とする。前室内部は化粧屋根裏とする。主屋正面の前室後端の部分



図 734 西南院経蔵遠景



図 735 西南院経蔵側面

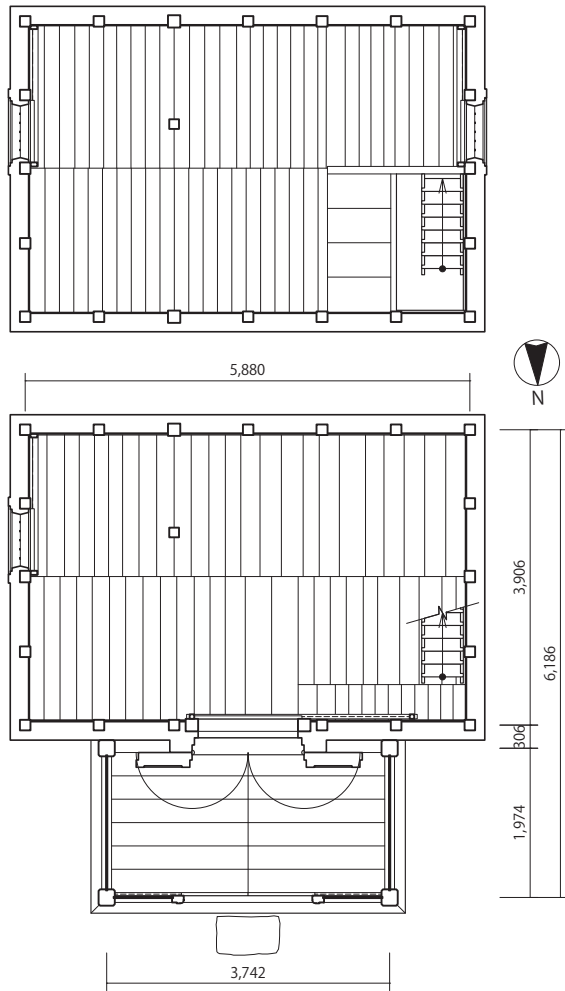


図 736 西南院経蔵平面図 1:100



図 737 西南院経蔵前室

には、菖蒲桁上に梁を載せ、葵紋を彫刻した板葺股を置き、菖蒲棟を受ける。内部は地長押の半長押上端に合わせて床板を敷く。また、前室部分は木部に赤色塗装を、実肘木に青色塗装を施す。

**まとめ** 西南院経蔵は、土蔵でありながら、塗装を施した屋根部分や、組物・木鼻・葺股などで飾り、塗装を施した前室部分など、装飾性に富む。主屋部については19世紀前期の建たとみられるものの、前室部分には17世紀の前身建物の古材が使用されているとみられる。古い要素を持つ装飾的な土蔵として高い価値を有する。  
(山崎有生)

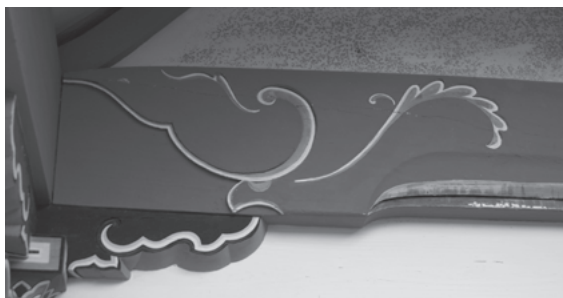


図 738 西南院経蔵前室虹梁絵様



図 739 西南院経蔵前室軒下



図 740 西南院経蔵1階

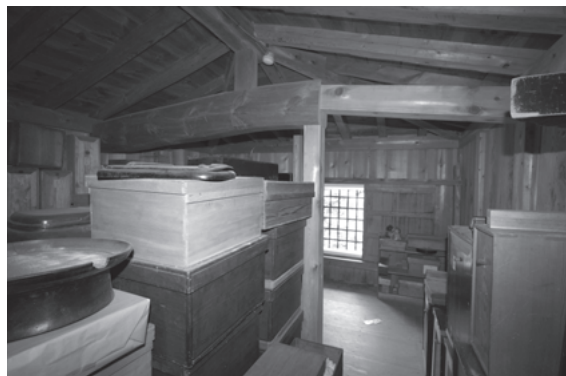


図 741 西南院経蔵2階



#### (4) 洋館

**構造形式** 2階建、桁行8.0m、梁間6.1m、切妻造、金属板葺、  
北面角屋突出、桁行4.5m、梁間6.5m、切妻造、金属板葺

**建立年代** 大正期（技法・意匠）

**概要** 洋館は、西南院の敷地東面に開く裏門を入ってすぐ、本堂の東方に位置する。1970年代に神戸より移築したと伝わる建物で、現在は、物置として使用している。二階建、切妻造妻入、金属板葺の木造の洋風建築である。二階建切妻造の矩形平面の居室部の北面に、水回りを中心とした角屋が接続する。出入り口は東面、北面、西面にあり、東面の出入り口は居室部の玄関にあたり、建物本体から500mmほど張り出している。

建築年代を示す資料はないが、意匠や部材の風食状況からは、大正時代の建物と判断する。

**内部** 内部は、居室部東面の出入り口を入ると玄関部屋となり、玄関部屋の西南には南面に3面の張り出しを設けた広間と、その東には6畳間程度の広さの居室が並ぶ。玄関部屋は6畳間程度の部屋の中央に引き違い戸を入れて東西に分け、西側は板敷

とする。張り出しのある広間は、南面の壁を3面に張り出し、それぞれ窓を設けている。壁面、天井は漆喰で塗られ、モールディングなどの装飾は施されていないが、天井中央に簡素ながらシャンデリアをつるしており、おそらくサロンのような用途の部屋であったと考えられる。この部屋の北側は3畳程度の板敷の小部屋で、西側に掃き出しの出入り口が設けられており、勝手口として機能していたと考えられる。2階への階段は廊下を通じてこの小部屋の北に位置する。

角屋部分は北面中央の出入り口を入ると玄関となり、東に部屋、西に風呂と便所などの水回りで構成される。角屋部分の内部は出入り口の腰高のガラス戸や物置の舞良戸、竿縁天井など、全体を和風の意匠とする。ただし、東の部屋は内部を洋風とし、壁は内法高までクロス張りとし、それより上部は漆喰仕上げとする。部屋の用途は不明であるが、換気扇を取り付けており、以前は台所か配膳室などとして使用していたのであろう。

2階は、階段の北側が角屋部分の小屋裏となり、



図 742 西南院洋館北面



図 743 西南院洋館 南西より



図 744 西南院洋館 北東より



図 745 西南院洋館架構

床を張って物置とする。階段を上がると、正面に6畳間相当の広さの居室が続き、その南には同規模の居室が並ぶ。そしてこれら2室の西に広間を設ける。居室2室は、いずれも洋室として整えられているが、北側の居室は壁が黄褐色のクロス張りとするのに対し、南側の居室は内法高に付鴨居をまわす。西側の広間は窓の意匠や照明は洋風であるが、漆喰仕上げの蟻壁を設け、付鴨居を二重に廻し、壁を深緑色に仕上げ、北面に床の間風に一間幅の腰高の棚をつくる。床も現在は取り外されているが、当初は畳敷き



図 746 西南院洋館 1階玄関

だったとみられ、部屋全体を和風に仕上げている。

以上の間取りを整理すると、居室部の1階は、外向きの接客空間、2階は生活空間、角屋部分はサービス空間と、その機能を明確に区分することができる。

**外 観** 外観は、壁面全体をアイボリー、木部を薄水色のペンキで塗装し、明るく軽快に仕上げている。全体として、装飾の要素は少なく、簡素な仕上げであるが、細部をみると、東面出入口にステンドグラスや鉄製の扉飾りが、北面出入口にも鉄製の持ち送りなどが使用されており、控えめながら上品な洋風意匠が施されている。

**まとめ** 移築の際の仕上げで建築当初の状態は不明であるが、軸部に不自然なおさまりはなく、移築時の状況をよく保存している。高野町に位置する本格的な洋館として貴重な建物である。 (大林 潤)



図 747 西南院洋館 1階西南室



図 748 西南院洋館 2階西南室



図 749 西南院洋館 2階東南室



図 750 西南院洋館 2階東北室

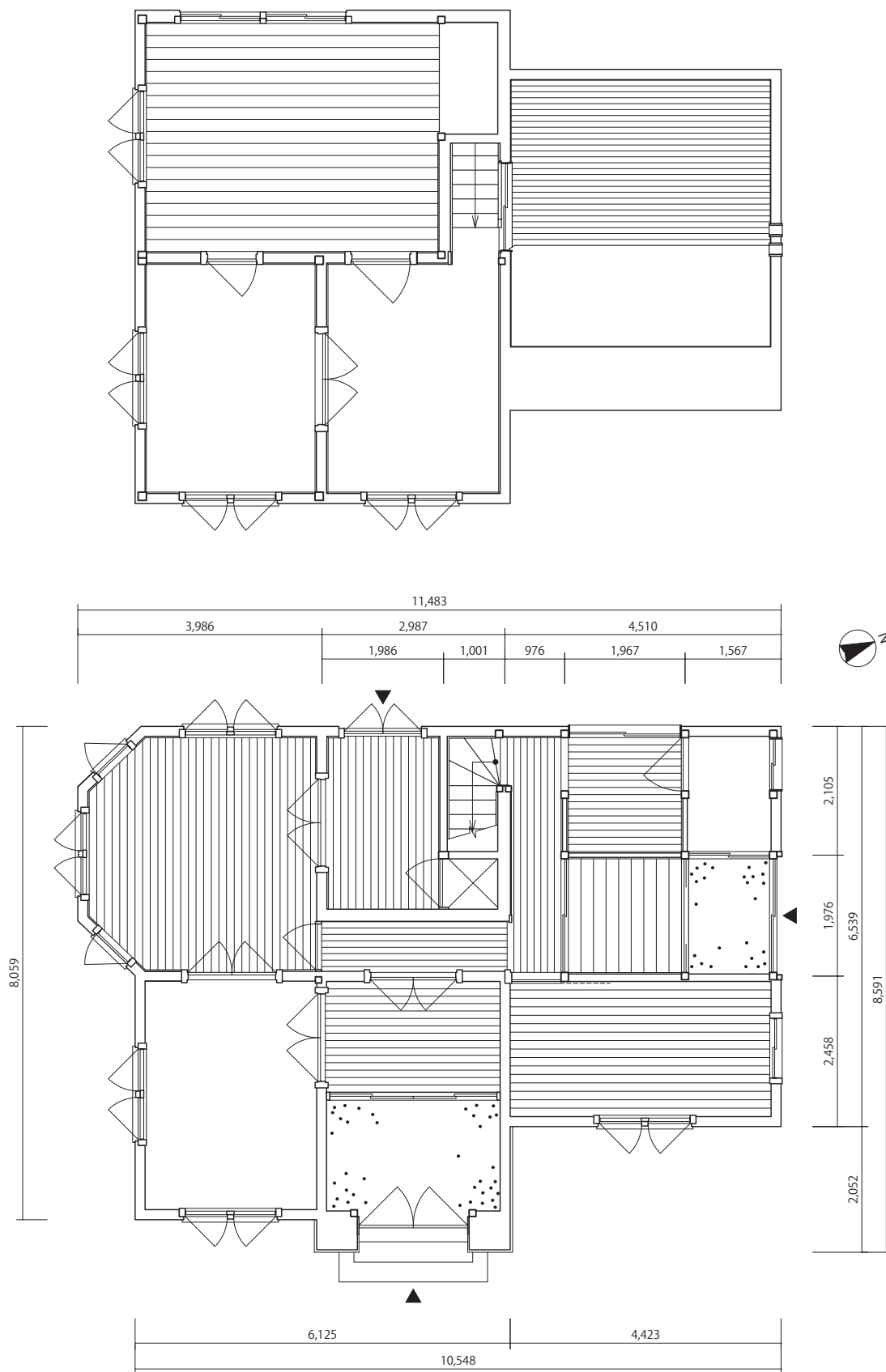


图 751 西南院洋館平面图 1:100

## 13 常喜院

### (1) 沿革と配置

**沿革** 常喜院は、南谷に位置し、北面は蛇腹道に面する。寺伝では実慧を開基とし、心覚を中興とする。古くは往生院谷に、元禄年間（1688～1704）からは小田原谷の枝谷である浄土院谷に位置し、江戸時代には行人方に属していた。明治3年（1870）に最勝院のあった現在地に移転した。

**配置** 境内の東面には、戦後の建立とされる表門が開き、表門を潜った右手に移転当初の建立とみられる客殿、表門からまっすぐ進んだ正面に大正11年（1922）建立の本堂が、その北方に18世紀初頭建立とみられる行人方東照宮の経蔵を移築した校倉が建つ。表門は、いわゆる亀岡様式の虹梁絵様・木鼻・臺股をもつ。常喜院の南に建つ高野山大師教会の大講堂は、亀岡末吉設計、辻彦兵衛施工により、大正4年（1915）に竣工している。表門は昭和前期の建立と伝わるが、亀岡と協働した大工が携わった可能性がある。



図 753 常喜院客殿正面



図 755 常喜院客殿玄関

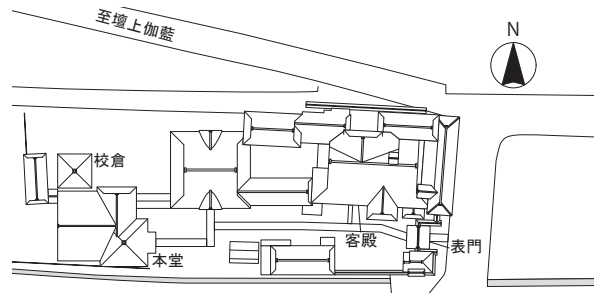


図 752 常喜院配置図 1:2000

### (2) 客殿

**構造形式** 桁行 25.6 m、梁間 16.4 m、入母屋造、正面東寄り  
玄関突出、桁行 2.7 m、梁間 4.0 m、妻入、入母屋造、銅板葺

**建立年代** 19世紀後期（技法・様式）

**概要** 客殿は、東面する表門を潜った右手に南面して建つ入母屋造、銅板葺の建物で、正面南寄りに入母屋造、銅板葺、妻入の玄関がとりつく。常喜院が現地に移転した明治3年（1870）以降、比較的早い時期、すなわち19世紀後期に建立されたものとみられる。客殿は虹梁絵様の様式などからみて、表門や本堂よりも古く、敷地移転当初の建物とみられる。

**平面形式** 客殿の主体部は桁行約25.6m、梁間16.4mで、奥行方向に3列の部屋を並べ、南正面、西側面、北背面に広縁を巡らし、正面は玄関より西方に



図 754 常喜院客殿正面側まわり



図 756 常喜院客殿広縁

濡縁が玄関の東方に階段が取りつく。

手前列には、玄関を入った正面に8畳間（中門）、その東隣（右手）に8畳間（寺務所）が並び、中門の西隣（左手）に10畳・8畳の続きの間（大広間）、さらに西、8畳間（隅の間）、6畳間（隅の間隣の間）が並ぶ。中門・寺務所の奥は板間の庫裏で、現在はかまどより西の大部分を新建材で囲み寺務所として用

いる。大広間のうち10畳間の奥には、12畳半間と10畳間（囲炉裏の間）が続き、8畳間の奥には、間口2間に仏壇を構えた8畳大の板間（持仏間）がつづき、背面に物置を介して、床の間を備えた7畳間（稚児の間）を配する。隅の間の奥には、それぞれ8畳間の2室（上段の間）がつづき、奥寄りの8畳間は2畳大の畳床を構える。上段の間の西面には、半間幅

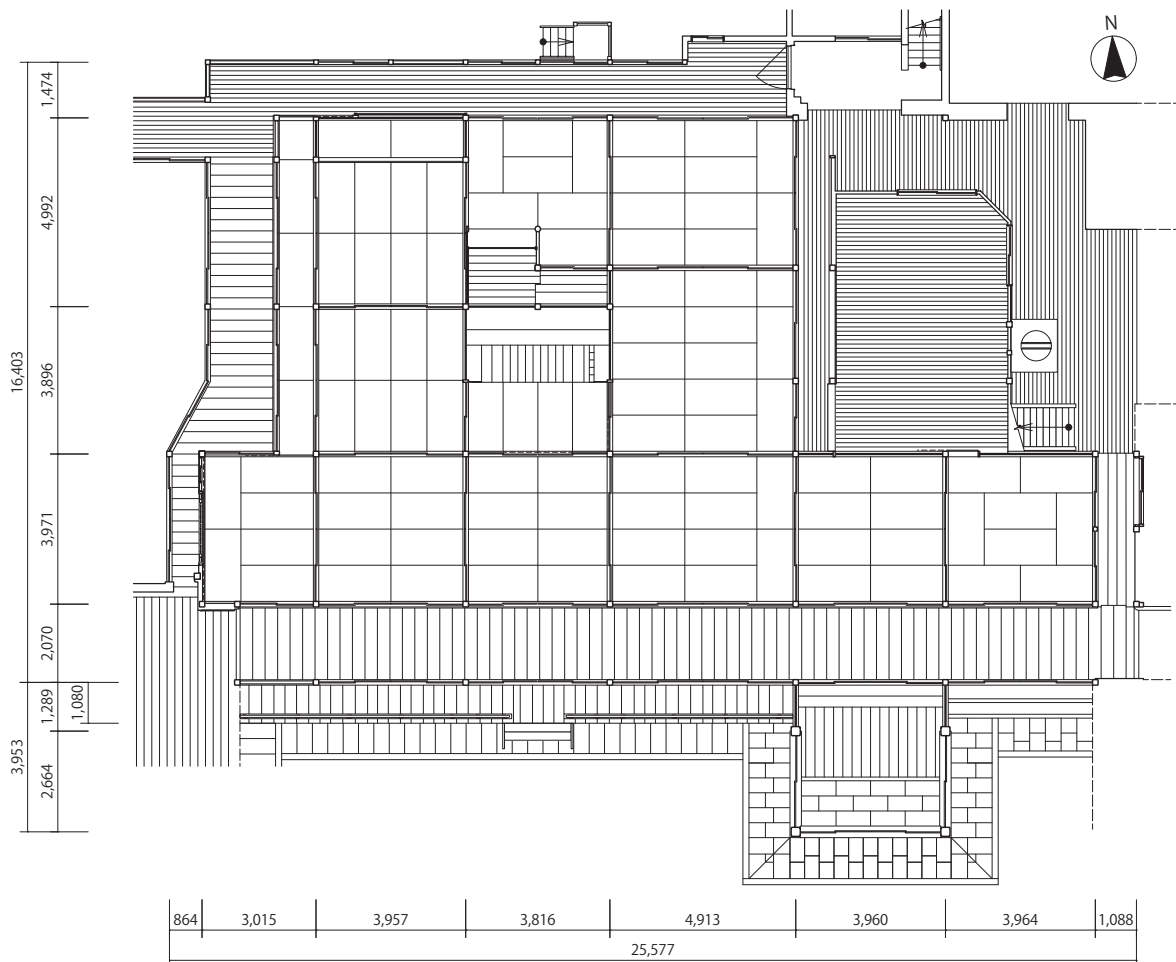


図 757 常喜院客殿平面図 1:200



図 758 常喜院客殿中門



図 759 常喜院客殿中門・広縁境虹梁形飛貴

の畳敷の広縁が付く。このような平面形式は、寛永元年（1624）建立の金剛三昧院客殿及び台所、19世紀前期建立とみられる円通寺庫裏、文久2年（1862）再建の金剛峯寺（旧青巖寺）大主殿、などと共通し、高野山の寺院客殿の特徴を備えたものといえる。

**側まわり** 建物の周囲は、切石で舗装し、切石の側石をもつ雨落溝を巡らす。軸部は礎石の上の方145mmの面取り角柱を立て、側まわりは、柱間に敷居・鴨居・胴差を入れ、柱天に直接、桁を据え、垂木を受ける。各間に腰付ガラス障子を嵌め、敷居の



図 760 常喜院客殿寺務所

上は漆喰塗の小壁とする。正面東寄りの玄関は、部材が新しく近年の後補とみられるが、虹梁形頭貫の絵様など、その意匠は表門に倣い、亀岡式を忠実に再現している。

軒は一軒疎垂木で、反り・古稀はもたず、は柱心揃えで1間に4枝を配する。垂木の上に、木舞を配して裏板を張る。

濡縁は、切目縁で高欄を巡らす。持仏間正面位置には3級の木階を設ける。当該部分の高欄は途切れ、端部は架木及び平桁を蕨手にして納め、上部の鴨居に、「遍照金剛」と題した扁額を掲げる。

**内部** 正面及び西側面の入側柱筋には、切目長押・内法長押を角釘で留め、各柱間には敷居・鴨居・飛貫を入れ、柱天に舟肘木を据えて、桁を受け、垂木尻を架ける。持仏間以外は、長押を巡らす。天井は、南面の広縁及び西面の広縁の6畳間に面した部分は化粧垂木、西面のその他の広縁及び各室は竿縁天井とする。

中門は正面上部の飛貫を虹梁形とする。絵様繰形は、下巻の楕円形の渦をもち、19世紀後期の様相を



図 761 常喜院客殿大広間上手



図 762 常喜院客殿持仏間



図 763 常喜院客殿持仏間内法貫虹梁絵様



図 764 常喜院客殿稚児の間

示す。東面の寺務所境及び西面の大広間境には杉戸を嵌める。大広間の10畳間と8畳間の境に敷居・鴨居を入れ、襖を建て込むが、鴨居の上は開放し、天井を一続きになっている。8畳間の正面側は長押を一段高く切り上げ、持仏間の正面性を強調する。各室境には襖を建て込み、隅の間境の内法長押上には、板欄間を嵌め込む。持仏間は背面寄りに仏壇を構える。仏壇は地覆・束柱・框を黒漆塗とし、面取り部分などに赤色塗装を施す。上部には、虹梁形飛貫を入れ、虹梁絵様を施す。仏壇には不動明王・愛染明王・地藏菩薩・2体の童子などを祀り、2基の厨子も安置する。床板は透漆塗とする。隅の間隣の6畳間は、西面に花燈窓を開く。上段の間は、2室の部屋境に敷居・鴨居を入れ、鴨居の上には障壁画を描くが、これらは後補で、当初は一室であったと考えられる。上段の間は、背面寄りに床の間を構える。2畳大の畳床で、黒漆塗の框を用いる。稚児の間は住職の控室で、西南隅に棚を構える。囲炉裏の間は、南寄り12畳間の竿縁天井の形状から、中央に煙出しを備えていたことがわかる。庫裏は拭板敷で、前述

の通り、新たに壁を設け寺務所を構えるほか、壁面及び天井にも新建材を貼っており、庫裏の架構も1階からは見られなくなっている。庫裏のかまど上部には煙出しを備える。

小屋組は、梁行方向に大梁を架け、桁行方向の横架材をこの上に据え、これらの上に束を立て、背違い貫で固め、東天に母屋桁を載せ、垂木を受ける。材にはチョウナはつりの痕跡が残る。庫裏のかまどの柱上部には昭和50年11月19日の年紀をもつ修理棟札が打ち付けられている。正面の玄関増築や庫裏内の改修は、この時期のものである可能性がある。

**まとめ** 客殿は、常喜院移転後の明治期に建立されたものとみられる。その平面構成は、金剛三昧院客殿、金剛峯寺大主殿、円通寺庫裏などと共通しており、明治期に至るまで、高野山の客殿建築が同様の形式を踏襲している点は興味深い。玄関の付加や、庫裏の改修はあるものの、その多くは可逆的なものであり、座敷部分は当初形式をよく残す。近代高野山の客殿建築として高く評価できる建物である。



図 765 常喜院客殿庫裏



図 766 常喜院客殿隅の間



図 767 常喜院上段の間 (上手)



図 768 常喜院客殿上段の間 (下手)

### (3) 校倉

**構造形式** 方3間、宝形造、銅板葺

**建立年代** 17世紀後期（技法・様式）

**概要** 校倉は、本堂と客殿の背面にあり、金剛峯寺と壇上伽藍の間を繋ぐ参道（蛇腹道）に面した中庭の西寄りに東面して建つ、方3間、宝形造、銅板葺の建物で、普賢延命菩薩を祀る。19世紀後期頃建立と考えられる土蔵造の主体部の周囲に、明治年間に廃絶した行人方東照宮の宝庫を移築したものと考えられる。行人方の東照宮は寛永5年（1628）に造営が始められ、同8年（1631）に落成したとされ、慶安3年（1650）には御仏殿に造り替えられた（『高野春秋編年輯録』）。後述する通り、絵様などからみて宝庫もこの頃に造営されたものとみられる。「御公儀上一山図」（正保3年=1646）、「高野山絵図」（承応2年=1653）、「高野山総図」（万治元年=1658）、「高野山壇上并寺中絵図」（元禄6年=1693）、「高野山壇上寺家絵図」（宝永3年=1706）、「高野山古図」（寛政8年=1796）、「高野全山及び周辺の絵図」（赤松院蔵、文化8年=1811）などには、興山寺の裏手に東照宮が描かれる。「高野山



図 769 常喜院校倉正面



図 770 常喜院校倉正側面

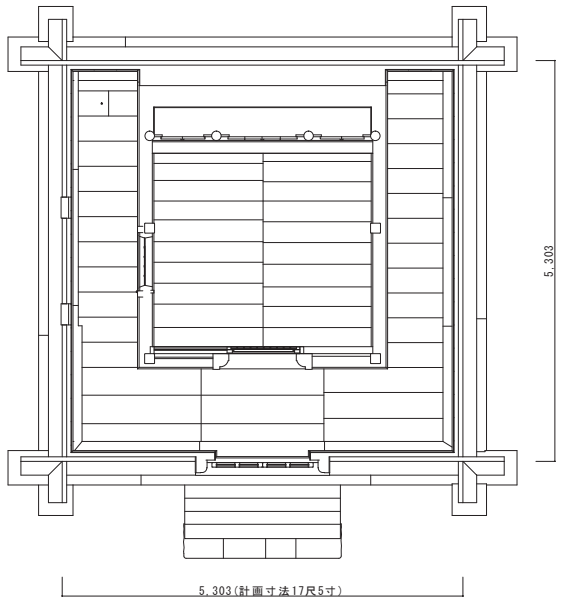


図 771 常喜院校倉平面図 1:100  
(和歌山県文化財センター提供)

総図」（万治元年）以前は、本殿・拝殿を囲む塀の南東方に、宝形造、檜皮葺の建物を描くのに対し、「高野山壇上并寺中絵図」（元禄6年）は描かず、「高野山壇上寺家絵図」（宝永3年）以降は、校倉造として描く。また金剛峯寺蔵の指図では（PL.62）、御宝蔵として、校倉の中に、土蔵造の躯体をおさめた建物を描くが、土蔵造部分の形状は異なる。

常喜院はもとは小田原谷にあったが、元治元年（1864）の火災で類焼し、明治3年（1870）に現在地へと移転した。行人方東照宮は、明治23年（1890）頃に解体、入札され、普賢院・普門院に移築されており、経蔵も同じ頃に移築されたものとする。

**側まわり** 切石を模したコンクリートブロック積の基壇に、自然石の礎石を据え、束柱を立て、盤木を組んで、成の高い台輪を据える。束柱の位置は、各面3間等間で、総間18枝、各間6枝を配する。束柱は、地長押と地貫で固め、地貫の下は縦連子、上は板壁とする。盤木と地長押は、風食が少なく、移



図 772 常喜院校倉拳鼻



築時の補足材と考えられる。台輪の上に9段の校木を組み、台輪を据える。正面中央には扉口として幣軸付両開き棧唐戸を設け、その正面に4級の木階を取り付け、さらに踏石を1基据える。

台輪の上には、束柱に対応する位置に、拳鼻付の平三斗を据え、実肘木を介して側桁を受ける。中備は撥束で実肘木をもち、組物と中備の間には琵琶板をはめ、十字形の小窓を穿つ。拳鼻は下巻の木瓜形の渦をもち、彫りは浅く、やや細い。実肘木の絵様は円形の渦で、やはり彫りは浅く、やや細い。これらの絵様は、17世紀後期の様相を示す。これは、各絵図に記された経蔵が校倉造で描かれるようになる時代と対応する。

軒は一軒半垂木で、角形断面で糸面取りを施し、反り扱きはもたない。垂木の上は、茅負、布裏甲で納める。屋根は宝形造、銅板葺で、頂部には露盤・宝珠を据える。

台輪・組物・中備には纏縹彩色を施し、桁・琵琶板・校木を受ける台輪下の小壁に白色塗装、校木・桁・垂木の木口に黄色塗装、扉の棧及び幣軸に黒色塗装、その他の軸部に赤色塗装を施す。

**内 部** 内部には、土蔵造の主体部が立ち上がる。側まわりの内側は縦板壁張で、丸釘で留める。天井は竿縁天井、床は拭板敷で、丸釘で留める。

主体部は壁体の内側に、柱を間口3間・奥行2間で配置する。正面中央に扉口を設け、腰高障子の引き戸を設け、西面中央に窓を開き、片開きの銅製扉を設ける。柱は、正面及び両側面は面取り角柱とする。背面のみ丸柱とし、切目長押・内法長押・虹梁形飛貫で固め、仏壇構えとし、壇は背面に突出させ



図 773 常喜院校倉正面側通り

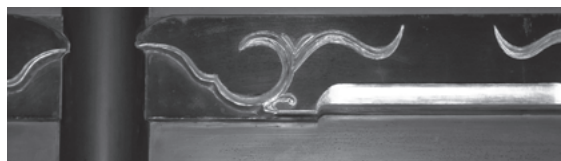


図 775 常喜院校倉仏壇脇間虹梁形飛貫

る。虹梁形飛貫の絵様は円形の渦で、彫りは太く、深く、19世紀後期の様相を示す。各柱間には両開きの扉を嵌める。中央間のみ、方立及び鴨居を用い、両脇は内法長押が軸を受ける。仏壇手前には、地覆の上に几帳面取りを施した角柱を立て、框を受ける。仏壇下は収納とする。柱天に天井桁を据え、朱漆塗の天井板を嵌めた格天井を受ける。床は、透漆塗の拭板敷で、角釘と丸釘で留められている。丸釘は後補で、主体部まわりの床の釘留めと同時期のものと考えられる。

仏壇の束柱・框、天井格子の面取りに赤色塗装、仏壇の切目長押・半長押・鴨居・内法長押・扉板、框下の羽目板、内法長押上の小壁は茶色塗装、虹梁絵様・袖切・眉欠に金色塗装、廻し縁、正面扉の棧木・敷居・鴨居・方立、側面の窓枠、仏壇の地覆・束柱・框・虹梁形飛貫、天井桁、天井格子に黒色塗装を施す。天井桁・内法長押に釘隠し、仏壇束柱・框・切目長押・内法長押・正面天井桁に八双金具を取り付ける。釘隠しには、三つ芭蕉巴文を象る。

**まとめ** 常喜院校倉は、明治3年の移転当初に営まれた土蔵造の仏堂を、明治23年頃に校倉造の行人方東照宮経蔵で包んだ特異な建物である。寛政8年頃に建立され、17世紀後期に造り替えられたと考えられる意匠性の高い東照宮経蔵の姿を現代に伝え、明治期の常喜院の移転、行人方東照宮の解体という高野山の近世近代移行期の歴史を伝えることの両面において、高く評価できる建物である。(鈴木智大)



図 774 常喜院校倉主体部内部

## 14 金剛三昧院

### (1) 沿革・配置

**沿革** 金剛三昧院は安養院から南方に延びる道を上った高台に位置する。北条政子が源頼朝の菩提のために、退耕行勇を開山として、建暦元年（1211）に禅定院を建立し、さらに承久元年（1219）に改建し、金剛三昧院と改称した。貞応2年（1223）頃に堂舎が完成したという。密禅律の三宗兼学の寺院として、代々の長老は鎌倉幕府により山外の僧が任命された。

**配置** 境内には、昭和前期以前に建立された多くの建物が建ち並ぶ。中核となる建物は、北西部に集中する。北西部の東面に文政8年（1825）建立の表門が建ち、表門を潜った右手に寛永元年（1624）建立の客殿及び台所が南面し、参道をすすんだ正面に、17世紀中期とみられる本堂及び位牌堂が東面して建つ。また参道の南には、鎌倉時代建立の多宝塔・経蔵、天文21年（1552）の四所明神社本殿が建つ。なお客殿及び台所の建立年代は2022年に発見された棟札による。

### (2) 本堂及び位牌堂

**構造形式** 本堂：桁行3間、梁間3間、入母屋造、檜皮葺、北面及び西面北寄り2間の軒下を内部に取り込む、正面1間向拝付、位牌堂前堂：桁行3間、梁間3間、入母屋造、檜皮葺、東面北寄り2間の軒下を内部に取り込む、位牌堂後堂：桁行3間、梁間5間、妻入、入母屋造、檜皮葺、両側面及び背面、軒下を内部に取り込む

**建立年代** 17世紀中期（技法・意匠）

**概要** 金剛三昧院本堂及び位牌堂は、表門を潜



図 777 金剛三昧院本堂及び位牌堂正面

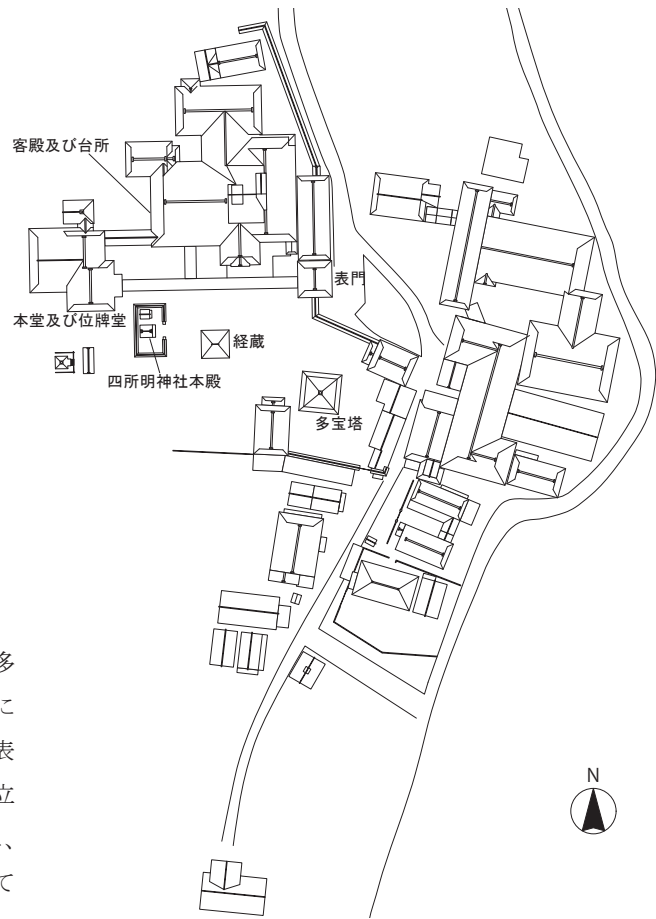


図 776 金剛三昧院配置図 1:2000

りまっすぐ進んだ正面に東面して建つ。桁行3間、梁間3間、入母屋造の本堂の北に、桁行3間、梁間3間、入母屋造、檜皮葺の前堂と、桁行3間、梁間5間、妻入、入母屋造、檜皮葺の後堂からなる位牌堂が接続する。本堂には愛染明王を祀り、位牌堂後堂には大壇を据える。

本堂の北面及び南面西寄り2間、位牌堂前堂の北面南寄り2間の軒下を内部に取り込み、東面には縁を巡らせる。位牌堂後堂は後述するように19世紀中期以降に増築されたものとみられる。建立年代を示す史料はないが、後述するように本堂向拝や位牌堂



図 778 金剛三昧院本堂向拝

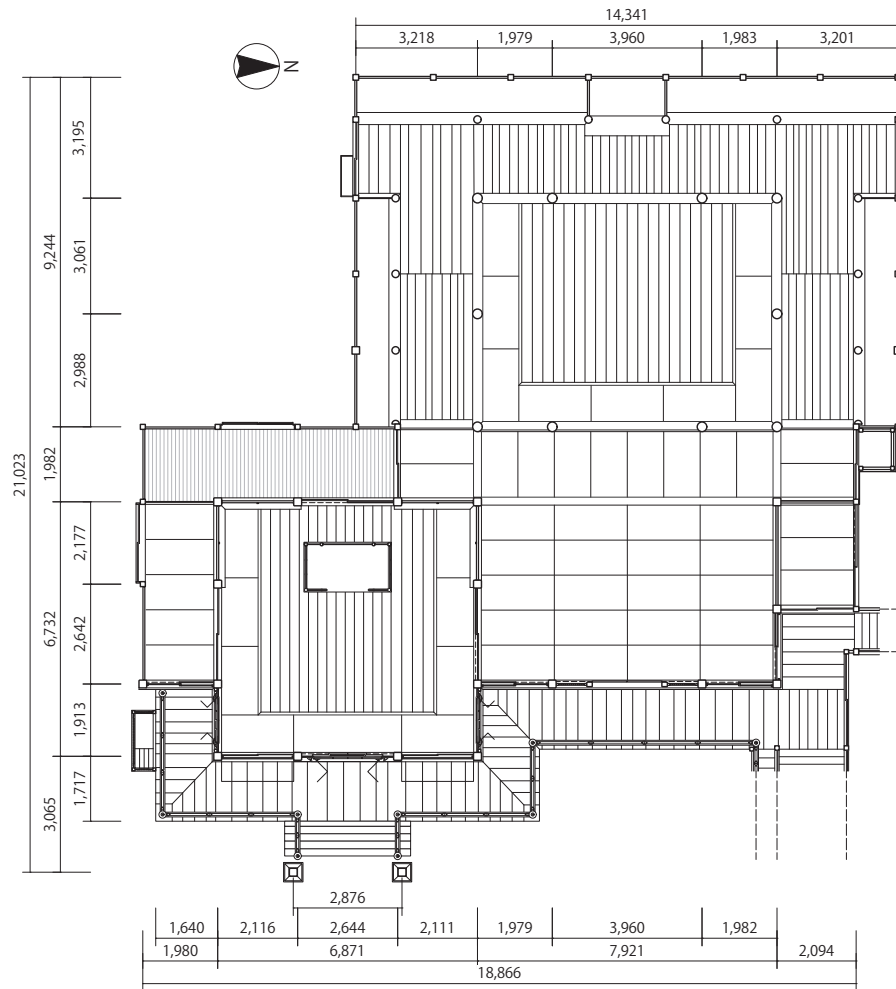


図 779 金剛三昧院本堂及び位牌堂平面図 1:200



図 780 金剛三昧院本堂及び位牌堂正側面遠景



図 781 金剛三昧院本堂及び位牌堂後堂背側面



図 782 金剛三昧院本堂側まわり



図 783 金剛三昧院本堂位牌堂正面側まわり

正面中央間の虹梁形頭貫の絵様の様式からみて、17世紀中期の建立とみられる。

**柱配置と平面計画** 本堂は、桁行・梁行ともに中央間20枝、両脇間16枝、総間52枝で割り付け、向拝柱間は中央間より2枝広い22枝とする。位牌堂前堂は、桁行中央間を30枝、両脇間15枝、総間60枝で割りつける。一枝寸法は桁行で約132mm、梁間で約129mmと桁行がやや長いが、施工誤差及び実測誤差によるものと考えられる。

**基壇・基礎** 本堂の主体部と位牌堂前堂は、縁下に納まる乱石積基壇の上に、自然石の礎石を据える。基壇上面のうち側柱より外側は漆喰で固める。基壇周辺には、切石の縁束礎石を据える。位牌堂後堂は基壇を持たず、地表面高さに自然石の礎石を直接据えている。

**側まわり** 軸部は、礎石上に方210mm（面内178mm）の大面取角柱を立て、地長押、切目長押、内法長押、木鼻付の頭貫、留継とする台輪で固める。柱は樺材で、他は針葉樹材を用いる。位牌堂中央間の頭貫は虹梁形とする。虹梁絵様は彫りが浅く、線の細い、

木瓜形の渦と若葉からなり、17世紀中期の様相を示す。組物は実肘木付の出組で、秤肘木は絵様肘木とし、板支輪には波の彫刻を施す。中備は本臺股で内部に彫刻をもつ。本堂は仙人を主題とし、位牌堂は動植物を主題とする。本堂及び位牌堂前堂の正面及び側面は二軒垂木で、反りはなく飛檐垂木が扱きをもつ。本堂の背面及び位牌堂後堂は一軒疎垂木で、反り・扱きはない。飛檐隅木は鼻先を大きく造り出す。屋根は、本堂・位牌堂ともに、入母屋造、檜皮葺で、破風には鱗をもつ蕪懸魚を設ける。位牌堂の妻飾は二重虹梁臺股とする。正面には切目縁を巡らし、本堂正面中央に5級の木階を設け、縁及び階段に木製擬宝珠高欄を据える。高欄は客殿と同じ形式をもち、同時期に造られたものと考えられる。

**柱間装置** 本堂は正面中央間を両折棧唐戸、正面両脇間を半蔀戸、両側面南端間を両折板扉とし、正面中央間の内側を明障子、その他の間の内側を引違い障子戸とする。位牌堂は正面中央間に方立を立て、明障子戸とし、袖壁には盲連子窓を設け、腰壁には牡丹の彫刻を嵌める。正面両脇間は外側を引違いの板



図 784 金剛三昧院本堂軒まわり



図 785 金剛三昧院本堂隅柱組物



図 786 金剛三昧院位牌堂中央間虹梁形頭貫絵様



図 787 金剛三昧院本堂向拝虹梁形頭貫絵様

扉、内側を引違い障子戸とする。

**向 拜** 向拜は、花崗岩の方形礎石の上に、花崗岩の方形礎盤を据え、方 207 mm（面内 165 mm）の几帳面取り角柱を立て、獅子鼻付虹梁形頭貫で繋ぐ。虹梁絵様は、位牌堂正面中央間虹梁形頭貫と同じく彫りが浅く、線が細い木瓜形の渦と若葉からなり、17世紀中期の様相を示す。組物は実肘木付の連三斗で、中備は実肘木付の本臺股とし、内部に龍の彫刻を施す。手挟みは、牡丹の籠彫りとする。軒は、打越垂木による一繁垂木とする。

**本堂内部** 本堂内部の中央方3間は、内法長押・天井長押で固め、組物を据えずに直接、天井を受ける。天井は二重折上小組格天井で、中央背面寄りを折り上げる。床は拭板敷で正面及び両側面に畳を敷きまわす。柱間装置は、西面中央間は引違い板戸とし、背面中央間と位牌堂境となる東面中央間は引違い板戸とし、本堂側に明障子を1枚入れる。背面及び両側面の入隅部各1間には奥行の深い漆塗りで八双金具を打ち付けた腰長押を設け、八祖棚とし、壁面に真言八祖の図像を張る。中央背面寄りには、漆

塗りの来迎壁をもつ禅宗様の須弥壇を設け、愛染明王坐像を祀る。須弥壇の狭間には「牡丹に獅子」、来迎壁には「竹に虎」、「雲に龍」、鳳凰など多くの彫刻を施し、組物の平三斗には纏綢彩色を施すなど、非常に手の込んだ優品で、本堂と同じく17世紀中期の作製とみられる。

西面の軒下を取り込んだ部屋には、内法長押をめぐらし、床は畳敷、天井は竿縁天井とする。背面の軒下を取り込んだ部屋には過去帳などを納める。長押は打たない。床はフローリングで、天井は竿縁天井で、位牌堂後堂増築時に修理がなされたものとみられる。

**位牌堂前堂内部** 位牌堂前堂の桁行3間、梁間3間の主体部は、前面寄り2間と背面寄1間に分け、前面寄り2間は内法長押、天井長押で固めて、組物を据えずに直接、折上格天井を受ける。背面は間口いっぱい長大な虹梁形内法長押と框を入れる。どちらも黒漆塗とする。虹梁絵様は、鎬をもつ線の太い楕円形の渦と若葉で、19世紀中期頃の様相を示す。床は畳を敷き詰める。東面の背面寄りには現在、



図 788 金剛三昧院本堂内部



図 789 金剛三昧院本堂須弥壇



図 790 金剛三昧院位牌堂前堂



図 791 金剛三昧院位牌堂前堂・後堂境

建具を入れていないが、敷・鴨居には3本溝がきられている。東面の軒下を取り込んだ部屋は長押を打たず、床は畳敷、天井は竿縁天井とする。背面との境には現在、建具を入れていないが、西隣の框と同じ高さにいれた鴨居と敷居には3本溝がきられている。東面の柱間は後補材で、別棟に続く階段境に引戸を入れる。

位牌堂前堂主体部背面寄りの間口3間、奥行1間は、東西各1間も続きの一室とする。床は、中央3間と各東西1間との間に、黒漆塗の無目敷居を入れて、畳を敷き詰める。東西各1間境の手前側の柱には、奥側の面に飛貫と小壁の痕跡が残る。後堂境は中央3間に虹梁形内法貫を入れ、両端間には内法長押を入れる。天井は、一続きの格天井で、天井長押で受ける。天井板には植物を描く。

**位牌堂後堂内部** 位牌堂後堂の、中央間口3間、奥行2間には、金箔張りの径約285mmの円柱を立て、虹梁形内法貫及び天井長押で固め、柱上には組物を据えず直接、格天井を受ける。正面の柱間には框を入れ、両側面及び背面には同行に無目敷居を入れる。



図 792 金剛三昧院位牌堂後堂中央部

框及び無目敷居は黒漆塗とする。床は拭板敷で両側面及び前面に畳を敷きまわし、中央背面寄りに大壇を据える。位牌堂後堂の背側面は、側柱に金箔張りの径約195mmの円柱を立て、虹梁形内法貫、天井長押で固め、位牌壇を構える。柱上には組物を据えず直接、格天井を受ける。後堂の虹梁形絵様はいずれも、前堂中央部の前後を分ける内法貫と同時期のもので、19世紀中期の様相を示す。床は拭板敷である。

**改修** 本堂及び位牌堂前堂の背面の柱は、位牌堂後堂と同時期とみられる後補材で、接続部の小屋組にはクイーンポストトラスを用いる。増築の時期は明確でないが、虹梁絵様の様式とあわせ、19世紀中期頃と考えられる。側まわりは、柱に根継がなされているほかは、当初材とみられる。

**まとめ** 金剛三昧院本堂及び位牌堂は、建立年代が明確でないものの、虹梁絵様からみて17世紀中期の建立とみられ、高野山の寺院本堂として最も古い。絵様肘木を用いた出組、墓股彫刻、籠彫りの手挟みなど、随所に凝った意匠をみせ、縁下基壇、飛檐隅木鼻、八祖棚などは、高野山の仏堂によくみられる



図 793 金剛三昧院位牌堂後堂背面位牌壇



図 794 金剛三昧院位牌堂前堂虹梁形内法貫絵様



図 795 金剛三昧院位牌堂後堂虹梁形内法貫絵様

特徴を示す。また位牌堂後堂の増築は、19世紀中期以降における高野山の本堂の傾向といえる。本建築は、客殿及び庫裏とともに、金剛三昧院の主要な建物であるとともに、高野山に唯一のこの江戸時代前期の寺院本堂として極めて貴重である。

### (3) 表門

**構造形式** 1間1戸楼門、入母屋造、檜皮葺

**建立年代** 文政8年(1825)(棟札)

**概要** 表門は、本堂・客殿・経蔵・多宝塔などが建つ境内西北部の東面に開く、一間一戸、入母屋造、銅板葺の楼門である。上層は桁行3間、梁間2間である。小屋梁下面に打ち付けられた棟札から、伊都郡伏原村の林右衛門を正大工、儀左衛門を権大工として、文政8年(1825)に建立されたことがわかる。林右衛門は、天保14年(1843)には金剛三昧院四所神社の上葺・及び彩色の大工棟梁を、弘化3年(1846)上棟の壇上加藍御影堂において棟梁を務める大工である。

**柱配置** 下層は、桁行3,861mm、梁間3,015mmで、梁間寸法を10尺として計画した可能性がある。上層は、桁行は中央間10枝、両脇間8枝の総間26枝、梁間は各10枝の総間10枝で割り付け、1枝寸法は約129mmである。

**下層基礎・軸部・組物・天井** 基礎は水勾配をもうけた花崗岩切石敷の上に花崗岩の礎盤を据える。下層軸部は、親柱は木製の唐居敷の上に径338mmの円柱を、控柱は礎盤の上に径293mmの円柱を立て、桁行を腰長押、棟通りを内法長押で固め、柱頂を木鼻付の頭貫及び台輪で固める。円柱はいずれも頂部に粽をもち、正面及び背面の頭貫は虹梁形とする。虹



図 796 金剛三昧院表門正側面

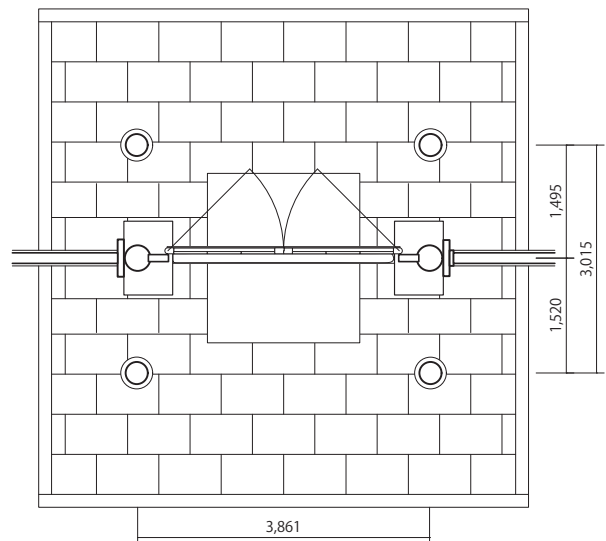
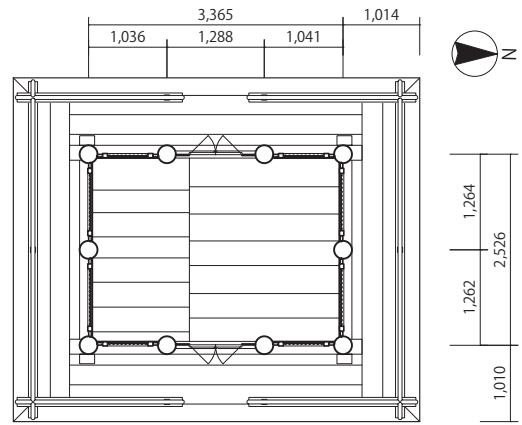


図 798 金剛三昧院表門 1:100

梁絵様は、比較的太く、彫りが浅く、鏝をもつ、楕円形の渦と若葉からなる。若葉の枝分かれ部に小さな芽を付けた意匠は、壇上加藍山王院拝殿、勸学院鐘楼、円通寺本堂などとも共通する。

棟通りは唐居敷に方立を建て込み、両開き板戸を設け、両側面の腰長押の上には、吹き寄せで上下互い違いとした格子を嵌める。下層の組物は二手先として縁を受ける。桁行柱間には2組の組物を据え、中備に蓑束を据える。組物内部は、出三斗として、



図 797 金剛三昧院表門背側面

格天井の天井桁を受ける。

**上重軸部・組物・軒まわり・屋根** 上層軸部は、井桁に組んだ柱盤の上に径 236 mm で頂部に粽をもつ円柱を立て、木鼻付の頭貫及び台輪で固める。柱間装置は、桁行中央間に両開きの扉を、その他の柱間に盲連子を嵌める。組物は尾垂木付の二手先で、軒天井と蛇骨子を造り出した板支輪を備える。中備には撥束を据える。軒は、軸部の規模に比して深い。二軒繁垂木で、反りはなく、飛檐垂木は扱きをもつ。隅木は、飛檐隅木が扱きをもつ。隅木鼻は地・飛檐ともに大きくはしない。縁は樽縁とし、跳高欄を据える。正面の縁には長宥匡による明治辛丑年（明治 34 年 = 1901）の銘をもつ大きな扁額をかける。屋根は入母屋造、銅板葺で、妻飾に蕪懸魚を付ける。

組物は梁行方向の一の肘木を内部に引き込む通肘木とし、これに同じく内部に引き込んだ桁行方向の一の肘木を組んで、束を立て、梁を受ける。この梁も両端に妻面の尾垂木尻を架け、さらにその上に平の尾垂木尻を重ねる。この梁と丸桁の間には登梁状の鐘釣梁を架ける。銅鐘は承元 4 年（1210）の銘をも

ち、重要文化財（工芸品）指定を受ける。

**まとめ** 金剛三昧院表門は一間一戸ながらも、尾垂木付の二手先の組物で受ける深い軒をもつ屋根を備えた優れた意匠性を有した鐘楼門であり、多くの歴史的建造物を有する金剛三昧院に相応しい。棟札から、後に壇上伽藍御影堂の再建で棟梁を務めた林右衛門が大工を務め文政 8 年に建立されたことが明らかで、江戸時代後期の高野山における指標としても貴重である。 （鈴木智大）



図 799 金剛三昧院表門初層



図 800 金剛三昧院表門見上げ



図 801 金剛三昧院初層虹梁形頭貫・腰組



図 802 金剛三昧院表門上層内



図 803 金剛三昧院表門銅鐘



## 15 不動院

### (1) 沿革と配置

**沿革** 不動院は往生院谷の南側に位置し、延喜7年(907)に濟高大僧正が開基した12ヶ院のひとつとされる。『寺院明細帳』によれば、昭和9年(1934)に敷地を拡張し、境内の様態替えをおこなっている。

**配置** 敷地の北面に表門が開き、表門を潜ってまっすぐすすんだ正面に客殿が、その東方に本堂がどちらも北面して建つ。表門を潜ってすぐの右手には書院が南面して建つ。書院は昭和38年に和歌山県指定文化財に指定されている。

### (2) 書院

**構造形式** 桁行23.5m、梁間14.9m、入母屋造、金属板葺

**建立年代** 江戸時代前期(技法・意匠)

**概要** 不動院書院は境内の西北部に南面して建つ、桁行23.5m、梁間14.9m、入母屋造、金属板葺の建物である。南正面の旧玄関を境に、西半を書院、東半北を庫裏、東半南を浴室とする。庫裏及び浴室の一部は主体部から東に張り出している。また書院



図 807 不動院書院正側面



図 804 不動院書院側まわり

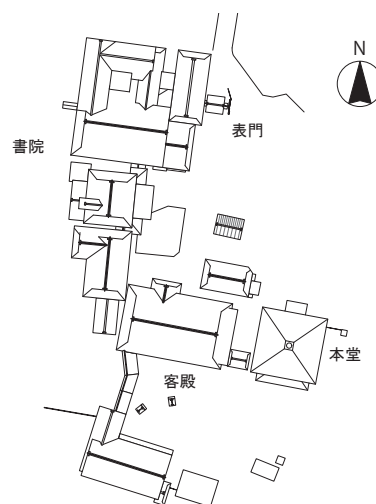


図 806 不動院配置図 1:2000

北面には昭和40、50年代に坊舎が増築されている。

建立年代を示す明確な史料はなく、改変が大きいもの、後述する通り、技法・意匠からみて、江戸時代前期に遡る高野山内でも最古級の客殿建築とみられる。

**平面** 書院は、東西3列、南北3列の間取りで、高野山内に共通する客殿の平面形式をもつ。書院南面に建つ坊舎と接続する渡り廊下に向かって中門に相当する旧玄関が位置する。現在の旧玄関は中央に間仕切り壁を設けて東西に部屋を分ける。書院は、



図 808 不動院書院廊下接続部(旧玄関)



図 805 不動院書院広縁・前列

前列西上手から次の間（8畳）と2室の広間（ともに8畳）と並ぶ。中列は上手から床の間をもつ座敷（8畳）と広間（8畳）、後列は上手から増築部、仏間北の室（8畳）とつづき、仏間の東に中列から後列にかけて南北に長大な一室空間（25畳）を設ける。この長大な室は囲炉裏の間に相当する。書院南面及び西面の入側には畳敷の広縁を設け、南面は幅約2.0m、西面は幅約1.5mとする。南面及び西面の側柱筋より外側には濡縁を設け、北面にも濡縁を設ける。書院は現在、宿坊宿泊者の食事会場として主に利用されている。

**軸部と造作** 書院の軸部は自然石礎石上に方133mmの面取り角柱（面内115mm）を立て、鴨居を渡して桁をのせる。次の間及び広間南面の入側筋と仏間周囲では一間ごとに柱を立てる。書院内部には内法長押をまわし、座敷と次の間はさらに飛長押を設け、広間は2室とも蟻壁長押を設ける。旧玄関の入側柱筋には鴨居上部に彫刻を施した絵様虹梁を設ける。

書院の柱間装置は、南面及び西面の側柱筋を引違いの腰高ガラス障子戸とするが、西面の南端柱間の

み引違いの板戸とする。ただし、西面は側柱筋の外側に柱を付けて壁面を付加している。旧玄関正面の入側柱筋は東寄りに後補の間柱を立てて壁を造り、東端に片引き戸を設ける。旧玄関南面の廊下と書院南面入側縁との境は引違い板戸とする。現在の書院内部は宿泊者の食事会場として利用するため、建具が取り外されているが、広間と旧玄関境には引違いの板絵建具を入れる。仏間東の柱筋は当初建具を入れていたと考えられるが、現在は板壁で閉じている。また囲炉裏の間に相当する室と庫裏との境は中央1間分に引違い戸を設けるが、その南北両脇の柱間は土壁とする。書院北面の側柱筋は引違いの障子戸を入れる。

内法長押上の小壁は南面及び西面の側柱筋では障子欄間を入れ、書院南面広縁と旧玄関南面廊下境には竹の節欄間を設け、節間には透かし彫りの板を備える。座敷と次の間境、次の間と広間境の小壁は箆欄間とし、横棧の数を替えて意匠に変化をつけている。2室の広間境は透かし彫りを施した板欄間とし、その他の部屋境の小壁は板壁とする。

天井は座敷及び次の間は折上格天井とし、天井板に荒杢のケヤキ板を用いる。その他の部屋は棹縁天井とする。

細部の造作では、旧玄関にかかる絵様虹梁は、両端に渦絵様、梁中央に透かし彫りを施す。絵様は曲線も緩やかで、若葉の先端を雲様に彫り込む。座敷の床の間は西に床、東に床脇を構える。床の間は書院造の付書院のように、やや高い位置に押板を設け、床脇は違い棚と天袋を備える。床の間部分は壁面に青色塗装を施し、押板や違い棚は透漆が塗られる。



図 809 不動院書院次の間



図 810 不動院書院



図 811 不動院書院座敷

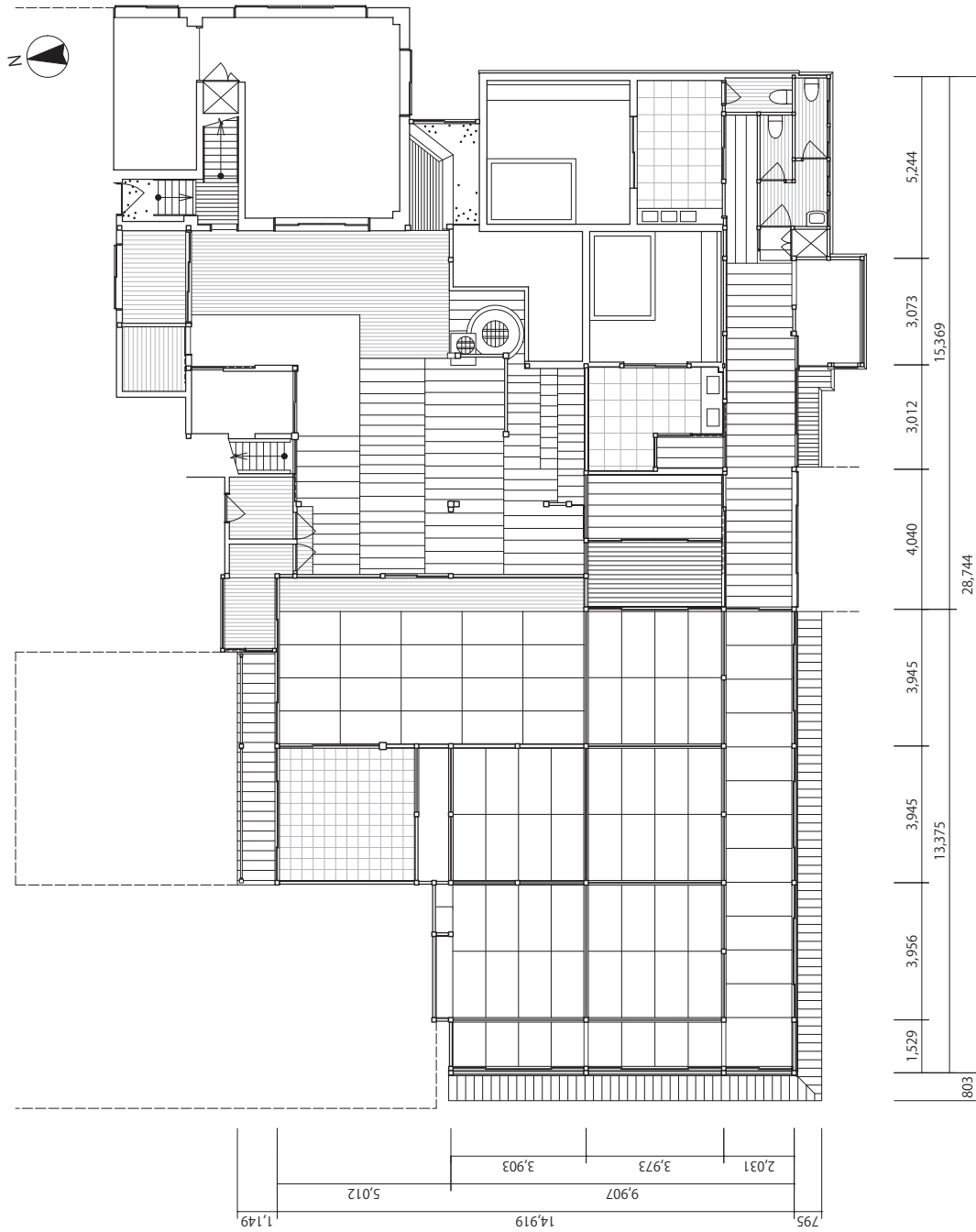


図 812 不動院書院平面図 1:200



図 813 不動院書院囲炉裏の間



図 814 不動院書院庫裏



図 815 不動院書院旧玄関虹梁形頭貫絵様

庫裏は桁行 9.1m、梁間 8.9m の規模で、中央やや東南の位置にカマドを設ける。庫裏東北隅及び東南隅には水回りの増築部が取り付く。庫裏の軸部は方 150 mm 前後を基本とし、書院と同じく面取りを施している。床は板敷で、一部は近年の改修でフローリングとする。天井は化粧屋根裏として成の高い梁や小屋組をみせる。カマドは円錐形に立ち上がる台の上に大釜をのせ、大釜の脇には煉瓦造の台を設けて小釜を据える。カマド西面には成の低い柱を立てて桁をのせ、そこから煙抜き煙道を屋根まで伸ばす。カマドまわりの形式は山内寺院の中でも古式を留めている。

旧玄関東方の浴室は昭和初期に増築されたもので、その後平成 6 年頃に内装を改修したという。現在は宿坊宿泊者が利用する。また書院北の増築された坊舎の位置には、かつて平屋の角屋があったといい、西の山が崩落して倒壊し建て直したという。

**軒まわりと屋根** 軒は一軒、棒垂木の疎垂木とする。西妻の妻飾は板を張るため不明であるが、東妻は六葉蕪懸魚に雲形彫刻の笈形を備え、妻壁は木連格子とする。小屋組は和小屋で、小屋束を新材でボルト留めして補強する。垂木は一部に当初のものが残る。小屋束は方 106 mm、貫は成 90 mm とし、ともにヨキによる加工痕が残る。小屋梁はやや細めの丸太材である。小屋組は昭和 60 年の屋根修理に関する棟



図 816 不動院書院軒まわり見上げ

札が残り、施工はかつて山内にあった大建組による。屋根大棟は鬼板に箱棟とし、屋根北面には庫裏のカマド上部の位置に袴腰を備えた煙出しを備える。

**改修履歴** 不動院書院の南方には 45 年ほど前まで現在とは別の建物が建っており、書院西南隅から渡り廊下で接続していたという。書院西南隅の柱及びその東の側柱には南面に差鴨居の痕跡が残る。また 40 年以上前に床下から屋根までの大修理をおこなったといい、屋根は先述の通り昭和 60 年にも修理が加えられている。定期的に部分修繕もなされ、内部の保存状態もよいが、一部で柱の沈下が生じており、数年前に床下を修繕したという。その際に濡縁や箆欄間の修理等をおこなったとみられる。旧玄関の間仕切り壁も近年の改修であろう。現状の金具は近年新調されたものであるが、当初とみられる金具は別途保管されている。庫裏は昭和 40 年代の山内全体での防災への取り組みの一環として、壁面に耐火ボードを張ったという。庫裏の東張り出し部は昭和 62 年頃に増築され、カマド南に位置するボイラーまわりは昭和 59 年に改修されたという。その他に近年のものとして、床板の一部フローリング化や排煙設備が更新されている。

**まとめ** 不動院書院は後世の改修部分があるものの、軸部は当初材を良く残している。一間毎に柱を立てる軸部の形式や柱の面取りの大きさ、絵様虹梁の彫刻から、建立年代は江戸時代前期に遡り、金剛三昧院客殿とともに高野山内、最古級の客殿建築とみられる。今後、修理などの機会を捉えて、詳細な調査をおこなうことで、より明確な価値づけがなされることが望まれる。(福嶋啓人)



図 817 不動院書院小屋組

## 16 普賢院

### (1) 沿革・配置

**沿革** 普賢院は、康治2年(1143)に覚鑿門下の力乗房を開基として創建されたという。当初は普賢王院と呼ばれていた。久安5年(1149)に炎上し、覚鑿の弟子の五智房融源が再建したという(『紀伊国統風土記』)。明治21年(1888)の大火で境内の建物が全焼した。再建にあたっては、同じく罹災した隣接する普門院とともに、明治2年(1869)の青巖寺と興山寺の合併にともない廃絶した興山寺の裏山に位置した行人方東照宮の建物を、明治25年(1892)に入札により金剛峯寺より払い下げられたようである。

**配置** 現在の境内は、西面に表門となる鐘楼門が建ち、門をくぐった正面に前述の本堂が西面して建ち、北部に玄関付の庫裏が南面して、西南部に宝蔵が建つ。また南面には裏門(四脚門)が開く。表門、庫裏、宝蔵は、明治期再建とみられる。このほかにも昭和後期以降の建物が多数建ち並ぶ。

このうち、裏門(四脚門)が行人方東照宮の本殿・拝殿を囲む瑞垣の正面に開く門にあたるものと考えられ、本堂は後述する通り17世紀後期建立の東照宮拝殿を大きく改造したものと考えられる。

**行人方東照宮** 行人方東照宮は、行人方の本山として木食応其が開創した興山寺の裏山に位置し、寛永5年(1628)に第3世応昌により地鎮がなされ、寛永8年(1628)に完成した(『高野春秋編年輯録』)。正保3年(1646)の「御公儀上一山図」には、「東照権現様」として、本殿・拝殿ともに千木を載せた屋根をもつ建物が塀に囲まれ、正面に門がひらき、その正面に鳥居が、さらに右手に宝形造で宝珠を関した建物が描かれる(絵図については「本章2金剛峯寺」に掲載)。慶安2年(1649)には江戸幕府から東照宮に領地が下賜され、興山寺では「御仏殿」の造替をはじめ、翌3年(1650)春には完成させた(『高野春秋編年輯録』)。承応2年(1653)の「高野山絵図」では、「御仏殿」として、宝形屋根に宝珠を載せた本殿と、正面に唐破風を備えた拝殿が建ち、両者が廊下で繋がれる。これらが塀で囲まれ、正面に入母屋造の門が開き、門の前には鳥居が建ち、右手に宝形造で宝

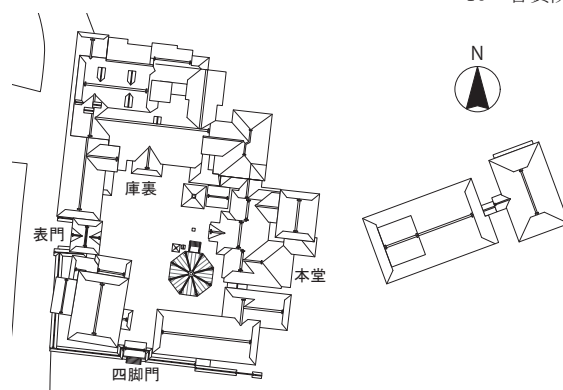


図 818 普賢院配置図 1:2000

珠を関した「経蔵」が描かれる。建物の規模や形状などの描写精度は高くないものの、慶安3年の造替により、千木を載せた屋根から宝珠を載せた屋根に建て替えられたことは、『高野春秋編年輯録』の記述とも一致する。万治元年(1658)の「高野山絵図」も同様の描写がされる。

宝永2年(1706)の「高野山壇上寺家絵図」では「東照宮」として、宝珠を載せ、正面に向唐破風の向拝をもつ本殿と、桁行5間、入母屋造、平入で、正面に向唐破風の向拝をもつ拝殿が建ち、これらが塀で囲まれ、正面に平唐破風造の四脚門が開く様子が描かれる。塀の外、正面右手には一重、切妻造の鐘楼と、宝形造で宝珠をもつ校倉造の「御経蔵」が建ち、これらが柵で囲まれる。塀の東西にはそれぞれ「御宮守庵」(東)、「鐘撞庵」(西)と記された入母屋造の建物が描かれる。拝殿の描写は、万治元年(1658)「高野山絵図」以前の描写と明確に異なり、17世紀後期頃に造り替えられた可能性を想定できる。

また金剛峯寺には、指図が伝わる(PL.62)。桁行7間、梁間3間で、正面に3間の向拝をもち、背面に石の間が取り付く。本図の作成年代などは明らかでないが、実現しなかった計画図の可能性なども含めて、今後、検討されるべきだろう。

### (2) 本堂

**構造形式** 中央部：桁行3間、梁間5間、入母屋造、檜皮葺、北部：桁行4間、梁間4間、入母屋造、檜皮葺、南部：桁行4間、梁間2間、入母屋造、檜皮葺、南部背面：桁行4間、梁間5間、妻入、切妻造、金属板葺

**建立年代** 17世紀後期(技法・様式)、明治25年(1892)頃移築

**平面** 普門院本堂は境内の東北部に位置する丘の裾に西面して建ち、南北には昭和後期以降に建てられた坊舎が接続する。本堂の中央部は、桁行3間、梁間3間、入母屋造、檜皮葺で、正面に軒唐破風付、

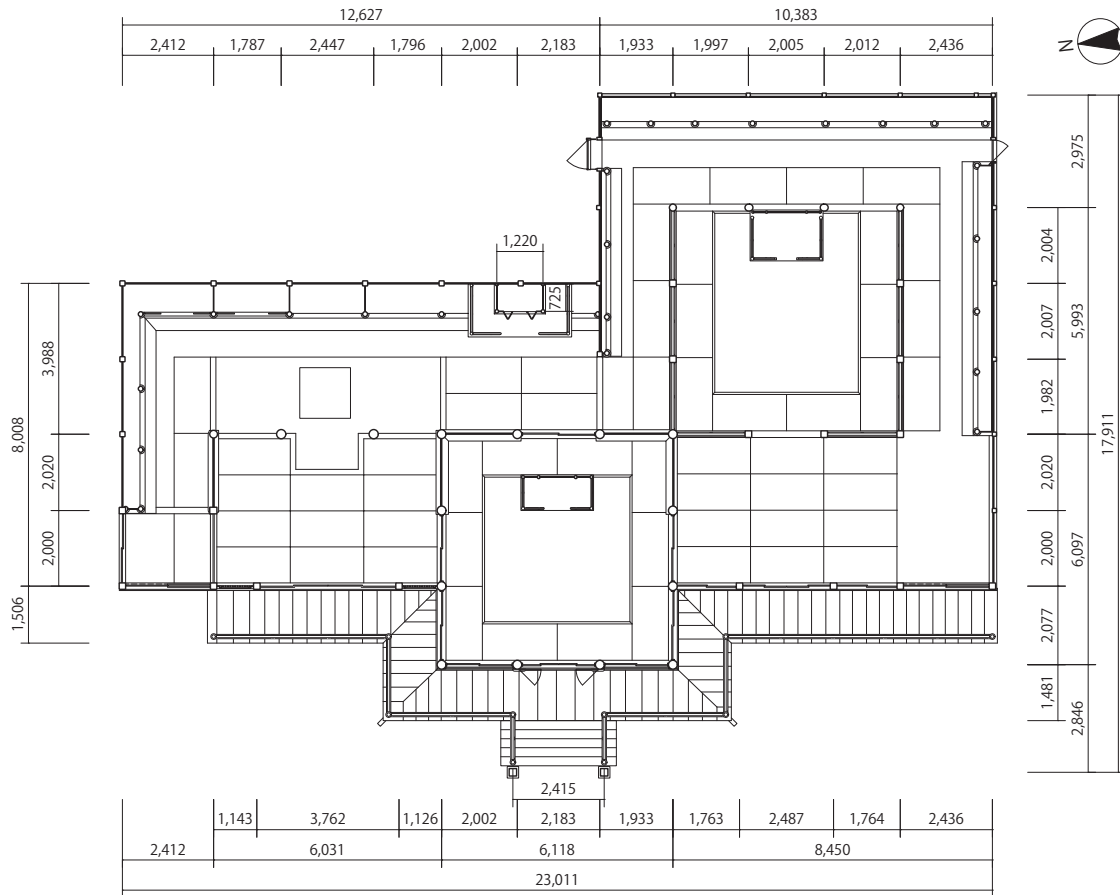


図 819 普賢院本堂平面図 1:200

檜皮葺の1間向拝が付き、南北に、桁行4間、梁間2間、入母屋造、檜皮葺の建物が翼廊状に取り付く。正面には縁を設ける。北部の背面は2間幅で拡張され、南部の背面に桁行5間、梁間4間、入母屋造、金属板葺、妻入の阿弥陀堂が突出する。

中央部は、間口6,117mm(20尺)、25枝で、中央間9枝、両脇間8枝、向拝10枝で割り付ける。一枝寸法は245mmで、8寸にあたる。梁間3間は寸法に振れがあるものの、各8枝等間で計画されたものと推測される。北翼部は中央部から3間分を、6,029mm、24枝とし、南翼部は中央部から3間分を、6,014mmを24枝としており、一枝寸法は中央よりやや長い

251mmで、8寸2分にあたるが、誤差の範疇であろう。北部は中央部から2間分を19枝、つづく1間を5枝で割り付けるが、北部の中央部より2間、南部3間分の柱位置は枝割とあわない。南北両端1間は吹き下ろし部分にあたり、北部2,412mm、南部2,436mmで、8尺で計画されたものと考えられる。

**基壇・基礎** 中央部と向拝部が二重に突出する平面形状に沿った切石積基壇のうえ、縁下に納まる乱石積基壇を築盛し、上面に自然石の礎石を据え、周囲に花崗岩切石の縁束を据える。

**側まわり** 軸部は、中央部には径約235mmの円柱を、両翼部は方約175mmの角柱を礎石上に立て、地



図 820 普賢院本堂正面



図 821 普賢院本堂側まわり

長押・切目長押・内法長押・内法貫・拳鼻付の頭貫で固め、台輪を据える。両翼部の中央から2間目は頭貫を虹梁形とする。頭貫の拳鼻は、円形下巻の渦で、中央部突出部の隅及び南部の隅のものは彫りが細く、やや浅いのに対して、北部及び南部の中央入隅から3本目の手先方向のものは彫りが太く、深い。前者が17世紀後期の様相、後者が19世紀後期の様相を示している。虹梁絵様は、円形下巻の渦で、彫りは太く、深く、19世紀後期の様相を示し、明治期の補足材と考えられる。後述するように、両翼部の外側各1間は、明治期に増築された部分にあたるが、当初、隅に用いていた木鼻の位置を変更して再利用したものと考えられる。

組物は実肘木付の出三斗で、中備には基本的に彫刻付の臺股を据えるが、頭貫を虹梁形とした両翼の中央から2間目は中央に出三斗を詰組で据え、組物間に彫刻を据える。北部南端間と、南部の南端間も臺股ではなく彫刻を据える。

軒は、中央部及び両翼部の正面側は、二軒半繁垂木で、反り・扱きはなく、茅負の上に布裏甲を据え

て、檜皮を葺く。南部の南面は、一軒半重垂木で、反り・扱きはなく、銅板葺とする。

正面の縁は、切目縁で、擬宝珠高欄を巡らし、正面中央には5級の木階を設ける。柱間装置は、中央部中央間を棧唐戸、両脇間を半部戸とし、各間の内部には明かり障子を入れる突出部の両側面は舞良戸を嵌める。両翼部は北部の中央部入隅から1間目と3間目を腰高の連子窓とするほかは、舞良戸として、内部に明かり障子を入れる。

軸部及び軒まわりの樹種は後述する向栞を含め、

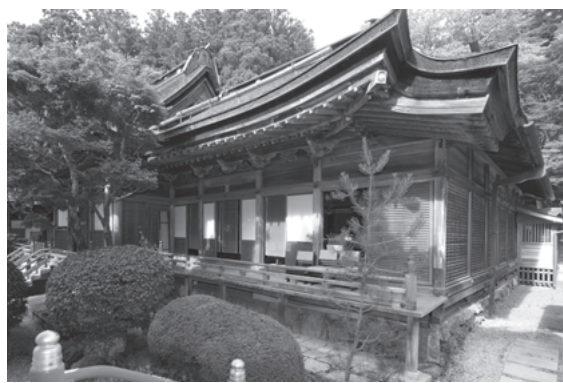


図 822 普賢院本堂南部正面側面



図 823 普賢院本堂北部側まわり



図 824 普賢院本堂中央部頭貫木鼻



図 825 普賢院本堂北部隅柱頭貫木鼻



図 826 普賢院本堂北部虹梁形頭貫絵様



図 827 普賢院本堂南部虹梁形頭貫絵様

檼材とみられる。軒より上部は基本的に、明治期の補足材とみられ、一部その後の補足材も混ざる。柱のうち、北部の北側柱及び南部の南側柱は明治の補足材と考えられ、両翼各1間分増築されたものとみられる。ただし前述の通り、当初南隅部にあった頭貫木鼻は1間分外にずらして再利用している。

**向 拝** 花崗岩切石の礎石の上、同じく花崗岩の礎盤を据え、方196mmの几帳面取り角柱を立て、象鼻をもつ虹梁形頭貫で繋ぎ、柱天には皿斗付の連三斗を据え、実肘木を介して、虹梁形菖蒲梁及び菖蒲桁を受ける。虹梁絵様は、頭貫・菖蒲梁ともに、19世紀後期の様相を示す。虹梁形頭貫の上には「波に龍」の彫刻を据え、菖蒲梁の上には、「牡丹に獅子と孔雀」の彫刻を施した墓股を据える。軒は、主体部の飛檐垂木を打越した二軒半繁垂木で、向唐破風の兎の毛通しには鳳凰の彫刻を据える。向拝は、いずれも明治期に付加されたものである。

**中央部** 中央部の間口3間、奥行3間は、内部には柱を立てず、中央背面寄りに来迎壁をもつ、禅宗様の須弥壇を据え、本尊として普賢菩薩を、両脇に

不動明王と愛染明王を祀る。軸部は内法長押・頭貫で柱天に天井桁を載せ、小組二重折上格天井を受ける。背面入隅の各1間、つまり両側面の背面側と背面の両脇間には、奥行の深い腰長押を打ち付け、八祖棚とし、壁面には真言八祖を描く。両側面中央間には襖を、背面中央間には明かり障子を嵌める。床は朱漆塗の拭板敷で、周囲に畳を敷きまわす。正面側柱は内法長押より下を素木とし、正面以外の柱の内法長押より下には透漆塗を施す。敷居は黒漆塗、八祖棚となる腰長押は面取り部分と木口を朱漆塗とする黒漆塗で、八双金具を打ち付ける。鴨居・内法長押・小壁・頭貫は、金色塗装を施す。八祖棚下の小壁には蓮池を描き、内法長押には工字繋ぎ文様を描く。柱頂及び天井桁には青地の極彩色を施す。正面側柱の柱頂にも同様の極彩色を施すが、手が異なり、明治期のものと考えられる。天井は黒漆塗で、格子には金色塗装を施し、八双金具を打ち付ける。折上部の天井板には植物文様の彩色を施す。

須弥壇は、面取り部分を朱漆塗とする黒漆塗で、擬宝珠には金色塗装を施す。壇上背面に、4本の柱



図 828 普賢院本堂向拝



図 829 普賢院本堂向拝手挟み



図 830 普賢院本堂中央部



図 831 普賢院本堂中央部須弥壇



を立てる。各柱間を飛貫・拳鼻付頭貫・台輪で繋ぎ、実肘木付の平三斗で桁をうけ、桁の上に架木を据える。中央間の2本の柱は高くしており、脇間の横架材は柱の側面に納める。中央間の架木・台輪間には彫刻を嵌め、組物とともに極彩色を施す。極めて手の込んだ優品である。

**北 部** 北部は、中央部に続く、桁行3間、梁間2間が1室で、旧東照宮拝殿の北翼部にあたと考えられる。北方に1間分、東方は中央部の北寄り2間まで2間分拡張しており、明治期移築時もしくはその後付加されたものである。旧北翼部の背面すぐに護摩壇を据え、東面及び北面に位牌壇を構える。旧拝殿北翼部は中央部境となる南面及び背面に丸柱、正面及び西面の残る柱は角柱を立てる。正面の中央間北の柱は明治期の補足材で、北面及び背面の拡張部分の側柱も明治期の補足材と考えられる。北翼部背面の柱筋は、虹梁形頭貫で固め、柱上に実肘木付平三斗を据えて天井桁を受ける。虹梁絵様は、中央間は雲形の渦、両脇間は木瓜形の渦で、延宝7年(1679)建立の金剛峯寺経蔵の絵様に通じる17世

紀後期の様相を呈している。西面及び南北面は、東面の頭貫高さに内法長押をめぐらし、柱頂を頭貫で繋ぎ、組物は用いず、柱天及び頭貫が直接、天井桁を受ける。柱間装置は東面には入れず、南北面中央間は襖、奥寄りの脇間は奥行の深い腰長押を取り付け、壁面に明王像などを描く。床は奥寄り中央の1畳分のみ拭板敷で他は畳を敷き詰める。天井は小組格天井である。虹梁形頭貫及び内法長押より上部には極彩色を施す。

北面及び東面増築部は位牌壇上来迎柱を立て、虹梁形頭貫で繋ぎ、隅には牡丹を象った籠彫りが、平の柱には獅子鼻が取り付く。絵様は19世紀後期の様相を示しており、増築部は明治期のものと考えられる。組物は実肘木付平三斗で正面に拳鼻を出し、中備は彫刻付の墓股である。主体部の柱とは、虹梁形頭貫でつなぐ。中央部背面の位牌壇は、他より一回り大きな須弥壇とし、正面には高欄をめぐらす。壇上には入母屋造、妻入、板葺の厨子を据え、弘法大師を祀る。厨子の屋根と干渉するため、位牌壇の虹梁形頭貫は切断されている。ここに須弥壇及び厨

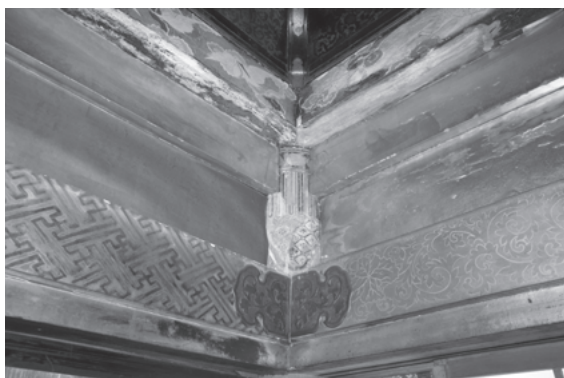


図 832 普賢院本堂中央部隅 (左：西正面、右：北側面)



図 833 普賢院本堂北部

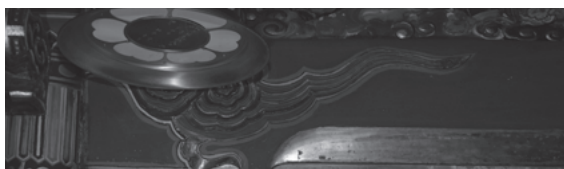


図 834 普賢院本堂北部中央間虹梁形頭貫絵様



図 835 普賢院本堂北部脇間虹梁形頭貫絵様



図 836 普賢院本堂北部背面

子が据えられたのは、平成27年の修理によるもので、それ以前は南部の南端に据えられていたという。床は、黒漆塗の拭板敷を基本とするが、背面の主体部寄りのみ朱漆塗とする。天井は折上格天井で、護摩壇上部が折上部にあたり、煙出しを兼ねている。頭貫から組物まで極彩色を施す。旧東照宮拝殿となる主体部に通じる手の込んだ優品である。

**南部** 南部は中央部につづく桁行4間、梁間2間を1室とする。旧東照宮拝殿の南翼部を、南端に1間拡張したものと考えられる。背面には間口3間、



図 842 普賢院本堂中央間背面

梁間3間の空間が取り付き内陣とし、中央間背面寄りに須弥壇を設け、阿弥陀三尊を祀り、旧南翼部を外陣として扱う。内陣の南北面及び東面の3方に、1間幅の空間を巡らせ、位牌壇を構える。背面の構えは、平成27年の修理に際して彩色塗装も改めて施しており、部材の新旧の判別が極めて難しいが、虹梁絵様からいずれも明治期の増築と考えられる。

旧南翼部となる外陣は、中央部境の柱以外は角柱で背面南端間を除き内法長押を打ち、頭貫で固め、柱天に天井桁を据え、格天井を受ける。南面入側柱



図 837 普賢院本堂中央間背面虹梁形頭貫絵様



図 838 普賢院本堂南部阿弥陀堂外陣



図 839 普賢院本堂南部背面阿弥陀堂内陣



図 840 普賢院本堂南部南側通り



図 841 普賢院本堂南部背面位牌壇

筋と背面南端間の頭貫は虹梁形とする。前者の絵様は17世紀後期、後者は19世紀後期の様相を示す。床は、南端1間は拭板敷、他は畳敷で、現在は上面全体に絨毯を張る。内法長押には箔押しを施し、それより上部には極彩色を施す。

旧南翼部背面の内陣は、背面の柱筋を円柱、他を角柱とし、虹梁形頭貫で固め、内側を台輪高さとする天井桁を据え、二重折上格天井を受ける。背面両脇間の頭貫は、柱に納まる部分を送り出し、絵様を足している。当初材を用いながら、移築以前と異なる場所で用いたものと想定される。正面両脇間及び側面の柱間には高欄をいれる。床は、黒漆塗の拭板敷で、正面及び両側面に畳を敷きまわす。背面中央間の須弥壇は、来迎壁をもち、擬宝珠高欄を巡らせた、いわゆる禅宗様須弥壇である。

背面及び南面の須弥壇は壇上の柱を虹梁形肘木で繋ぐ。組物は実肘木付平三斗で、背面中央間及び南側面の各柱間には中備として、実肘木付臺股を据え、天井桁を据え、格天井を受ける。虹梁絵様は、中央間以外の梁行は17世紀後期、梁行中央間及び桁行は19世紀後期の様相を示す。ただし、17世紀後期の様相を示すものも、材自体は新しくみえる。新旧の判断は留保せざるを得ない。

**小屋組** 小屋組は梁上に束を立てた和小屋で、明治移築時の構成を伝えるものと考えられる。南部背面は束に丸太材を用いるなど、技法が異なり、中央部及び両翼部の移築後、しばらくしてから増築された可能性がある。

**まとめ** 普賢院本堂は、旧行人方東照宮の拝殿を用いながら、明治期に、向拝を取り付け、両側面及



図 846 普賢院本堂中央部小屋組

び南面に増築した建物である。特に、極彩色を施す内部に、東照宮拝殿としての姿をとどめており、意匠性の高い荘厳を伝える。その意匠の様式は18世紀後期の様相を示しており、冒頭で述べた絵図に描かれた拝殿の姿が変容した時期と重なる。正面に突出する中央部と両翼からなる平面構成は、時代が下るものの、文化10年(1813)頃建立の勸学院本堂の平面構成とも共通する。

普賢院裏門(四脚門)、普門院本堂・表門、常喜院校倉とともに、意匠性が高い旧行人方東照宮の姿を伝える貴重な遺構である。明治期における東照宮の廃絶、建物の払い下げ、再建の歴史を伝える点も高く評価できる。今後、修理など適切な機会を捉えて、詳細な調査をおこなうことで、より詳細な来歴を明らかにすることが望まれる。(鈴木智大)

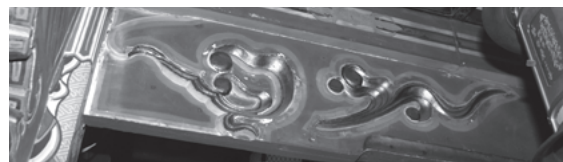


図 843 普賢院本堂南部外陣南端間絵様



図 844 普賢院本堂南部内陣梁行中央間



図 845 普賢院本堂南部内陣桁行脇間



図 847 普賢院本堂南部背面小屋組

## 17 普門院

### (1) 沿革・配置

**沿革** 普門院は千手院谷の東側南部、普賢院の北方に位置する。『続風土記』によると、開基を勤操とし、当初、谷上にあったが、元禄年間（1688～1704）の高野聖断で改易された見樹院跡の当地に移転した。明治21年（1888）の大火により境内を焼失した。

現在の境内には、西面に表門が開き、表門をくぐった正面に本堂が西面し、左手に玄関付の客殿及び台所が南面して建つ。周囲には昭和後期以降建立の2・3階建の建物などが多く建ち並ぶ。『名刹誌』によれば、書院及び奥書院が明治23年（1890）に、表門が同25年（1892）に、本堂及び護摩堂が同27年（1894）に再建されている。

本堂及び表門は、『重要文化財普賢院四脚門ほか二棟修理工事報告書』（高野山文化財保存会、1996年）において、慶安3年（1650）建立の行人方東照宮本殿を移築したものと指摘されている。

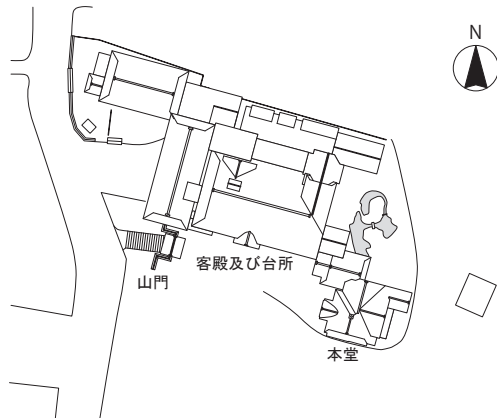


図 850 普門院配置図 1:2000



図 848 普門院本堂正面

### (2) 本堂

**構造形式** 桁行4間、梁間4間、宝形造、銅板葺、旧檜皮葺

**建立年代** 慶安3年（1650）（『高野春秋編年輯録』）、明治27年（1894）移築（『名刹誌』）

『日並記』（金剛峯寺所蔵）によれば、明治25年に旧行人方東照宮の玉垣内の建物を、普門院に払い下げており、本堂及び護摩堂はこのうち、本殿を移築したものとみられる。

後述するように普門院本堂は、明治の移築にともない大規模な増改築がなされているものの、行人方東照宮の本殿を利用したものと考えられる。

**柱配置・平面計画** 本堂は西面し、同じく西面する表門に正対して建ち、西北部が坊舎に接続する。本堂は間口15.4m、奥行12.8mの規模をもち、屋根は複合形式の銅板葺で、中央の宝形造を中心に、両脇には入母屋造風の屋根が、背後には切妻造の屋根がそれぞれ接続する。宝形造の屋根には、露盤宝珠を頂く。

平面は、間口3間で前後に揃う外陣・内陣の主体部を中心として、間口方向には北に3間分、南に1間が取り付き、奥行方向には内陣の背面に2間分が取り付く。主体部の北脇の部屋は、主体部の正面から1間後退して取り付く。建物の正面には、平面形状に沿って切目縁が雁行して巡る。主体部の正面には、唐破風の向拝1間と木階5級が備わる。

主体部は、外陣が奥行2間、内陣が奥行3間で、内外陣境に扉口を設ける。内陣両側面の中央1間は、奥行の深い腰長押を打ち、八祖棚とし、板壁に真言八祖を描く。内陣背面中央間には、奥行半間の仏壇を構え、本尊の大日如来坐像を安置する。主体部の



図 849 普門院本堂正面側まわり

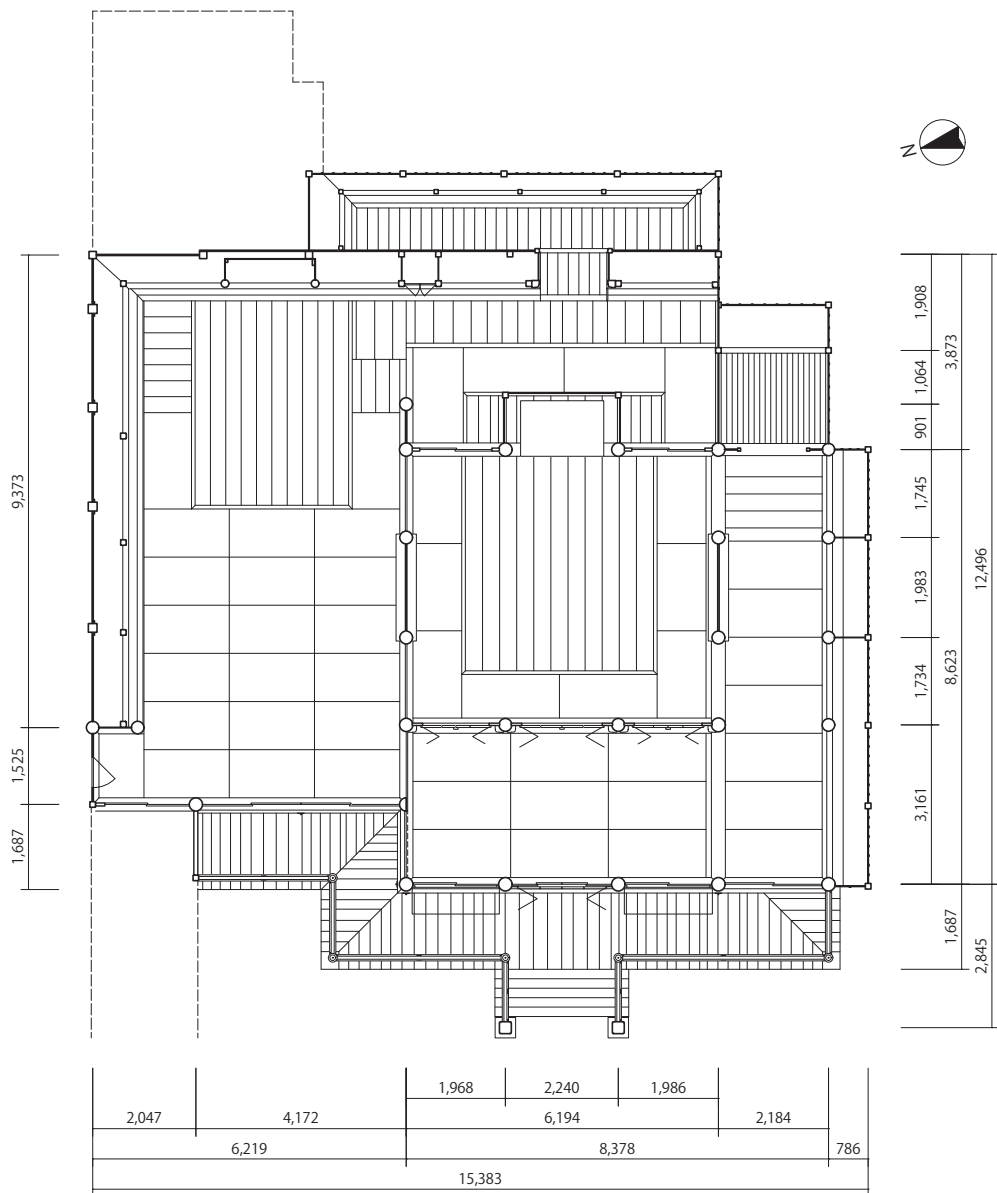


图 851 普門院本堂平面図 1:150



图 852 普門院本堂外陣



图 853 普門院本堂内外陣境扉まわり

北脇の部屋は、内陣の背後まで鉤形に広がる一室空間で、北側面と東背面に位牌壇を構える。内陣の後方中央には古材の幣軸をまわし、位牌棚を造り付ける一室への入口を構える。その北方の位牌棚には、円柱、木鼻付頭貫形虹梁、大斗絵様肘木の仏壇を構える。主体部の南脇は、正面から内陣の背面位置まで続く廊下で、南側面に位牌壇を構え、その背後に一室を設ける。

後述するように、主体部の正面側まわりを中心に、行人方東照宮本殿の部材が利用されている。主体部は、間口6,203mm(20.5尺)で50枝に割る。一枝寸法は124mm程度を測り、これは4.1寸と思われる。中央間2,233mm(7.38尺)が18枝、両脇間1,985mm(6.56尺)が16枝で、平面は枝割によって計画されたと考えられる。

**基壇・基礎** 基壇は、自然石と切石を混用した見切石を平面形状に沿って巡らし、その外側に自然石で石組の雨落溝を巡らす。切目縁に納まる自然石外装をもつ基壇を築き、周囲に自然石の束石を並べる。

基壇上には自然石礎石を据える。向拝柱は石製礎

盤が礎石を兼ねる。

**側まわり** 正面の軸部は、径268mmの円柱を自然石礎石にひかりつけて立て、切目長押、内法長押、頭貫で固める。頭貫は隅で組んで、象の彫刻の木鼻を出す。この木鼻は、主体部の正面の隅柱と、建物正面の南の隅柱から突出する。主体部の北脇の正面間口は、頭貫を虹梁形とする。

正面の組物は、軒支輪・実肘木付の出組が基本である。ただし、主体部の中央間両脇の柱上は、出組からさらに一手を挺出して出三斗風にして、丸桁と同高から突出する木鼻を受ける。主体部の南隅では、組んだ丸桁の木鼻が突出するが、ここは平の組物を置き、丸桁の木鼻を支持しない。主体部の正面の隅柱と、建物正面の南の隅柱に載る組物の秤肘木からは、木鼻を出す。正面の入隅部分では、隅行方向に一の肘木を出して鬼斗を載せ、枳肘木を組んで丸桁を受ける。軒支輪は、板に彫刻を施した板支輪である。中備は、植物の彫刻を施した本臺股である。

南側面の組物は前方2間分のみで据え、ほかは組物なしで柱を高く立ち上げ、桁を兼ねた頭貫で固め、



図 854 普門院本堂内陣



図 855 普門院本堂北部



図 856 普門院本堂北部虹梁形頭貫絵様



図 857 普門院本堂主体部北部正面軒下見上げ

垂木を架ける。前方2間の組物は、基本的には正面と同じく軒支輪・実肘木付の出組であるが、新旧材を寄せ集めた場当たりの納まりとしている。北側面の組物は、実肘木付の出三斗である。これらの肘木には、面取に大小の違いが確認できる。

主体部の軒は、二軒繁垂木である。主体部の正面両隅から隅木を出し、主体部で1つの小屋を形成する。飛檐隅木には、独特な繰形が施されている。主体部の正面側の垂木は、各柱筋と丸桁を手挟むように割られ、六枝掛で納める。飛檐垂木は反りと扱きを備え、その上に眉付の茅負と布裏甲を置く。

主体部の両脇では、主体部と別に軒を出す。正面は二軒であるが、ほかは一軒である。正面の入隅部分では、主体部の両隅と同形式の繰形を持つ飛檐隅木が出る。

主体部の柱間装置は、正面中央間が両折れ両外開きの棧唐戸、両脇間が半蔀で、それぞれの内側に腰障子が入る。それ以外の正面各間には、腰障子が入る。各間の内法長押と頭貫の間には、板壁の小壁を造る。



図 859 普門院本堂南面側まわり



図 861 普門院本堂小屋組（中央部から南部をみる）

正面の切目縁は、東石に縁束を立て、縁葛と隅掬首で固め、縁板を張る。縁板上には、擬宝珠高欄をまわす。擬宝珠高欄は主体部の中央間にあわせて開放し、向拝柱との間に登高欄を置く。

頭貫、組物、中備、丸桁、地垂木、飛檐垂木などに、白色に変色した赤色塗装の痕跡が残る。

**内 部** 北側面と東背面以外は、各部屋の外周に正面と同様の軸部をまわす。ただし、外陣の南側面の中央には、柱を立てない。

内陣は、床が拭板敷の追いまわし畳敷で、天井が



図 858 普門院本堂南部主体部正面南端間軒下見上げ



図 860 普門院本堂主体部軒まわり



図 862 普門院本堂背面部屋入口

折上格天井である。外陣と主体部南の畳廊下は、床が畳敷で、天井が格縁天井である。主体部の東北に広がる鉤形の一室空間は、前半が畳敷、後半が洋釘留めの拭板敷である。天井は格縁天井であるが、東北隅の一部に折上小組格天井を造る。

内外陣境の柱間装置は、幣軸をまわし、両折れ両外開きの板扉を吊る。扉の金具には徳川家の葵の御紋が刻印されている。外陣北側面と内陣背面両脇間には、障子戸が入る。外陣南側面と内陣両側面両脇間は現状で開放であるが、内陣北側面両脇間の内法には、2本溝が刻まれる。

内部の円柱と板壁には金の箔押を施し、その他の主要な軸部や天井などに彩色や漆塗が施す。特に、主体部と主体部の北脇の部屋には、青色塗装を主体とした独特の極彩色を施す。

**向 扨** 向扨柱は上下に粽を付けた唐戸面取角柱で、幅は236mm、面内幅は180mmである。向扨柱間には虹梁形頭貫を渡し、彫刻の掛鼻を出す。

組物は実肘木付の連三斗を組んで向扨桁と手挟みを受け、中備に彫刻板幕股を置く。向扨桁は、向扨

柱間が絵様虹梁形である。その上に彫刻板幕股を置き、棟木を支える。彫刻板幕股と絵様虹梁が二重に重なる立面となる。

軒は、向扨柱間では茨垂木を用いて唐破風を造るが、向扨柱の外側ではこれと直交して向扨桁上に本宇からの打越垂木を伸ばして、二軒繁垂木にする。唐破風には、彫刻の兔毛通を備える。

**移築後の改造** 明治期は、移築・転用した古材を用いて建立したため、現状の部材には移築前の痕跡も残る。そのため、移築当初の詳細な復原は困難であるものの、木部の風食、小屋の形式、内部の彩色などから、およそは唐破風の向扨と主体部、及びその北脇の部屋で構成されていたと考えられる。主体部の西南隅から隅木が出て、正面に丸桁木鼻が突出するのは、移築当初の名残りである。主体部の南脇の廊下には極彩色がなく、黒漆塗りである。

主体部の北脇の部屋は、内陣背面の柱筋のやや後方で、間口方向に天井桁が架かる。この天井桁は、正面側に青色塗装を主体とした独特の極彩色が残り、さらに底部に柱や束ともなう仕口痕も残る。



図 866 普門院本堂背面部屋入口



図 865 普門院本堂南側通り



図 863 普門院本堂向扨軒まわり見上げ



図 864 普門院本堂向扨手挟み



この部屋の両側面の天井回り縁に施される独特の極彩色は、この天井桁より正面側に施され、背面側にはない。内陣北側面の内法長押は、背面の柱筋位置で背面側に継がれている。内陣の後方では、内陣北側面の延長線上の柱や敷居などに、頭貫痕と板壁決り痕が残る。

移築当初の主体部の北脇の部屋は、背面を内陣と揃えて位牌壇を構え、内陣の後方は、内陣と間口をあわせて北側面に板壁を張って閉塞していたと思われる。後世に、主体部の北脇の部屋と内陣の後方が鉤形に連続する格縁天井の一室空間に改められ、主体部の南脇には廊下が設けられたと考えられる。

主体部の極彩色が施される天井回り縁には、猿頬形状の仕口痕跡があり、移築当初は猿頬天井であった。鉤形に連続する一室空間に改められた際に、格縁天井に変更されたと考えられる。主体部の北脇の後方に取り付く仏壇は、虹梁の絵様や風食からみて、このときに補足されたと思われる。また、内法長押の継手痕などから、このときには内陣の仏壇まわりも改造されたことがわかる。なお、主体部の南脇は、外部の組物、頭貫の掛鼻には転用古材が用いられているが、頭貫や軒まわりは新補材である。

**移築前の建物** 移築前の建物は、現状の部材などからみて、方3間、唐破風向拝付きの宝形造で、軒支輪・実肘木付の出組組物、二軒繁垂木であったと思われる。現状の部材のうち、軸部・組物の面取の大きな部材、主体部の北脇の正面間口に架かる虹梁、特異な繰形のある飛檐隅木などは、転用古材である。移築にあたって、正面を中心に組物・軒まわりの部材が転用されており、17世紀中期頃の様相を示して



図 869 普門院本堂北部天井桁猿頬竿縁仕口

いる。『高野春秋編年輯録』によれば、慶安3年(1650)に行人方東照宮本殿が建立されており、移築前の建物はこれにあたる。金剛峯寺所蔵の行人方東照宮指図(PL.62)をみると、方3間の本殿は内部を手前・中央・後方と、奥行方向に3分割し、かつ石の間も有する。指図の性格は不明なもの、本建築と大きく異なるが、奥行方向を分割する柱間装置の装置が内外陣境に用いられた可能性が想定できる。

なお、唐破風の向拝の虹梁絵様は、主体部の北脇の正面間口に架かる虹梁と比べて、時期差があると思われる。向拝柱は風食が少なく、後補材であろう。**まとめ** 普門院本堂は、旧行人方東照宮の本殿を用いながら、再構成した、近代の仏堂と評価できる。虹梁絵様、組物、軒支輪、中備などの細部が、行人方東照宮本殿の意匠を良く伝える。一方で1棟の建築部材を、正面外部に展開・再配置して旧状を表現しつつ、主体部の北脇には内部に柱の立たない一室の大空間を確保するなど、外観と内部空間とが対応しない面白さを持っている。明治21年の大火後の復興を知る上でも、貴重な建物である。(目黒新悟)



図 867 普門院本堂北部長押天井納まり(主体部東北隅柱)



図 868 普門院本堂背面仏壇虹梁形頭貫絵様

### (3) 表門

**構造形式** 1間1戸四脚門、切妻造、檜皮葺

**建立年代** 18世紀前期(技法・意匠)、明治25年(1892)頃  
移築(『高野山名刹誌』)

**概要** 普門院表門は普門院の西端に西面して建つ、切妻造、檜皮葺の四脚門である。両脇には銅板葺の屋根をもつ筋塀形式の袖塀が取り付け。

普門院は明確な建立年代を示す資料がないものの、後述の通り、虹梁絵様から18世紀前期の建立とみられる。

**構造** 基壇はもたず、本堂への参道とある敷石の上に建つ。唐居敷を兼ねた切石礎石に円柱の親柱を立て、柱上に冠木を渡し、大斗・絵様実肘木を載せ、梁を受ける。控柱は、切石礎石の上に据えた石製礎盤に、粽を付した唐戸面取角柱を立て、親柱との間を木鼻付の男梁(頭貫)と腰長押で固める。控柱どうしは錫杖彫を施した虹梁形頭貫で繋ぎ、端部に木鼻を取り付ける。柱上には絵様実肘木付の枿肘木を載せ、梁・桁を受ける。

扉口は、方立、鼠走を入れ、後補の棧唐戸を吊っている。ただし、現在、蹴放は入れていない。

梁の上、親柱の位置には木鼻付の大瓶束を入れ、大斗・絵様実肘木を載せる。中央には間斗束・絵様実肘木を載せ、その上に棟木を架ける。

軒は二軒疎垂木で反り増しはない。垂木上には化粧木舞を渡す。垂木・肘木には面取が施されている。大棟は箱棟で、両端に鬼板を付す。

**建立年代** 普門院表門の虹梁形頭貫・梁・実肘木・木鼻には絵様が施されている。特に虹梁形頭貫・梁の絵様はやや太く、渦の先端ほど太くなるなど、宝

永2年(1705)落成の金剛峯寺大門脇間の虹梁形飛貫の絵様に類似し、18世紀前期の様相とみたい。また、絵様のほかにも、頭貫の木鼻の表面には瑞雲が彫りこまれ、垂木先や破風先端に繰形を施す。

**移築** 普門院が明治21年(1888)の大火で大きな被害を受けていることから、別の場所になっていたものを移築したとみられる。当寺本堂や普賢院本堂・四脚門は旧行人方東照宮の建物を移築したとみられ、表門も同様と考えられる。

明治28年(1895)頃成立の『高野山名刹誌』を見ると、普門院の門の項目に、明治25年(1892)再建とあることから、この頃と判断される。その際に、塗装を施し、門扉を取り替え、彫刻・金具を追加するなどの改造(後述)が施されたが、軸部に大きな改変はなく現在に至っているとみられる。

**塗装** 表門には黒漆・朱漆、金箔などの塗装が確認できる。その剥落の状況から朱漆の下塗りに黒漆が用いられたと判断される。金箔は梁と虹梁形頭貫の絵様などのごく限られた場所に入れられる。しかしこれらの塗装は、明治移築後に施工されたものとみられ、当初から塗装があったかは、判然としない。一方で、高野山内の寺院で外部に塗装を施すものは多くなく、建立当初の塗装を踏襲して移築時に塗りなおしたとも考えられるが定かではない。これらに加え、表門には乳白色の肌が確認できる。その表面の状況から、黒漆の下地に用いられた布のようなものの可能性がある。

**彫刻・飾金具** 普門院表門には随所に彫刻が認められる。正面両脇の親柱と脇柱の間には腰長押の上に羽目板彫刻が入れられる(北側面には梅に三光鳥、南



図 870 普門院表門正側面



図 871 普門院表門背面

側面には楓に錦鶏)。正面の虹梁形頭貫には龍の彫刻が入り、冠木の上、間斗束の両脇には瑞雲・麒麟・鳳凰の彫刻が入る。破風の合わせ目の下には懸魚状に花(菊カ)の彫刻を吊る。しかし、表門の軸部には塗装の痕跡が確認できるのに対し、これらの彫刻は素木で塗装の痕跡はない。

親柱・控柱・方立の下部、腰長押の隅、冠木の両端、破風の先端・合わせ目に入八双の金具を、棧唐戸の棧には出八双の金具を付ける。釘隠には六葉金具を用い、棧唐戸には饅頭金具も付ける。また丸に立葵・抱牡丹の家紋を施した金具を要所に打ち付ける。金具に施される文様は大振りなもので近代のものと思われる。

これらの彫刻・金具は全て後補のもので、移築した際に取り付けられたものと認められる。

**まとめ** 普門院表門は虹梁絵様が18世紀前期の様相を示し、建立当初の軸部をよく残す建物である。断定できないものの、旧行人方東照宮を構成した建物である可能性がある。また、明治21年の大火を経て、古建築を用いて境内の再整備を行ったという普

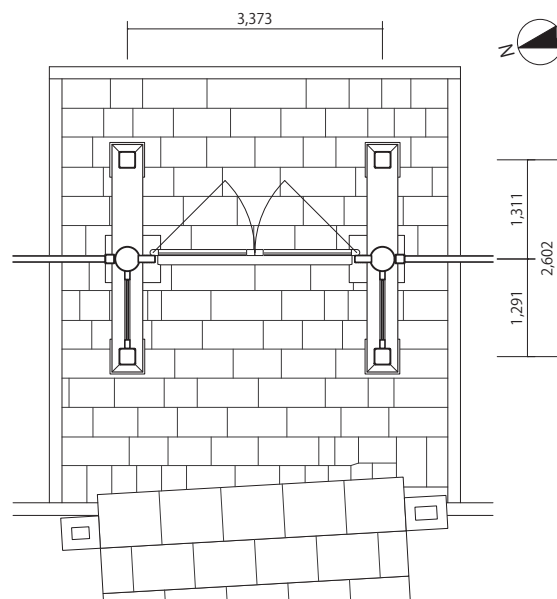


図 872 普門院表門平面図 1:100

門院の復興の履歴を示す点においても、高い価値を有する。(山崎有生)



図 873 普門院表門架構見上げ



図 874 普門院表門妻面架構



図 875 普門院表門虹梁形頭貫絵様



図 876 普門院表門虹梁絵様

## 18 観音堂

### (1) 観音堂

**構造形式** 桁行3間、梁間4間、切妻造、金属板葺、東面桁行2間、梁間4間突出、切妻屋根、金属葺

**建立年代** 18世紀中期（技法・意匠）

**沿革・配置** 観音堂は、千手観音を祀ることから千手堂とも呼ばれる。高野山上の地区名の1つである、千手院谷の由来となったとされる堂宇である。建物は、主屋が桁行3間、梁行4間、切妻造、金属板葺、平入で南面し、北背面と東側面に増築部を有する。東増築部の正面は、主屋から半間後退して取り付く。主屋と東増築部の正面に雁行して切目縁を巡らし、それぞれの正面中央に木階3級を設ける。主屋の手前には、「享保二十年卯二月吉日」の年紀を持つ2基の華瓶が立つ。主屋は、虹梁絵様が18世紀

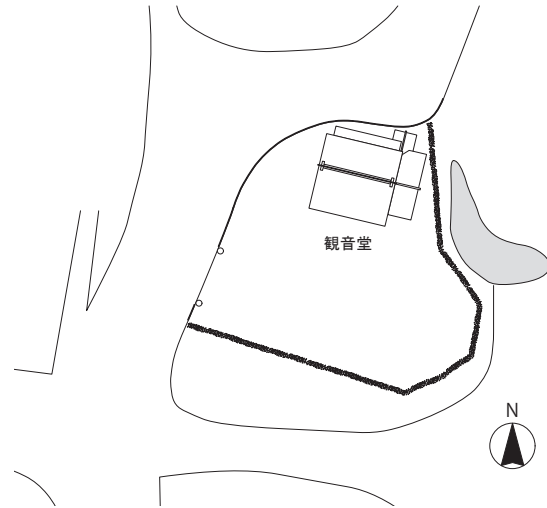


図 877 観音堂配置図 1:1000

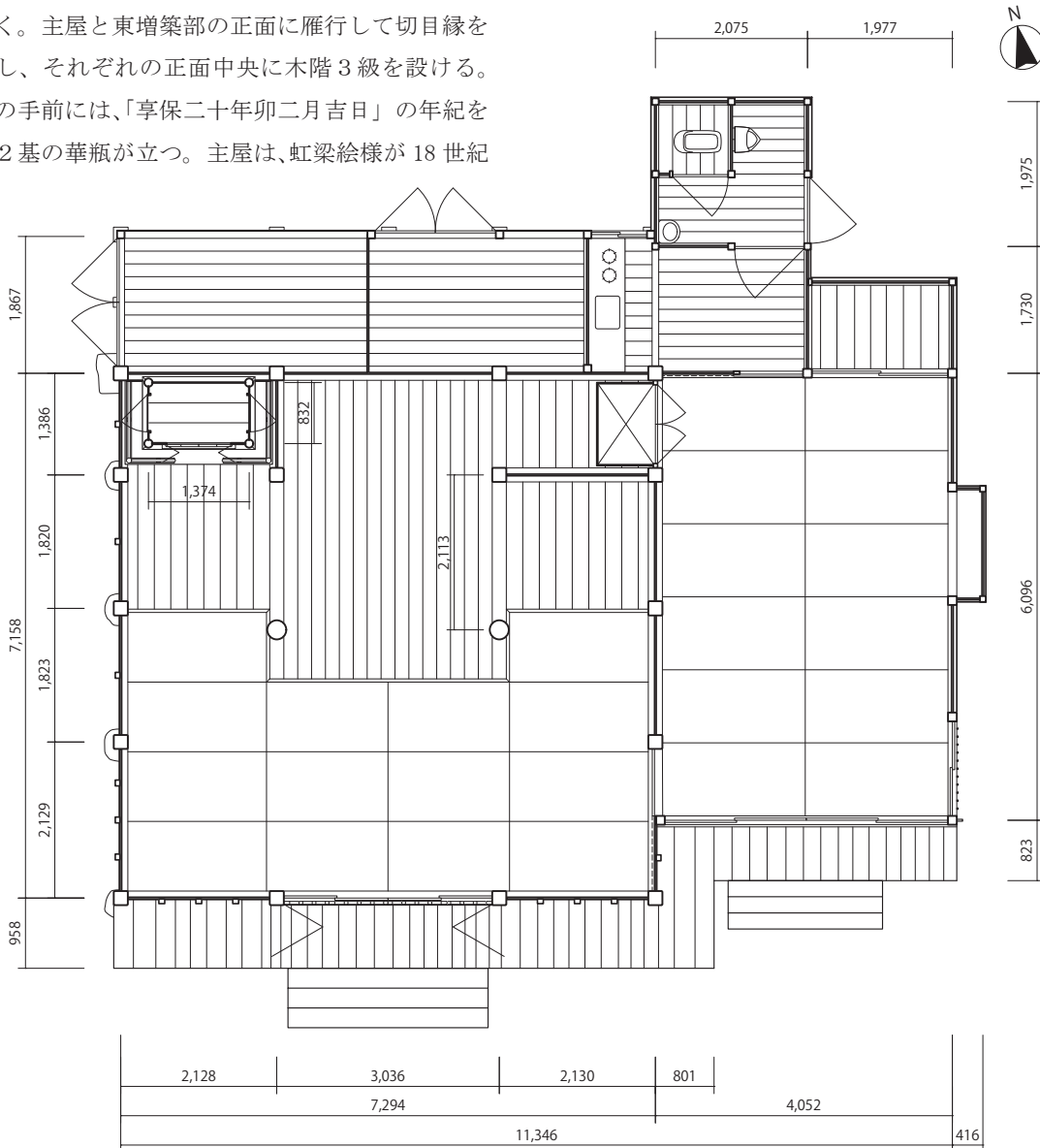


図 878 観音堂平面図 1:100

中期の様相を示しており、これらの華瓶が奉納されたのと同時期の建立とみられる。

**基壇・基礎** 基壇は、自然石の見切石で一段高く造り、正面では基壇の外側に縁の束石を置いて亀腹状に造る。基壇上面に舗装はなく、主屋の自然石礎石を並べる。建物の正面と西側面には、U字溝にグレーチングで蓋をした雨落溝を巡らす。

**平面** 主屋の側まわりは桁行3間、梁行4間で、桁行総間7.3 m (24.0 尺)、梁行総間7.1 m (23.5 尺)である。中央間は3.0 m (10.0 尺)を7枝、両脇間は2.1 m (7.0 尺)を5枝に割り付けており、平面は枝割ではなく尺単位で計画されたものと考えられる。主屋は四周に板壁を張り、正面中央間に扉口を設ける。主屋東面にも扉口を設けて、東増築部と内部で接続する。主屋の梁行は、正面側1間が2.1 m (7.0 尺)で、背面側1間の1.4 m (4.5 尺)より広い。そのため、棟通りとなる中央の柱筋は妻面中央から後退し、屋根は招造になる。

主屋の内部は、中央間に揃えて四天柱を立て、背面側の2本は入側柱筋に揃えるが、正面側の2本は

棟通りの柱筋から0.3 m (1.0 尺)前方に立てる。棟通りから正面側が畳敷、背面側が拭板敷で、中央間のみ拭板敷が半間分突出する。四天柱内の西よりに、簡素な仏壇を設けて本尊の千手観音像を祀り、その東脇に脇侍の地藏尊を安置する。背面側の東脇間は、中央間境が開放、正面側が縦板壁である。背面側の西脇間は、中央間境が縦板壁、正面側が開放で、中に厨子を安置する。

**主屋側まわり** 柱は幅190 mm、面内幅172 mmの面取角柱で、自然石礎石にひかりつけて立て、腰貫と内法貫で固める。正面中央間の内法貫は虹梁形にする。絵様は、円弧の渦を巻き、渦に接して若葉が生える。彫りには鎬を付け、幅は広い。渦と若葉が接続し、彫りの幅も広く、後世の絵様にみられる新し



図 879 観音堂主屋正面中央間虹梁形内法貫絵様



図 880 観音堂正側面 (南西より)



図 881 観音堂正側面 (南東より)



図 882 観音堂背面 (北東より)



図 883 観音堂妻面架構見上げ

い要素も生じているが、比較的整った渦の形状は、18世紀中期の様相を示すとみておきたい。正面・背面の側柱に柱天載せで軒桁を置き、妻面ではこれと同高で梁行方向に繋ぎ梁を架けて入側柱に挿す。妻面の各入側柱と棟通り柱に上屋梁を天載せし、上屋梁の上で各入側柱筋に母屋桁を架ける。

軒は一軒疎垂木、茅負、布裏甲、登裏甲、破風、拝懸魚である。垂木は各柱筋に心揃えて納め、傍軒は3枝分出る。垂木は棟から軒先まで直線に伸びず、母屋桁を境に別材として、「く」の字に屈折する。ただし、屋根は鍔葺にしない。棟木から母屋桁までは急勾配、母屋桁から垂木鼻までは緩勾配である。

妻飾は東立、扱首で、東の上に斗を置いて棟木を支える。

柱間装置は、正面中央間の扉口が両開きの両折れ格子戸で、内側に4枚違の腰障子を入れる。腰障子の腰板には、「明治廿三年観音堂十二月吉日新調」の墨書がある。東面の東増築部に続く扉口は、片引き舞良戸である。それ以外の柱間は、内法に間柱を立て横板壁で閉塞する。室内には、さらに洋釘で堅板

が張られる。

正面の切目縁は、東石に縁束を立て、縁葛で繋ぎ、建物正面の側柱に打ち付けた縁板掛との間に縁板を渡す。切目縁上に高欄はない。

正面には、中央間と西脇間の内法上にそれぞれ扁額が掲げられる。中央間の扁額には、「寛政八年」の年紀を確認できる。正面中央の軒下には、垂木から鰐口が吊られる。鰐口の背面には、「明和三戊」の年紀を確認できる。

**主屋内部** 四天柱は、正面側の2本が径260mmの円柱で、背面側の2本が幅190mm、面内幅158mmの面取角柱である。正面側では、中央間の側柱上に軒桁と同高で直交して繋ぎ梁を架け、円柱に挿す。繋ぎ梁の上には、入側柱筋に束を立て、これと四天柱に上屋梁を天載せする。上屋梁の上には、正面・背面の各入側柱筋に母屋桁を置く。また、棟通りには棟束を立て、天載せで棟木を支持する。上屋梁間には、中央間では棟通りのやや前方に、両脇間では棟通りのやや後方に虹梁を架け、棟木との間に洋釘で垂壁を設ける。この虹梁と垂壁には、赤色塗装が施



図 884 観音堂主屋内部



図 885 観音堂正面西側四天柱背面痕跡



図 886 観音堂東脇間



図 887 観音堂主屋正面中央間腰障子墨書

される。

天井は化粧屋根裏で、「く」の字に屈折する天井面を現す。

**改造** 柱は、いずれも腰貫の下で根継ぎされており、大規模な修理がおこなわれている。側柱や円柱は、当初材に鉋がかけられており、新補材のようにみえる。

四天柱や上屋梁・母屋桁の仕口痕などから、四天柱の両側面と背面は板壁で仕切られ、正面には虹梁形頭貫と仏壇框が架けられていたことがわかる。現状の上屋梁間の虹梁と垂壁は、後補である。板床は張り替えられており、現状の間仕切壁と扉まわり、四周の壁に室内から張られた縦板は、後補である。現状の縁まわりは、後補材である。当初は、一室の中央に四天柱で囲われた仏壇を有する形式であった。

東増築部は、室内に掲げられる「御手洗場建築寄進者」銘板にある「昭和廿四年一月十七日落成」から、建立時期を知れる。腰障子は、このときにあわせて新調されたことがわかる。また、同室内には「観音堂大修理」銘板があり、「平成元年九月十五日落慶法要」とあるから、このときに大修理がおこなわれたことがわかる。北増築部は木部の風食が少なく、このときに増築されたと思われる。

**厨子** 背面側の西脇間には、仏壇付きの厨子が安置され、中に仏像を祀る。仏壇は、束を立てて正面の羽目板を3区に分け、ここに盲連子入りの格狭間を施す。仏壇の上面には、正面と両側面に高欄をまわす。高欄の親柱には逆蓮彫刻を施し、正面の中央は蕨手を付けて開放する。



図 888 観音堂東増築部

仏壇上の厨子は、方1間、寄棟造、平入で、板材で屋根の造形を施す。軸部は、円柱を四隅に立て、地長押、腰長押、内法長押、木鼻付頭貫で固める。組物は大斗絵様肘木で、中備に彫刻付きの本臺股を置く。軒桁は面取が大きく、上面に軒反を付け、隅で組んで木鼻に繰形を施す。軒は板軒で、軒桁に副って軒反をもつ。内法の柱間装置は、正面が扉口、両側面と背面が板壁である。地長押と腰長押の間は、板壁で閉塞する。扉口は、闕、蹴放、方立、鼠走、楣をまわし、闕と鼠走に軸摺穴を彫って両外開きの両折れ板唐戸を吊る。天井は鏡天井である。仏壇・厨子ともに全体に漆塗りが施され、内部両側面と背面の板壁には仏画が描かれる。高欄地覆、平桁、腰長押、内法長押、鼠走には釘隠金物が、扉まわりには入八双金物が取り付く。

厨子の両側面の板壁は開閉でき、三方から拝むものであるから、この厨子はほかの同宇から遷座されたものと思われる。厨子は、様式から寛永年間頃と思われ、保存状態も良く良質である。

**まとめ** 観音堂は、「く」の字に屈折する垂木をあらわした化粧屋根裏で、面取の大きな角柱など古風な造りの仏堂である。堂内は特殊な架構を有し、繋ぎ梁で正面入側柱を省略する点など興味を引く。建立年代は明確でないが、虹梁絵様から18世紀中期頃の建立とみられる。痕跡から当初復原が可能で、特徴的な形式の仏堂として貴重であり、堂内に安置される古式の厨子とともにきわめて興味深い事例である。

(目黒新悟)



図 889 観音堂厨子

## 19 蓮華定院

### (1) 沿革・配置

**沿革** 蓮華定院は一心院谷の東北側、西室院の北西方に位置する。『名刹誌』によれば、行勝（1130～1217）が念仏三昧に入った奥坊念仏院が始まりで、建久年間（1190～1199）の建立と伝える。『名刹誌』によれば、万延元年（1860）に本堂が再建された。

**配置** 現在の境内は、南面に山門が開き、山門をくぐった正面に庫裏が南面して、左手となる西部に本堂及び護摩堂が東面して建つ。敷地奥には昭和後期建立の2階建の宿坊施設が建ち並ぶ。

### (2) 本堂及び護摩堂

**構造形式** 本堂：桁行10.2m、梁間16.1m、入母屋造、檜皮葺、  
護摩堂：桁行5.9m、梁間7.9m、入母屋造、檜皮葺

**建立年代** 万延元年（1860）（『名刹誌』）

**概要** 蓮華定院本堂及び護摩堂は境内西南隅に位置する。南に本堂、北に護摩堂と並立し、いずれも東面して建つ。本堂の南側面には片流れの物置が取り付く。『名刹誌』には、天保14年（1843）の大火後、万延元年（1860）前後の造営と考えられる。本堂は桁行10.2m、梁間16.1m、護摩堂は桁行5.9m、梁間7.9mとし、入母屋造平入、檜皮葺（一部金属板葺）とする。本堂と護摩堂の屋根は一連とするが、護摩堂の大棟を本堂よりも一段切り下げる。本堂は東半分、護摩堂は全体を土壁漆喰塗の土蔵造とする。本堂の東正面及び両側面の正面側1間分に擬宝珠高欄を備えた縁をまわし、護摩堂の正面側及び北面には跳高欄を備えた縁を設ける。

**本堂の平面構成** 本堂の間取りは東正面から奥行



図 891 蓮華定院本堂及び護摩堂正面

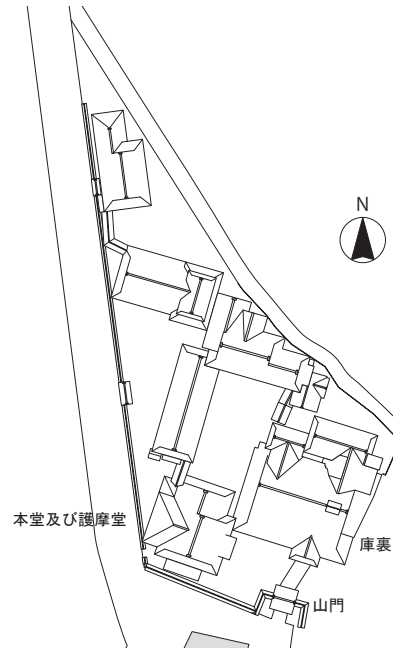


図 890 蓮華定院配置図 1:2000

1間の広縁、その西に18畳の外陣を構え、床を一段高めた18畳の内陣とつづく。内外陣の南北及び背面は半間幅の通路がめぐり、位牌棚を造作する。内陣の東端柱間の南には水屋を張り出し、反対の北側には護摩堂と通じる通路を設ける。

**本堂側まわり** 本堂は護摩堂と一連の亀腹基壇で高め、自然石礎石上に柱を立てる。本堂の正面及び南面の正面寄りには土蔵造の外壁に沿って面取角柱（210mm×175mm、面内178mm・165mm）の外部柱が立つ。正面側の外部柱は内法長押と絵様虹梁頭貫を渡して荘厳し、柱上には台輪をおいて三斗実肘木の組物を介して軒桁を支持する。中央間の絵様虹梁は両脇間のそれに比して成を高くし、中央間のみ台輪上に中備に三斗実肘木の組物を設ける。南面は台輪を設けず、頭貫を渡し、大斗実肘木の組物で軒桁を受ける。

**本堂向拝** 本堂正面の向拝は、方形切石礎盤上に几帳面取角柱の向拝柱を立て、柱頭部は粽とする。向拝柱間には絵様虹梁頭貫を渡し、木鼻を突出させ



図 892 蓮華定院本堂南側面



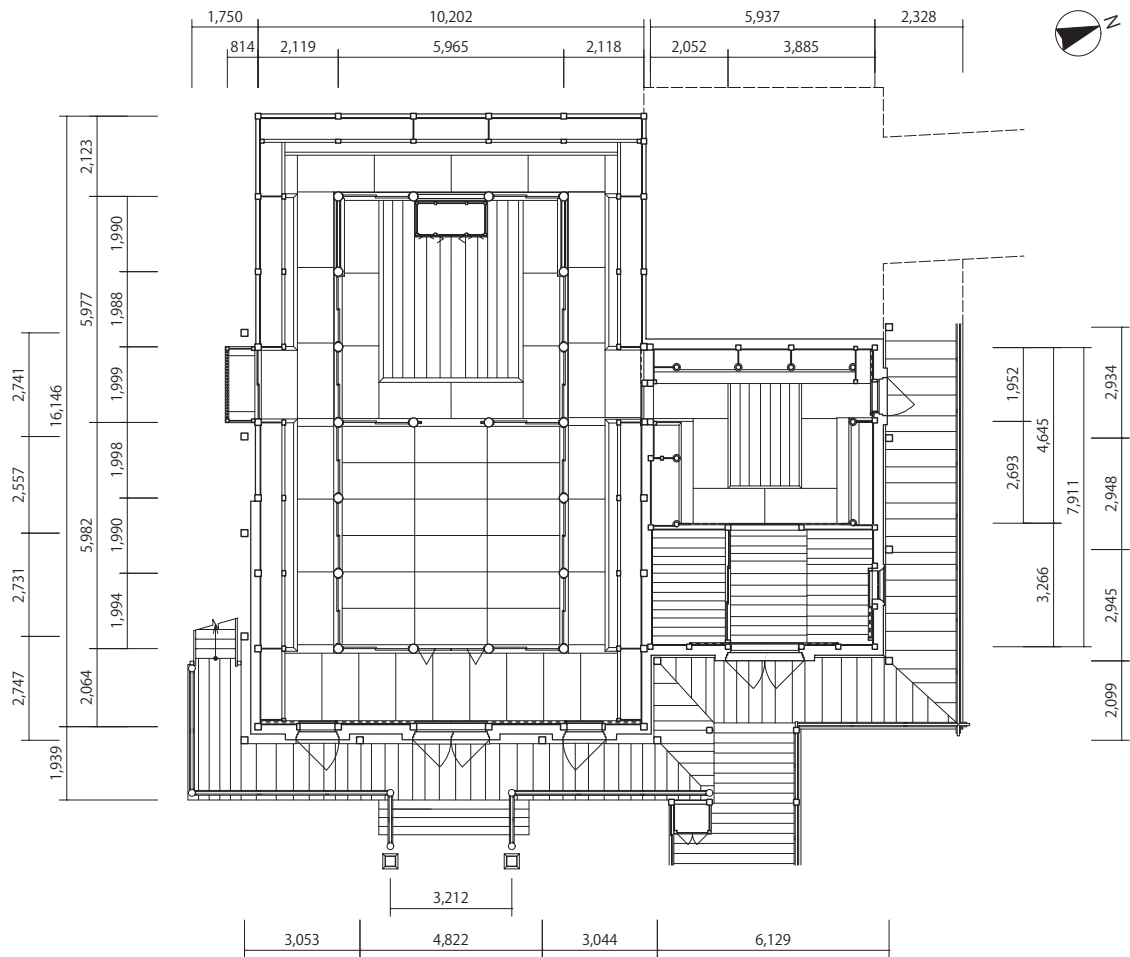


図 893 蓮華定院本堂及び護摩堂平面図 1:200



図 894 蓮華定院本堂正面側まわり



図 895 蓮華定院本堂正面脇間虹梁形頭貫絵様



図 896 蓮華定院本堂組物拳鼻



図 897 蓮華定院本堂向拝

る。組物は連三斗とし、籠彫の手挟を設ける。絵様虹梁上の中備は龍の彫刻臺股をおく。軒は本堂の飛檐垂木をのぼし、一軒、疎垂木とする。本堂と向拝柱は横架材等で接続せず、向拝柱は独立して立つ。向拝柱は2本とも根継がなされる。

**本堂内部** 内外陣は丸柱（径 220 mm）を立て、内法長押と絵様虹梁頭貫で軸部を固める。柱上には台輪をおき、実肘木付きの出三斗を介して桁を受ける。内陣のみ框及び敷居を入れて、床を一段上げ、内陣両側面の西端1間分及び背面中央間は、腰貫を設けて板壁とする。側柱は角柱（方 130 mm）とし、位牌棚の柱は角柱（135 mm×100 mm）とする。虹梁絵様は渦の曲線や玉、若葉の形状が表門と類似する。

床は畳敷とする。内陣及び外陣の天井は丸柱上の組物から一手出して天井縁をのせ、外陣は格天井で、中央天蓋上部のみ折上小組格天井とし、内陣は全面格天井を張る。広縁及び背側面の通路の天井も格天井とするが、広縁は東西の格間を2間、脇間は南北の格間を1間とする。

**本堂柱間装置** 本堂正面の開口部は3カ所で、中

間に土壁漆喰塗の観音扉を設け、内側に両引きの板戸及び腰付障子戸を設ける。その両端間は土壁漆喰塗の片開き戸とし、内側に片引きの板戸及び腰付障子戸を入れる。

内部の柱間装置は外陣正面中央間を折戸、内陣正面中央間は開放とし、その他は引違い戸を入れる。先述の内陣西端1間の腰貫下は内外とも草花の板絵を描き、腰貫上は内側に真言八祖、外側は金箔地に六観音をそれぞれ描く。外陣小壁には飛天、広縁東面の小壁には羅漢像を描き、南北両側面の位牌棚では東端の柱間にのみ絵様虹梁を渡し、鴨居との間に波に水鳥の彫刻欄間を入れる。

**護摩堂の平面構成** 護摩堂は東半を外陣、西半を内陣とし、護摩堂外陣は2室に分け、南1間分は物入とする。西面に仏壇、南北側面に位牌棚を設け、内陣中央には護摩壇を据える。

**護摩堂側まわり** 護摩堂は本堂と一連の亀腹基壇上に建ち、軸部は角柱（方 140 mm）とし、外陣は内法長押と天井長押をまわす。内陣は西面及び南北両側面の祭壇に、円形礎盤をおいて丸柱を立てる。この



図 898 蓮華定院本堂広縁



図 899 蓮華定院本堂広縁位牌棚虹梁形飛貫絵様



図 900 蓮華定院本堂外陣



図 901 蓮華定院本堂内陣

丸柱頭部には絵様虹梁頭貫を渡し、三斗実肘木の組物を介して天井桁を支持する。

本堂と同様に、土蔵造の外壁に沿って、正面及び北面に外部柱を立てる。正面は間口1間とし、内法長押と絵様虹梁頭貫をかけて木鼻を突出させる。柱上に台輪をおき、柱上及び中備に三斗実肘木の組物を据える。北側面は本堂南面と同様とする。

**護摩堂内部** 護摩堂の内陣は護摩壇及び供物台を据える3畳分を板敷とし、その他は畳敷とする。外陣は板敷で、角釘が確認できる。天井は外陣を格天

井、内陣を折上格天井とし、内陣護摩壇上部には排煙用の天蓋を下げる。

**護摩堂柱間装置** 護摩堂正面中央及び北面西端に扉を設け、外陣北面に窓を設ける。北面中央の扉は土壁漆喰塗の観音扉とし、内部に両引きの格子戸を入れる。北面西端の扉は土壁漆喰塗の片引き戸で、内部に片引きの格子戸を設ける。外陣北面の窓は内側から片引き障子戸、板戸を入れ、鉄格子を設ける。内部では、外陣南面に菊を描いた板戸3枚を入れ、内外陣境に腰付障子戸を入れる。



図 902 蓮華定院本堂内陣虹梁形頭貫・組物



図 903 蓮華定院護摩堂側面



図 904 蓮華定院護摩堂組物



図 905 蓮華定院護摩堂内陣



図 906 蓮華定院護摩堂外陣



図 907 蓮華定院護摩堂内陣虹梁形頭貫・組物

**小屋組・軒まわり・屋根** 本堂及び護摩堂の屋根は土蔵造の土置き屋根上に小屋束を立てた和小屋とし、一連の大屋根をかける。軒は二軒、棒垂木の疎垂木とする。飛檐隅木鼻は大きく造り出す。本堂の妻飾は出三斗の組物で受けた虹梁の上に臺股を据え、梁を受け、大瓶束を立てる。下段虹梁を受ける中備は平三斗である。護摩堂の妻飾は、出三斗と中備の臺股で虹梁を受ける。ともに、拌みに籠彫りの笈形を備えた六葉蕪懸魚を下げる。

**改修履歴** 本堂は昭和48年(1973)に内陣から背



図 908 蓮華定院本堂軒まわり



図 909 蓮華定院本堂小屋組



図 911 蓮華定院本堂妻飾

面側を増築したという。現在の内外陣境の柱には腰貫や背面側に内法長押の痕跡が残り、現在の内陣にある腰貫や最背面の位牌棚は当初のものともみられ、増築以前は現在の外陣を内陣、広縁を外陣とし、側背面を位牌棚が取り囲んでいたことがわかる。護摩堂の規模は当初より大きな改変はないとみられ、当初の本堂と護摩堂の梁間は同規模であった。昭和48年の増築にともない、屋根も新調されたとみられる。

**まとめ** 本堂及び護摩堂は万延元年(1860)の建立で、天保14年の大火によって前身建物が焼失したため、土蔵造によって堅牢に建築されたことが想像できる。高野山地区には土蔵造の仏堂が数棟確認できるが、建立時期があきらかな好例である。

本堂の西半は後世に増築されたものであるが、かつて背面側にあった位牌棚など、当初部材を多く移設しており、当初形態を知ることでもできる。護摩堂は後世の改修も少なく、当初材及びその形式がよく残っている。客殿及び庫裏や表門とともに一連の造営で、とくに土蔵造の本堂及び護摩堂は大火の被災とその後の再建を物語る貴重な事例である。



図 910 蓮華定院本堂背面増築部小屋組



図 912 蓮華定院護摩堂妻飾

(3) 庫裏

**構造形式** 桁行 27.7 m、梁間 19.0 m、入母屋造、正面檜皮葺、背面金属板葺、正面玄関突出、入母屋造、妻入、檜皮葺

**建立年代** 19 世紀中期 (技法・様式)

**概要** 蓮華定院庫裏は山門を潜った正面に南面して建つ。一重(一部2階建)、桁行 27.7m、梁間 19.0m、入母屋造、正面檜皮葺、背面金属板葺で、正面やや東より入母屋造、妻入、檜皮葺の玄関が突出する。南面の広縁から西に進むと、本堂及び護摩堂に接続する。北背面側は増築部で、境内最奥の宿坊とも接続する。高野山内の客殿建築と共通した間取り構成とし、玄関先の中門から西は客殿部分、北及び東は台所部分に大別される。本稿でもこの平面構成をもとに詳述する。

**建立年代** 小屋裏に棟札など明確な建立年代を示す史料はなかった。しかしながら万延元年 (1860) の建立があきらかな山門と比較すると、虹梁絵様は類似する。したがって、庫裏の建立年代は、天保 14 年 (1843) 大火後におこなわれた一連の再建として、19 世紀中期頃と首肯できる。

**間取りと平面計画** 庫裏は先述の通り、正面に玄関を突出させ、玄関北の広縁を介して中門へと至る。中門より西の客殿部分は南北 4 列、東西 4 列の間取りで、南正面及び西面に濡縁を設ける。間取りは南 1 列目を西から順に稚児の間 (8 畳)、角の間 (10 畳)、大広間 (25 畳) とする (室名称は現在の呼称である)。南より 2 列目は同様に、上段控の間 (10 畳)、上段次の間 (10 畳)、持仏間 (10 畳大)、土室 (15 畳) とする。南より 3 列目は上段控の間、上段の間 (8 畳)、金の間 (8 畳)、茶の間 (12 畳) とし、4 列目は上段控の間、上々段 (4 畳)、会所次 (6 畳)、銀の間 (6 畳) と並ぶ。上段控の間は 3 列分の通しの一室空間である。中門の東の庫裏部分は南面に寺務所と便所が並び、その北に台所が位置し、庫裏の北東には増築部が張り出す。

庫裏の枝割は柱心揃えで、正側面とも 1 間を 4 枝分として等間で割る。一枝寸法は約 495 mm ~ 502 mm (1.63 ~ 1.65 尺) である。

**庫裏側まわり** 庫裏は自然石礎石及び修理部分はコンクリート布基礎とし、側柱は自然石上に切石方

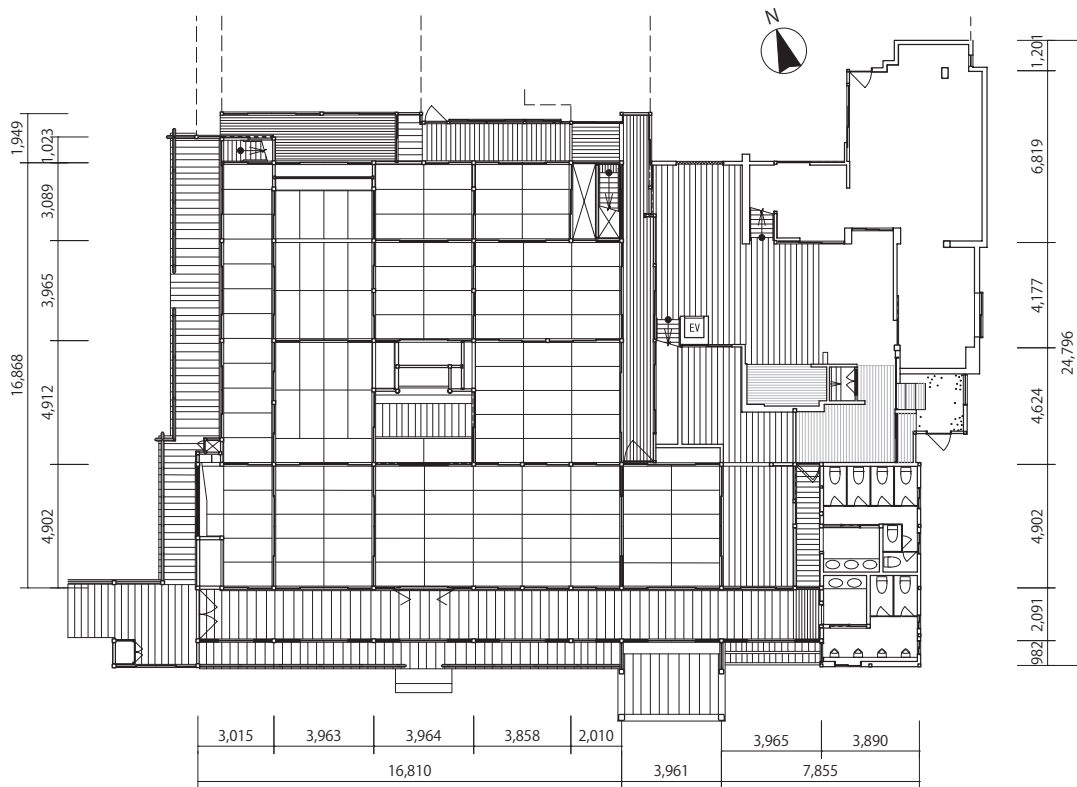


図 913 蓮華定院客殿及び庫裏平面図 1:300

形礎石を据える。側柱は方147mmの角柱で、鴨居を渡し、化粧桁をのせる。南面では、側柱筋に内法長押を設けず、入側柱の柱頭と側柱上の化粧桁間には柱筋ごとに、絵様線形を施した腕木を出して海老虹梁で繋ぐ。西面は側柱外側に切目長押と内法長押を設ける。入側柱筋は面取り角柱（方150mm、面内130mm）とし、切目長押、内法長押、飛貫で固める。柱上に舟肘木をのせて桁を支持する。

**客殿内部** 次に内部各室の造作を詳述する。南より1列目では、中門は内法長押と蟻壁長押をまわし、

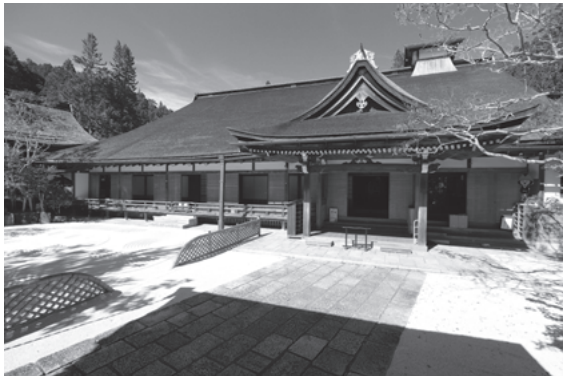


図 914 蓮華定院庫裏正面



図 915 蓮華定院庫裏西側面



図 917 蓮華定院庫裏大広間

天井は格天井とする。柱間装置は南面を引違い腰付障子戸とするが、その他3面は花鳥の板絵を施した板戸を入れる。ただし、西面の大広間境は中央二枚の板戸を障子戸に入れ替えている。小壁及び蟻壁は土壁漆喰塗とする。中門北面の内法上には寺額を掲げる。

大広間は内法長押と蟻壁長押をまわし、天井は桁行方向の棹縁天井を張る。南面は腰付障子戸を入れ、北面及び角の間境は松竹と山水を描いた金碧障壁画の襖を入れる。持仏間正面にあたる大広間南面では、広縁境の内法を切り上げ、棧唐戸の折れ戸を設ける。その内側に引違い腰付障子戸を入れ、内法上を箴欄間とし、内部では内法長押を切り上げながらさらに飛長押を設けている。持仏間に面する北面柱間は両端2枚を先述の障壁画の襖とするが、中央2枚は腰付障子戸とする。大広間西面の角の間境は小壁に箴欄間を入れ、その他壁面は土壁漆喰塗とする。

角の間は、内法長押と蟻壁長押をまわし、天井は格天井とする。南面柱間は腰付障子戸を入れ、その他3面は松鶴を描いた金碧障壁画の襖を入れる。西

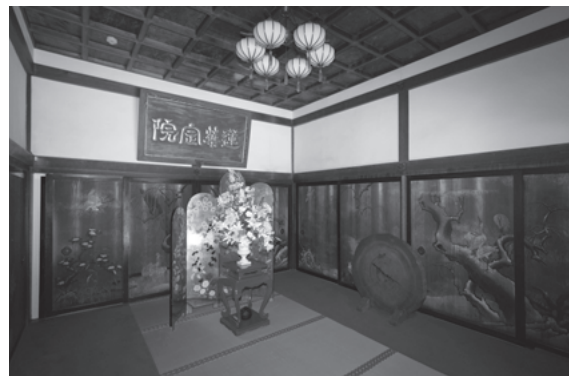


図 916 蓮華定院庫裏中門



図 918 蓮華定院庫裏角の間

面の稚児の間境の小壁には彩色を施した波・雲・草花の彫刻欄間を入れる。

稚児の間は内法長押と天井長押をまわし、天井は梁間方向に通す棹縁天井とする。西面は半間分濡縁側に張り出し、その張り出し部の南半に床の間を構え、北半には格狭間窓を設けて、引違い障子戸を入れる。窓の内側には厚板で窓台を造り、北面西には違い棚と天袋を備えた床脇を造る。南面の広縁側は腰付障子戸とし、東面の角の間境と北面の上段控の間境は金碧障壁面の襖を入れる。角の間境の小壁は先述の通りとし、その他は土壁漆喰塗とする。

次に南より2列目では、土室の東面は間柱を立てず、成の分厚い差鴨居を入れて間口いっぱい引違い腰付障子戸を入れる。内部は内法長押と天井長押をまわし、小壁は土壁漆喰塗とする。土室西面の北端には間口1間の床の間を構える。内法よりも一段高い位置に無目を渡し、押板と地袋を備え、壁は金箔押しとする。この床の間は大主殿書院の真然床に相当する。天井は桁行方向に通す棹縁天井とし、中央付近にさらに天井縁をまわして一段切り上げてお

り、かつて土室の煙道が設置されていたものとみられる。

持仏間は北面を除く3面に内法長押をまわし、蟻壁長押は各面にまわす。天井は格天井とし、天井板を市松模様張る。北面に供物台を2段造って、北面柱筋から奥に仏壇を構える。仏壇は円形礎盤上に丸柱を立て、柱上は粽とし、絵様虹梁頭貫を渡して、頭貫木鼻を出す。柱上は台輪を置いて、平三斗の組物を据え、蟻壁長押を受けている。台輪上の小壁には丸柱や虹梁、木鼻には彩色を施す。台輪上の小壁は中央に六文銭の彫刻、その左右に鳳凰の彫刻を据える。持仏間東西各面の柱間は金箔押し襖とする。仏壇まわりの壁面も金箔押しとし、その他の小壁や蟻壁は土壁漆喰塗とする。

上段次の間は内法長押と蟻壁長押をまわし、天井は格天井で荒杢の天井板を用いる。東面北寄りの1間分は持仏間に張り出して床の間を構える。黒漆塗の框に畳床とし、内法長押はなく、内法には一段上げて無目の落掛を設ける。西面の上段控の間境は腰付障子戸とするが、その他の柱間は襖とし、襖絵及



図 919 蓮華定院庫裏稚児の間



図 920 蓮華定院庫裏土室



図 921 蓮華定院庫裏持仏間



図 922 蓮華定院庫裏上段次の間

び床の間の壁面も含めて山水図が描かれる。上段の間境の欄間は、竹林の七賢とみられる透かし彫りの彫刻欄間を入れる。

上段の間は内法長押と蟻壁長押をまわし、上々段との境は黒漆塗の上がり框を設け、その上部は内法よりもさらに一段上げて無目の落掛を渡す。西面上段控の間境は腰付障子戸を入れ、東面及び南面は山水図の金碧障壁画の襖とする。天井は格天井とし、上段次の間と同じく荒空の天井板を張る。

上々段は上段の間よりも上がり框で一段高くなり、内法長押も一段切り上げる。蟻壁長押をまわして、天井は小組格天井とする。北面の間口いっぱい大床を構え、床板はケヤキ材の厚板に透き漆塗りとする。西面上段控の間境は棧を黒漆塗とした腰付障子戸とし、東面の内法長押下の壁面及び大床まわりの壁は金箔押しで、その他の小壁は土壁漆喰塗とする。

上段各室の西にある上段控の間は、東西1間、南北6間の一室空間で、内法長押と天井長押をまわす。天井は梁間方向に通す棹縁天井とし、小壁は土壁漆

喰塗とする。西面の濡縁側は引違いの腰付障子戸とする。

土室北に位置する茶の間は、東面柱筋を土室と同じく差鴨居とし、その他は内法長押と天井長押をまわし、桁行方向に通す棹縁天井とする。天井は中央やや南寄りにさらに天井縁をまわして格天井を張る。この部分は土室と同様にかつて煙道が取り付けられていた可能性がある。各柱間では、東面は引違い腰付障子戸、北面の東1間は引違いの襖、西2間分は山水図の金碧障壁画の襖とする。西面は真田家の家紋である六文銭及び結び雁金を市松模様に銀箔押しした引違いの襖を入れる。南面は漢詩を記した襖をはめる。小壁は北面西2間分を引違いの障子欄間とし、その他は土壁漆喰塗とする。

茶の間西の金の間は内法長押と天井長押をまわし、天井は梁間方向に通す棹縁天井とする。天井中央部には土室や茶の間と同様に別途天井縁をまわして格天井を張り、この室にもかつて煙道が設けられていた可能性がある。東面及び西面の柱間は、真田家家紋をあしらった襖とし、北面は山水図の紺碧障



図 923 蓮華定院庫裏上段の間



図 924 蓮華定院庫裏上段控の間



図 925 蓮華定院庫裏上段の間上々段



図 926 蓮華定院庫裏茶の間



壁面の襖、南面は漢詩を記した襖を入れる。北面小壁は箴欄間を入れ、その他の小壁は土壁漆喰塗とする。

茶の間北の銀の間は、東端3畳分を小屋裏部屋へ至る階段及び物入とし、西6畳分を部屋として使用する。北面は差鴨居を入れ、その他は内法長押をまわし、天井長押は各面にまわす。北面を引違いの障子戸、南面は引違いの襖、東面物入は金襖、西面は北半間を壁とし、南1間分に引違いの襖を入れる。小壁は差鴨居上を引違いの障子欄間とし、その他は土壁漆喰塗とする。天井は桁行方向に通す棹縁天井とする。

銀の間西の会所次は北面を除く3面に内法長押をまわし、天井長押を各面にまわす。西面は壁とし、北面は後世の改修で間柱を追加し、東半を引違いの障子戸、西半を土壁とする。銀の間境の北端の柱はやや西にずれており、銀の間からつづく北面の差鴨居はこの柱上で途切れ、天井長押下の位置で胴差を入れている。天井は梁間方向に通す棹縁天井とする。

縁まわりの造作では、まず南面の広縁は、床を板

敷、天井は化粧屋根とし、垂木上に木舞を渡して化粧裏板を張る。内法長押上の小壁はいずれも土壁漆喰塗とする。南面及び西面の濡縁は切目縁とし、跳高欄を備える。持仏間の南方及び上段の間西方の位置で昇降部分として高欄は途切れる。玄関東は内向き玄関とみられ、式台を設けている。

**玄関の軸部と造作** 玄関は土台建、入母屋造妻入、檜皮葺とする。玄関は昭和50年代の増築といい、大彦組による施工である。軸部は几帳面取角柱(方236mm、面内186mm)で、正面柱間及び両側面の隅柱から客殿側柱まで絵様虹梁頭貫を渡し、正側面に拳鼻を出す。柱上には三斗実肘木の組物をのせて桁を支持する。両側面は柱間のやや客殿寄りに間柱を立てる。正面及び両側面の絵様虹梁上には中備の透かし彫り彫刻臺股をおく。床は板敷で、広縁手前に木階を設ける。天井は格天井とする。広縁境は舞良戸を入れ、間柱と側柱間は腰貫を通し、腰下に下足箱を造作し、腰上は菱格子をはめる。軒は二軒、棒垂木の繁垂木とし、入母屋破風の妻壁は木連格子、破風板は2段で、拌みに猪目懸魚を下げる。



図 927 蓮華定院庫裏金の間



図 928 蓮華定院庫裏広縁・大広間境



図 929 蓮華定院庫裏西面濡縁



図 930 蓮華定院庫裏小屋組

玄関は後世の増築ではあるものの、復古的な意匠を採用し、庫裏や山門ともうまく調和している。

**軒まわり・小屋組** 軒は二軒、棒垂木の疎垂木とし、飛檐隅木の鼻先を大きく造り出す。妻壁は木連格子で、破風は2段として拌みに六葉猪目懸魚を下げる。小屋組は和小屋とする。屋根は大棟に山内で共通する鬼板と箱棟をのせる。箱棟側面には六文銭の金具を設ける。大棟の東寄りには、庫裏にかつてあったカマド上部の位置に、煙出しの越屋根を設ける。越屋根は袴腰とし、煙吹出口まわりは土壁漆喰塗とする。

**彫刻・金具・彩色塗装** 彫刻は後補の玄関まわりを除くと、広縁上部の海老虹梁と腕木、欄間彫刻、持仏間仏壇まわりが挙げられる。海老虹梁の渦絵様は山門のそれと類似する。金具は各長押の釘隠金具や襖の引手金具、高欄金具、仏壇まわりの飾金具が挙げられる。引手金具にも六文銭を取り入れており、当院にゆかりのある真田家の家紋が細部意匠に多く取り入れられている。彩色や塗装は全体的には多くないが、先述の通り、彫刻彩色や框の漆塗が挙げられる。また玄関部分は組物や木鼻、垂木等の木口に白色塗装を施している。

**寺務所・便所・台所等** 寺務所や便所、台所の内部は、平成に入ってから現代的な使用状況に合わせて改修がなされた。確認できる台所の軸部では、柱は面取角柱（方225mm、面内190mm）である。軸部は維持したまま、新建材で覆っているものと思われ、詳細については不明である。便所や寺務所部分も同様に、主要な軸部は残されているとみられる。また、北背面側を中心に小屋裏を改修し、一部居室として



図 932 蓮華定院庫裏広縁海老虹梁

使用している。これらの改修は平成に入ってからおこなわれたものという。

**改修履歴** かつては建物が傾くほど状態が悪かったそうであるが、昭和50年代におこなった大規模な修繕により、現在は良好な状態を保っている。昭和50年代の大規模修繕では、稚児の間の西張り出し部や、濡縁及び高欄、玄関部分の増築など、大々的に修理・改修がおこなわれている。また、先述の通り、寺務所や便所、台所、小屋裏の一部居室化は平成以降の改修である。

**まとめ** 昭和50年代の修繕により保存状態は格段に向上した。屋根の建ちも低く、屋根勾配は緩いが一部で檜皮葺も残り、境内正面側からの外観は高野山の伝統的な客殿建築の意匠をみせる。玄関は昭和50年代の増築ながらも、庫裏主体部との意匠的統一が図られている。山門や本堂の建立と同時期の19世紀中頃の建立と考えられ、軸部には当初材が多く残り、山内に共通する書院造の客殿の系譜を今に伝える建物として評価できる。



図 931 蓮華定院庫裏煙出し



図 933 蓮華定院庫裏台所

#### (4) 山門

**構造形式** 一間一戸四脚門、切妻造、檜皮葺

**建立年代** 万延元年（1860）（棟札）

**概要** 山門は棟札が棟木に打ち付けられた状態で残存しており、天保14年（1843）大火後の万延元年（1860）再建であることがわかる。山門は一間一戸、四脚門、檜皮葺とし、スロープ状の石敷をあがった先に南面して建つ。基壇は切石敷とし、切石の唐居敷上に門柱を立て、控柱は切石方形礎盤上に立つ。門柱は丸柱（径395mm）、控柱は几帳面取角柱（方210mm、面内163mm）とし、門柱と控柱は腰貫及び腰長押で固め、門柱上には冠木を渡す。この冠木と控柱は頭貫で接続し、控柱どうしには絵様虹梁を架ける。控柱上及び冠木上には三斗実肘木の組物をのせ、冠木中央にも三斗実肘木の中備を設け、控柱間の絵様虹梁上には正側面とも獅子の彫刻臺股をおく。組物上には梁間方向の控柱間及び桁行方向の門柱間に絵様虹梁を架け、妻柱及び中備に笈形付大瓶束を立てる。大瓶束の柱頭には木鼻を出して、大斗絵様肘木をのせて棟木を受ける。

柱間装置は、扉を棧唐戸とし、門柱と正面控柱間には腰貫上に牡丹草花の透かし彫りを施した欄間をはめる。その他の柱間は柱間装置をいれない。

軒は二軒、疎垂木で、地垂木にはやや反りをもたせる。妻飾は破風板を2段として、拝みに笈形付六葉猪目懸魚を下げる。大棟は高野山に共通する鬼板及び箱棟とする。なお、冠木両端には切妻造の小規模な板葺屋根をのせている。

山門は豊富な彫刻や飾金具で荘厳する。彫刻では先述したもののほかに、控柱の頭貫木鼻や冠木両端の八双彫刻などがある。頭貫木鼻は梁間方向を獅子、桁行方向を獏とする。大瓶束及び懸魚の笈形は牡丹彫刻とする。門柱上の冠木両端には八双に模った板を上面以外の3面に打ち付ける。

飾金具は、柱根巻金具、六葉釘隠金具、扉金具、冠木まわりの金具が挙げられる。扉金具は、扉棧接合部の補強として出八双金具が打たれ、扉全体が堅牢な趣である。冠木まわりの金具は、冠木正面には真田家の六文銭及び結び雁金の家紋金具を打ち、また背面側の下角部分に補強としてか、金具を設けて



図 934 蓮華定院山門正面



図 935 蓮華定院山門背側面



図 936 蓮華定院山門虹梁形頭貫・木鼻・組物



図 937 蓮華定院山門中備彫刻

いる。

各部材は檜材の素木造とする。唯一確認できる塗装は彫刻臺股の獅子と、頭貫木鼻の獅子及び獺の眼球の白色塗装のみである。

後世の改修部分は、腰長押の新調、東側の正背面控柱の根継、垂木及び破風板より上部の屋根根材が挙げられる。その他は当初材とみられ、保存状態も良い。

**脇 塀** 脇塀は切妻造、檜皮葺の一本柱塀で、山門の東西に取り付く。門東は大戸潜戸とその脇に出格子を設け、そこから南に折れて1間分つづく。門西は2間西にのびて、そこから南に折れて3間分のばし、南端で屋根は妻をみせる。ここからさらに西に16間分つづく。

軸部は野面乱石積基壇上に土台を据え、角柱(方155mm)を立てる。柱は腰長押、飛貫、内法長押、頭貫で固め、柱頭部やや下部に腕木を挿して軒桁をおく。南面西の16間分は控柱をもつ。壁は真壁造とし、外側の腰壁はなまこ壁、その他小壁は土壁漆喰塗とし、腰長押も漆喰で塗り籠める。内側は腰までを豎板壁とし、その他小壁は土壁漆喰塗とする。腰壁柱上の頭貫を地棟とし、その上に棟木を据えて垂木をかける。軒は一軒、棒垂木の疎垂木とし、切妻造、檜皮葺の屋根をかける。

脇塀は山門と一連に造営されたと考える。東半は土台及び柱、出窓、貝形部分は当初とみられるが、屋根まわりは新しい。西半は取り付けの貝形部分を除いて、戦後に新調されたとみられる。

**まとめ** 山門は棟札から建立年代が判明する貴重な事例である。一部の部材は新調されているものの、

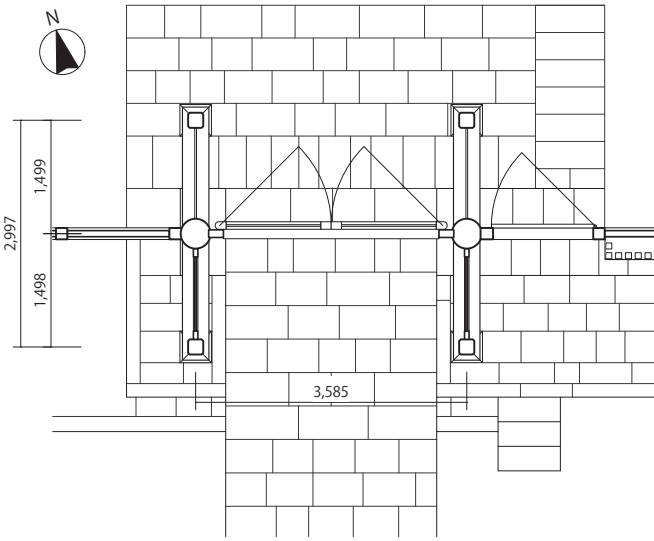


図 938 蓮華定院山門平面図 1:100

当初材を良く残し、頭貫木鼻や臺股など緻密な彫刻も豊富である。脇門は東半の一部に当初材を残し、山門と同時期の建立とみられる。西半の塀は古式を踏襲して戦後に新調したものであろう。山門は端正な造形と意匠を有し、当院の玄関口を飾る建物として評価できる。(福嶋啓人)



図 939 蓮華定院山門架構見上げ



図 940 蓮華定院山門妻面見上げ



図 941 蓮華定院山門欄間彫刻

# 第6章 高野町の寺院建築の特質

## 1 構造・意匠の特質

本節では、2次調査を実施した寺院建築のうち、仏堂・霊屋・仏塔と客殿をとりあげ、その構造・意匠の特質を見出したい。

### (1) 仏堂・霊屋・仏塔

**考察対象** 本項では、2次調査を実施した物件から、壇上伽藍・金剛峯寺・奥之院・金輪塔・円通寺から仏堂・霊屋・仏塔を計17棟をとりあげ、既指定国宝・重要文化財も含め、考察したい(表8・図)。

**規模** 調査した物件を桁行柱間で比較すると、9間堂が壇上伽藍金堂と山王院拝殿、5間堂が壇上伽藍根本大塔・御影堂・大会堂・西塔・奥之院護摩堂・円通寺本堂の6棟、残る9棟は3間堂である。

**9間堂** 壇上伽藍金堂は、桁行30.1mの破格の規模をもつ。山王院拝殿も桁行9間、梁間3間の長大な平面が特徴的である。

**5間堂塔** 桁行規模でみると、3群に細分できる。前述の金堂とともに、根本大塔の規模は22.9mと破

格のもので、これにつぐ15.0m前後の一群も、大きな仏堂・仏塔である。奥之院護摩堂は桁行10.2mと、3間堂よりは大きなものの、柱間寸法は3間堂と同等である。

**3間堂塔** 3間堂塔は調査物件のうち最も多い。6.0m以上のものは、いずれも仏堂であるのに対して、5.0m以下のものは、仏塔あるいは霊屋と類型が異なる。

既指定物件も含めると、徳川家霊台の2棟の霊屋が6.7m、金剛三昧院多宝塔が5.6mと、各タイプのなかで最大規模のものとなる。

**基壇** 続いて各部の構造・意匠をみることにしたい。床を張る建物の多くは、縁下におさまる基壇をもつ。一般的な仏堂では、漆喰で塗り込めた亀腹とするところであろうが、高野山においては、亀腹は、昭和9年(1934)の壇上伽藍金堂と既指定の金剛山三昧院多宝塔に限られる。縁下基壇の多くは乱石積の外装をもつが(図943)、壇上伽藍の御影堂と西塔は、切石積としており(図944)、建物の格の高さ

表8 高野山の主な仏堂・霊屋・仏塔

名称	建立年代	桁行総長		梁間総長		基壇	輪部			組物	中備	隅木鼻	屋根形式	葺材
		柱間	長さ	柱間	長さ		柱	線	台輪					
<b>9間堂</b>														
1 壇上伽藍金堂	昭和9年(1934)	9間	30.1m	7間	23.7m	壇正積基壇・縁下亀腹	円	なし	なし	三手先	間斗束	通常	入母屋造	銅瓦葺
2 壇上伽藍山王院拝殿	弘化2年(1845)	9間	21.2m	3間	7.8m	縁下乱石積基壇	円	なし	あり	大斗肘木	葦束	大(飛檜)	入母屋造	檜皮葺
<b>5間堂塔</b>														
3 壇上伽藍根本大塔	昭和11年(1936)	5間	22.9m	5間	22.9m	壇正積基壇	円(主屋)	なし	あり	四手先(上) 出組(下)	間斗束(上) 葦束・間斗束(下)	通常	宝形造	銅瓦葺
4 円通寺本堂	19世紀前期	5間	15.5m	5間	15.5m	縁下乱石積基壇	円	あり	あり	出三斗	葦束	大(飛檜)	宝形造	檜皮葺
5 壇上伽藍御影堂	弘化5年(1848)	5間	15.1m	5間	15.1m	縁下乱石積基壇	円	あり	あり	平三斗	葦束	大(飛檜)	宝形造	檜皮葺
6 壇上伽藍大会堂	嘉永元年(1848)	5間	14.7m	5間	14.6m	縁下乱石積基壇	円	あり	あり	出組	葦束	繪棟	入母屋造	檜皮葺
7 壇上伽藍西塔	天保5年(1834)	5間	14.3m	5間	14.3m	縁下切石積基壇	円(主屋)	なし	あり	四手先(上) 出組(下)	葦束	通常	宝形造	銅瓦葺
8 奥之院護摩堂	文化9年(1812)	5間	10.2m	5間	10.3m	鉄筋コンクリート造	円	あり	あり	出三斗	なし	縁形(地) 大(飛檜)	入母屋造	檜皮葺
<b>3間堂塔</b>														
一 壇上伽藍不動堂 身舎	鎌倉時代後期	3間	8.5m	4間	10.5m	縁下乱石積基壇	円(身舎)	なし	なし	出三斗	葦束	—	入母屋造	檜皮葺
9 壇上伽藍准胝堂	明治16年(1883)	3間	7.7m	3間	7.7m	縁下乱石積基壇	円	あり	あり	出組	詰組	大(飛檜)	入母屋造	檜皮葺
10 壇上伽藍愛染堂	嘉永元年(1848)	3間	7.4m	3間	7.4m	縁下乱石積基壇	円	あり	あり	出組	葦束	大(飛檜)	入母屋造	檜皮葺
11 勧学院本堂 主体部	文化10年(1813)	3間	6.9m	4間	8.8m	縁下乱石積基壇	角	あり	あり	出三斗	なし	縁形	入母屋造	檜皮葺
一 徳川家霊台家康霊屋	寛永18年(1641)	3間	6.7m	3間	6.7m	切石積	円	あり	あり	三手先	詰組	縁形(地)	宝形造	銅瓦葺
一 徳川家霊台秀忠霊屋	寛永10年(1633)	3間	6.7m	3間	6.7m	切石積	円	あり	あり	三手先	詰組	縁形(地)	宝形造	銅瓦葺
12 金剛峯寺護摩堂	文久3年(1863)	3間	6.0m	3間	6.0m	縁下乱石積基壇	角	あり	あり	平三斗	なし	大(飛檜)	入母屋造	檜皮葺
一 金剛山三昧院多宝塔	貞応2年(1223)	3間	5.6m	3間	5.6m	縁下乱石積基壇 ・縁下亀腹	円(主屋)	なし	あり(上) なし(下)	四手先(上) 出三組(下)	なし(上) 葦束(下)	通常(上) 大(飛檜・下)	宝形造	檜皮葺
13 金剛峯寺真然堂	寛永17年(1640)	3間	5.0m	3間	5.0m	縁下乱石積基壇	円	あり	なし	出三斗	間斗束	大(飛檜)	入母屋造	檜皮葺
14 金輪塔	天保5年(1834)	3間	5.0m	3間	5.0m	縁下乱石積基壇	円	なし	あり(上) なし(下)	四手先(上) 出組(下)	なし	大(飛檜)	宝形造	檜皮葺
<b>壇上伽藍三昧堂</b>														
15 壇上伽藍三昧堂	嘉永元年(1848)	3間	4.0m	3間	4.0m	縁下乱石積基壇	角	あり	あり	出組	なし	大(飛檜)	宝形造	檜皮葺
一 上杉謙信霊屋	江戸時代前期	3間	3.6m	2間	3.2m	—	角	なし	なし	出三斗	間斗束	通常	入母屋造	檜皮葺
16 奥之院井伊直政霊屋	17世紀後期	3間	3.1m	1間	2.0m	—	円	あり	あり	出三斗	葦束	—	切妻造	銅板葺
一 佐竹義重霊屋	慶長4年(1599)	3間	2.8m	1間	1.8m	切石積	角柱	なし	なし	三斗	大斗肘木	—	切妻造	檜皮葺
17 奥之院密厳堂	寛文11年(1671)	3間	2.7m	2間	2.7m	切石積	円	あり	あり	出三斗	なし	通常	入母屋造	檜皮葺

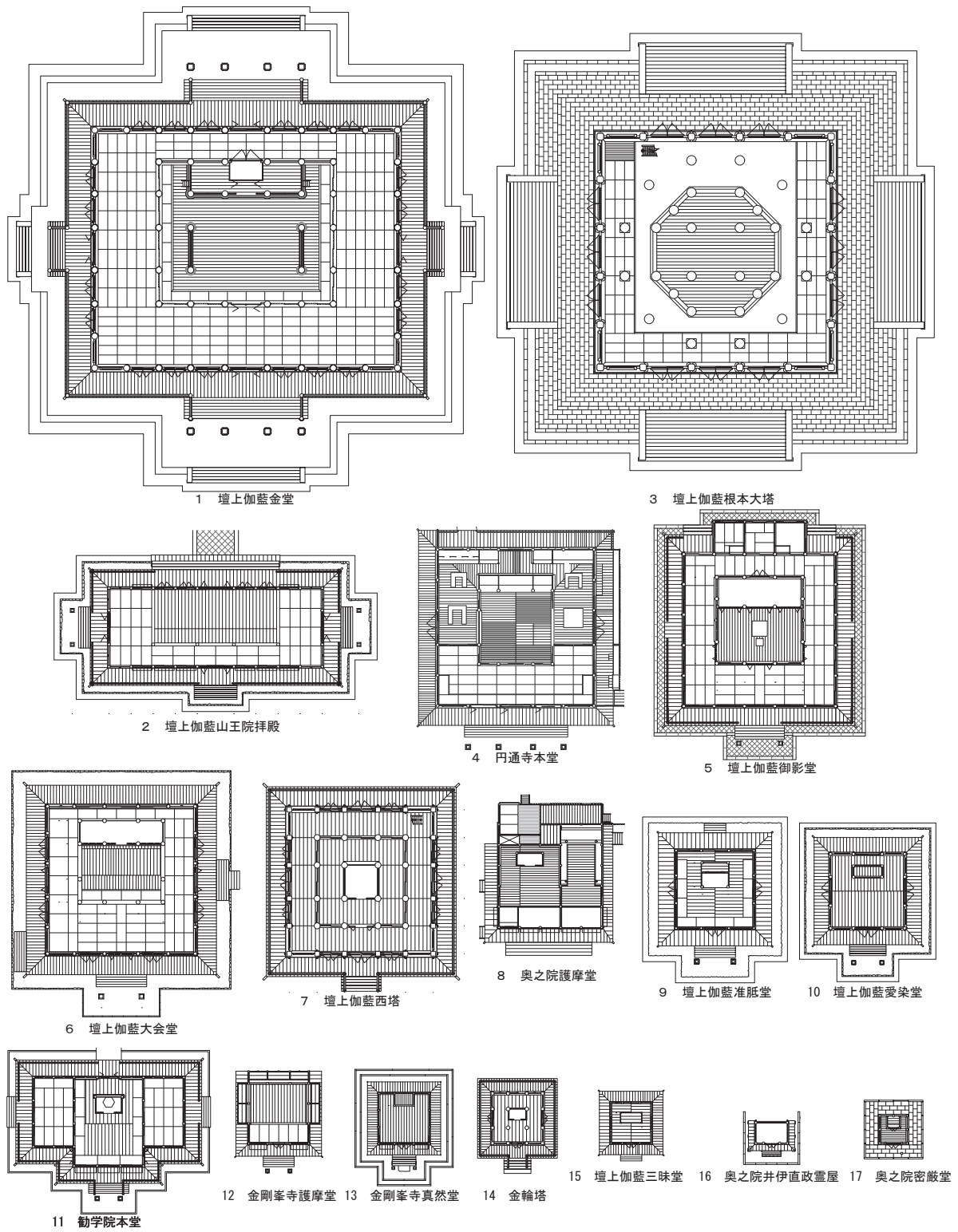


図 942 高野山の仏堂 1:400

が伺える。

**軸部** 仏堂の多くは、粽をもつ円柱を腰長押・内法長押で固め、台輪を据える(図945)。この傾向からはずれるのは、仏塔(多宝塔)、霊屋の一部、昭和期の壇上加藍金堂・根本大塔である。台輪をもちいない仏堂は、他には金剛峯寺真然堂と壇上加藍の不動堂に限られており、17世紀後期以降の画一性は高い。

**組物・中備** 多宝塔が上層を4手先とし、壇上加藍金堂と徳川家霊台の2棟の霊屋が三手先とするほかは、平三斗・出三斗・出組といった簡素なものが多く、詰組とするのも徳川家霊台の霊屋に限られる。

**軒まわり・屋根** 軒まわりで特徴的なのは、隅木鼻の形状である。飛檐隅木の鼻先の下面を膨らませて大きくするものが多い(図946)。金剛三昧院多宝塔の初重でも確認でき、高野町以外では室町時代後期建立の慈尊院多宝塔(伊都郡九度山町)の初重で確認できる。少なくとも鎌倉時代以降、一定の地域、あるいは工匠のなかで広がりをもったようである。大きくする意図はよくわからないが、時代が降ると、

絵様を施すものもあられる。

屋根は、檜皮葺が多く、他は銅瓦葺及び銅板葺である。瓦葺の建物が無いのは、冬季の積雪と低温に対応したためであろう。檜皮葺の多さは、歴史的には防火上の弱点となってきたわけだが、一方で高野山の良好な景観を形成してきた。今後の保護にあたっては、防災上の適切な措置が求められよう。

**八祖棚** 仏堂の側柱内部、内外陣境、来迎壁などに奥行の深い腰長押を打ち付けて棚として、壁面に真言八祖等を祀るもので、本書では八祖棚と総称した。



図943 縁下に納まる乱石積基壇(金剛峯寺真然堂)



図944 縁下に納まる切石積基壇(壇上加藍御影堂)



図945 粽をもつ円柱・台輪・長押(壇上加藍大会堂)



図946 鼻先を大きく造り出す飛檐隅木(壇上加藍御影堂)



図947 奥行の深い腰長押による八祖棚(壇上加藍御影堂)

腰長押を漆塗としたり、八双金具を打ち付けて、荘厳するものも多い。最も整ったものは、壇上伽藍御影堂にみられ、空海の十大弟子と真然・定誉を祀る。

**まとめ** 以上で確認した構造・意匠の特徴は、高野山の他の寺院でも多く確認でき、高野山建築の特徴とってよいだろう。

## (2) 客殿

本項では2次調査を実施した客殿建築6棟をとりあげ、その特質を探求したい(表9・図948)。

**規模** 6棟を桁行寸法で比較すると、金剛峯寺大主殿54.0mと、他が23.5～30.9mであるのに比べて圧倒的に規模が大きい。金剛三昧院客殿は34.3mで、金剛峯寺大主殿に次ぐ規模である。

**屋根** いずれも入母屋造の屋根をもつ。金剛峯寺大主殿のみ客殿と庫裏にそれぞれ入母屋造の屋根を架け、直行させる。他は入母屋造の屋根を客殿及び庫裏と一体となった入母屋造の屋根を架ける。

江戸時代の絵図をみると、青巖寺、興山寺、大徳院のみが、2棟の入母屋造の建物を直行させており、他の寺院は1棟に納めている。学侶・行人・聖方の3派の中心寺院の3箇寺の客殿の特質とってよいだろう。

**客殿の間取り** いずれの建物も、中門を挟んで、客殿と庫裏を配置する。多くの客殿は正面側の板敷の中門につづいて、大広間と隅の間を並べる。不動院では、大広間はなく8畳大の部屋をならべ、宝城院では、中門には10畳の部屋が並び、その続きに20畳の広間を配置する。常喜院も10畳と8畳の続きの2室が並ぶ。大広間を設けないのは、建物の規模に応じたものと考えられる。大広間の規模は金剛峯寺が54畳、蓮華定院が25畳、円通寺が16畳で、金剛三昧院は30畳である。また、小さな客殿では隅の間

を設けず、反対に大きな客殿では、さらにもう一室座敷が続く。

大広間の奥には持仏間を配置する。須弥壇を設けた板間であり、蓮華定院と金剛峯寺では、広縁からみて持仏間の正面となる大広間と広縁の境に扉を設けており、広縁あるいは建物外部からも目立つ。

隅の間の背面、持仏間の上手には、奥行方向に長い上段の間を設ける。金剛三昧院、蓮華定院、金剛峯寺ではその名の通り、上段を設ける。多くは2室を並べるが、金剛峯寺は上々段を含めて、39畳の一室とする。広縁も含めて、大主殿の中でも最も優れた意匠をみせる。

持仏間の下手は、火袋を備えた土室を配する。すでに失われている客殿もあるが、円通寺及び金剛峯寺には現存する。

持仏間の背面には、稚児の間と呼ばれる小部屋があり、建物規模に応じて、背面に数室を並べる。

これらの部屋が並ぶ正面には広縁が付き、さらに玄関が突出する。金剛峯寺と蓮華定院は、広縁に加えて、落縁も備える。

**庫裏** 中門からみて大広間などの座敷の反対位置の正面には部屋が続く、寺務所などとして用いられている。その背面には庫裏がつづく。後世の改変もあるが、竈をもち、煙り出しを備える。煙り出しの下部には鳥居の架木状をなす石材を据えており、意匠的にも注目される。

**玄関** 不動院を除けば、いずれも正面に玄関を突出させる。金剛三昧院客殿及び台所は、棟札から宝暦8年(1758)に付加されたことが明らかであり、江戸時代中期以降の特質である可能性もある。

**まとめ** 以上のように、高野山の客殿は、屋根形状・葺材、間取りなど、かなり高い共通性も有して

表9 高野山の客殿

名称	建立年代	規模	屋根形式	葺材
1 不動院書院	江戸時代前期	桁行 23.5m、梁間 14.9m	入母屋造	銅板葺
— 金剛三昧院客殿及び台所	寛永元年(1624)	桁行 34.3m、梁間 18.9m	入母屋造	檜皮葺
2 宝城院客殿及び庫裏	18世紀後期	桁行 30.9m、梁間 22.6m	入母屋造	檜皮葺
3 円通寺庫裏	19世紀前期	桁行 24.6m、梁間 16.5m	入母屋造	檜皮葺
4 蓮華定院庫裏	19世紀中期	桁行 27.7m、梁間 19.0m	入母屋造	檜皮葺
5 金剛峯寺大主殿	文久2年(1862)	桁行 54.0m、梁間 23.7m	入母屋造	檜皮葺
6 常喜院客殿	19世紀後期	桁行 25.6m、梁間 16.4m	入母屋造	檜皮葺



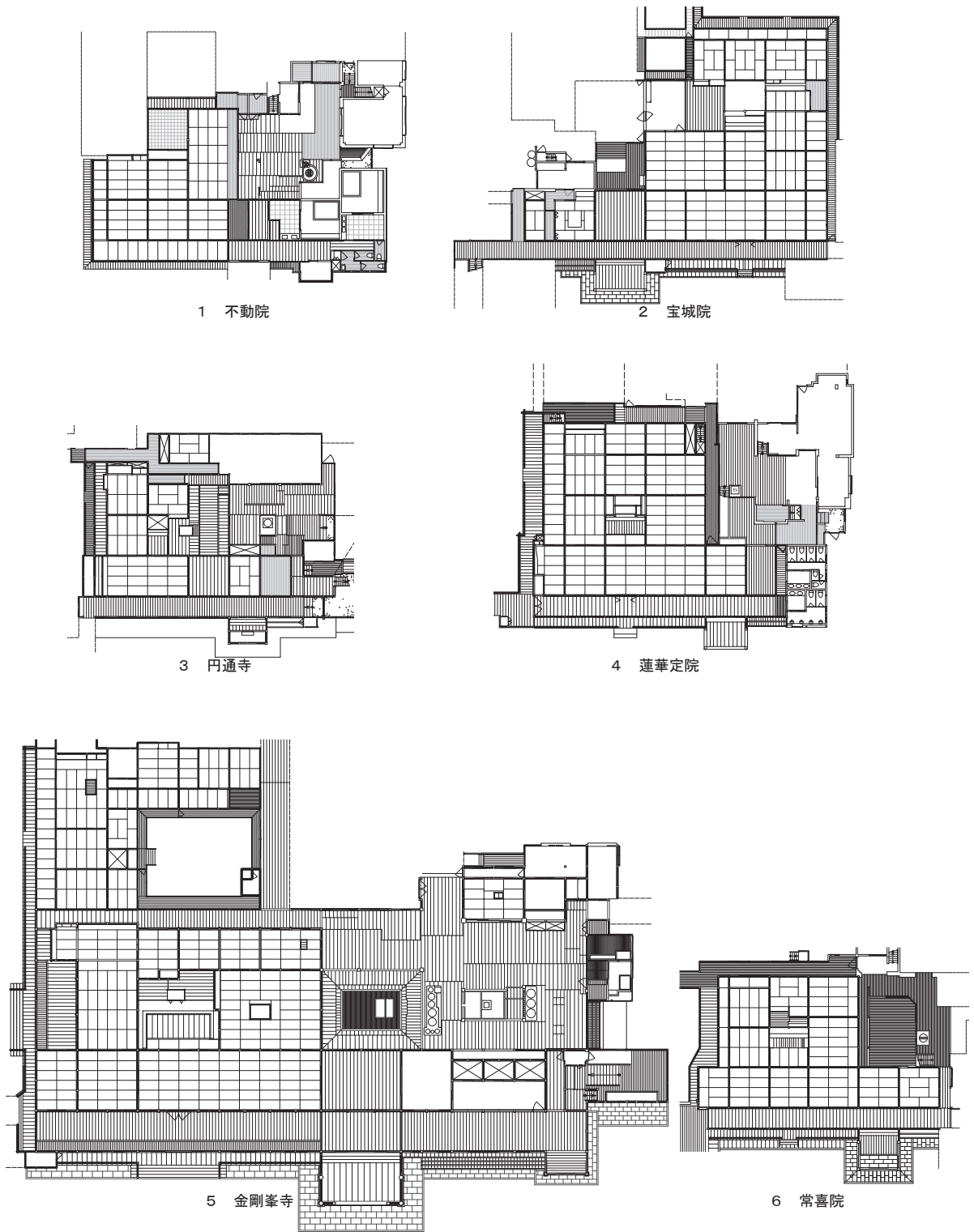


図 948 高野山の客殿 1:600

いる。金剛三昧院のように江戸時代前期の建物から、19世紀後期の建物に至るまで、構造・意匠が継承されたことは注目すべきである。 (鈴木智大)



図 949 客殿・台所・玄関の複合屋根（金剛峯寺大主殿）

## 2 虹梁絵様の変遷

高野山の寺院建築の多くは、虹梁形の部材などに絵様彫刻をもつ。虹梁絵様は江戸時代以降の建築の年代指標としての有効性が指摘され、検証が積み重ねられている。本項では、国指定物件及び今回調査をおこなった物件について、高野山の虹梁絵様を通覧し、変遷を明らかにしたい。以下では、大きく1世紀ごとに分け、さらに1世紀を3等分する程度の様式観を把握したい(表10、図950～952)。

### (1) 17世紀の絵様

**徳川家霊台、奥之院佐竹義重霊屋** 徳川家霊台家康・秀忠霊屋は墨書で確認された年代こそ、前者が寛永18年(1641)、後者が寛永10年(1633)と異なるものの、技法・意匠の特徴に大きな違いはない。絵様は、やや扁平な木瓜形の渦と、浅く細い彫りが特徴的で、若葉をもたず、弓眉を施す点も共通する。両霊屋正面の唐門と表門は、大きな木瓜形の斜め上に小さな木瓜形が展開する構図が異なるものの、様式的には同時期で、17世紀中期の様相とみる。普賢院四脚門も同様である。

慶長4年(1599)の刻銘をもつ佐竹義重霊屋は、やや傾きをもつ木瓜形の渦をもち、若葉はもたない。渦の下の、鳥兜状の絵様は、木鼻の絵様が虹梁絵様に移行する過程を示すと指摘されるものだが(『和歌山県の近世社寺建築』66頁)、渦の傾きは後述の金剛三昧院本堂とも似ており、後補材である可能性も残る。

**金剛三昧院客殿及び台所** 金剛三昧院客殿及び台所は、2022年に発見された棟札により寛永元年(1624)の建立であることが明確となった。これは平成修理の報告に示された年代観とも一致する(『重要文化財 金剛三昧院客殿及び台所他一基 修理工事報告書』2013年)。中門・広縁境の虹梁形頭貫に絵様彫刻を施している。中門側で若葉部分とする部分を、広縁側では雲形とする点が異なる。正円形に近い渦は、徳川家霊台などに比べると太く、やや時代が下り、17世紀後期と推測する事例に近い。持仏の間の仏壇内法貫も同様である。報告書では、当初材とみており、徳川家霊台等と異なる絵様が17世紀前期に並存するものとみておきたい。

**金剛三昧院本堂及び位牌堂** 金剛三昧院本堂及び位牌堂の渦とその下の鳥兜は、前述の奥之院佐竹義重霊屋とよく似ており、若葉が取り付く点は、展開と捉えられ、17世紀中期の様相とみる。

### **金剛峯寺経蔵・山門、奥之院密厳堂、普門院本堂**

金剛峯寺経蔵は、仏壇内法貫と前室の梁で絵様が異なる。前者は、前述の17世紀中期の一群と、彫りが浅く細い絵様が共通するが、弓眉はもたない。一方、後者は金剛峯寺山門とよく似た木瓜形の渦をもち、後述する宝永2年(1705)建立の大門の初重端間頭貫に通じる。経蔵は扁額銘に延宝7年(1679)建立、山門は『高野春秋』に同8年(1680)建立の記録があり、後の大門に繋がる先進的な絵様が採用されたと考える。経蔵の2種類の絵様を採用した部材はどちらも後補材とはいえず、同時代に選択的に採用されたものと考えられる。寛永11年(1671)の奥之院密厳堂は、これらよりもやや巻きが弱い。

**普門院本堂・表門** 慶安3年(1650)建立の旧行人方東照宮を移築、増改築した普門院本堂の北部頭貫の絵様は、やや扁平な木瓜形の絵様を金剛三昧院本堂と金剛峯寺経蔵・山門の間の様相とみる。表門も、旧行人方東照宮の遺構とみられ、巻きの弱い渦と、幅の変化する線が特徴的である。享和3年(1803)建立の西南院経蔵前室の梁と通じる。経蔵には、元和2年(1616)と元禄7年(1694)の棟札が伝わり、古材を利用した可能性がある。弓眉をもたないことから、元禄7年の部材と考える。これより翻って、普門院表門も17世紀後期の様相とみる。

**普賢院本堂** 普賢院本堂も普門院と同様に、行人方東照宮を移築、増改築したものとみられる。その絵様は極めて多様である。このうち、北部脇間頭貫は、整った木瓜形の渦をもつ。前述の金剛峯寺経蔵や山門と通じるものであり、17世紀後期の様相とみる。この他にも、渦を雲形とするものや、巻の浅い円形とするものなど、様々な種類があり、多くは17世紀後期とみられる。なかには19世紀後期の様相を示すものがあり、移築時に補われたものとみる。

**不動院書院** 不動院書院は、高野山の中でも、金剛三昧院客殿及び台所とともに、古い要素をもつ客殿建築である。虹梁絵様は、中門頭貫で確認できる

のみで、整った円形の渦と、雲状の若葉からなる。同一の構成をもつ絵様は、他にないが、渦の形状は、普賢院本堂に通じ、17世紀後期の様相とみておく。

### (2) 18世紀の絵様

**大門** 大門は、元禄14(1701)に上棟、宝永2年(1705)に落慶法要がなされたことが明らかで、絵様を施した頭貫・内法貫は当初材とみられ(『重要文化財 金剛峯寺大門修理工事報告書』1986年)、高野山の虹梁絵様の変遷を考える定点となる。17世紀中期以前のものとは、彫りは太く、深く、2葉の若葉は端部を巴状に配置する。初重中央間・脇間が、正円に近い円形の渦をもつものに対して、端間はやや扁平で巻きの強い木瓜形とする。これらは、全国的には宝暦年間(1751～1764)に流行する形状と位置づけられようが、高野山では早い段階で採用されている。

**金剛三昧院客殿及び台所** 前述のとおり、金剛三昧院客殿及び台所は、寛永元年(1624)の建立であるが、玄関は宝暦8年(1758)に増築されたことが棟札より明かである。頭貫の絵様は、線の太い彫りで、やや扁平な楕円形をなす巻きの弱い渦と、若葉の枝分かれ部に芽のような浅い彫りが付くのが特徴的である。後者の要素は、19世紀前期の勸学院、壇上伽藍、金剛峯寺などにも継承、多用される。

**宝城院・観音堂** 宝城院の表門、客殿及び庫裏、本堂及び護摩堂は、建立年代を示す明確な史料が得られなかったが、虹梁には、いずれも円形・下巻の渦と2葉の若葉からなる絵様を施す。年代の上限としては前述の大門と同時期の18世紀前期と考える。ただし、客殿及び庫裏、本堂及び護摩堂は、部材がそれほど古くなく、18世紀後期と考えておく。

また観音堂は、中央間頭貫に楕円形の渦と若葉が連続した絵様が施され、両者の枝分かれ部に小さな葉をもつのが特徴的である。同様の葉は、後述する文化9年(1812)の奥之院護摩堂の若葉に通じるが、これよりも小さい。建物前の華瓶の刻銘と考えあわせ、18世紀中期の様相とみる。

### (3) 19世紀の絵様

**勸学院・奥之院護摩堂・金剛三昧院表門** 勸学院本堂・鐘楼・表門の絵様は、表門の頭貫のみ、雲をあらわしたのか、とぐろを巻いたような渦を用いる

ほかは、円形の渦と若葉からなる。若葉にはいくつかの種類があり、枝分かれ部に芽をもつものも多い。一方、同時期に造営された奥之院護摩堂は、整った形状をもつ木瓜形の渦をもつもの、渦・若葉ともに波を象ったものと、種類が豊富である。同大師堂位牌棚の頭貫は、建物よりも古い様相をみせる。これらに次ぐ、金剛三昧院表門は、巻きの弱い楕円形の渦が特徴的で、前述の同客殿及び台所の玄関頭貫に通じる。ただし太さは異なる。

**円通寺本堂** 円通寺本堂・庫裏は、勸学院とよく似ており、19世紀前期の建立とみてよいだろう。

**壇上伽藍・金剛峯寺・六時鐘楼** 壇上伽藍のうち、天保14年(1843)の火災から比較的早く再建された、山王院拝殿・鐘楼、三昧堂、大会堂、愛染堂の絵様、勸学院や円通寺でみられる芽をもつ絵様が多く確認できるほか、壇上伽藍の御影堂・大会堂以降は、渦を唐草で表現するものや、波形とするものが増える。

つづいて復興された金剛峯寺大殿・護摩堂・会下門・六時鐘楼では、やや扁平な楕円形や木瓜形の渦をもつ絵様をもつものが多い。また唐草で表現した絵様は、上述のものより彫りが若干浅い。

**蓮華定院・常喜院** 蓮華定院の本堂及び護摩堂、庫裏、山門は、それぞれ異なった絵様をもつが、上述の19世紀中期のもの共通した特徴をもつ。常喜院客殿は、壇上伽藍准胝堂に近く、19世紀後期とみる。

### (4) 20世紀の絵様

**西南院** 明治34年(1901)建立の西南院本堂の頭貫は、彩色と相まって、実に多様である。

**高野山大師教会・常喜院・蓮華定院** 大正4年(1915)に亀岡末吉によって設計された高野山大師教会講堂の向拝頭貫は、19世紀中期以降にみられる唐草の渦を採用する。また、高野山大師教会に隣接する常喜院の表門・客殿玄関や蓮華定院の庫裏玄関は、整った円形の巴状の渦をもつ、いわゆる亀岡様式を採用している。亀岡にも関係した歴史的建造物の保存修理に携わる人物の参画が想定できる。

**まとめ** 以上、高野山の絵様の変遷を通覧した。18世紀の事例がやや少なく細分に困難さが残る。今後、周辺寺院の調査による補足、周辺地域との比較により、より確かなものとなるだろう。(鈴木智大)

表 10 高野山虹梁絵様一覧（通し番号は図 950～952 に対応）

No.	棟名・部位名	年代	根拠	形状	渦	巻方	巻込み	若葉	彫り	幅	深さ	鏝	袖切	弓眉	備考
1	奥之院佐竹義重堂屋	慶長 4 年 (1599)	刻銘	木瓜	下巻	中	—	—	細	浅	有	4筆	有		渦・鳥兜は、9～11 と似る。
2	金剛三昧院客殿 中門広縁境内法貫南面	寛永元年 (1624)	棟札	円	下巻	中	—	—	中	中	有	3筆	有		持仏の間仏壇内法貫も似る。
3	中門広縁境内法貫北面	寛永元年 (1624)	棟札	円	下巻	中	—	—	中	中	有	3筆	有		
4	徳川家霊台秀忠霊屋 梁	寛永 10 年 (1633)	墨書	木瓜	上巻	中	—	—	細	浅	有	4筆	有		
5	徳川家霊台秀忠霊屋唐門 梁	17 世紀中期	技法・意匠	木瓜	上巻	中	—	—	細	浅	有	4筆	有		
6	徳川家霊台家康霊屋 梁	寛永 18 年 (1641)	墨書	木瓜	上巻	中	—	—	細	浅	有	4筆	有		
7	徳川家霊台家康霊屋唐門 梁	17 世紀中期	技法・意匠	木瓜	上巻	中	—	—	細	浅	有	4筆	有		
8	徳川家霊台表門 梁	17 世紀中期	技法・意匠	木瓜	上巻	中	—	—	細	浅	有	4筆	有		
9	普賢院四脚門 頭貫	17 世紀中期	技法・意匠	円	下巻	中	—	—	細	浅	有	3筆	有		
10	金剛三昧院位牌堂 頭貫	17 世紀中期	技法・意匠	木瓜	下巻	弱	分離	2葉	細	浅	有	3筆	有		渦がやや傾く。
11	金剛三昧院本堂 向拝頭貫	17 世紀中期	技法・意匠	木瓜	下巻	中	分離	3葉	細	浅	有	3筆	有		
12	奥之院上杉謙信霊屋 向拝頭貫	17 世紀中期か	技法・意匠	円	下巻	中	—	—	中	中	有	4筆	有		
13	普門院本堂 北部頭貫	慶安 3 年 (1650)	『高野春秋』	木瓜	上巻	強	分離	2葉	中	中	有	無	無		
14	奥之院密蔵堂 頭貫	寛文 11 年 (1671)	棟札	木瓜	下巻	中	分離	4葉	中	中	有	3筆	有		
15	金剛峯寺経蔵 仏壇内法貫	延宝 7 年 (1679)	『紀伊統風土記』	円	下巻	弱	分離	木瓜	細	浅	有	3筆	無		
16	前室梁	延宝 7 年 (1679)	『紀伊統風土記』	木瓜	下巻	強	分離	1葉	中	中	有	3筆	有		
17	金剛峯寺山門 頭貫	延宝 8 年 (1680)	『高野春秋』	木瓜	下巻	強	分離	4葉	中	中	有	3筆	有		
18	普門院表門 頭貫	17 世紀後期	技法・意匠	円	上巻	弱	分離	2葉	※	中	有	3筆	無		※幅は均一でなく変化する。
19	西南院経蔵 前室梁	享和 3 年 (1803)	名刺誌	円	下巻	弱	分離	6葉	細	中	有	4筆	有		18 と似る。古材利用か。
20	普賢院本堂 北部脇間頭貫	17 世紀後期	技法・意匠	木瓜	上巻	中	分離	2葉	中	中	有	3筆	無		
21	北部中央間頭貫	17 世紀後期	技法・意匠	雲	下巻	強	連続	雲	中	中	有	4筆	無		
22	中央部後陣・南部背面境	17 世紀後期	技法・意匠	木瓜	下巻	強	分離	4葉	中	中	有	5筆	無		
23	南部背面阿弥陀堂桁脇間	17 世紀後期	技法・意匠	円	下巻	弱	分離	2葉	中	中	有	6筆	無		端部繰出
24	南部背面位牌棚	17 世紀後期	技法・意匠	木瓜	下巻	中	分離	菊・波	中	中	有	4筆	無		
25	不動院書院 中門頭貫	17 世紀後期か	技法・意匠	円	下巻	弱	分離	葉	中	中	有	3筆	有		
26	大門 初重中央間内法貫	宝永 2 年 (1705)	棟札	円	下巻	弱	分離	4葉	中	中	有	5筆	有		
27	初重端間頭貫	宝永 2 年 (1705)	棟札	木瓜	下巻	強	分離	5葉	中	中	有	5筆	有		
29	宝城院表門 頭貫	18 世紀前期	技法・意匠	円	下巻	弱	分離	2葉	中	中	有	3筆	有		
29	金剛三昧院客殿及び台所 玄関頭貫	宝暦 8 年 (1758)	棟札	楕円	下巻	弱	分離	3葉 4芽	大	中	有	4筆	有		
30	観音堂 頭貫	18 世紀中期	技法・意匠	楕円	下巻	中	連続	2葉	中	中	有	4筆	有		
31	宝城院護摩堂 頭貫	18 世紀後期	技法・意匠	円	下巻	弱	分離	2葉	中	中	有	3筆	有		
32	宝城院客殿 頭貫	18 世紀後期	技法・意匠	円	下巻	弱	分離	2葉	中	中	有	3筆	有		
33	奥之院護摩堂 大師堂位牌棚側面頭貫	文化 9 年 (1812)	棟札	楕円	下巻	中	分離	3葉	中	中	有	3筆	無		
34	大師堂位牌棚正面頭貫	文化 9 年 (1812)	棟札	楕円	下巻	弱	分離	2葉	中	中	有	3筆	有		
35	大師堂外陣頭貫	文化 9 年 (1812)	棟札	木瓜	下巻	弱	分離	3葉	中	中	有	4筆	無		
36	大師堂内陣頭貫	文化 9 年 (1812)	棟札	波	下巻	弱	連続	波・菊	中	中	有	2筆	無		
37	勸学院本堂 向拝頭貫	文化 10 年 (1813)	項 『高野山名所図会』、指図	円	下巻	弱	分離	3葉 1芽	中	中	有	3筆	有		
38	妻飾	文化 10 年 (1813)	項 『高野山名所図会』、指図	円	下巻	弱	連続	3葉	中	中	有	3筆	無		
39	勸学院鐘樓 妻飾	文化 10 年 (1813)	項 『高野山名所図会』	円	下巻	弱	連続	2葉	中	中	有	3筆	無		
40	勸学院表門 梁間梁	文化 10 年 (1813)	項 『高野山名所図会』	円	下巻	弱	分離	3葉	中	中	有	3筆	無		
41	桁桁梁	文化 10 年 (1813)	項 『高野山名所図会』	円	下巻	弱	分離	3葉	中	中	有	3筆	無		
42	頭貫	文化 10 年 (1813)	項 『高野山名所図会』	雲渦	上巻	強	分離	2葉	中	中	有	3筆	無		
43	金剛三昧院表門 頭貫	文政 8 年 (1825)	棟札	楕円	上巻	弱	分離	2葉 1芽	中	中	有	3筆	無		
44	円通寺本堂 内陣頭貫	19 世紀前期	技法・意匠	円	下巻	弱	分離	2葉 2芽	太	中	有	5筆	無		
45	向拝頭貫	19 世紀前期	技法・意匠	円	下巻	弱	連続	3葉 2芽	太	中	有	5筆	無		
46	向拝虹梁	19 世紀前期	技法・意匠	円	下巻	弱	連続	2葉 2芽	太	中	有	5筆	無		
47	円通寺庫裏 中門飛貫	19 世紀前期	技法・意匠	円	下巻	弱	分離	3葉	太	中	有	4筆	無		
48	壇上伽藍山王院拝殿 入側柱頭貫	弘化 2 年 (1845)	『高野山名所図会』	木瓜	下巻	中	分離	4葉	中	中	有	3筆	無		
49	南面中央間頭貫	弘化 2 年 (1845)	『高野山名所図会』	渦	下巻	中	連続	2葉 1芽	中	中	有	4筆	無		
50	壇上伽藍御影堂 向拝頭貫	弘化 3 年 (1846)	琵琶板墨書	波	下巻	中	連続	波	中	中	有	4筆	無		
51	背面突出部桁	弘化 3 年 (1846)	琵琶板墨書	唐草	下巻	中	連続	唐草	中	中	有	4筆	無		
52	壇上伽藍山王院鐘樓 妻飾	弘化 5 年 (1848)	『高野山名所図会』	渦	下巻	強	連続	渦	中	深	有	—	無		
53	壇上伽藍三昧堂 仏壇内法貫	嘉永元年 (1848)	棟札	円	下巻	弱	分離	3葉	中	中	有	4筆	無		
54	壇上伽藍大会堂 向拝頭貫正面	嘉永元年 (1848)	棟札	波	下巻	中	連続	波	中	中	有	—	無		
55	向拝頭貫背面	嘉永元年 (1848)	棟札	楕円	下巻	中	連続	唐草	中	中	有	4筆	無		
56	妻飾	嘉永元年 (1848)	棟札	楕円	下巻	弱	分離	3葉	中	中	有	2筆	無		
57	壇上伽藍愛染堂 向拝頭貫正面	嘉永元年 (1848)	棟札	波	下巻	弱	連続	波	中	深	有	—	無		
58	向拝頭貫背面	嘉永元年 (1848)	棟札	木瓜	下巻	強	連続	2葉	中	中	有	4筆	無		
59	妻飾	嘉永元年 (1848)	棟札	円	下巻	弱	連続	2葉 2芽	中	中	有	4筆	無		
60	蓮華定院本堂 正面脇間頭貫	万延元年 (1860)	『名刺誌』	楕円	上巻	弱	連続	唐草	中	中	有	3筆	無		
61	護摩堂 仏壇内法貫	万延元年 (1860)	『名刺誌』	木瓜	下巻	中	分離	3葉	太	中	有	4筆	無		
62	蓮華定院庫裏 広縁海老虹梁	19 世紀中期	技法・意匠	円	下巻	弱	連続	2葉	太	中	有	4筆	無		
63	蓮華定院山門 頭貫	万延元年 (1860)	棟札	楕円	下巻	中	分離	3葉	中	中	有	4筆	無		
64	金剛峯寺大主殿 大広間広縁境胴差	文久 2 年 (1862)	棟札	楕円	下巻	中	連続	2葉	中	中	有	4筆	無		
65	中門頭貫	文久 2 年 (1862)	棟札	木瓜	上巻	中	分離	3葉	中	中	有	5筆	無		
66	持仏堂内法貫	文久 2 年 (1862)	棟札	楕円	下巻	強	分離	3葉	中	中	有	4筆	無		
67	大玄関頭貫	文久 2 年 (1862)	棟札	木瓜	下巻	強	分離	3葉	中	中	有	4筆	無		
68	小玄関頭貫	文久 2 年 (1862)	棟札	楕円	下巻	中	連続	2葉	中	中	有	4筆	無		
69	広縁海老虹梁	文久 2 年 (1862)	棟札	楕円	下巻	中	連続	2葉	中	中	有	5筆	無		
70	金剛峯寺護摩堂 向拝頭貫	文久 3 年 (1863)	棟札	楕円	下巻	中	連続	2葉	中	中	有	2筆	無		
71	内部頭貫	文久 3 年 (1863)	棟札	楕円	下巻	中	連続	1葉	中	中	有	2筆	無		
72	金剛峯寺会下門 中央間内法貫	慶応元年 (1865)	項 指図	木瓜	上巻	中	分離	3葉	中	中	有	6筆	無		
73	六時鐘樓 妻飾	慶應元年 (1865)	『高野山寺院明細帳』	円	上巻	弱	連続	1葉	中	中	有	3筆	無		
74	壇上伽藍准祇堂 内部頭貫	明治 16 年 (1883)	『高野山名所図会』	波	上巻	弱	連続	波	中	中	有	3筆	無		
75	妻飾	明治 16 年 (1883)	『高野山名所図会』	円	上巻	弱	連続	1葉 1芽	中	中	有	4筆	無		
76	向拝	明治 16 年 (1883)	『高野山名所図会』	楕円	上巻	強	連続	唐草 3葉	中	中	有	5筆	無		
77	常喜院客殿 中門胴差	19 世紀後期	技法・意匠	楕円	上巻	中	連続	2葉	中	中	有	3筆	無		
78	持仏間	19 世紀後期	技法・意匠	楕円	下巻	中	連続	2葉	中	中	有	3筆	無		
79	普賢院本堂 南部南入側通頭貫	19 世紀後期	技法・意匠	波	上巻	弱	分離	波 4葉	太	深	有	5筆	無		
80	西南院本堂 向拝頭貫	明治 34 年 (1901)	聞き取り	波	上巻	弱	連続	波	中	中	有	4筆	無		
81	向拝虹梁	明治 34 年 (1901)	聞き取り	雲楕円	下巻	中	連続	雲	中	中	有	—	無		
82	外陣内法貫	明治 34 年 (1901)	聞き取り	雲楕円	下巻	弱	連続	雲	中	中	有	—	無		
83	東内陣内法貫	明治 34 年 (1901)	聞き取り	牡丹	下巻	中	連続	牡丹	中	中	有	—	無		
84	厨子頭貫	明治 34 年 (1901)	聞き取り	楕円	下巻	中	連続	4葉	中	中	有	4筆	無		
85	高野山大師教会講堂 向拝頭貫	大正 4 年 (1915)	『高野山開創老千百年記念大法会記録』	楕円	上巻	中	連続	4葉	中	中	有	—	無		
86	常喜院表門 頭貫	昭和前期	聞き取り	円	上巻	弱	巴状	4葉	中	中	有	3筆	無		87・88 と類似。
87	常喜院客殿 玄関頭貫	昭和期	技法・意匠	円	上巻	弱	巴状	3葉	中	中	有	6筆	無		86・88 と類似。
88	蓮華定院庫裏 玄関頭貫	昭和期	技法・意匠	円	上巻	弱	巴								

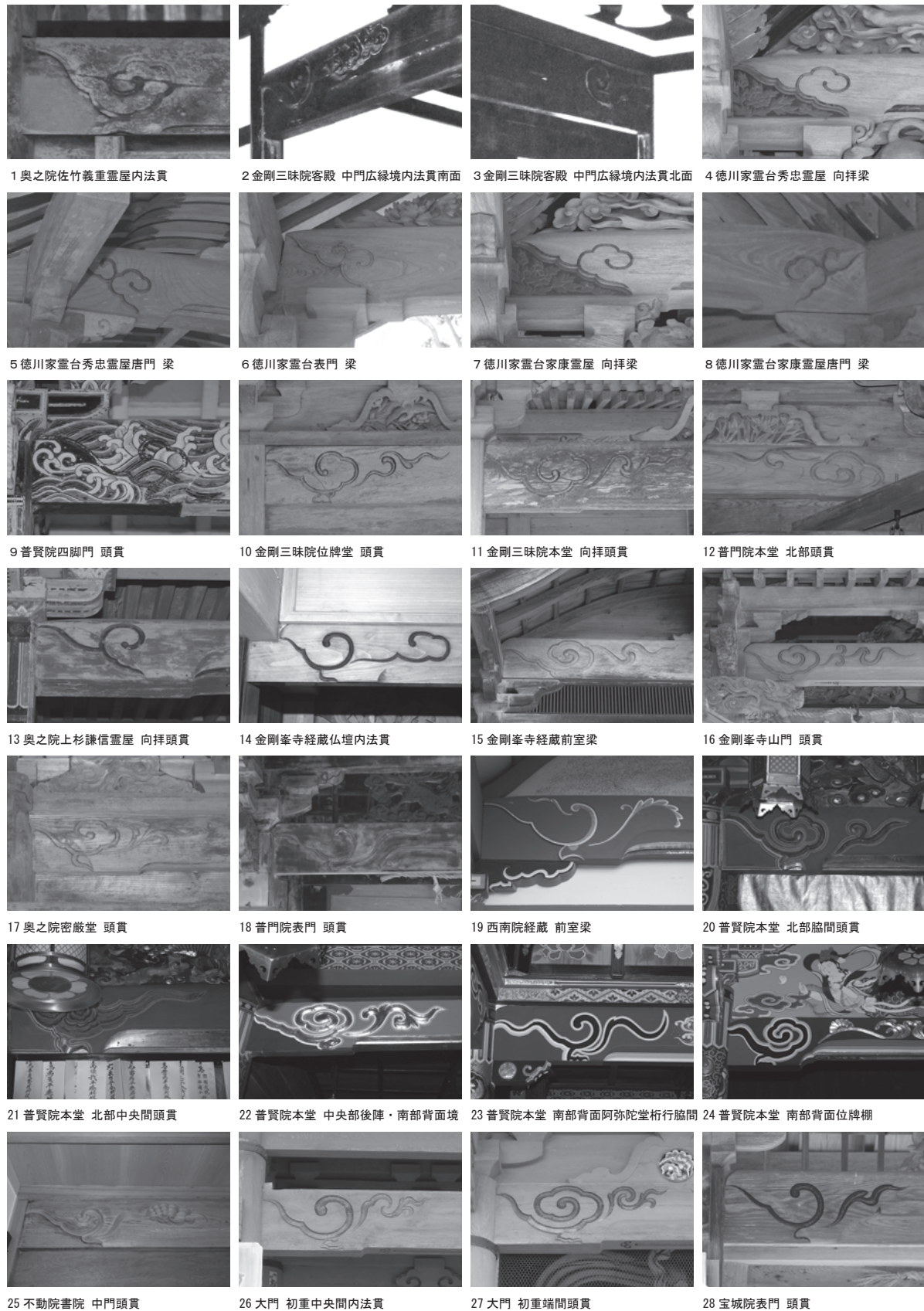


図 950 高野山の虹梁絵様 1 (1・2 出典 『重要文化財 金剛三昧院客殿及び台所他一基修理工事報告書』)



29 金剛三昧院客殿及び台所 玄関頭貫



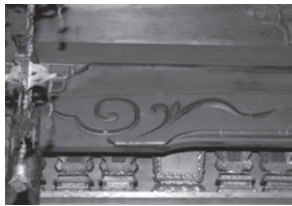
30 観音堂 頭貫



31 宝城院護摩堂 頭貫



32 宝城院客殿及び庫裏 玄関頭貫



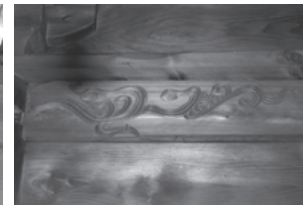
33 奥之院護摩堂 大師堂位牌棚側面頭貫



34 奥之院護摩堂 大師堂位牌棚正面頭貫



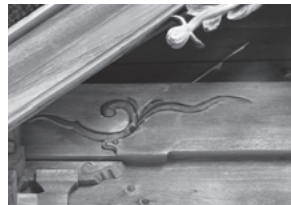
35 奥之院護摩堂 大師堂外陣頭貫



36 奥之院護摩堂 大師堂内陣頭貫



37 勸学院本堂 向拝頭貫



38 勸学院本堂 妻飾



39 勸学院鐘楼 妻飾



40 勸学院表門 梁間梁



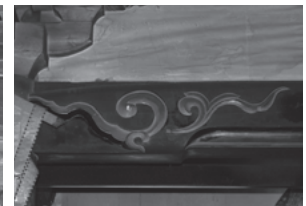
41 勸学院表門 桁行梁



42 勸学院表門 頭貫



43 金剛三昧院表門 頭貫



44 円通寺本堂 内陣頭貫



45 円通寺本堂 向拝頭貫



46 円通寺本堂 向拝梁



47 円通寺庫裏 中門飛貫



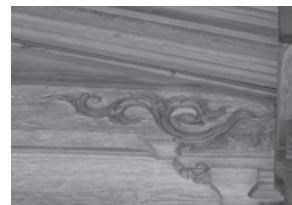
48 壇上加藍山王院拝殿 入側柱頭貫



49 壇上加藍山王院拝殿 南面中央間頭貫



50 壇上加藍御影堂 向拝頭貫



51 壇上加藍御影堂 背面桁



52 壇上加藍山王院鐘楼 妻飾



53 壇上加藍三昧堂 仏壇内法貫



54 壇上加藍大会堂 向拝頭貫



55 壇上加藍大会堂 向拝頭貫



56 壇上加藍大会堂 妻飾

図 951 高野山の虹梁絵様 2



57 壇上加藍愛染堂 向拝頭貫南面



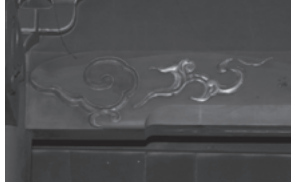
58 壇上加藍愛染堂 向拝頭貫北面



59 壇上加藍愛染堂 妻飾



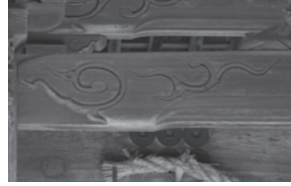
60 蓮華定院本堂 正面脇間頭貫



61 蓮華定院護摩堂 仏壇内法貫



62 蓮華定院庫裏 広縁海老虹梁



63 蓮華定院山門 頭貫



64 金剛峯寺大主殿 大広間広縁境桐差



65 金剛峯寺大主殿 中門頭貫



66 金剛峯寺大主殿 持仏堂内法貫



67 金剛峯寺大主殿 大玄関頭貫



68 金剛峯寺大主殿 小玄関頭貫



69 金剛峯寺大主殿 広縁海老虹梁



70 金剛峯寺護摩堂 向拝頭貫



71 金剛峯寺護摩堂 内部頭貫



72 金剛峯寺会下門 中央間内法貫



73 六時鐘楼 妻飾



74 壇上加藍准胝堂 内部頭貫



75 壇上加藍准胝堂 妻飾



76 壇上加藍准胝堂 向拝頭貫



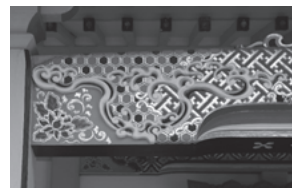
77 常喜院客殿 中門桐差



78 常喜院客殿 持仏間内法貫



79 普賢院本堂 南部南入側通頭貫



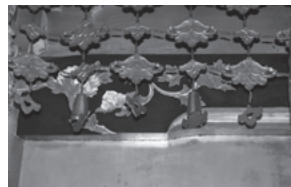
80 西南院本堂 向拝頭貫



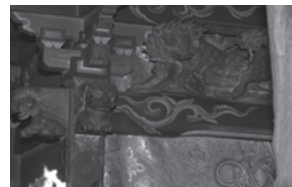
81 西南院本堂 向拝梁



82 西南院本堂



83 西南院本堂



84 西南院本堂 厨子



85 高野山大師教会講堂 向拝頭貫



86 常喜院表門頭貫



87 常喜院客殿 玄関



88 蓮華定院庫裏 玄関頭貫

図 952 高野山の虹梁絵様 3



### 3 高野山における大工と諸職人の活動

高野山の建築の造営には、高野山の周辺地域、和歌山県域、さらに広域の大工の参画が、棟札や文献史料などを通して確認できる。本章では、大工と諸職人を中心に、2棟以上の建物造営に携わった大工と諸職人を取りあげ、造営体制を概観したい。

#### (1) 大工

**17世紀の造営** 17世紀の高野山における造営体制を伝える史料は限られているが、寛永20年(1643)の根本大塔の造営では、中井長次が大工棟梁を務めたことが確認できる。大規模な建築の造営に外部から職人が参画する事象である。大檀那となる徳川家との関連が考えられる。同時に、高野山周辺地域である天野(現・伊都郡かつらぎ町)・河根(現・伊都郡九度山町)・伏原(現・橋本市高野口町)の大工の活動が確認できる。寛永12年(1635)の壇上伽藍高野明神社の修理にみえる天野太郎左衛門は後述する狭間の先祖であろう。青巖寺(現・金剛峯寺)大主殿と雑舎の造営では、伏原村の平右衛門が棟梁をつとめる。後述する19世紀の壇上伽藍及び金剛三昧院の造営に携わる伏原村の林右衛門の先祖が、平姓を名乗っていた可能性がある。

**狭間河内(天野)・小佐田出羽(河根)** 18世紀から19世紀中期に至る長期にわたり、壇上伽藍の建築造営で名が挙がるのが、狭間河内と小佐田(長田)出羽である。宝永2年(1705)建立の大門の棟札に正大工として見え、御影堂文書から狭間は天野の大工であることがわかる<sup>注1</sup>。狭間姓、小佐田姓の大工については、鳴海祥博が天野村の丹生都比売神社本殿と天野番匠について考察する中で、その活動を明らかにしている<sup>注2</sup>。天野村は、貴志川の支流である真国川の最上流域、高野町の西北に位置する。慈尊院に始まる高野山の町石道の中ほどにあたる。上天野の丹生都比売神社には文明元年(1469)建立の本殿、明応8年(1499)年建立の同楼門が建つ。

鳴海によれば、『高野春秋』に、万治2年(1659)に高野山の正大工・権大工の地位をめぐる天野の「大工棟梁狭間太郎左衛門」と河根の「小佐田出羽」が争ったことが記され、この際には小佐田家が天正

年間からの大工家であるのに対して、狭間家がそれより古いことから正大工とされた<sup>注3</sup>。河根は、高野町の北方、丹生川沿いに位置する。丹生都比売神社第四殿宮殿台座裏面の墨書から延徳3年(1491)の「ハサマエモン五郎」と「二郎三郎」の名が見え、文明元年(1469)の丹生都生比売神社本殿の造営文書には天野番匠として「エモン五郎」と「二郎三郎」の名も見え<sup>注3</sup>、天野村の狭間姓の大工が、文明年間まで遡ることが指摘されている。

狭間・長田は、大門の造営以降にも、文政5年(1822)の壇上伽藍六角堂、万延元年(1860)の同金堂でも、正大工・権大工を務めている。六角堂および金堂では、小佐田勘之丞も権大工に加わる。六角堂と金堂の造営の間でも、嘉永元年(1848)の大会堂、嘉永5年(1852)の孔雀堂には、正大工として「三棟梁」とあり、狭間と小佐田を指しているものと考えられる。正大工の名を記さなくてもよいほど、狭間と小佐田の地位が確立されていたと考えられる。ただし、三棟梁とともに造営にあたる脇棟梁を、大会堂では祝上元右衛門が、孔雀堂では喜三兵衛がつとめている。棟札に、正大工の名を記さず、脇棟梁の名のみが記されることから、この頃には実質の造営を、脇棟梁が担当していたと推測できる。

さらに万延元年(1860)の金堂造営に際しては、正大工・権大工のほかに、総肝煎・副肝煎が立てられ、この造営を最後に両名は造営にあらわれなくなる。

**久保勘兵衛(天野)** 天野の大工としては、狭間のほかに、現存する高野山随一の大建築である文久2年(1862)建立の青巖寺大主殿造営で、正大工をつとめた久保勘兵衛源基義がいる。久保姓の大工は、明和9年(1772)の三宝荒神社造営の番匠として久保利右衛門も確かめられる。三宝荒神社は、行人方の中心寺院である興山寺境内に建つものとみられる。

**林右衛門(伏原)** 伏原村の大工として、前述の延宝5年(1677)の青巖寺大主殿造営の平右衛門に連なる可能性がある林右衛門が、文政8年(1825)金剛三昧院表門の正大工、天保14年(1843)の同四所明神社本殿の修理の大工棟梁を務め、弘化3年(1846)に至って、壇上伽藍御影堂の造営では棟梁を務める。

**その他周辺地域の大工** 文久2年の青巖寺大主殿

第6章 高野山の寺院建築の特質

表11 高野山における造営体制（江戸時代以前）

番号	建物名	年号	願主・施主・奉行など
1	壇上伽藍山王院総社	大永2年(1522)	—
2	壇上伽藍山王院丹生明神社 上葺・彩色	天正11年(1583)	本願 應其
3	奥之院経蔵	慶長4年(1599)	石田三成 母菩提 / 本願 木食広其
4	西南院経蔵	元和2年(1616)	大檀那 家康 / 大願主 住寺 沙門 良尊 / 大施主 洛陽西田宗普
5	壇上伽藍山王院高野明神社 修理	寛永12年(1635)	—
6	青巖寺真然堂	寛永17年(1640)	檢校法印弘翁 万福院・無量寿院阿闍梨澄栄・實性院入寺政等 / 奉行 学侶方 正龍院 / 奉行 行人方 梅院
7	壇上伽藍根本大塔	寛永20年(1643)	—
8	徳川家霊台秀忠霊屋瑞垣	17世紀中期	—
9	壇上伽藍山王院総社	寛文7年(1667)	—
10	奥之院密厳堂	寛文11年(1671)	願主 來派沙門
11	青巖寺真然堂 上葺	延宝3年(1675)	—
12	金剛三昧院四所明神社本殿 修理・修葺	延宝3年(1675)	入寺唯心房徴勳
13	青巖寺大主殿・雑舎	延宝5年(1677)	—
14	壇上伽藍経蔵	延宝7年(1679)	施主 摂州天満住 伊川氏都光浄栄信士 / 門主 無量寿院 貴秀
15	西南院経蔵	元禄7年(1694)	大願主 住持 沙門 成信 / 十方檀那
16	大門	宝永2年(1705)	御願主 徳川綱吉 / 寺務檢校執行法印大和尚位有乗
17	壇上伽藍山王院丹生明神社 彩色	元文元年(1736)	—
18	壇上伽藍山王院高野明神社 彩色	宝曆7年(1757)	—
19	金剛三昧院客殿及び台所 玄閣増築	宝暦8年(1758)	金剛三昧院第四十一代長老 快辨 / 奉行 円観房
20	三宝荒神祠	明和9年(1772)	大奉行學侶方 高室院寛耕 / 同行行人方 西方院圭峯 / 寄進 和歌山御家中福田儀左衛門正勝
21	金剛三昧院四所明神社本殿 上葺	天明元年(1781)	現住 阿闍梨 妙住
22	金毘羅宮	天明7年(1787)	寺務檢校兼大衆院靈信七十一歳
23	壇上伽藍山王院本殿丹生明神社 修葺	文化2年(1805)	寺務檢校執行法印大和尚位義辨執行代西南院隆本(平等院) / 實性院代 乘如 / 總預 俊成 / 會行事 潭道 / 無量壽院代 同阿 / 行事代 如實 / 年預代 教盈 / 正年預 阿闍梨曼海會所普賢院 / 修理奉行 學侶方 圓秀 行人方 徳藏院
24	壇上伽藍山王院本殿高野明神社 修葺	文化2年(1805)	寺務檢校執行法印大和尚位義辨執行代西南院隆本(平等院) / 實性院代 乘如 / 總預 俊成 / 會行事 潭道 / 無量壽院代 同阿 / 年預代 教盈 / 行事代 如實 / 正年預 阿闍梨曼海會所普賢院 / 修理奉行 學侶方 圓秀 行人方 徳藏院
25	金剛三昧院四所明神社本殿 上葺	文化2年(1805)	現住 阿闍梨等如
26	奥之院護摩堂	文化9年(1812)	前住 快龍存命 / 二十五代快昌 弟子 快圓 / 大坂世話人 平野屋宇兵衛
27	壇上伽藍山王院高野明神社	文政2年(1819)	—
28	壇上伽藍六角堂	文政5年(1822)	御願主 徳川家斉 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 陳實
29	金剛三昧院表門	文政8年(1825)	—
30	壇上伽藍山王院本殿丹生明神社 修葺	文政8年(1825)	寺務檢校執行法印大和尚位弘源執行代 性源院周存(寶城院) / 無量壽院代 快雄 / 總預 賢了 / 會行事 觀阿 / 實性院代 覺本 / 年預代 戒辨 / 行事代 專榮 / 正年預阿闍梨泰住會所慈眼院 / 修理奉行 學侶方 賢政 行人方 延壽院
31	壇上伽藍山王院本殿高野明神社 修葺	文政8年(1825)	寺務檢校執行法印大和尚位弘源執行代 性源院周存(寶城院) / 無量壽院代 快雄 / 總預 賢了 / 會行事 觀阿 / 實性院代 覺本 / 年預代 戒辨 / 行事代 專榮 / 正年預阿闍梨泰住會所慈眼院 / 修理奉行 學侶方 賢政 行人方 延壽院
32	円通寺山門	天保4年(1833)	—
33	壇上伽藍西塔	天保5年(1834)	御願主 徳川家斉 / 再建願主 正智院乘如・金光院眞導 / 御導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 増源 / 奉行 聖善院 道猷・寶瓶院 龍華
34	壇上伽藍山王院丹生明神社 彩色	天保10年(1839)	—
35	壇上伽藍山王院高野明神社 彩色	天保10年(1839)	—
36	金剛三昧院四所明神社本殿 造作彩色	天保14年(1843)	現住 学頭 増琢 / 世話人 木村雅之進
37	山王院本殿丹生明神社 修葺	弘化2年(1845)	寺務檢校執行法印大和尚位專雄 執行代大聖院靈明(釈迦文院) / 實性院代 覺龍 / 會行事 圓教 / 總預 永超 / 無量壽院代 澄辨 / 年預代 宜全 / 行事代 自證 / 正年預阿闍梨増琢會所慈眼院 / 修理奉行 學侶方 寛海 / 行人方 梅林院
38	山王院本殿高野明神社 修葺	弘化2年(1845)	寺務檢校執行法印大和尚位專雄 執行代大聖院靈明(釈迦文院) / 實性院代 覺龍 / 會行事 圓教 / 總預 永超 / 無量壽院代 澄辨 / 年預代 宜全 / 行事代 自證 / 正年預阿闍梨増琢會所慈眼院 / 修理奉行 學侶方 寛海 / 行人方 梅林院
39	壇上伽藍御影堂	弘化3年(1846)	—
40	円通寺土蔵	弘化4年(1847)	—
41	壇上伽藍三昧堂	嘉永元年(1848)	御願主 徳川家慶 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 來應 / 寄付再建願主 正智院一世道猷
42	壇上伽藍愛染堂	嘉永元年(1848)	御願主 徳川家慶 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 來應 / 再建願主 西院谷 地藏院妙範 / 播州越山 瑠璃寺有智恵運房 / 再建掛里 学侶方 中藏院連阿 / 行人方 正塔院了範
43	壇上伽藍大会堂	嘉永元年(1848)	御願主 徳川家慶 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 來應 / 再建願主 阿州 大瀧寺一世如戒 / 再建掛里 学侶方 一乘院・同 五坊寂靜院・行人方 福智院・同 真乘院
44	壇上伽藍孔雀堂	嘉永5年(1852)	御願主 徳川家慶 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 實賢 / 再建願主 堺南中之町大道 河内屋仁兵衛 / 再建掛里 学侶方 愛染院・行人方 真乘院
45	壇上伽藍山王院丹生明神社 彩色	安政6年(1859)	—
46	壇上伽藍山王院高野明神社 彩色	安政6年(1859)	—
47	壇上伽藍金堂	万延元年(1860)	大願主 徳川家茂 / 供養導師 寺務青巖寺執行法印大和尚位 増應 / 学侶方奉行 多開院・理性院 / 行人方奉行 上藏院・龍生院
48	蓮華定院山門	万延元年(1860)	＝如者覺應
49	神通寺七社大明神社頭並脇宮二社 上葺	文久元年(1861)	供養導師 寺務青巖寺法印大和尚 増應 / 大奉行 増長院・寶積院 / 修理奉行 宜順坊・阿弥陀院
50	青巖寺大主殿	文久2年(1862)	大願主 徳川家茂 / 寺務檢校券門主 増應 / 学侶方奉行 普門院鏡旭・俗役人 遠方村 田中勘右衛門藤原守紀 / 行人方奉行 密藏院 興玉・俗役人 河根邑河野孝次郎藤原有信
51	青巖寺護摩堂	文久3年(1863)	再建寄付主(施主) 前寺務檢校龍光院増應 / (普請) 奉行 学侶方 龍生院 深雄・行人方 密藏院 興玉
52	青巖寺鐘樓	元治元年(1864)	御願主 徳川家茂 / 寺務檢校兼定光院 龍雄 / 奉行 学侶方 龍生院 深雄・行人方 清淨院 栄雄
53	金剛三昧院四所明神社本殿 上葺彩色	慶応3年(1867)	現住 前左学頭 春明 / 普請奉行 安楽川 西秀之進政直

凡例 「/」は、根拠となる史料が異なることを示す。

同一人物、あるいは一族と考えられる人物が、2棟以上の造営で確認できるものについて、太字で示した。

壇上伽藍及び大門の建物は、江戸時代以前には金剛峯寺の寺名が冠されているが、明治時代に青巖寺と興山寺が合併して成立した本坊を指す金剛峯寺との混乱を防ぐため、便宜的に壇上伽藍に統一した。

番号	棟梁など	根拠等 (No. は巻末史料に対応)
1	大工 ナラ権屋尚繼	墨書※1 64 頁
2	—	修理札※1 64 頁
3	—	扁額銘※2 8 頁
4	大工 藤原朝臣家久	棟札 (No. 39)
5	御口口ノ大工 天野太郎左衛門 / 同して 口助 / 天野口口口甚一郎・正三郎	墨書※1 64 頁
6	大工 藤原朝臣藤左衛門家吉	棟札 (No. 2)
7	大工棟梁 中井大和掾藤原長次	『高野春秋』寛永 20 年 6 月 7 日条
8	伏見海通道五条東御彫物師長谷川重五郎 / 京塗師 山本五郎	墨書 (No. 33)
9	渋谷用典 // シンヤチヨウキチ・モトフサマサツネ	墨書※1 64 頁
10	—	棟札 (No. 35)
11	頭科 摂州大坂之住檜皮屋山西治郎左衛門尉 / 手代 升口吉兵衛 / 大阪三郎兵衛・同 市兵衛・同 長三郎・同 利右エ門 / 当地 庄兵衛・七兵衛	棟札 (No. 3)
12	大工 河根石見守曾孫半三郎	墨書※3 20 頁
13	棟梁 伏原村平右衛門	『高野春秋』延宝 5 年 11 月 25 日条
14	—	額銘 (No. 7)
15	大工 左治兵衛・甚兵衛	棟札 (No. 40)
16	正大工 狭間河内 / 権大工 長田出羽 // 銅瓦請負所 中之坊 鋸屋町 大坂葺方頭領 小衛門 / 御金瓦細工 摂州大坂順慶町心齋橋萬金具師鋸屋八兵衛尉通公 (元禄 16 年 =1704)	棟札 (No. 31)、 銅瓦墨書※4 311 頁
17	森岡伊勢大工口口口、同 口口元三郎	墨書※1 65 頁
18	彩色 西岡数馬	墨書※1 66 頁
19	大工 藤原忠晨 // 大工出生神野市場村 柳原藤太・藤原忠晨	棟札※3 21 頁
20	番匠 久保利右衛門 / 葺師 山西三河愛綱	棟札 (No. 30)
21	大工 紀州南名古曾 住人 忠七 // 檜皮葺棟梁 紀州慈尊院色 住人 常七	棟札※3 19 頁
22	—	棟札 (No. 48)
23	葺師紀州伊都郡九度山村空運 森田文吉芳房	棟札 (No. 18)
24	葺師紀州伊都郡九度山村空運 森田文吉芳房	棟札 (No. 21)
25	檜皮葺棟梁紀州天野色 住人 莊兵衛	棟札※3 19 頁
26	—	棟札 (No. 36)
27	塗師平右エ門	墨書※1 66 頁
28	正大工 狭間河内 / 権大工 小佐田出羽・小佐田勘之丞	棟札 (No. 24・25)
29	正大工 當国伊都郡伏原村 林右衛門 / 権大工 儀左衛門	棟札 (No. 41)
30	葺師紀州伊都郡慈尊院村空然丹下重次郎	棟札 (No. 19)
31	葺師紀州伊都郡慈尊院村空然丹下重次郎	棟札 (No. 22)
32	大工 阿州板野郡 畑村住 弥三八	棟札 (No. 38)
33	正大工 藤原朝臣西山金輔 / 権大工 同木下彦右衛門 // 高野山小田原 中口口口口国 針渡口 当二人 天保三年 良工手カツラ 庄口口 // 彩色師 京都四條高倉 八幡屋嘉兵衛 / 五ノ宮仏住 喜三郎 // 江戸本所石原外手丁 合口屋 職吉	棟札 (No. 15)、 墨書 (No. 12 ~ 14)
34	絵師 吉兵へ	墨書※1 66 頁
35	画工師 森田吉兵へ	墨書※1 66 頁
36	大工 (棟梁) 紀州伏原邑 林右衛門 / 檜皮棟梁 寺領慈尊院色貞八	棟札※3 19 頁
37	葺師紀州伊都郡九度山村空榮 森田文吉	棟札 (No. 20)
38	葺師紀州伊都郡九度山村空榮 森田文吉	棟札 (No. 23)
39	當国伊都郡中祖伏原村 棟梁 林右衛門 // 鋳工 當国粉河住 福井石見大掾良房 // 工師 若山鋸屋 重兵衛・善吉	墨書 (No. 16)、 露盤銘 (No. 17)
40	巧匠 紀伊国九度山住人 政次郎	棟札 (No. 37)
41	—	棟札 (No. 26)
42	—	棟札 (No. 27)
43	正大工 三棟梁、脇棟梁 祝上元右衛門	棟札 (No. 28)
44	正大工 三棟梁、脇棟梁 喜三兵衛	棟札 (No. 29)
45	画工 當山住居西小田原谷口 池中古兵衛 出生名倉村口口山 / 花坂描工八輔 / 名倉生池豊輔	墨書※1 65 頁
46	當山西小田原住居之權 画工 池中古兵衛 / 吉兵へ弟子 花坂横手出生 画工八輔・名倉同豊輔・同村同市兵へ	墨書※1 65・66 頁
47	正大工 狭間河内大掾 / 権大工 小佐田出羽大掾・小佐田勘之丞 / 総肝煎 柴田日向大掾・森肥後大掾・藤田長五郎・同上総大掾 / 副肝煎 伊藤平左衛門・古橋 太郎兵衛・森丈助・伊藤総右衛門・鶴飼長兵衛・伊藤喜兵衛・西村伊八 / 彫物師 柴田伊勢大掾・丸山新四郎・柴田文助・中川利兵衛 / 銅瓦延師 白井七兵衛 / 銅瓦葺師 綱永栄蔵・渡辺元兵衛・中村儀兵衛 / 金物師 文殊四郎・載本治郎太兵衛 / 塗師方 櫛田和三郎・塗師太兵衛・同 宇兵衛 / 彩色師 石田友篤・長谷川等舟 / 仏工 山本茂助 / 仏画師 森田重三郎 / 石工 石屋五兵衛・和泉屋太吉 / 木挽頭 文右衛門・徳右衛門・和右衛門 / 日雇頭 吉助 / 車力頭 音吉	棟札 (No. 9)
48	—	棟札 (No. 44・45)
49	正大工 慈尊院村小松茂重郎藤原房長 / 権大工 慈尊院村井上兵蔵 / 正葺師 慈尊院村山西重治郎藤原安實 / 権葺師 九度山村森田文吉	棟札 (No. 46・47)
50	正大工 天野邑久保助兵衛源基義 / 権大工 九度山村前田喜三兵衛藤原信光	棟札 (No. 1)
51	正大工 當国伊都郡大野邑岡田元次郎光高 / 権大工 同国若山住吉町小田政右衛門重考	棟札 (No. 5・6)
52	大工 能登国鹿嶋郡伏森邑住藤田長五郎平直光	棟札 (No. 8)
53	大工棟梁 紀州慈尊院邑嘉助 / 檜皮棟梁 同国九度山 理兵衛	棟札※3 20 頁

※1 『重要文化財 金剛峯寺山王院本殿他八棟 修理工事報告書』1980 年。  
 ※2 『重要文化財 金剛峯寺奥院経蔵修理工事報告書』1978 年。  
 ※3 『重要文化財 金剛三昧院客殿及び台所 四所明神社本殿 多宝塔 修理工事報告書』1969 年。

の造営では、九度山村（現・伊都郡九度山町）の前田喜三兵衛藤原信光が権大工を務める。喜三兵衛の名は、前述の嘉永5年造営の壇上伽藍孔雀堂にもあらわれる。九度山の木工としては、弘化4年（1847）の円通寺土蔵の巧匠を政次郎が、また文久3年（1863）の青巖寺護摩堂では、正大工を大野村（現・橋本市高野口町大野）の岡田元次郎光高が、権大工を若山住吉町（現・和歌山市住吉町）の小田政右衛門が務める。

**遠方出身の大工** 天保4年（1833）の円通寺山門の造営では、阿波板野郡（現・徳島県板野郡）畑村の弥三八が大工を務めた。円通寺山門は、いわゆる竜宮門の形式をもつ。壇上伽藍や青巖寺のみならず、周辺寺院においても遠方の大工が参画しているのは、留意すべきだろう。

なお天保5年（1834）の壇上伽藍西塔の造営では、

西山金輔が正大工を、木下彦右衛門が権大工を務めている。両名がどのような人物か、出身などについて、管見の限り、他の史料は見いだせなかったが、大塔の造営を成し遂げる技量を有し、信頼を得ていたものと思われる。

**万延度金堂再建** 前述の通り、万延元年の金堂再建にあたっては、正大工・権大工に加えて、総肝煎・副肝煎が立てられる。総肝煎に、柴田日向大掾・森肥後大掾・藤田長五郎・同上総大掾の4名、副肝煎に、伊藤平左衛門・古橋太郎兵衛・森丈助・伊藤総右衛門・鶴飼長兵衛・伊藤喜兵衛・西村伊八の7名が名を連ね、彫物師として柴田伊勢大掾・九山新四郎・柴田文助・中川利兵衛の4名が参画した。

柴田らは、天保4年の東本願寺御影堂、天保6年（1835）の同阿弥陀堂、弘化4年（1847）の同大門を

表12 高野山における造営体制（明治期以降）

番号	建物名	年号	願主・施主・奉行など
54	大門 修理	明治28年(1895)	宮禱係 如意輪寺住職 古川賢隆・西門院住職 小早川慶道・西室院住所 □團陸・大明王院住職 芝辻覚超
55	金剛三昧院四所明神社本殿 上葺	明治35年(1902)	現住 八寺行璋
56	壇上伽藍不動堂 修理	明治41年(1908)	—
57	高野山大師教会	大正4年(1915)	—
58	奥之院納骨堂	大正5年(1916)	大發願主 金剛峯寺座主 智等 / 大願主 大檀那 大阪市 小西久兵衛 / 弘法大師一千百年御遠忌事務局総監 藤村密輔 / 金剛峯寺執行長 庄野琳真 / 理事 静盛應・宮崎忍海
59	高野山霊宝館	大正10年(1921)	霊宝館建設工務所顧問 黒板勝美・荻野仲三郎
60	壇上伽藍金堂	昭和4年(1929)	供養導師 座主大僧正密雄 / 建築協議員 法性有鏡・長谷川覺明・森寛澄 / 御遠忌口理事 藤村密輔・久保親口・谷内清謙・真西通範・静盛應 / 御遠忌事務局総監 釋法傳 / 金剛峯寺執行長 瀧川大憲 / 徳守清口・尾池口口・名越有全・宮崎忍海・大平智城 / 同 参務 飯田俊正
61	高野山大学図書館	昭和4年(1929)	御遠忌事務局総監 釋法傳 / 古義真言宗々務所 總務 瀧川大憲
62	壇上伽藍山王院丹生明神社	昭和5年(1930)	—
63	壇上伽藍山王院総社	昭和5年(1930)	—
64	奥之院関東震災霊神堂	昭和5年(1930)	東京市長 永田秀次郎
65	金剛三昧院四所明神社本殿 上葺	昭和7年(1932)	住職 權中増正 久利性呼
66	壇上伽藍不動堂 屋根葺替	昭和8年(1933)	—
67	金剛峯寺奥殿・別殿	昭和8年(1933)	金剛峯寺内御遠忌事務局総監 庄野琳真 / 金剛峯寺執行長 釋法傳
68	壇上伽藍六角経蔵	昭和9年(1934)	坂口祐三郎
69	壇上伽藍根本大塔	昭和11年(1936)	着工当時管長 龍智密雄 / 竣工当時管長 高岡隆心
70	金剛峯寺真然堂 修理	昭和14年(1939)	—
71	壇上伽藍山王院丹生・高野明神社	昭和19年(1944)	—
72	女人堂 屋根替	昭和27年(1952)	—
73	壇上伽藍鐘樓	昭和32年(1957)	坂口祐三郎
74	壇上伽藍山王院高野明神社 修理	昭和37年(1962)	—
75	蓮華定院本堂 増築社殿	昭和48年(1973)	供養導師 現住 權檢枝大僧正 隆俊
76	普賢院本堂 修復屋根替	—	現住 森克勝

※4 『重要文化財 金剛峯寺大門修理工事報告書』1986年。

※5 『国宝 金剛峯寺不動堂修理工事報告書』1999年。

※6 『高野山開創老千百年記念大法會記録』金剛峯寺、1916年。

手掛けた集団で、壇上伽藍金堂再建の後、再び焼失し、万延元年（1860）に上棟された本願寺御影堂・阿弥陀堂・大門の再建にあたっている。柴田家は東本願寺の元文から安政度の造営を通じて常に肝煎方の上位にあたる惣肝煎を務めた大工家である。その活動は、小山興誓の論考に詳しい<sup>注4</sup>。

**藤田長五郎直光（能登）** 万延度金堂の再建に際し、肝煎を務めたのち、元治元年（1864）造営の青巖寺鐘楼で大工を務めたことが確認できる。鐘楼は現存し、木鼻の陽刻した渦が特徴的で、同時期再建の建物と異なる。能登国鹿嶋郡杵森は、現・七尾市杉森町（旧・鹿島郡田鶴浜町杵森、2004年に合併）にあたる。藤田長五郎は、東本願寺の文政度造営において、本山から直接雇い入れられ京都大工平肝煎をつとめ、嘉永3年（1850）の富山県南砺市の城端別院善徳

院式台門の造営で棟梁を務めたという<sup>注5</sup>。

**江戸時代の高野山における造営の体制** 以上のように、江戸時代における壇上伽藍（金剛峯寺）と青巖寺などの造営は、高野山周辺の天野（伊都郡かつらぎ町）、河根・（伊都郡九度山）、伏原・大野（橋本市高野口町）など周辺地域の大工が担うと同時に、寛永20年の根本大塔における中井長次や、万延元年の金堂の柴田らのように、大規模な建物の造営にあたっては、遠方から参画するものもあった。

このような造営は、主として徳川将軍家を願主とし、学侶方と行人方の双方が奉行を立て、検校が取りまとめた堅固な組織があつてこそ、成し遂げられたとみられる。

**近代の造営** 大正期以降、高野山大師教会、高野山靈宝館、高野山大学図書館、金剛峯寺奥殿・別殿、

番号	棟梁など	根拠等 (No. は巻末史料に対応)
54	家根棟梁 大橋佐吉・中村芳太郎 / 大工棟梁 <b>辻本彦兵衛</b> ・伊東平助・萱野伊三郎 // 鈔屋寅寅之助 / 高野山東小田原 中村好太郎 / 丸瓦ふきかへ人 中村芳太郎 / 丸瓦葺替大工職人名 大橋庸之助・三葛常太郎・桑島兼次郎・十津政吉・上村建之右エ門	棟札 (No. 32)、銅瓦墨書※4 313 頁
55	大工棟梁 <b>彦兵衛・政太郎</b> // 大工 <b>久保政太郎</b>	棟札※3 20 頁
56	棟梁 和歌山縣伊都郡高野山 藤崎熊太郎 / 副棟梁 藤崎米次 / 檀宮主任 木田市太郎 / 職工 中橋亀太郎 / 職工 生地晴之助、山田房吉・中山幸之助・井之上常太郎・樋口清市郎・東谷亀次郎・中谷常松・ <b>井本孫次郎</b>	棟札※5 225 頁
57	設計 亀岡末吉 / 施工 <b>辻本彦兵衛</b>	記録※6
58	改築技師 <b>大江新太郎</b> / 助手 森口四郎・北奥三吉 / 大工 <b>辻本彦兵衛</b> / 金工 田中伊雅	棟札写※8 72 頁
59	設計 (工務部長) <b>大江新太郎</b> 、現場技師 奥本吾一	記録※7
60	建築顧問 工学博士 <b>武田吾一</b> ・ <b>天沼俊一</b> / 設計技師 工学士 <b>布施忠司</b> / 建築監督技師 <b>戸塚秀夫</b> / 建築係 <b>大浦徳太郎</b> ・ <b>三家與</b> ・ <b>森本長守</b> / 主體工事施工者 大林組 社長 大林義雄 / 同 工事主任 渡邊圭吾 / 同 現場主任 高井久治 / 営業係 小原 力 / 材料係 勝田近平・中川辰雄 // 魚津弘吉	棟札写 (No. 10)、記録※8 37 ~ 51 頁
61	設計監督 <b>武田吾一</b> / 監督技師 工学士 <b>布施忠司</b> ・ <b>戸次秀夫</b> / 掛 <b>三家與</b> / 工事施工 (建築工事・下水工事・書庫内棚板工事) 清水組京都支店 / 暖房工事 東亞鐵工所 / 給水衛生及汚水浄化装置工事 西原衛生工業所 / 電燈照明器具 北中製作所 / 書庫内書架金物工事 大東工業株式会社 / 各室家具裝飾全般 高島屋裝飾部 / 標札並建設記鋼板 今村銅器製作所	記録※8 66・67 頁
62	和歌山縣西牟婁郡西向村岩瀨出生 当時東京市小室翠雲塾世 画工 山崎梅峽 / 請負人 画工 高野山西院住 高野山絵時工 木下文一郎 / 塗師職人 西野樋口郎	墨書※1 65 頁
63	和歌山縣伊都郡高野町西院 家根葺替人 <b>上福井秀松</b> / 奈良縣吉野郡野迫川村池津川 家根師 <b>大和健一</b> / 奈良縣吉野郡野迫川村池津川 家根師 新家義一 / 和歌山縣伊都郡見好村山崎 家根師 茶原良光 / 奈良縣吉野郡野迫川村池津川 家根師 菊谷三郎	修理札※1 66 頁
64	設計 <b>武田吾一</b>	※9
65	大工 <b>辻本兵吉</b> / 屋根 西上安幸	棟札※3 20 頁
66	工事請負人 <b>堀光三郎</b> / 技師 大浦・濱邊松次郎 / 工事主任 <b>上福井秀松</b> ・岩坪忠之助・ <b>井本繁</b> ・藤崎米次・中山茶太郎・葉善三郎・倉 義雄・ <b>向平玉芳</b> ・ <b>村高市郡真口村五井 上田亀吉</b> ・伊都郡学文路村清水 小出俊之助	棟札※5 225 頁
67	請負人 西本健次郎 / 監督技師 <b>大浦徳太郎</b> / 別殿並に屋根葺工事 <b>山中商會</b> / 別殿間渡廊下 稲垣啓二 / 渡廊下屋根葺 <b>堀光三郎</b> / 貴賓及客殿用鈔金具 京都磯村才次郎商店 / 別殿及奥殿電燈工事 高野 浦野光三郎 / 下水排水工事、別殿前橋梁架設工事、別殿給水タンク同蓋工事、貴賓室浴槽 西本組 / 給水工事 牧野藤吉 / 奥殿北側鐵條網垣、別殿前橋側板垣、奥殿西側亞鉛塀 三谷健藏 / 奥殿及別棟漆塗工事 能登輪島町平田吉左衛門 / 貴賓室附風呂室給水衛生工事 須賀商會	記録※8 37 ~ 51 頁
68	—	銘盤
69	工学博士 <b>天沼俊一</b> / 枝師 <b>大浦徳太郎</b> / 助手 <b>森本長守</b> / 正棟梁 稲垣啓二 / 副棟梁 北尾年弘 / 下層工事大工 杉江一學・藤田仙松・平田千賀治・後藤一男・反橋政男・安藤千代作・酒本善代治・反橋武男・杉江利一・鈴木米一・能勢徳一・平松眞一・大林倉一・東條健太郎・中村武夫・小坂田薫・黒田範治・高田正太郎・梅本 華・上林政安・山本勝太郎・柴田藤吉・新出政次郎・吉田由太郎・藪下伊清・近田一二・大西儀造・牧野孝一・稲垣行夫・青木太一・谷口重右エ門 / 上層工事 藤田仙松・後藤一男・藪下伊清・梅本 華・上林政安・安藤千代作・反橋武男・山本一男・横林 甫・坪田久吉 / 内部工事 藤田仙松・梅本 華・上林政安・岩瀬利司・太田徳十・松井信明・福森清六 / 木挽 血谷宗太郎 / 石匠 田伏徳三郎・市塚平八郎・中村新七・伊藤都三郎・水越豊吉・小椋 要・岡本岡治郎・野依博康 / 左官 山本龜太郎・木下伊太郎・岡部武夫・宇田宗次・森内正吉・和田吉藏・足田儀夫・谷口榮太郎 / 手傳頭 辰巳松五郎・西川辰之助・野田新太郎・小西卯之松・安藤辰之助・北川信一・東風留吉・橋詰辰藏・佐藤幸一 / 丹工 松岡庄吉・中村朝秋 / 銅瓦 <b>山中合名会社</b> / 葺師 村越俊夫 / 丸輪 森本安之助 / 給仕 坂下正一	棟札 (No. 11)、記録※8 51 ~ 63 頁
70	大工 弓場善之助・ <b>向平見</b>	墨書 (No. 4)
71	請負人 <b>堀光三郎</b> ・ <b>廣田庄吉</b> ・増井理助・古家義善・上東栄太郎・大江芳太郎・北岡善好・ <b>井本繁</b> ・ <b>大和九一</b> ・大谷重一・辻 能敏・上岡利政・後口安春・恩地志摩男・中上登晴	修理札※1 67 頁
72	請負人 <b>堀光三郎</b> ・ <b>廣田庄吉</b> ・ <b>井本繁</b> ・辻口□・岩本繁文・中上登晴・ <b>大和九一</b>	棟札 (No. 34)
73	あめりか屋	銘盤
74	<b>井口陸雄</b>	墨書※1 67 頁
75	棟梁 高野山 <b>大彦組 辻本喜次</b>	棟札 (No. 43)
76	檜皮師 <b>大和九一</b> / 大工棟梁 <b>井口陸雄</b>	棟札 (No. 42)

※7 『高野山靈宝館建設報告書』高野山靈宝館、1921年。  
 ※8 『弘法大師老千年御遠忌紀要』金剛峯寺、1943年。  
 ※9 坂口英伸「東京美術学校と関東大震災」『東京藝術大学美術学部紀要』52、2014年、33～50頁。

壇上伽藍金堂・根本大塔などの造営では、金剛峯寺内に御遠忌寺務局を置いて、造営が進められた。設計は、亀岡末吉、大江新太郎、武田五一、大浦徳太郎、天沼俊一ら、歴史的建造物の保存に関わる建築家・技師がおこなった。施工は、金堂では大林組・魚津弘吉、高野山大学図書館では清水組、根本大塔では稲垣啓二・北尾年弘ら、外部の施工者・大工が統括した。その一方で地元の大工として、辻本姓（彦兵衛・兵吉・喜次）、堀光三郎、井本姓（孫次郎・繁）、上福井秀松、向平玉芳らが参画している。

## （2）諸職人

つづいて諸職人について、葺師、金工、彩色師の順で確認したい。

**葺師** 延宝3年（1675）の青巖寺真然堂の山西治郎左衛門尉、明和9年（1772）の三宝荒神祠、文久元年（1861）の神通寺七社大明神社（丹生官省符神社か）の山西重治郎藤原安實と、山西姓をもつ葺師の活動が確認できる。山西の名は、九度山町慈尊院弥勒堂（重文）の元和7年（1621）、延宝2年（1674）、元禄7年（1694）、正徳4年（1719）、元文2年（1737）、宝暦7年（1757）、安永6年（1777）、寛政9年（1797）の屋根葺替棟札に「山西次郎左衛門」（元文2年以前、安永6年）、「山西貞右衛門」（宝暦7年）、「山西重右衛門愛綱」（寛政9年）の名が見え、代々の檜皮葺師と考えられる。元文2年以前では大坂住とするが、その後、宝暦7年・安永6年・寛政9年には高野山住とあり、山内に移住したものと思われる。さらに文久元年には、慈尊院村の肩書をもつ。

また寛永13年（1636）の東寺御影堂の上葺に際した棟札に、「右檜皮之御大工者高野満山永作□□、摂州大坂之住山西二郎□□・同勘十□□」<sup>注7</sup>とあり、時期を同じくして高野山と東寺の造営に関わっている点は、諸職人の活動を知る上で興味深い。

山西のほかにも、九度山の葺師として、文化2年（1805）と弘化2年（1845）の壇上伽藍丹生明神社・高野明神社の葺替えをおこない、前述の文久元年の神通寺七社大明神社の吹き替えで権葺師を務めた森田文吉をはじめ、多くの職人の活動が確認できる。

なお近代には、奈良県吉野郡野迫川村の職人が多く入り、とくに大和姓（健一・九一）の活動が目立つ。

**金工** 飾金具及び銅瓦の制作者として、繰り返した史料にあられる職人はいないが、宝永2年の大門では銅瓦を大坂の小衛門、金瓦細工を八兵衛尉、弘化3年（1846）の壇上伽藍御影堂では、宝珠・露盤を粉河の福井良房<sup>注8</sup>、木口金具を若山（和歌山）の重兵衛・善吉、万延元年の壇上伽藍金堂では、金物師として文殊四郎・藪本治郎太兵衛の名が挙がり、ほかに銅瓦延師・銅瓦葺師が参画する。また昭和11年（1936）の壇上伽藍根本大塔では、京都の森本安之助が九輪を手掛けている。居住地が確認できるのは、大坂、若山、粉河、京都と、大工や葺師に比べると、高野山からは遠方となる。

**彩色師** 天保10年（1839）と安政6年（1859）の壇上伽藍丹生明神社・高野明神社の彩色に、吉兵衛及びその一門の参画が確認できる。天保では森田姓を記すが、安政には池中姓を名乗り、高野山西小田原住とする。その他には、17世紀中期の徳川家霊台秀忠霊屋瑞垣に京塗師の山本五郎が、天保5年（1834）の壇上伽藍西塔に京都四条高倉の八幡屋嘉兵衛が関わるなど、京都の職人の活動が目立つ。

以上のように、諸職人は出身地域に限られ、かつ遠方からの参加も多いことが確認できる。（鈴木智大）

## 注

- 『重要文化財 金剛峯寺大門修理工事報告書』（高野山文化財保存会、1986年）。同書収録の「御影堂文書 53-18」には「大工天野狭間喜平次」とある。
- 鳴海祥博「丹生都生比売神社の建築と天野番匠」（『和歌山県立博物館研究紀要』10、2003年、44～57頁）。
- 「丹生廣良氏所蔵」（『かつらぎ町史 古代中世資料編』かつらぎ町、1986年）。
- 小山興誓「東本願寺大工の系譜」（『真宗本廟（東本願寺）飛地境内地建築群総合調査報告書 大谷祖廟・高倉会館・涉成園』2022年）。
- 前掲注4論文、『城端別院善徳院建造物等調査報告書』（富山県南砺市教育委員会、2013年）を参照した。ただし、藤田長五郎および金剛寺屋利八が関わった根拠は示されていない。
- 『社寺の国宝・重文建造物等棟札銘文集成 近畿編2』（国立歴史民俗博物館、1996年）215～222頁。
- 『重要文化財教王護国寺宝蔵大師堂修理工事報告書』（京都府教育庁、1955年）38・84頁。
- 福井良房については、『粉河町史 第一巻』（粉河町、2003年、556～566頁）に詳しい。

## 4 壇上伽藍御影堂と山王院拝殿の

### 変遷にみる旧規の継承と展開

第4章でも言及したように、高野山の建築、とくに壇上伽藍は古代の創建以来、幾度も火災により焼失しながらも、随所に古式な要素が確認できる。本稿では壇上伽藍の中でも、文献資料、指図、絵図などによって、各時代の形態を比較的確認できる御影堂と山王院拝殿を対象に、平面形状や構造の変遷を検討することで、再建を繰り返すなかで、いかに旧規を継承、あるいは展開してきたか、確認することにしたい<sup>注1</sup>。

#### (1) 壇上伽藍御影堂

**現在の御影堂の概要** 壇上伽藍御影堂は天保14年(1843)の大火による類焼後、弘化5年(1848)に落慶した建物である。方5間、宝形造、檜皮葺で正面に1間の向拝が付く。内部には間口(東西)3間、奥行(南北)4間の中心部の四面に廂を巡らしたような構成をとるが、側柱と入側柱は柱筋を揃えない。また、廂に相当する部分は東西両側面に対して、正面側の柱間を広く、背面側を狭くする(図953-1)。

この御影堂については、福山敏男による伽藍の沿革の研究や、井上充夫や藤井恵介による金沢文庫所蔵指図の研究、川上貢や山岸常人による真言宗の御影堂に関する研究、横山舜による仁和寺所蔵指図の研究など、豊富な蓄積がある<sup>注2</sup>。これらの既往研究

を参考にしながら、改めて御影堂の平面形状の変遷を検討したい。

まず、御影堂の履歴について確認しておく。「金剛峯寺塔建立由来書」(『又統宝簡集』44大日本古文書、高野山文書3)によると御影堂は空海の持仏堂であったという。事実であれば高野山創建間もないころ、空海の存命中に成立したことになる。正暦5年(944)と久安5年(1149)の大火で焼失を免れたものの、永正18年(1521)に焼失し、天文2年(1533)に再建されている(「高野山焼失記」)。その後、寛永7年(1630)に焼失し、寛永10年(1633)に落慶している(『高野春秋編年輯録』。以下、『高野春秋』とする)。そして、天保14年の火災の後、弘化3年(1846)に上棟、弘化5年に落慶して、現在に至る。

**御影堂を描く指図と絵図** この御影堂を描いた建築指図に、平安末～鎌倉初期成立の金沢文庫所蔵指図と寛永12年(1635)成立とされる仁和寺所蔵指図がある。また、この建物の外見を描いた絵画資料として永仁4年(1296)の「天狗草紙」、14世紀前半の「高野山水屏風」、南北朝時代の「弘法大師・四社明神像」などがある。これらについて年代を追って検討したい<sup>注3</sup>。

壇上伽藍御影堂を描く金沢文庫所蔵指図は寿永3年(1184)の端裏書をもつもの2点と、建久4年(1193)のもの2点の、計4点が確認できる。いずれも、描かれる建築の形態は同一である(図953-2)。間口3間、奥行4間で、両側面と背面に高欄付の縁を巡ら

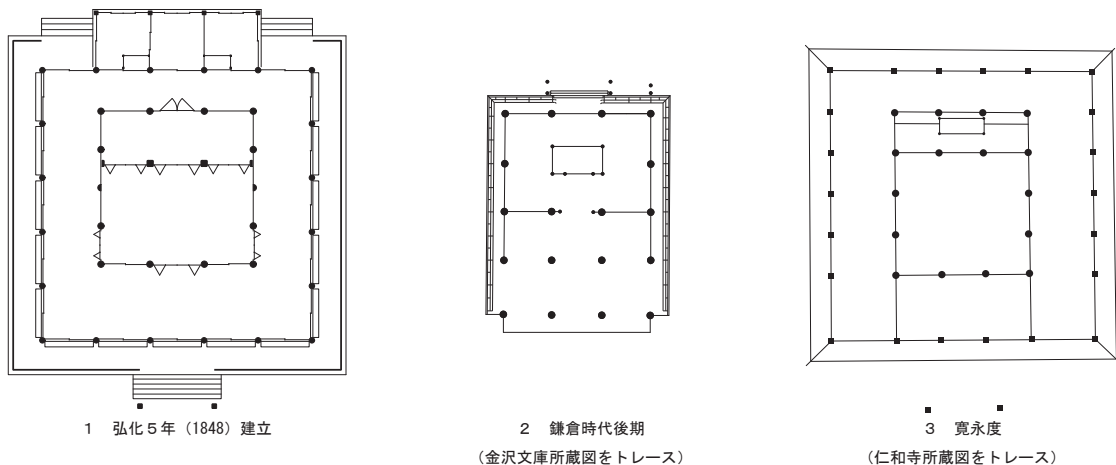


図 953 壇上伽藍御影堂平面模式図

す。正面にも縁をもうけるが高欄は設けず、側背面の縁とも連続しない。背面には高欄を切って階段を付し、向拝および閤伽棚を設ける。内部は、奥2間の内陣と、手前2間の礼堂に大別される。内陣には、弘法大師の御影を安置する厨子を据える。礼堂内部には柱が立ちあがり、前後2区画に区分される。すなわち、間口3間、奥行2間の内陣に、奥行1間の中陣、奥行1間の外陣を付したような平面構成となる。『高野春秋』には康平4年(1061)のこととして「御影堂三間北鸞并三間礼堂創造之」と記され<sup>註4</sup>、この年に三間礼堂、つまり外陣部分が追加されたことがわかる。それ以前は方3間の堂を奥2間、手前1間に分けていたと考えられる。

時代の下った、永仁4年(1296)の「天狗草紙」に

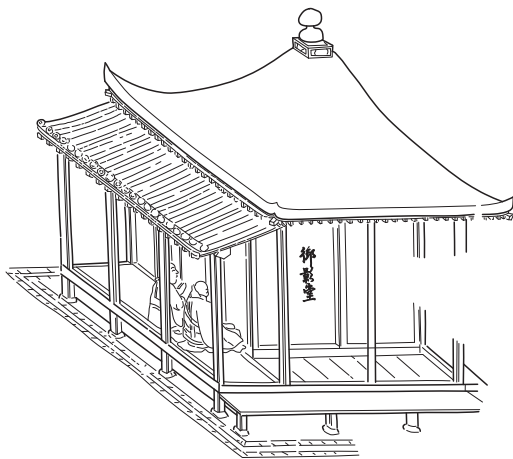


図954 「天狗草紙」に描かれた御影堂(『続日本の絵巻 26 土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』所収図をトレース)

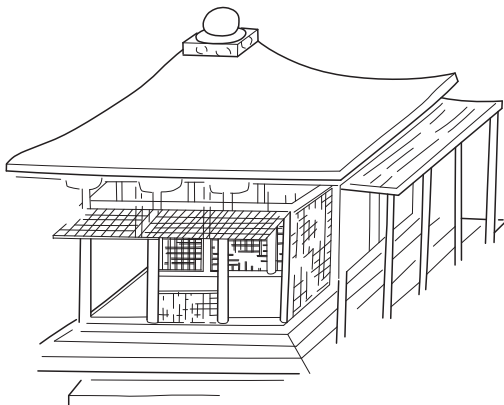


図955 「高野山水屏風」に描かれた御影堂(『特別展 聖域の美 一中世寺社境内の風景』所収図をトレース)

描かれる高野山御影堂(図954)は、間口3間、奥行3間の宝形造、檜皮葺で、屋根頂部には露盤、宝珠を上げる。正面に間口3間、奥行1間に瓦葺の廂を付ける。廂および主体部の東面1間を吹放とする。すなわち、間口2間、奥行2間の身舎に、正面(南面)・東側面の2面に廂を付けた平面構成である。建物の履歴から考えると、金沢文庫所蔵指図に描かれた建物と同一の建物を描写していると思われるが、その平面形状は異なる。

14世紀前半の「高野山水屏風」に描かれる御影堂(図955)は間口3間、奥行3間の宝形造、檜皮葺で、屋根頂部には露盤、宝珠を上げる。東側面に3間の板葺の土廂を付している。やはり、金沢文庫所蔵指図に描かれた建物と平面形状が一致しない。

南北朝時代の「弘法大師・四社明神像」に描かれる御影堂(図956)は間口5間、奥行3間の宝形造檜皮葺で、屋根頂部には宝珠を上げる。間口3間、奥行3間の身舎の両側面(東西面)に間口1間、奥行3間の廂を設ける。やはり、金沢文庫所蔵指図に描かれた建物と平面形状が一致しない。

この絵画資料3点に描写される御影堂はいずれも、金沢文庫所蔵指図に描かれる建物と平面形状が一致しない。これは、絵画資料が建築を忠実に描写していないことに起因するのだろう。しかし、3点の絵画資料は宝形造檜皮葺で屋根頂部に宝珠を上げる点で共通しており、後述する壇上加藍御影堂を模倣したとみられる鎌倉期仁和寺御影堂の屋根形式が宝形造である点を勘案すると、平安時代から永正18年まで存続した壇上加藍御影堂は宝形造であった可能性が高い。また3点はいずれも東側面(「弘法大師・

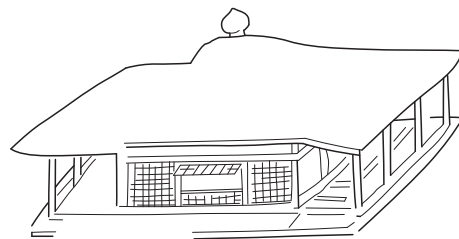


図956 「弘法大師・四社明神像」に描かれた御影堂(『第二十二回高野山大宝蔵展 高野山の国宝 一壇上加藍と奥之院』所収図をトレース)



四社明神像」は東西両側面)に吹放ちの土廂ないし廂を取り付けたように描写される点も共通する<sup>注5</sup>。

仁和寺所蔵指図の御影堂は、その端書から寛永12年(1635)に高野山から注進したものであることが分り、寛永10年に落成した御影堂の平面を知ることができる(図953-3)。間口3間、奥行6間の規模をもち、間口3間、奥行4間の円柱からなる中心部に、角柱の廂が四面に取り付いたような平面をもつ。廂に相当する部分は、正面と東西両側面の出を中心部の柱間より広く取り、背面は中心部の柱間と等しくし、側柱と入側柱の柱筋は揃える。また、正面には主屋中央間よりも広い幅をもつ、1間の向拝を付す。すなわち寛永度再建の高野山御影堂の平面は、四面に廂が巡らされるなどして大型化しているものの、金沢文庫所蔵指図にみられた間口3間、奥行4間という規模の中心部を内包する。ただし、手前3間が中陣、奥1間が内陣となる点は金沢文庫所蔵指図と異なる。なお、この時代の御影堂の屋根であるが、天保10年(1839)成立の「紀伊続風土記」には「宝形造り。檜皮葺。赤銅の露盤宝形あり。余堂に異して軒特に低し」とあって、前身堂の宝形造檜皮葺で屋根に宝珠を上げるという形式を踏襲しているだけでなく、軒が低いという現在の御影堂と共通する特徴をもっていたことがわかる<sup>注6</sup>。

現在の御影堂は、仁和寺所蔵指図に示される寛永度の御影堂の構成や間口3間、奥行4間という中心部の形状を引き継ぎながら、奥行を5間とし、側まわりの柱間を全て等間としながら、側柱と入側柱の柱筋をずらすことで内部空間の広さを調節している。また、内陣を広く取り、側まわりの柱も円柱とすることも異なる。すなわち、現在の御影堂にも、金沢文庫所蔵指図にみられた間口3間、奥行4間という規模が、中心部に踏襲されているのである<sup>注7</sup>。また、屋根についても、軒の低い宝形造という特徴を寛永度の御影堂にも確認でき、宝形造、檜皮葺で宝珠を上げるという特徴は、平安末～鎌倉初期の御影堂にも遡り得る。

以上のように、壇上加藍御影堂は、康平4年に成立した間口3間、奥行4間という平面構成や宝形造檜皮葺という屋根形式を引き継ぎながらも、寛永度

までには四面に廂を付け、弘化度にはその柱配置を変更して現在に至っていることがわかる。前身堂の要素を残しつつも、時に大きく、時に微細な変更を加えているのが特色と言えよう。

**仁和寺御影堂との関係** 前項では壇上加藍御影堂の平面の変遷を見て、間口3間、奥行4間という規模が踏襲されてきたことを確認した。ここで、この構成とよく共通する鎌倉期の仁和寺御影堂について検討し、高野山の建築が他寺院の建築に影響を及ぼした例を示したい。

仁和寺御影堂については、金沢文庫に正中2年(1325)の年紀のある指図が伝わっており、鎌倉時代末期の平面形状を知ることができる(図957)。この図によれば、弘法大師の御影を安置する厨子を置いた、間口3間、奥行2間の内陣と、間口3間、奥行2間の礼堂に大別される。さらに礼堂内部には柱が立ち、さらに中1間、手前1間の2区画に区分される。その構成は平安末～鎌倉初期の高野山御影堂に極めて類似した平面をもつことがわかる。ただし、後方隅部の縁を切って閤伽棚をもうけ、後方の階段が中央間から脇間に寄る。これは高野山御影堂と異なる点である。なお、鎌倉期仁和寺御影堂は指図の端書に「宝形」との注記がみられ、屋根形式が宝形造であることがわかる<sup>注8</sup>。

また、その他の指図の注記から、内陣は側面と背

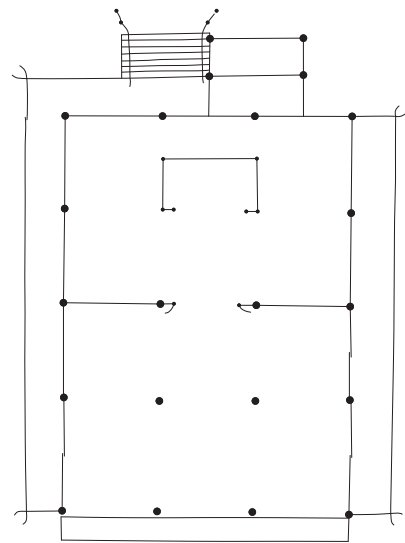


図957 正中2年仁和寺御影堂平面模式図  
(金沢文庫所蔵指図をトレース)

面脇間が壁で閉塞されていること、手前の礼堂は正面に格子が入れられ、右側面は2間とも遣戸、左側面は手前1間が遣戸、奥1間が壁となることがわかる。礼堂の内部柱の柱間には葎が入れられ、建具でも仕切られる。手前に巡らされるのは単なる縁ではなく沓脱である<sup>注9</sup>。

先述のように仁和寺には寛永度高野山御影堂の指図が所蔵されており、伽藍の再建造営の参考にした可能性が高いことと合わせて考えると、仁和寺では度々、壇上加藍御影堂形態を参照していることがわかる<sup>注10</sup>。ただし、慶長度清凉殿の古材を用いることで知られる現在の仁和寺御影堂は、宝形造、檜皮葺だが、方五間で手前1間を外陣、奥4間を内陣としており、その平面構成は寛永度の壇上加藍御影堂と異なる。

## (2) 山王院拝殿

**現在の山王院拝殿の概要** 現在の山王院拝殿は天保14年(1843)の大火で類焼した後に、弘化2年(1845)に再建された建物である(図958-1)。桁行9間、梁間3間で、桁行中央間ならびに梁間中央間を大きく取るほかは等間とし、南北両側面に1間の向

拝を付す。内部は1室で、正面入側に側通り2間おきに4本の柱を立てる。また四周には高欄付きの縁を巡らせる。山王院拝殿については、鎮守3社の修理工事の報告のほか、井上充夫や藤井恵介による金沢文庫所蔵指図の研究がある<sup>注11</sup>。これら既往研究を参考にしながら、山王院拝殿の平面の変遷について改めて検討したい。

『高野春秋』によると、延久2年(1070)に波切不動が山王院拝殿の本尊となっており、この時期までには創建されている。「金剛峯寺堂塔建立由来書」によると、承安2年(1172)に造替されたという。その後、永正18年(1521)に焼失し(「高野山焼失記」、再建され、元禄6年(1693)には大雪で西の屋根が破損したため(「釈迦文院書状写」など)修理をおこなっている。そして、天保14年(1843)に再び焼失し、再建されたのが現在の建物である<sup>注12</sup>。

**山王院拝殿を描く図面** 山王院拝殿を描いた建築指図に、平安末～鎌倉初期成立の金沢文庫所蔵指図と、年紀のない高野山霊宝館所蔵指図がある。金沢文庫所蔵指図では、寿永3年(1184)の年紀をもつもの1点、建久4年(1193)のもの1点の、計2点が確

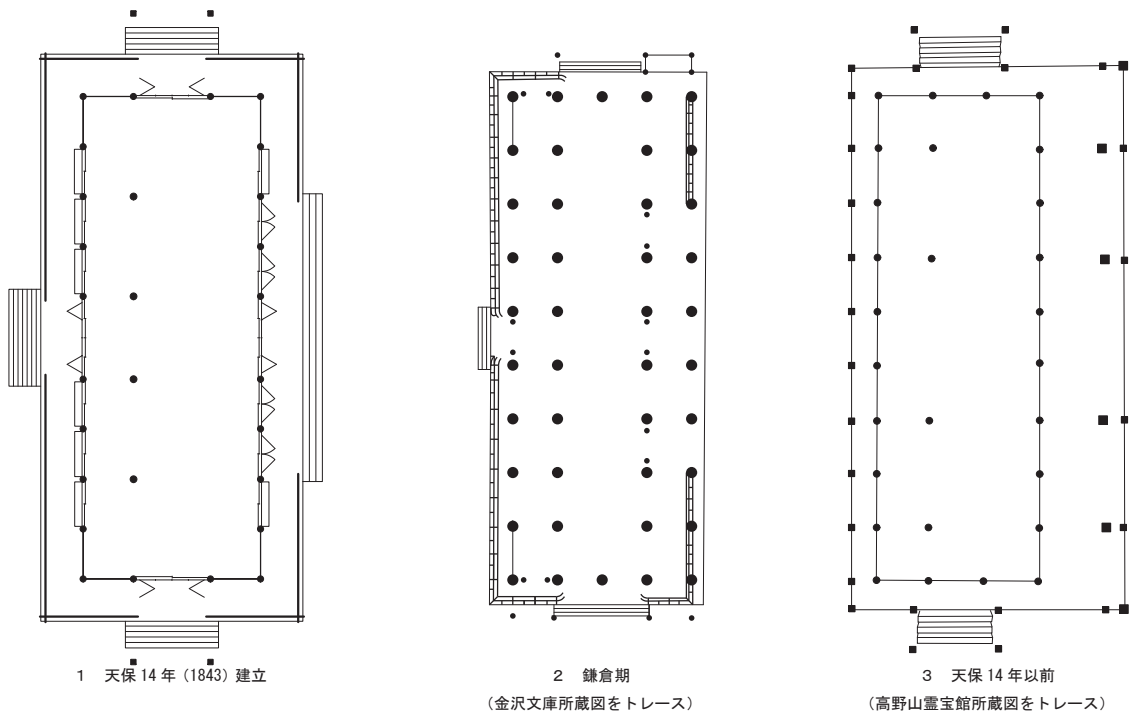


図 958 山王院拝殿平面模式図

認できる。描かれる建築の形態は同一である(図958-2)。ここに描かれる山王院拝殿は桁行9間、梁間4間で、正背面の入側に柱を立て、九間二面の平面とする。正面と両側面には縁を巡らし、正面中央間と両側面中央2間に階段を、南側面西端間には關伽棚をもうける。そして、階段と關伽棚のある部分を除いて高欄を巡らす。北側面には3間の、南側面には1間の向拝を付す。なお、正面中央間ならびに両側面東端間には方立を描く。背面側柱筋は両端各2間の柱間に高欄を入れ、中央5間には柱間装置を描かない。しかし、背面入側柱通りの中央間ならびに中央間から3間目には方立を描く。扉口が入側柱筋まで後退し、背面側柱筋に高欄が入れられることから、背面の廂は吹放しとみられる<sup>註13</sup>。

高野山靈宝館所蔵指図は、「御社拝殿地割」との表記をもつ(図958-3、PL.59)。桁行9間、梁間3間で、円柱の主体部を持ち、柱間はいずれも等間とする。南北両側面に1間の向拝を付すが、主屋の側柱と柱筋を揃えない。階段は側面の向拝位置に描かれ、正面中央間には描かれていない。内部は1室で、正面入側には、妻面から2本目、4本目、7本目、9本目の位置に、計4本の柱を立てる。また正面と両側面には同じ幅の縁を巡らせ、背面(西側)のみは縁の幅を大きく取る。そして、主体部背面の円柱の外、背面の縁の中に、正面入側柱と同じ位置に角柱を立てる。縁の端部には縁束を描くが、背面の隅の縁束のみ角柱と同程度の太い柱として表記する。現在の建物と比較すると、背面に幅広の縁を設けて角柱を4本立てる点で大きく異なっている。なお、前述の角柱の存在から、背面の縁の上部にも差し掛け屋根などの上部構造が存在したことが想定される。ただし、背面の隅の縁束が他の角柱と同様に表記される点是不審で、表記にあたって柱位置を誤記した可能性も想定されよう。正面中央間の階段が描かれない点も不審である。

ここで問題になるのが、この指図に描写される山王院拝殿がいつの時代のものかということである。山王院拝殿の前身建物が焼失する以前の、天保10年(1839)に成立した「紀伊続風土記」の拝殿山王院の項には、次の記述がみられる。「両社の前六間許を隔

てあり。棟南北に流れ檜皮屋根なり。表行京間十間五尺。裏行四間四尺四方にて廻り縁あり。西側の縁は殊に幅広して上下段あり。南北に庇あり。木階唐戸口あり(後略)。」

ここから、天保14年焼失以前の山王院拝殿の規模とおおよその形態が判明する。現在の山王院拝殿の桁行総長は21.20m(≒70尺)であり、京間十間五尺(=70尺)にほぼ一致する一方で、梁間総長は7.8m(≒26尺)であり、四間四尺(=30尺)には長さが足りない。また、現在の山王院拝殿の西面の縁は、ほか3方向と同じ幅であり、上下段に分かれていない。西面の縁の幅を大きく取る様子はむしろ、靈宝館所蔵指図の表記内容と類似する。梁間寸法が現在の建物よりも大きいのは、正面側柱から背面角柱までの寸法だからとも考えられる。つまり、山王院拝殿靈宝館所蔵指図は「紀伊続風土記」の内容と整合し、永正18年の火災の後再建された山王院拝殿とみてよいだろう。

鎌倉期の拝殿(金沢文庫所蔵指図に描かれた建物)と、永正焼失後に再建された拝殿(靈宝館所蔵指図に描かれた建物)、現在の拝殿を比較すると、桁行9間の横長平面で両側面向拝をもつという点は一貫している。一方で、鎌倉期に対し、永正焼失後再建の拝殿では入側柱を減らし、背面の吹放し部分の形態も変化した。現在の拝殿では、背面吹放し部分が省略された。また、入側柱位置や向拝柱位置などの微細な変化もみてとれる。このように、山王院拝殿は平安時代末期の平面を大枠で踏襲しながらも、背面を中心に大小の変更が加えられていることがわかる。

**まとめ** 以上、壇上加藍の御影堂と山王院拝殿の変遷について概観した。御影堂と山王院拝殿の両者に共通しているのは平安時代末期の建物の構成にあった要素を残しつつ、建物を変化させている点であり、その意味で高野山の諸建築はよく前身建物の要素を残している。

御影堂は間口3間、奥行4間という主体部の規模を踏襲しながら、周辺に廂を付けるなど大型化し一方、山王院拝殿は桁行9間という規模は踏襲しつつも、平安時代末期にはあった背面の吹放しの廂を撤去し、入側柱も一部省略するなど変化の方向性には

違いも確認できる。

壇上伽藍の再建における旧規に対する姿勢は、近代に入ったのちの金堂・根本大塔・六角経蔵の再建においても連続とつづくものであり、連続的に捉えた方がよいだろう。(山崎有生・鈴木智大)

注

- 1 本稿は、鈴木智大「高野山の近世建築における古代・中世建築の継承」(『奈良文化財研究所紀要 2022』、44～45頁)を大幅に加筆・修正したものである。
- 2 福山敏男「初期天台真言寺院の建築」(『仏教考古学講座』3、1936年、1～74頁。のち『寺院建築の研究 下』中央公論美術出版、1983年に収録)。井上充夫「金沢文庫所蔵の高野山関係指図」(『金沢文庫研究』18-1、1972年、2～17頁。川上貢「弘法大師御影堂について」(『日本建築の特質 太田博太郎還暦記念論文集』中央公論美術出版、1976年、243～277頁)。山岸常人「上醍醐御影堂史論」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所、1988年、785～803頁)。のち『中世寺院社会と仏堂』塙書房、1990年に収録)。上野勝久・藤井恵介「解説」(『金沢文庫資料全書』9、神奈川県立金沢文庫、1988年、287～296・337・339～341頁。横山舜『近世京都の寺院再興における建築情報の収集と実用』(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士論文、2022年)。
- 3 「天狗草紙」は小松茂美『続日本の絵巻 26 土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』中央公論社、1993年)、「高野山水屏風」は『特別展 聖域の美 —中世寺社境内の風景—』大和文華館、2019年)、「弘法大師・四社明神」は『「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産暫定リスト登載記念展 第二十二回高野山大宝蔵展 高野山の国宝 —壇上伽藍と奥之院—』高野山霊宝館、2001年)を参照した。
- 4 井上注2論文において、井上は『高野春秋』にみえる「北鸞」を「比簷」と解釈し、この時の御影堂の軒を広げたものと解釈している。
- 5 時代は降るが、『高野春秋』に寛永11年(1634)3月17日の御影堂でおこなわれた不断経に際して「張出仮廂於三方」とある。間口3間、奥行4間の主体部の側面に「仮廂」を取り付けるということがあった可能性もある。また、『「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産暫定リスト登載記念展 第二十二回高野山大宝蔵展 高野山の国宝 —壇上伽藍と奥之院—』では、南北朝時代の「弘法大師・四社明神像」に描かれる高野山御影堂の東西廂について、康平4年(1061)に屋根が拡張されたことと関係がある可能性を指摘している。
- 6 なおこの時代の壇上伽藍御影堂は、天保焼失以前の天保10年(1839)成立の「紀伊続風土記」によると、「後

には廻廊(中略)宝庫に連り」とあって、軒廊で宝庫と接していたらしい。

- 7 井上注2論文でも指摘されている。
- 8 以下、指図の注記については、『金沢文庫資料全書』9(神奈川県立金沢文庫、1988年)の151・279頁参照。
- 9 一方、平安末～鎌倉初期の高野山御影堂の建具については、井上注1論文や、川上注2論文で言及される。井上は『東長儀』・「山槐記」、川上は『東長儀』を引いて、内陣と中陣境の中央間には両開きの板扉、中陣と外陣境は中央間に遣戸、左右各脇間には格子、外陣の正面3間には格子、側面には遣戸を入れていたとする。また川上は、天治元年(1124)の鳥羽上皇の高野山参詣記録である『高野御幸記』を引き、外陣には柱間装置を装備していなかった可能性を指摘する。このことを考慮すると、平安末～鎌倉初期の壇上伽藍御影堂の壁以外の柱間装置については一定しなかった可能性がある。
- 10 横山注2論文によると、仁和寺には金沢文庫所蔵指図とほぼ同一の建久4年(1193)の裏書をもつ「御影堂差図」があつて、寛永期の造営にあたって鎌倉初期の壇上伽藍の御影堂の情報を把握しているという。
- 11 井上注2論文。上野・藤井注2論文。『重要文化財金剛峯寺山王院本殿他八棟修理工事報告書』(高野山文化財保存会、1980年)。
- 12 『高野山開創一二〇〇年記念展 初公開!高野山の御神宝 —壇上伽藍御社の奉納品—』高野山霊宝館、2015年)所収の御社・山王院略年表を参考にした。
- 13 金沢文庫所蔵指図の山王院拝殿背面廂が吹放しであることは、すでに井上注2論文にて指摘されている。

## 5 高野山の棟札の特質

**概要** 今回の調査では、多くの棟札を確認した。本項では、判読できた棟札のうち江戸時代に遡るものを中心とする41点の棟札について整理をおこなうことで、高野山の棟札の特質を抽出する(表13)。棟札については、水藤真、秋山敬による研究があり、その分析手法を参考に分類する<sup>註1</sup>。なお文章括弧内及び表中の番号は、巻末図版掲載番号に対応する。

**外形** 棟札の形状は、すべて縦に長く、総高を計測した棟札35点のうち、400mm台が6点、500mm台が2点、600mm台が7点、700mm台が7点、800mm台が5点、900mm台が1点と、400mm～900mm台に集中している。1mを超える大型のものも6点あり、最大が壇上伽藍金堂(9)の1916mmである。最少は、金毘羅宮(48)の358mmであり、400mm以下はこの1点のみである。また、目視判断も含め、32例は上幅が下幅より広い熨斗型、6例が上幅と下幅がほぼ同じ上下同幅型で、熨斗型が多数を占める。上下同幅型は、嘉永元年～5年(1848～1852)に壇上伽藍の三昧堂・愛染堂・大会堂・孔雀堂(26～29)の再営に際する4点が集中する。これらは青巖寺の寺務検校執行法印(以下、検校とする)である来応および実賢が記したとみられる。頭部形式はすべて上部中心部が肩より飛び出ている尖頭型である。

材種を判断した21点のうち、10点が杉、9点が桧で大半を占める。壇上伽藍金堂および金剛峯寺大主殿(9・1)が朴を用いているのが注目される。さらに両者は1mを超える大きさである。高野山のなかでも中核をなす建物で、棟札にも格の高さがあらわれている。木取りを判断した22点のうち、板目が15点と大半を占め、追桁が6点、桎目が1点である。

このことから、高野山棟札の外形の特徴としては、熨斗型・尖頭型で杉または檜を板目で木取りするのが基本といえる。壇上伽藍三昧堂・愛染堂・孔雀堂(26・27・29)に関しては、上下同幅型、追桁であり、この形状は嘉永元年～5年(1848～1852)に青巖寺で作成された棟札の外形的な特徴と考えられる。

**記載項目と配字形式** すべて縦書で、多くは建造物の造営や修理に関連する内容である。表・裏の両面

が確認できた棟札ではすべて両面に記載があった。多くの場合、表面の頭頂部に梵字を配し、その下に建物名と造営の内容、大壇主、大願主、経典の一部を示す偈を記載し、裏面の上部に梵字と偈を記載し、年号や修理奉行、施工者の名前もいずれかの面に記載する。両面で1つの出来事に対して作成されたものと考えられる。両面に同一の内容を記した棟札、複数枚に亘って文が続く棟札はみられなかった。

ただし、金剛峯寺真然堂(3)では、表面に「奉修愛染明王…」「慶安三庚寅稔…」とあるのに対して、裏面に「奉納上尊棟札」「延宝三年」とあり、表と裏で異なる時期、内容を示しており、筆跡にも違いがみられる。慶安3年(1650)の愛染明王護摩供の木札の裏面に延宝3年(1675)に屋根の葺き替えの内容を追記したものと考えられる。ただし、愛染明王護摩供が真然堂で修されたとは考え難く、別の建物に納められていたものを、利用したものと考えられる。ちなみに、「棟札」という字の記載があるのは真然堂のみである。また、封大師釈迦牟尼如来木札(49)は建物名がなく仏像にまつわる木札で、どこに安置された仏像のものかあきらかでない。年号に関しても、仏像の造営・修理のもので、建物には関連しない可能性がある。

配字形式は、秋山らは単行型、三行型、多行型、主文型、平文型、上文型、表題型、列記型などに分類している。本稿ではそれらの分類方法を参照しつつ、既往の定義とやや異なる形式があるため、再度定義しながら分類した。高野山では、表面は中央に主文である棟札の内容などを大きく示し、その両脇に偈や年号、願主などの項目を記すもの(以下、多行型と呼ぶ)が多く37点、上部に棟札の主題を示し、その下に偈や願主などの項目を記すもの(以下、主題型と呼ぶ)が2点、上記のような主文・主題がなく、大工や年号など項目、偈を並べるもの(以下、列記型と呼ぶ)1点である。主題型の2点は西南院経蔵(39・40)である。多行型とは異なり、主題型では寺院・建物名のみ記し、施工内容は示さない。『棟札銘文集成一近畿編二一』(国立歴史民俗博物館、1996年)をみる限り、和歌山県では金剛三昧院客殿及び台所の宝暦8年の棟札が類似するほかには同様の配字形式の

第6章 高野山の寺院建築の特質

表 13 高野山の棟札（年代順）

No.	名称	願主など	棟梁など
39	西南院経蔵元和二年（一六一六）棟札	大檀那 家康 / 大願主 住寺 沙門 良尊 / 大施主 洛陽西田宗善	大工 藤原朝臣家久
2	金剛峯寺真然堂寛永十七年（一六四〇）棟札	檢校法印弘翁 万福院・無量寿院阿闍梨澄榮・寶性院入寺政等 / 奉行 学侶 方 正龍院・行人方 梅院	大工 藤原朝臣藤左衛門家吉
35	奥之院密藏堂寛文十一年（一六七一）棟札	願主 夾派沙門	不明
3	金剛峯寺真然堂延宝三年（一六七五）上葺棟札	なし	頭科 摂州大坂之住檜皮屋山西治郎左衛門尉
40	西南院経蔵元禄七年（一六九四）棟札	大願主 住持 沙門 成信 / 十方檀那	大工 左治兵衛・甚兵衛
31	金剛峯寺大門宝永二年（一七〇五）棟札	大檀主 征夷大将軍（徳川綱吉） / 青巖寺寺務檢校執行法印大和尚位有兼	正大工 狭間河内 / 權大工 長田出羽
49	封大師釈迦牟尼如来享保二年（一七一七）木札	大檀主 征夷大将軍（徳川吉宗） / 願主 寺務檢校法印 隆恭	なし
30	三宝荒神祠明和九年（一七七二）再建棟札	大奉行学侶方 高室院寛耕 / 同行人方 西方院圭峯 / 寄進 和歌山御家中福田 儀左衛門正勝	番匠久保利右衛門 / 葺師山西三河愛綱
48	金毘羅宮天明七年（一七八七）棟札	寺務檢校兼大樂院靈信七十一歳	なし
36	奥之院護摩堂文化九年（一八一二）棟札	前任 快龍存命 / 二十五代快昌 弟子 快圓 / 大坂世話人 平野口（住か） 宇 兵衛	なし
18	壇上伽藍丹生明神社文化二年（一八〇五）修葺棟札	寺務檢校執行法印大和尚位義辨執行代西南院隆本（平等院） / 修理奉行 學 葺師紀州伊都郡九度山村空運 森田文吉芳房 侶方 圓秀 行人方 徳藏院	
21	壇上伽藍高野明神社文化二年（一八〇五）修葺棟札	寺務檢校執行法印大和尚位義辨執行代西南院隆本（平等院） / 修理奉行 學 葺師紀州伊都郡九度山村空運 森田文吉芳房 侶方 圓秀 行人方 徳藏院	
24	壇上伽藍六角堂文政五年（一八二二）棟札	御願主 徳川家斉 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 陳實	正大工 狭間河内 / 權大工 小佐田出羽
25	壇上伽藍六角堂文政五年（一八二二）棟札	御願主 徳川家斉 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 陳實	正大工 狭間河内 / 權大工 小佐田出羽 / 同 小佐田勘之丞
49	金剛三昧院表門文政八年（一八二五）棟札	護持法王宥寂	正大工 當国伊都郡伏原村 林右衛門 / 權大工 儀左衛門
19	壇上伽藍丹生明神社文政八年（一八二五）修葺棟札	寺務檢校執行法印大和尚位弘源執行代 性源院周存（寶藏院） / 修理奉行 學 葺師紀州伊都郡慈尊院村空然丹下重次郎 侶方 賢政 行人方 延壽院	
22	壇上伽藍高野明神社文政八年（一八二五）修葺棟札	寺務檢校執行法印大和尚位弘源執行代 性源院周存（寶藏院） / 修理奉行 學 葺師紀州伊都郡慈尊院村空然丹下重次郎 侶方 賢政 行人方 延壽院	
38	円通寺山門天保四年（一八三三）棟札	なし	大工 阿州板野郡 畑村住 弥三八
15	壇上伽藍西塔天保五年（一八三四）棟札	御願主 徳川家斉 / 再建願主 正管院乗如・金光院眞尊 / 御導師 寺務青巖寺 檢校執行法印大和尚位 増源 / 奉行 聖源院 道猷・寶瓶院 龍華	正大工 藤原朝臣西山金輔 / 權大工 同木下彦右衛門
20	壇上伽藍丹生明神社弘化二年（一八四五）修葺棟札	寺務檢校執行法印大和尚位専雄 / 執行代大聖院靈明（釈迦文院） / 修理奉行 學 葺師紀州伊都郡九度山村空榮 森田文吉 侶方 寛海・行人方 梅林院	
23	壇上伽藍高野明神社弘化二年（一八四五）修葺棟札	寺務檢校執行法印大和尚位専雄 / 執行代大聖院靈明（釈迦文院） / 修理奉行 學 葺師紀州伊都郡九度山村空榮 森田文吉 侶方 寛海・行人方 梅林院	
37	円通寺土蔵弘化四年（一八四七）棟札	なし	巧匠 紀伊国九度山住人 政次郎
26	壇上伽藍三昧堂嘉永元年（一八四八）棟札	御願主 徳川家慶 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 来應 / 寄付 再建願主 正智院一世道猷	なし
27	壇上伽藍愛染堂嘉永元年（一八四八）棟札	御願主 徳川家慶 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 来應 / 再建 願主 西院谷 地藏院妙範・播州松越山 瑠璃寺有智恵運房 / 再建掛里 学侶 方 中藏院蓮阿・行人方 正塔院了範	なし
28	壇上伽藍大会堂嘉永元年（一八四八）棟札	御願主 徳川家慶 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 来應 / 再建 願主 阿州 大瀧寺一世如戒 / 再建掛里 学侶方 一乘院・同 五坊寂靜院・行 人方 福智院・同 真乘院	正大工 三棟梁、脇棟梁 祝上元右衛門
29	壇上伽藍孔雀堂嘉永五年（一八五二）棟札	御願主 徳川家慶 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 實賢 / 再建 願主 堺南中之町大塚 河内屋仁兵衛 / 再建掛里 学侶方 愛染院・行人方 真 乘院	正大工 三棟梁、脇棟梁 善三兵衛
9	壇上伽藍金堂万延元年（一八六〇）棟札	大願主 徳川家茂 / 供養導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位 増應 / 学侶方 奉行 多開院・理性院 / 行人方 奉行 上藏院・龍生院	正大工 狭間河内大掾 / 權大工 小佐田出羽大掾 / 同 小佐田 勘之丞
44	蓮華定院山門万延元年（一八六〇）棟札（東）	□如者覺應	不明
45	蓮華定院山門万延元年（一八六〇）棟札（西）	□如者覺應	不明
46	神通寺七社大明神社頭並脇宮二社文久元年（一八六一）上葺棟札	供養導師 寺務青巖寺法印大和尚 増應 / 大奉行 増長院・寶積院 / 修理奉行 宜順坊・阿弥陀院	正大工 慈尊院村小松茂重郎藤原房長 / 權大工 慈尊院村井上 兵藏
47	神通寺七社大明神社頭並脇宮二社文久元年（一八六一）上葺棟札	供養導師 寺務青巖寺法印大和尚 増應 / 大奉行 増長院・寶積院 / 修理奉行 宜順坊・阿弥陀院	正葺師 慈尊院村山西重治郎藤原安實 / 權葺師 九度山村森田 文吉
1	金剛峯寺大殿文久二年（一八六二）棟札	大願主 徳川家茂 / 寺務檢校寿門主 増應 / 学侶方 奉行 普門院鏡旭・俗役人 遠方村 田中勘右衛門藤原守紀 / 行人方 奉行 密藏院 興玉・俗役人 河根昌 河野孝次郎藤原有信	正大工 天野邑久保勘兵衛源基義 / 權大工 九度山村前田喜三
1	同小屋貫打ち付け	不明	不明
5	金剛峯寺護摩堂文久三年（一八六三）棟札	再建寄付主 前寺務檢校龍光院増應 / 奉行 学侶方 龍生院 深雄・行人方 密 藏院 興玉	正大工 當国伊都郡大野邑岡田元次郎光高 / 權大工 同国若山 住吉町小田政右衛門重考
6	金剛峯寺護摩堂文久三年（一八六三）棟札	再建施主前寺務檢校壽門主兼龍光院増應 / 普請奉行 学侶方 龍生院深雄・ 行人方 密藏院興玉	不明
8	金剛峯寺鐘樓元治元年（一八六四）棟札	御願主 徳川家茂 / 寺務檢校兼定光院 龍雄 / 奉行 学侶方 龍生院 深雄・行 人方 清浄院 栄雄	大工 能登国鹿嶋郡秋森色住藤田長五郎平直光
10	壇上伽藍金堂昭和四年（一九三九）棟札写	弘法大師壹千百年御遠忌報恩謝徳施主十方檀越 / 供養導師金剛峯寺法燈第 三百八十九世座主大僧正密雄	武田五一・魚津
11	壇上伽藍根本大塔昭和十一年（一九三六）棟札	善工当時管長 龍智密雄 / 竣工当時管長 高岡隆心	工学博士 天沼俊一 / 技師 大浦徳太郎 / 助手 森本長守 / 正 棟梁 稲垣啓二 / 副棟梁 北尾年弘
34	女人堂昭和二十七年（一九五二）屋根替棟札	不明	請負人 堀光三郎・廣田庄吉・井本繁・辻口口・岩本繁文（二 十五才）・中上登晴・大和九一
43	蓮華定院本堂昭和四十八年（一九七三）増築荘厳棟札	供養導師 現住 権檢校大僧正 隆俊	棟梁 高野山 大彦組 辻本喜次
42	普賢院本堂修復・屋根替棟札	現住 森寛勝	檜皮師 大和九一 / 大工棟梁 井戸陸雄

凡例

不明：打ち付けられて確認できない部分がある、判読できない部分があるなど。

偈の種類

聖主天中天…聖主天中天 迦陵頻伽加聲 哀愍衆生故 我等今敬礼  
一切日皆善…一切日皆善 一切宿皆賢 諸佛皆威徳 羅漢皆斷漏 以斯誠実言 願我常吉祥  
若末法世人…若末法世人 長誦此眞言 刀兵不能害 水火不焚漂  
南無堅牢…南無堅牢地神諸眷属等 南無五帝龍王諸侍者等

祈禱句の種類

天下泰平（願主）…天下泰平御武運長久貴軀御堅固



棟札や、社寺・建物名のみを示し施工内容を記さないものはなく、西南院独自の形式とみられる。列記型の円通寺山門(38)には願主などや偈の記載がなく、複数の梵字の下に日付と建物名などの文を並列で記載し、大工名をその下に記載している。同寺の土蔵(37)にも願主などの記載がないが、土蔵では年号、建物名、大工名を3行に亘り記載しており、そのうち建物名を中央に大きく記載しているため多行型となっている。

偈の配字形式は、元禄7年(1694)作成の西南院経蔵(40)までは建物名あるいは梵字を上記し、その下に偈、さらに下に建物名や大檀那、大願主を記す形式で偈を一連で記載していたが、宝永2年の金剛峯寺大門(31)以降は主文の両側の上部に半分ずつ偈を記載する形式のみである。

裏面は主文がなく、梵字の下に偈や施工者名、年号などを並べる列記型を基本とするが、壇上伽藍西塔(15)、壇上伽藍三昧堂(26)は梵字、偈の下に施工に至るまでの経緯を文章で記す。

**表面の梵字** 高野山の棟札では、両面ともに梵字を記載する棟札が多数みられる。表面に梵字の記載がある棟札は33点あり、いずれも仏尊をあらわした種字とみられる。そのうち頭部に梵字を1字配している1字型の棟札が最多で30点確認できた。金剛界大日如来をあらわすと考えられる「バン」を記載するものが21点と最も多く、続いて胎蔵界大日如来をあらわすと考えられる「ア」が4点、金剛薩埵あるいは愛染明王をあらわすと考えられる「ウン」が2点、不動明王をあらわすと考えられる「カーン」が2点、愛染明王をあらわすと考えられる「ウン」が1点を数える。壇上伽藍丹生明神社・高野明神社(18~23)は、建物名のみ異なるほぼ同一の棟札が3時期に2枚ずつ作成されているが、表面の梵字は丹生明神社が「ア」、高野明神社が「バン」となっており、両祭神の本地仏である胎蔵界および金剛界の両界の大日如来をあらわしている。また、円通寺山門(38)は表面に上から、1・2・1・2・1字の計7字を互い違いに記載した7字5段型で梵字を配している。水天をあらわした真言である。円通寺土蔵(37)は上部が打付けてありすべて確認できない

が、山門と同様に配された2字の同じ梵字が確認できるため、同じ内容と考えられ、水天をあらわした7字5段型の真言が円通寺の棟札の特徴と考えられる。また、昭和49年(1974)の蓮華定院本堂(43)では表面上部に阿弥陀三尊をあらわす3字(阿弥陀如来「キリーク」、聖観音「サ」、勢至菩薩「サク」とその下に卍が記載されており、今回調査した棟札の中では唯一の形式であり、万延元年に作成された同院山門(44・45)とは異なることから、昭和に作成された棟札の形式と考えられる。

**裏面の梵字** さらに、裏面の確認できる32点の棟札のうち、28点の裏面上部に梵字が書かれており、1字型、梵字を複数段に亘り記載する複数段型があった。複数段型は構成する段数ごとに13字3段型、13字4段型、13字5段型、13字9段型に分類でき、基本的に同一の13字からなる大勝金剛をあらわす真言で、配置が異なるのみである。また、12字3段型である神通寺七社大明神社頭並脇宮二社(46・47)は文の終わりをあらわす「ダ」のを最後に記載しないのみで、基本的には13字4段型と同じである。

今回調査した棟札のうち、初期の事例である元和2年(1616)の西南院経蔵(39)や、寛永17年(1640)の真然堂(2)、元禄7年(1694)の西南院経蔵(40)は13字3段型である。西南院経蔵(39)、真然堂(2)は5・5・3字の段からなることに對し、西南院経蔵(40)は、6・5・2字であり、段ごとの文字数が異なる。続いて、宝永2年(1705)の金剛峯寺大門(31)は、今回調査した棟札の中で唯一、1・3・3・3・3字の13字5段型である。梵字の順番は、後述する1・2・1・2・1・2・1・2・1・2・1字の9列を互い違いに記載する13字9段型と似ているが、13字5段型は隣り合う3文字が1列に並ぶ。13字5段型は、他の13字9段型より古く、13字9段型の原型である可能性が指摘できる。以上が今回の調査で確認した初期の梵字形式であり、その後の棟札では、1字型(10点)、上述の13字9段型(6点)、4文字ずつ3段で記載し、最後に「ダ」の1字を記す13字4段型(6点)、12字3段型(2点)に大別できる。このうち、13字4段型、13字9段型、12字3段型は、『棟札銘文集成一近畿編二一』をみる限り、和歌



山県では高野山でのみ確認できる。

一字型の棟札は、愛染明王をあらわすとみられる「ウン」が壇上伽藍丹生明神社・高野明神社（18～23）の6点、金剛界大日如来をあらわすとみられる「バン」が円通寺土蔵・山門（37・38）の2点、胎蔵界大日如来をあらわすとみられる「ア」が奥之院護摩堂（36）の1点、一字金輪仏頂尊をあらわすとみられる「ボロン」が金毘羅宮（48）の1点であり、表面と併せて「ボロン」は金毘羅宮のみに記載されている。また、寺院ごとに梵字の違いがみられる。

13字4段型・12字3段型・13字9段型の棟札は、壇上伽藍丹生明神社・高野明神社（18～23）、昭和に作成された壇上伽藍金堂（10）を除き、明治以前に青巖寺の建物であったもの、あるいは棟札の作成者と考えられる供養導師を青巖寺の検校が務めた棟札のみであった。作成年代でみると、文久元年（1861）の神通寺七社大名神社頭並脇宮二社（46・47）より前は13字4段型、12字3段型が多く、文久2年（1862）の金剛峯寺大主殿（1）以後は13字9段型のみとなる。いずれにしろ13字4段型、12字3段型、13字9段型の梵字配字は青巖寺の棟札の特徴といえる。

ちなみに、現在、金剛峯寺では、本尊がある建物の棟札には大勝金剛真言を、本尊がない建物の棟札には水天真言を記すという。

**偈** 偈は、「聖主天中天…」、「若末法世人…」、「一切日皆善…」、「南無堅牢…」の4種に大別できる。水藤真・秋山敬らによれば、いずれも仏教系の偈で、「聖主天中天…」は『法華経』化城喻品第七、「若末法世人…」は『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜伽経』に基づくもので、「一切日皆善…」と「南無堅牢…」は出典が不明とされている<sup>注2</sup>。なお「南無堅牢…」について、水藤は道教の影響がある可能性を指摘している<sup>注3</sup>。「聖主天中天…」は24点に使用され最も多く、表面のみに記す。「若末法世人…」は17点あり、すべて「聖主天中天…」の偈のある棟札の裏面に記載されている。「一切日皆善…」は、壇上伽藍丹生明神社・高野明神社（18～23）、円通寺土蔵・山門（37・38）、奥之院護摩堂（36）、三宝荒神祠（30）の棟札に記載されている。山王院では裏面に「南無堅牢…」の偈が記されている。奥之院護摩堂では「水災…」

の偈が記され、この偈は他の棟札にはみられない。中央に「南無堅牢…」の偈が記載されているため、「南無堅牢…」から始まる偈との関連が考えられる。また、「一切日皆善…」と「南無堅牢…」の偈が併用される傾向があることは水藤も指摘しており<sup>注4</sup>、高野山も同様といえる。円通寺棟札は「一切日皆善…」の偈を裏面に配し、表面には偈を記載しない。反対に、三宝荒神祠は表面にこの偈を配し、裏面には偈を配さない。『棟札銘文集成—近畿編二—』をみる限り、和歌山県では、神社に用いることが多いようで、高野山でも検校が記したとみられる神通寺七社大名神社頭並脇宮二社を除く社殿の棟札ではこの偈が使用されている。また、「一切日皆善…」の偈がある棟札の裏面の梵字は、記載のない三宝荒神祠を除き、すべて1字型であり、梵字と偈に関連性がみられる。

特殊な事例として、金剛峯寺真然堂（2）では、「一切日皆善…」の偈の間に「若末法世人…」の偈を入れ、両者を組み合わせている。両偈を同じ棟札に記載する事例もみられない。この棟札特有の形式か、あるいは初期には存在したが後世では使用されなくなった形式だと考えられる。

**祈祷文言** 主文に「天下泰平」「国土安穩」といった祈祷文言のある棟札は20点ある。また、万延元年（1860）の壇上伽藍孔雀堂（29）以前に青巖寺検校が作成した棟札7点には願主である征夷大將軍の名の後に「天下泰平御武運長久貴躰御堅固」と將軍に対するとされる文言が入る。高野山棟札の祈祷文言は四字のものが多く、壇上伽藍西塔・金堂（15・9・10）や神通寺七社大名神社頭並脇宮二社（46・47）、金剛峯寺護摩堂（5）などでは複数の文言を組み合わせる。主文の祈祷文言を大別すると、複数の文言記載があり重複するものを含め、「密教紹隆」6点、「天下泰平」5点、「護持大衆」は山王院の6点、「満山静謐」5点、「国土安穩」3点、「国家安全」2点、「万歳万歳万万不朽霊」は西南院の2点である。「満山静謐」や、金剛峯寺真然堂（3）の「満山安全」は秋山の論文になく、似た表現として「四海静謐」「国家安全」などはあることが知られる。「満山」は『棟札銘文集成—近畿編二—』掲載の和歌山の棟札では確認できない言い回しで、既存の文言を「山」に置

全体の傾向

形状：熨斗型・尖頭型、木材：杉または檜、木取り：板目、配字形式：多行型

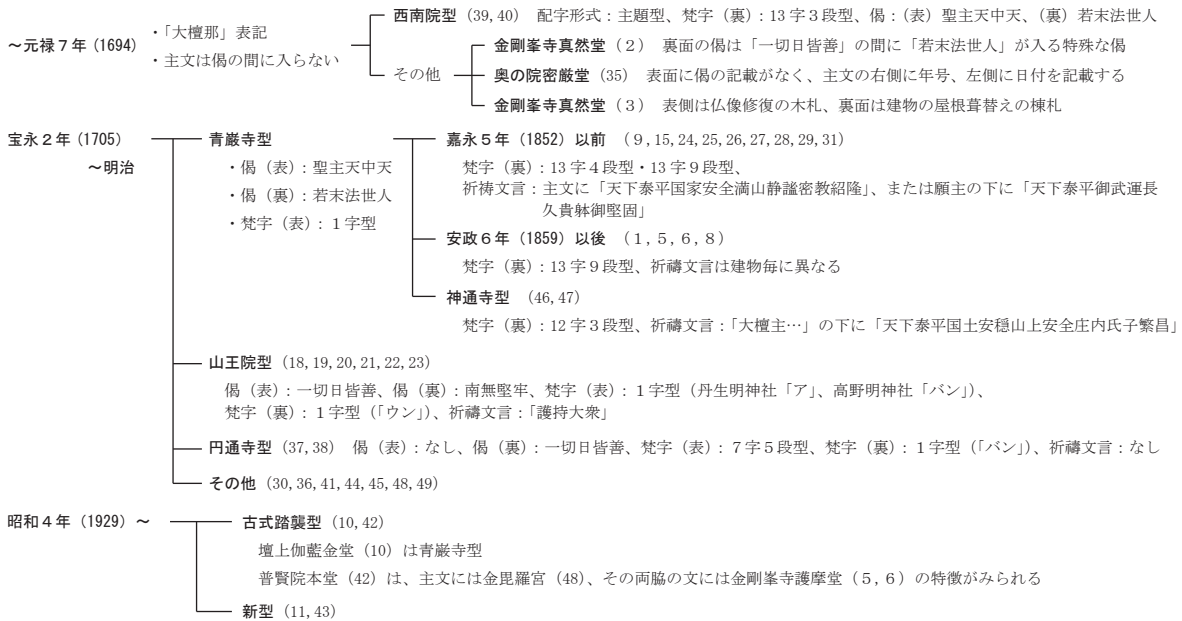


図 959 高野山棟札の分類

き換えた高野山独自の文言の可能性がある。「密教紹隆」も同様に例がなく、密教寺院ならではの文言であると考えられる。祈禱文言がなく、大壇主や大願主、年月日、施工者名など、事実関係のみ記した棟札は11点である。祈願文言の有無には、年代や寺院ごとの傾向はみられない。

**2枚の棟札** 高野山では、ほぼ同じ内容の棟札が2枚作成されている事例が複数ある。一方の棟札を小屋内に打ち付け、もう一方の棟札を別の場所で保管している事例は、壇上伽藍愛染堂(27)、金剛峯寺大主殿(1)・護摩堂(5・6)・鐘楼(8)であり、旧青巖寺の建物で多く認められる。このうち、金剛峯寺護摩堂の棟札は同じ内容であるが、年号などの記載の方法や主文の内容、文字の位置、人名の書き方が異なる。蓮華定院山門(44・45)は、唯一2枚とも建物に打ち付けた事例である。一方で、2枚とも打ち付けられず保管された壇上伽藍六角堂(24・25)、神通寺七社大名神社頭並脇宮二社(46・47)の事例もある。六角堂は、権大工の小佐田勘之丞の名を記載するもの(24)と記載しないもの(25)があり、筆跡や大きさにも明確な差が認められる。後者が検校の陳実が記したもので、前者は大工がそれを写した可能性などが考えられる。しかし、両者が打ち付けられずに保管された意図は不明である。神通寺七社大名神社頭並脇宮二社は、棟札の大きさも全く同じで

あることに加え、筆跡も同じと思われる。表面の内容も全く同じであるが、一方が裏面に大工を記すのに対して(46)、もう一方は葺師を記載する(47)。それぞれの施工者を記録するために2枚作成されたものと考えられる。

**まとめ** 上記の内容を年代、寺院ごとに分析し、まとめたものが上図である。高野山の棟札は、元禄7年の西南院経蔵(40)以前と、宝永2年の金剛峯寺大門(31)以降、高野山の組織体制が大きく変化した明治以降(今回の棟札では昭和以降)の3期に大別でき、さらに金剛峯寺大門以降の江戸時代の棟札では寺院や棟札の作成者ごとに違いがみられる。昭和以降の棟札は、近世の形式を踏襲するものと、従来の高野山にない新しい形式のものがみられる。外形や文字配置、記載されている偈などは、他の地域の棟札と同一の傾向とみてよいだろう。その一方で、梵字の内容や配置、祈願文言や、2枚の棟札などは、他ではみられず、あるいは少数であり、高野山の棟札の特徴と認められる。(高野 麗)

注

- 1 水藤真『棟札の研究』(思文閣出版、2005年)、秋山敬『棟札の基礎的研究 主として甲斐国の事例を素材として』(岩田書院、2010年)などにまとめられている。
- 2 水藤、秋山注1前掲書。
- 3 秋山注1前掲書、153頁。
- 4 水藤注1前掲書、194頁。

## 第7章 総括

### 1 まとめ

#### (1) 高野山地区の寺院建築

本節では、高い重要性を見出した高野山地区の建造物について整理したい。大きくわけて、金剛峯寺(旧青巖寺)及び六時鐘楼、壇上伽藍及び勸学院、奥之院、旧東照宮、周辺寺院などの5つのグループに分けて捉えることができる。

以下では、グループごとに概観する。

##### A 金剛峯寺(旧青巖寺)及び六時鐘楼

明治2年(1869)学侶方の中心寺院であった青巖寺と行人方の中心寺院であった興山寺が合併した金剛峯寺は、両寺の建物を引き継いだ。明治5年(1872)に旧興山寺の建物を焼失した。その結果、青巖寺から引き継いだ建物群とその後に建てられた建物が現在に伝わる。青巖寺も、創建以来、幾度も大規模な火災に見舞われたものの、一部の建物は焼失を免れていることが確認できた。

**江戸時代前期** 旧青巖寺のなかでも背面中腹に建つ真然堂は、慶安3年(1650)・万延元年(1860)の火災を免れた寛永17年(1640)建立の建物で、県指定文化財として保存修理工事がおこなわれた際の発掘調査によって、金剛峯寺創建以前から所在する真然の陵墓、その上に建てられた多宝塔と同じ場所に建てられたことが明らかになっている。また境内の中央部を東西に区画する築地塀は、旧青巖寺西辺を区画していたもので、建立は江戸時代初期の創建当初に遡る可能性がある。

**江戸時代中期** 万延元年の火災を免れた建造物として、経蔵・山門がある。慶安3年(1650)の火災のち、経蔵は延宝7年(1679)に、山門は同8年(1680)に再建された。

**江戸時代後期** 万延元年の火災後には、大主殿・護摩堂・鐘楼・会下門・かご塀が建立された。文久2年(1862)の大主殿は天野邑の久保勘兵衛、同3年(1863)の護摩堂は伊都郡大野邑の岡田元次郎といった高野山周辺地域の大工が正大工をつとめたのに対

して、元治元年(1864)の鐘楼は能登国鹿嶋郡杵森邑の藤田長五郎が大工を務めている。

金剛峯寺の南方に建つ六時鐘楼は、もとは青巖寺と興山寺が共同で管理していた建物で、現在するのは、両寺の合併以前の慶応元年(1865)に建立されたものである。江戸時代の各種絵図でも必ず描かれており、金剛峯寺の建造物群とともに、高野山に欠くべからざる建造物といえる。

**近代** 明治4年(1871)の火災で、旧興山寺の建造物を焼失したが、その後、弘法大師御遠忌壹千年記念法会に関連する事業のなかで、昭和8年(1933)に奥殿が、同9年(1934)に別殿が建立されている。いずれの建物も、簡素ながらも、整った意匠を備えた近代和風建築である。

##### B 壇上伽藍及び勸学院

壇上伽藍には、金堂・根本大塔・御影堂をはじめとする真言宗総本山の中核となる建造物群が建つ。度重なる火災により、焼失、再建を繰り返しているが、昭和58年(1983)再建の東塔や同59年(1984)の再建の孔雀堂に至るまで、伝統的な技法による木造建築が再建され続けている。

**江戸時代後期** 弘法大師を祀る御影堂、その背後に建つ宝庫、御影堂に並立する准胝堂、根本大塔とともに空海により計画された西塔、御社すなわち山王院本殿の前に建つ拝殿とこれに付属する鐘楼、根本大塔東方の壇下に立ち並ぶ、愛染堂・大会堂・三昧堂である。

一連の造営では、万延元年(1860)に金堂も再建された。金堂の再建は、挟間河内が正大工、小佐田が権大工を務める宝永2年(1705)再営の大門以来の体制に加えて、総肝煎として、柴田日向守大掾、森肥後大掾、藤田長五郎、藤田上総大掾が、副肝煎として伊藤平左衛門らが参加する。柴田らは、天保4年(1833)の東本願寺御影堂、天保6年(1835)の同阿弥陀堂、弘化4年(1847)の同大門を手掛けた集団で、壇上伽藍金堂再建ののち、再び焼失し、万延元年(1860)に上棟された本願寺御影堂・阿弥陀堂・大

門の再建にもあたっている。造営にあたる職人が、近隣地域から京都で活躍した地方出身の大工集団に移行した点において、万延元年（1860）の金堂再建はおおきな画期といえる。藤田長五郎はこの後、前述の金剛峯寺経蔵の造営で大工を務めることとなった。しかし、この金堂は昭和元年（1926）に再び焼失することとなる。

**近代** 昭和元年の火災後の、金堂・根本大塔・六角経蔵（旧六角堂）は、新たに鉄筋コンクリート造を採用し、再建されることとなった。度重なる火災に対して、近代の新たな技術に基づく耐火構造を採用したのである。

その平面形式は、古代の形式を採用している点において、これら以前の伝統的な技法に基づき再建された木造建築と共通する。一方で、細部意匠には、近代の文化財修理で培われた古代・中世の要素をちりばめており、昭和前期の時代性の発露であり、鉄筋コンクリート造の技法とともに、近代和風建築として評価することができる。

**勸学院** 勸学院は勸学の道場として、弘安4年（1281）に金剛三昧院内に設置されたことに始まり、文保2年（1318）に壇上伽藍の南東に位置する現地に移転したものとみられる。学道を修める上で、重要な勸学会の本会をおこなう建物である。文化10年（1813）再建とみられる両翼に勅使の間をもつ本堂、鐘楼、表門が建つ。特異な本堂の屋根は前身建物を描いたとみられる絵図でも確認できる。壇上伽藍と一体で評価されるべき建造物群といえる。

### C 奥之院

**御廟橋手前** 御廟をはじめ、丹生明神社、高野明神社、経蔵、納骨堂、燈籠堂が建ち並ぶ一帯から御廟橋の手前には、参道に沿って、護摩堂・頌徳殿など建ち並ぶ。護摩堂は、不動堂と大師堂を1棟に納めた建物で、棟札により文化9年（1812）に建立されたことが明らかである。建立当初は、南面して建っていたが、その後、参道に向かって、西面して建つ。御廟の近くに建ち、弘法大師信仰を映した建物のうち、江戸時代に建立された貴重な建物である。

**霊屋** すでに、木造の大名墓霊屋として、上杉家、佐竹家、が国指定を受けている。井伊直政霊屋

は、これらと同様、建立は17世紀に遡るものと考えられる。小規模ながらも、彩色を施し、譜代大名に相応しい華麗な意匠を備えている。今回調査をおこなった建造物のなかでは、保存状態が最も悪く、早急な対応が求められる。

密厳堂は、覚鑿を祀る霊屋である。覚鑿は大伝法院を建立し、金剛峯寺の座主にもなったものの、金剛峯寺や東寺の既存勢力との対立から、高野山を退き、根来寺で没した。元禄3年（1690）に至って、興教大師の号を賜るなど再評価されている。現在の堂宇は棟札により、これに先立ち寛文11年（1671）に建立されたことが明らかになった。また須弥壇下にあたる地面には石槨が確認でき、金剛峯寺真然堂同様、霊屋に先立つ陵墓の存在も想定される。

### D 旧東照宮の建物

江戸時代を通じて、鼎立していた学侶方、行人方、聖方の3派のうち、行人方と聖方はそれぞれの中心寺院である興山寺と大徳院の背後の山上に東照宮を造営した。

**旧聖方東照宮**（徳川家霊台） 旧聖方東照宮については、すでに徳川家霊台家康霊屋及び秀忠霊屋として、国指定を受けていた。また昭和修理に際して両棟を囲む透塀と、南面に開く四脚門について、明治期に解体・保管されていた部材を利用して、復原がなされていた。また今回の調査では、境内南面の石段上に位置する表門が、霊屋と同時期に建立されたことを確認した。つまり、両霊屋と各々の透塀及び四脚門、そして表門は、一連の造営による旧聖方東照宮の主要な建物と評価できる。

**旧行人方東照宮** 旧行人方東照宮は、明治維新による三派の廃止、青巖寺と興山寺の統合のなかで、廃止された。その後、火災により境内を焼失していた普門院、普賢院、敷地を移転した常喜院などに、建物が払い下げ、移築されたようである。

すでに普賢院四脚門が、東照宮の表門として当初の形式をよく伝えるものとして、国指定を受けて、常喜院校倉が旧経蔵として和歌山県指定を受けていた。平成5～8年（1993～1996）におこなわれた普賢院四脚門の修理工事に際して、すでに普賢院本堂が旧本殿、普門院本堂が旧拝殿、普門院表門が東照

宮敷地内のいずれかの門である可能性が指摘されていた。今回の調査により、その評価はより確かなものとなったと考えている。一方で、普賢院本堂及び普門院本堂については、移築時の改変に加えて、その後の修理・増築もあって、当初の姿が判然としない。今後、旧行人方東照宮として保存すると同時に、修理工事など適切な機会を捉え、前身堂に関する復元的な考察、その後の移築・増築の過程をより明確に、評価を定めてゆく必要がある。

### E 周辺寺院など

第4章で概観したように、高野山の寺院には、江戸時代に遡る建物や、伝統的な技法により近代に建立された建物が数多く残る。今回の調査で、平面図・断面図を採取し、一定の評価をおこなった寺院は、ごく一部に限られる。

以下では、女人堂、金輪塔、円通寺、金剛三昧院、その他の周辺寺院に分けてまとめる。

**女人堂** 高野山は女人禁制であったが、壇上伽藍や奥之院を囲むように女人道が整備され、高野七口にはそれぞれ女人堂と呼ばれる滞在施設が建てられていたという。現存する女人堂は不動坂口のみである。建立以来、幾度も改修がなされてきたようで、小屋には、長押しとして用いられた材などが補強材として用いられており、これらには参詣者による落書きが多数残されている。なかには正保年間や元禄年間の年紀をもつものがある。面取の大きな軸部材や軒まわりの部材など、比較的古式な技法と考えわせると、建立は江戸時代前期以前に遡るものと考えられる。女人禁制としながらも、女人道による参詣を実現するための建造物として、高野山に欠かすことのできない建物である。

**金輪塔** 金輪塔は、一心院谷の西部に建ち、不動坂口から女人堂を経て、高野山の中核へと進む道で、一際目立った存在である。検校をつとめた明算の廟所として建立したとされ、一字金輪仏頂尊座像を祀る。明治41年(1908)に壇上伽藍へと移築された不動堂とともに、一心院谷の景観を形成していた。高野山には、多くの多宝塔・大塔形式の塔婆が建てていたが、光臺院多宝塔が大阪へと移築された後、建立が江戸時代以前に遡る多宝塔は、金剛三昧院多宝

塔と金輪塔のみとなっている。高野山における多宝塔として、貴重な建物である。

**円通寺** 他の寺院群から山道を進んで遠く離れた境内に、19世紀中期に一連の造営に建立されたとみられる本堂、客殿及び台所、求聞持堂、土蔵、山門が建ち並ぶ。現在も、僧侶となるための修行道場として機能する。宝形造の本堂は、細部の技法や意匠はほかの周辺寺院と共通する一方で、平面形式が大きく異なっており、重源による別所建築の特徴を引継ぎながら、成立したものとみられ、高野山真言宗のみならず、中・近世の日本建築史を考える上で重要な建物である。

**金剛三昧院** 前述の円通寺ほどではないが、他の周辺寺院から南に離れた立地もあって、大きな火災に見舞われることなく、多くの歴史的な建造物を有する。すでに多宝塔が国宝の指定を受け、経蔵、四所神社本殿、客殿及び台所が、国指定を受けている。

今回の調査により、本堂が客殿及び台所と同時期か、やや時代が下って造営されたものとみられること、楼門形式の山門が文政8年(1825)に伏原村の林右衛門を棟梁として造営されたことを確認した。本堂は、高野山において江戸時代前期に遡る可能性がある本堂として貴重である。また、文政8年に山門を手掛けた林は、その後、弘化年間に壇上伽藍御影堂の造営において棟梁を務めるに至る大工である。

**その他の周辺寺院** 不動院で江戸時代前期の書院、宝城院で18世紀前期の客殿及び庫裏、19世紀前期の本堂及び護摩堂、蓮華定院で19世紀中期の本堂、客殿及び庫裏、表門、常喜院で19世紀後期の客殿、西南院で享和3年(1803)の経蔵、明治期の本堂が確認できた。このうち、不動院書院が県指定を受けるのみで、他の建物については、文化財指定・登録はなされていない。

周辺寺院については、今回詳細調査に至っていない建造物についても、調査を積み上げ、本堂、客殿などの各類型について、時代変遷を明らかにするなど、詳細な検討をおこなうなかで、各建造物の評価が定まってゆくものと考えている。

また千手院谷では、複数の寺院により共同で管理されてきた18世紀中期の建立とみられる観音堂を

確認した。高野山内の比較的狭い範囲での地域社会の在り方を考える上で重要で、簡素な構造ながらも、木太い架構や、特異な垂木の納まりも興味深い。

**構造・技法・意匠の特徴** 多く建物は、縁に納まる乱石積基壇、粽を持つ柱を貫・台輪で固めた軸部、柱上のみ組物、鼻先の膨らんだ隅木、仏堂における内陣背側面の八祖棚、客殿における共通する平面形式など、地域性をもった技法・意匠をみせる。そして、虹梁形の部材に施された絵様線形は、18世紀中期に至るまで先進的な様相を示しており、周辺地域へ影響を与えたものとみられる。

**(2) 民家建築と高野山地区以外の社寺建築**  
**民家建築** 高野山地区では、上述の寺院建築の間を埋めるように、町家や長屋が立ち並ぶ。なかには大正期・昭和前期に遡る町家もあり、寺院群とともに、高野山地区の景観形成に大きく寄与している。

一方で、高野山地区以外の周辺地域では、高野山に至る道に沿って建つ民家や、農村集落を形成する民家建築が多くみられた。地区によって、杉皮葺民家と茅葺民家の割合が異なる。とくに農村集落には、昭和後期以降に建て替えが進まなかったようで、江戸時代に遡る建物や、明治期から昭和前期に伝統的な技法により建てられたものが、数多くのこる。なかでも、杖ヶ藪と下筒香は、伝統的な建物の割合が高く、今日も手入れがなされているようで集落構成がわかりやすい。

また東富貴・西富貴では、たばこ乾燥小屋とみられる付属屋が多く確認でき、近代の産業を示す建物として注目される。

**その他の建築** 民家のほかには、各集落に小堂・小社が営まれている。多くが伝統的な技法により明治期以降に建てられたものである。また、公共建築としては各地区に、小学校の校舎・旧校舎が建つ。昭和前期に遡る校舎もあり、活用によって地域の拠点ともなりうる。また交通機関として、南海鉄道高野線、鋼索線の各駅舎は、創業当時の駅舎をよく残している。

### (3) 課題

上述の通り、今回の調査によって、高野山の建造物群がどのような時代・類型の建造物によって構成

されているのか概観することが可能となった。詳細な調査を実施した建物については、今後、適切な保存・活用を、所有者・行政・学術機関が連携して推進する必要がある。

同時に、課題も明確なものとなった。奥之院御廟及び周辺建物、近代和風建築、周辺寺院、造営関連史料群の4つに分けて整理しておきたい。

**奥之院御廟及び周辺建物** 奥之院については、今回の調査によって建物が江戸時代以前に遡る建造物の所在を把握することができ、3棟の建物について報告できた。一方で、『和歌山県の中世未指定社寺建築』で取り上げられ、天正13年(1585)に建立されたとみられる御廟とその東方に建つ丹生明神社・高野明神社については、調査する機会を得られなかった。壇上加藍や本坊機能を担う金剛峯寺とともに、高野山において重要な意義をもつ奥之院の中心施設であり、欠かすことができない建物であると考え。今後の調査によって、歴史的建造物としての評価を定め、適切な保存措置が講じられることを期待したい。

**近代和風建築** 今回の調査では、主として江戸時代以前に建てられた建物を中心に取り上げ、近代の物件としては、壇上加藍の根本大塔や金堂のように、古代・中世以来の伽藍中枢を似合う堂宇を中心に限られた建造物のみをとり挙げた。一方で、『和歌山県の近代和風建築』において取り上げられた高野山大師教会、高野山霊宝館、高野山大学図書館や、奥之院関東震災霊牌堂など、近代における文化財修理にも携わった技師や建築家の手掛けた良質な近代和風建築も多い。高野山真言宗の総本山が所在する高野山に相応しい近代建築群であり、伝統的な建造物とともに、評価すべきであり、既調査物件について保存・活用の措置を進めるとともに、未調査物件について調査を積み上げる必要がある。

**周辺寺院の建築** すでに繰り返し述べた通り、周辺寺院のうち詳細調査をおこなえたのは、ごく一部である。外観のみからでも、建物が江戸時代に遡るとみられる建造物を多く確認しており、これらについて地道な調査を積み上げる必要がある。周辺寺院の調査成果の積み上げによって、今回調査した寺院

群についても、評価がより定まったものとなるはずである。近世社寺建築調査で報告されながらも、今回の調査に至る間に、滅失した歴史的建造物があるという教訓を踏まえ、調査・保存の活動を継続する必要がある。

**造営関連史料群** 今回の調査では、各寺院の建造物調査を進めるなかで、各寺院の造営に関わる史料群が存在することを確認した。なかでも、金剛峯寺が所有し、高野山霊宝館に保管される史料群と、西南院が所蔵する史料群は、質・量ともに多く、重要とみられる。今回調査した建造物に関連する史料は、極力、本書に掲載するように努めたが、全体からみれば一部に過ぎない。今後、建造物調査とあわせて、関連史料の整理も必要である。(鈴木智大)

## 2 歴史的建造物の保護について

上記でまとめた今回の調査を踏まえ、高野町の歴史的建造物について、すでに文化財指定・登録がなされているものも含めて(第1章参照)、今後、講ずべき保存措置をまとめておきたい。

**既国指定建造物** すでに、国指定を受けた建物として、金剛峯寺大門、壇上伽藍の山王院本殿3社、旧聖方東照宮の徳川家霊台家康霊屋・秀忠霊屋、旧行人方東照宮の普賢院四脚門、金剛峯寺奥院経蔵、奥之院の大名墓霊屋の上杉謙信霊屋、佐竹義重霊屋、松平秀康及び同母霊屋、一心院谷に建っていた金剛峯寺不動堂、小田原谷の金剛三昧院多宝塔、経蔵、客殿及び台所、四所明神社本殿があり、和歌山県指定を受けた建物として、金剛峯寺9棟(真然堂・山門・経蔵・大主殿・奥書院・鐘楼・かご堀・会下門・護摩堂)、旧行人方東照宮の常喜院校倉、蓮花谷の不動院書院、石造物として西院谷の(西南院)五輪塔、(遍照光院)多層塔がある。

**金剛峯寺の建造物群** 今回調査した物件のうち、金剛峯寺に建つ江戸時代建立の建造物群は、旧青巖寺から引継いだもので、江戸時代に鼎立した学侶方、行人方、聖方の3派の中心寺院のうち、唯一、当時の建造物が現存するものである。江戸時代前期建立の真然堂、築地堀、江戸時代中期建立の経蔵、山門、江戸時代後期建立の大主殿、護摩堂、鐘楼、会下門、

かご堀、金剛峯寺南方に建つ六時鐘楼、と各時代に再建された姿を今に伝える。なかでも大主殿は、高野山の客殿建築として、金剛三昧院客殿及び台所に通じ平面形式をもちながらも、本山本坊に相応しい破格の規模と優れた意匠を有した建物である。すでに、和歌山県指定がなされているが、より一層の保護措置が求められよう。

**壇上加藍及び勸学院の建造物群** 明治期に移築された国宝・不動堂を除けば、壇上加藍で国指定を受けるのは、建立が中世に遡る山王院本殿3社のみで、その他の真言宗の中核伽藍は、文化財建造物としての保護措置はとられてこなかった。

江戸時代後期から明治期にまでに、伝統的な技法により再建された御影堂、宝庫、西塔、大会堂、愛染堂、三昧堂、准胝堂、山王院拝殿・鐘楼は、古代・中世以来の建物形式を基盤として、継承・展開したものであるとして、高い歴史的な価値を有する。

古代・中世の継承という点において、金堂・根本大塔・六角経蔵も同様である。さらに、これらの建物は、度重なる火災に対する耐火構造として、鉄筋コンクリート造を採用した。木造建築を模したこれほどの規模をもつ建築として、全国的にみても先駆的な事例である。また金堂には、古代・中世の歴史的建造物の細部意匠を組み込むなど、近代における歴史的建造物研究の一面も発露している。

壇上加藍の南東方に建つ勸学院の本堂・鐘楼・表門も、江戸時代後期の再建ながらも、両翼に勅使の間を備えた本堂の特異な形状は、前身建物から継承したことが明らかで、技法・意匠は、金剛峯寺及び壇上加藍の建造物群と並ぶ。

壇上加藍と勸学院の建物は、旧青巖寺とともに高野山の歴史的な重要性を伝える建造物として、十分な保護措置が求められる。

**奥之院** 奥之院については、すでに御廟の南東方に建つ経蔵、大名墓霊屋が、国指定を受けている。

今回調査した護摩堂は、御廟橋の手前の参道に沿って建ち、御廟周辺の景観を整える。建立年代も明確で、不動堂と大師堂を一棟に納める点は、江戸時代の高野山における仏堂の変遷を考える上で重要である。既指定の経蔵などともに、御廟周辺の建物と

して保護が必要である。

井伊直政霊屋は、奥之院に数棟しか残っていない大名墓霊屋の一つであり、既指定の大名墓の霊屋と遜色のない高い意匠性をもつ建物である。軒まわり、縁まわりを中心に大きく破損しており、早急な保護措置が必要である。

覚鑿を祀る密厳堂は、『和歌山県の近世社寺建築』においてもとりあげられてこなかったが、今回の調査によって寛文11年(1671)に建立されたことが明らかになった。空海を祀る奥之院御廟、真然を祀る真然堂、明算を祀る金輪塔とともに、高野山で活躍した高僧を祀る廟として、また江戸時代前期に遡り建立年代も明らかなかから高い価値を有しており、大名墓霊屋とともに、高い保護措置が必要である。

**旧聖方東照宮** 徳川家霊台のうち、家康霊屋及び秀忠霊屋は、すでに国指定を受けているが、今回の調査によって、昭和・平成修理に際して、再建された両棟を囲む瑞垣及び唐門が、両霊屋と同時期に造営されたことを改めて確認した。また表門も、同時期に聖方東照宮の表門として営まれたものであり、霊屋とともに一体での保護措置が必要である。

**旧行人方東照宮** 普賢院本堂(旧本殿)、普門院本堂(旧拝殿)、同表門、常喜院校倉(旧経蔵)については、行人方東照宮を構成した建物を移築、再利用した建物であることが確認できた。一方で、移築・増築の過程は明確にならない部分もある。今後、一定の保護措置を講じた上で、修理工事など適切な機会に調査を実施することで、より評価を確かなものとする必要がある。

**周辺寺院** 女人堂、金輪塔、観音堂、円通寺、不動院書院、宝城院、金剛三昧院、蓮華定院など江戸時代に遡る建造物が数多くあるが、金剛三昧院の国指定建造物、不動院書院を除いて文化財建造物としての保護措置がとられていない。

女人堂、金輪塔、観音堂は、高野山の歴史を語る上で欠くことのできないもので、建造物としても高い価値をもつ。一定の保護措置を講じる必要がある。

円通寺は、19世紀中頃に一連で建立された本堂、客殿及び台所、求聞持堂、土蔵、表門が建ち並ぶ。修行道場として機能するため、高野山の他の寺院に

は見られない特徴的な堂宇により構成される。高野山の別所の歴史を伝える重要な建造物群であり高い保護措置が必要である。

金剛三昧院をはじめとした周辺寺院では、客殿や本堂などに山内で共通する地域性がみられ、江戸時代に遡る建造物も数多いが、これら建造物の大半は詳細調査を実施できていない。今後適切な保護措置を講じるためにも調査を積み上げ、時代変遷等を明らかにしていく必要がある。

**近代建築** 壇上伽藍金堂・根本大塔・六角経蔵、金剛峯寺奥殿・別殿、高野山大師教会、高野山霊宝館、高野山大学図書館、奥之院関東震災霊牌堂・納骨堂、橋本警察署高野幹部交番など良好な近代建築があり、前5棟について詳細な調査をおこなったが、なお、多くは調査が及んでいない。調査により評価を確かなものとした上で、必要な保護措置を講じたい。

**近代化遺産** 高野山駅舎、極楽橋駅舎、紀伊神谷駅舎、紀伊細川駅舎などがあるが、近代化遺産全体として調査が進んでいない。関連した土木構造物を含めて調査を進め、保存と活用を図る必要がある。

**民家** 高野山地区の町家等の民家は、寺院建築とともに町並みとしての景観を構成する。また周辺集落には多くの歴史的建造物が残り、良好な山村集落景観が形成されており、杖ヶ藪、下筒香は特に優れた景観がみられる。今後、町並み・集落としての保護措置を講じる必要がある。

**今後の調査** 今回の調査で、高い価値を有するものと推測しながら、調査を行わなかった奥之院御廟、鎮守2棟は、高野山の寺院建築のなかでも、その価値の中核を担う建物である。今後、所有者、関係各位と協力し、建造物の状況を把握した上で、必要な保護措置を講じたい。また周辺寺院については、今回は一部の寺院の調査にとどまっている。継続して調査を行い高野山の寺院建築の特徴を明らかにし、指定・登録などの保護措置を講じる必要がる。

高野町の歴史的建造物は、住民・寺院はもちろんのこと、全国的な広がりをもつ多くの支援者によって、今日に伝えられてきた。先人の弛まぬ努力を後世に伝えるべく、適切な保存・活用の措置を講じてゆきたい。

(木本誠二)



# 図 版

## カラー図版

- PL. 1 金剛峯寺大主殿  
PL. 2 金剛峯寺大主殿  
PL. 3 金剛峯寺大主殿  
PL. 4 金剛峯寺大主殿  
PL. 5 金剛峯寺大主殿  
PL. 6 金剛峯寺大主殿  
PL. 7 金剛峯寺真然堂  
PL. 8 金剛峯寺護摩堂  
PL. 9 金剛峯寺護摩堂・山門  
PL. 10 金剛峯寺山門・かご堀  
PL. 11 金剛峯寺築地堀  
PL. 12 金剛峯寺経蔵  
PL. 13 金剛峯寺経蔵・鐘楼  
PL. 14 金剛峯寺会下門  
PL. 15 六時鐘楼  
PL. 16 壇上伽藍金堂  
PL. 17 壇上伽藍金堂  
PL. 18 壇上伽藍根本大塔  
PL. 19 壇上伽藍西塔  
PL. 20 壇上伽藍西塔  
PL. 21 壇上伽藍御影堂  
PL. 22 壇上伽藍御影堂  
PL. 23 壇上伽藍御影堂・宝庫  
PL. 24 壇上伽藍宝庫  
PL. 25 壇上伽藍准胝堂  
PL. 26 壇上伽藍准胝堂・山王院拝殿  
PL. 27 壇上伽藍山王院拝殿  
PL. 28 壇上伽藍山王院鐘楼・六角経蔵  
PL. 29 壇上伽藍六角経蔵・三昧堂  
PL. 30 壇上伽藍三昧堂  
PL. 31 壇上伽藍大会堂  
PL. 32 壇上伽藍愛染堂  
PL. 33 壇上伽藍愛染堂  
PL. 34 勸学院本堂  
PL. 35 勸学院本堂  
PL. 36 勸学院鐘楼  
PL. 37 勸学院表門  
PL. 38 勸学院表門  
徳川家霊台秀忠霊屋唐門及び瑞垣  
PL. 39 徳川家霊台家霊屋唐門及び瑞垣  
PL. 40 徳川家霊台家霊屋唐門及び瑞垣・表門  
PL. 41 徳川家霊台表門・金輪塔  
PL. 42 金輪塔・女人堂  
PL. 43 女人堂・奥之院護摩堂  
PL. 44 奥之院護摩堂  
PL. 45 奥之院護摩堂・密厳堂  
PL. 46 奥之院密厳堂・井伊直政霊屋  
PL. 47 円通寺本堂  
PL. 48 円通寺本堂  
PL. 49 円通寺庫裏  
PL. 50 円通寺庫裏  
PL. 51 円通寺庫裏  
PL. 52 円通寺求聞持堂  
PL. 53 円通寺土蔵  
PL. 54 円通寺山門

## モノクロ図版

- PL. 55 青巖寺間取図  
青巖寺鐘楼堂廿歩一差図  
青巖寺表門廿歩一差図  
PL. 56 青巖寺差図総図  
青巖寺建図本寺分  
PL. 57 青巖寺建図下門（会下門）分  
金剛峯寺建屋平面図  
PL. 58 （壇上伽藍）御影堂再建十分一之図  
PL. 59 （壇上伽藍）山王院地引絵図  
（壇上伽藍）御社拝殿地割図  
（壇上伽藍）山王院廿分一絵図  
PL. 60 （壇上伽藍）会堂十分一絵図  
（壇上伽藍）三昧堂十分一之絵図  
PL. 61 勸学院本堂再建絵図  
PL. 62 行人方東照宮指図





金剛峯寺大主殿 外観



金剛峯寺大主殿 客殿



金剛峯寺大主殿 客殿・奥書院



金剛峯寺大主殿 大玄関



金剛峯寺大主殿 表回廊



金剛峯寺大主殿 表回廊から大広間・仏殿をみる



金剛峯寺大主殿 中門



金剛峯寺大主殿 大広間



金剛峯寺大主殿 上段の間



金剛峯寺大主殿 奥書院



金剛峯寺大主殿 土室



金剛峯寺大主殿 庫裏





金剛峯寺真然堂 正側面



金剛峯寺真然堂 背側面



金剛峯寺護摩堂 正側面



金剛峯寺護摩堂 正側面



金剛峯寺護摩堂 内部



金剛峯寺表門 正面



金剛峯寺表門 背側面



金剛峯寺かご堀



金剛峯寺築地塀 南端



金剛峯寺築地塀 北端



金剛峯寺経蔵 正側面



金剛峯寺経蔵 1階



金剛峯寺經藏 2階



金剛峯寺鐘樓 正側面



金剛峯寺会下門 正面



金剛峯寺会下門 背側面





金剛峯寺六時鐘樓



金剛峯寺六時鐘樓 背側面



壇上加藍金堂 正側面



壇上加藍金堂 背側面



壇上加藍金堂 外陣



壇上加藍金堂 内陣



壇上加藍根本大塔 正側面



壇上加藍根本大塔 内部



壇上加藍西塔 正面



壇上加藍西塔 外陣



壇上加藍西塔 内陣



壇上加藍西塔 内陣見上げ



壇上加藍御影堂 正側面



壇上加藍御影堂 背側面



壇上加藍御影堂 外陣（正面）



壇上加藍御影堂 内陣





壇上加藍御影堂 外陣（背面）



壇上加藍宝庫 正側面



壇上加藍宝庫 背側面



壇上加藍宝庫 2階



壇上加藍准胝堂 正側面



壇上加藍准胝堂 背側面



壇上加藍准胝堂 内部



壇上加藍山王院拝殿 正側面



壇上加藍山王院拝殿 背側面



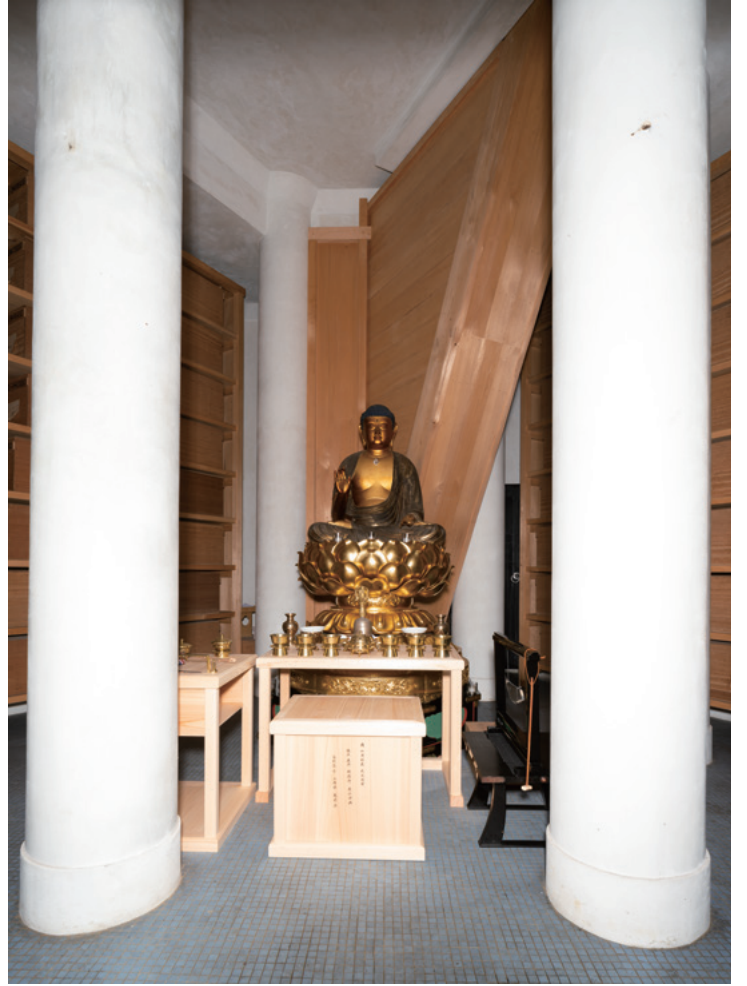
壇上加藍山王院拝殿 内部



壇上加藍山王院鐘楼 正側面



壇上加藍六角経蔵 正面



壇上加藍六角經蔵 1階



壇上加藍三昧堂 正側面



壇上加藍三昧堂 背側面



壇上加藍三昧堂 内部





壇上加藍大会堂 正側面



壇上加藍大会堂 背側面



壇上加藍大会堂 内部



壇上加藍愛染堂 正側面



壇上加藍愛染堂 背側面



壇上加藍愛染堂 内部



勧学院本堂 正面



勧学院本堂 背側面



勸学院本堂 主体部



勸学院本堂 勅使の間



勸学院鐘楼 正側面



勸学院表門 正面



勸学院表門 背側面



徳川家霊台秀忠霊屋唐門及び瑞垣 正側面



徳川家霊台秀忠霊屋唐門 背側面



徳川家霊台秀忠霊屋瑞垣 背側面





徳川家霊台家康霊屋唐門及び瑞垣 正側面



徳川家霊台家康霊屋唐門 背側面



徳川家霊台家康霊屋瑞垣 背側面



徳川家霊台表門 正面



徳川家霊台表門 背側面



金輪塔 背側面



金輪塔 内部



女人堂 正側面



女人堂 内部



奥之院護摩堂 正側面



奥之院護摩堂 外陣



奥之院護摩堂 不動堂



奥之院護摩堂 大師堂



奥之院密厳堂 正側面



奥之院密厳堂 内部



奥之院井伊直政靈屋 正側面





円通寺本堂 正面



円通寺本堂 外陣



円通寺本堂 内陣



円通寺本堂 不動堂



円通寺本堂 阿弥陀堂



円通寺庫裏 正面



円通寺庫裏 大広間



円通寺庫裏 書院



円通寺庫裏 食堂



円通寺庫裏 台所



円通寺求聞持堂 正側面



円通寺求聞持堂 内部



円通寺土蔵 正側面



円通寺土蔵 2階



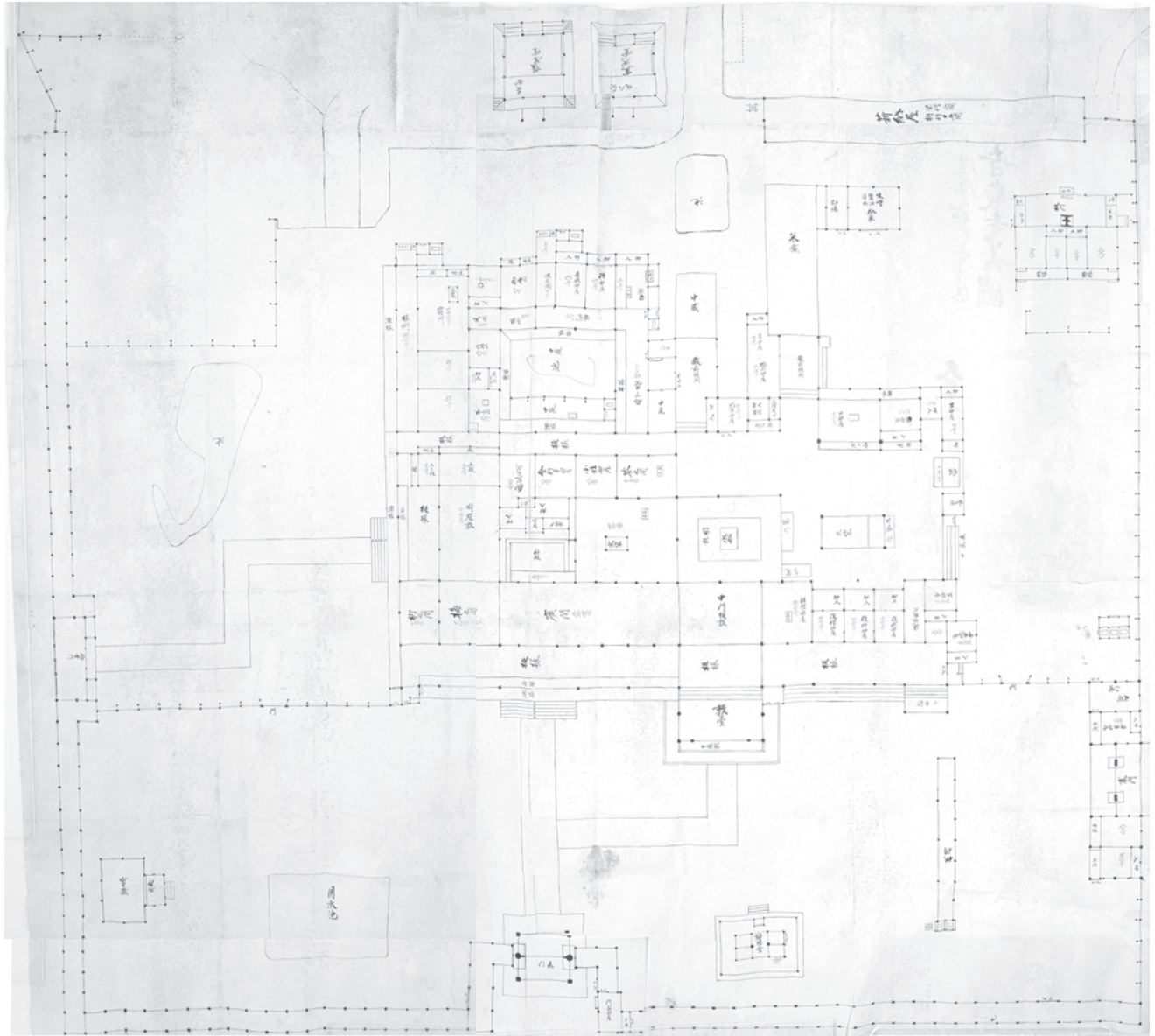
円通寺山門 正面



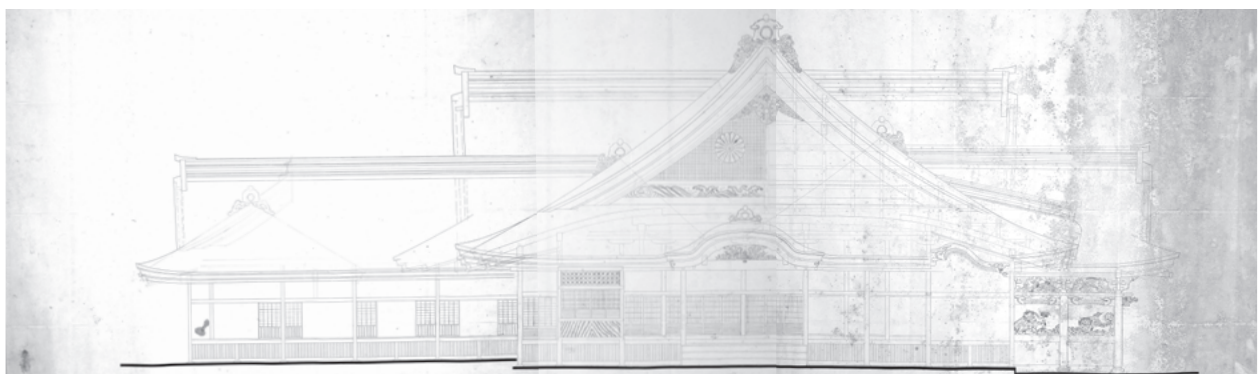
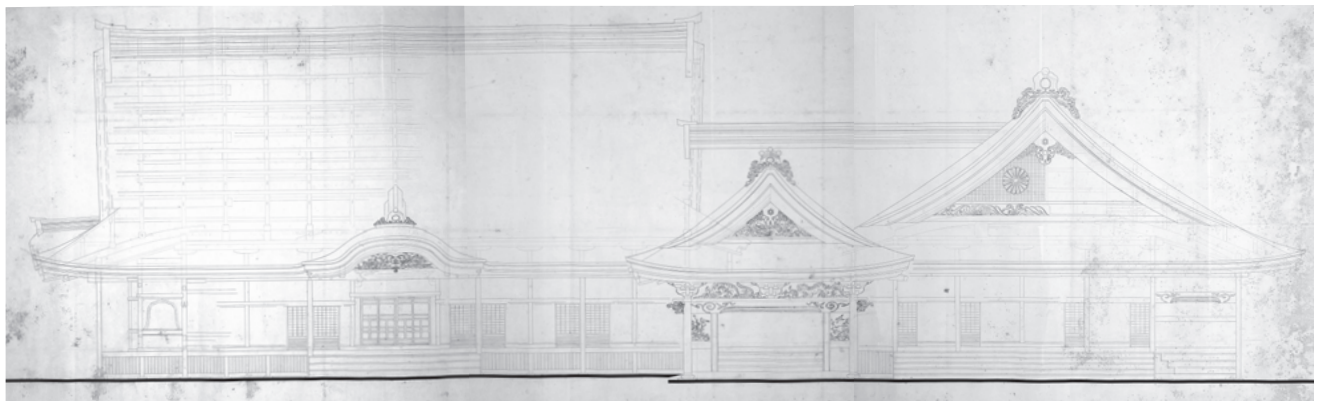
円通寺山門 背側面



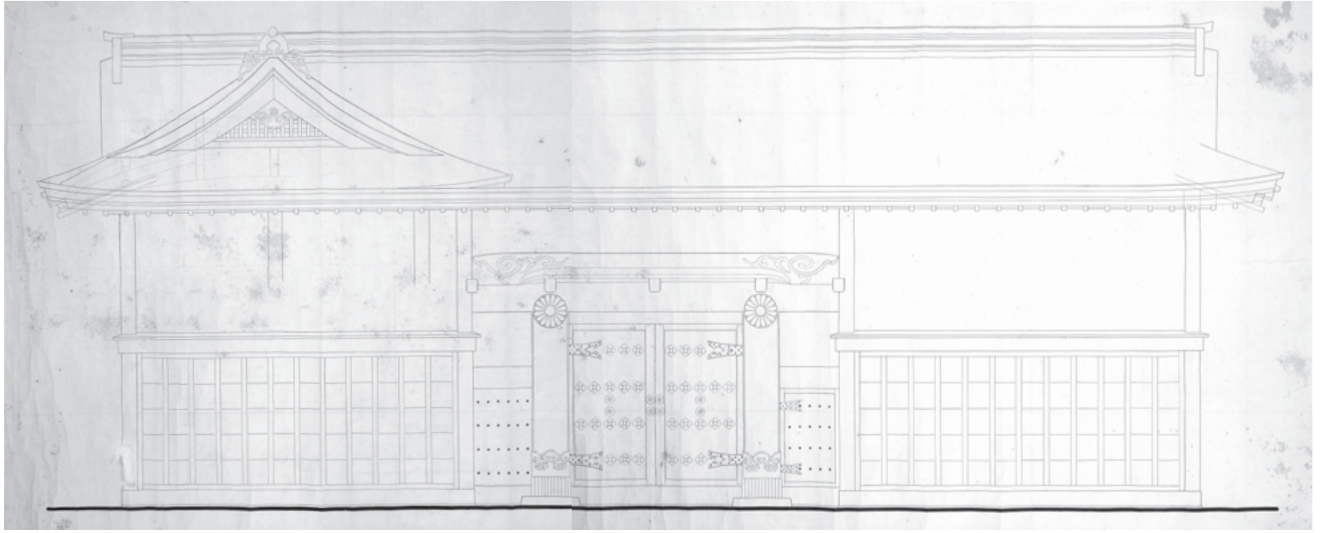




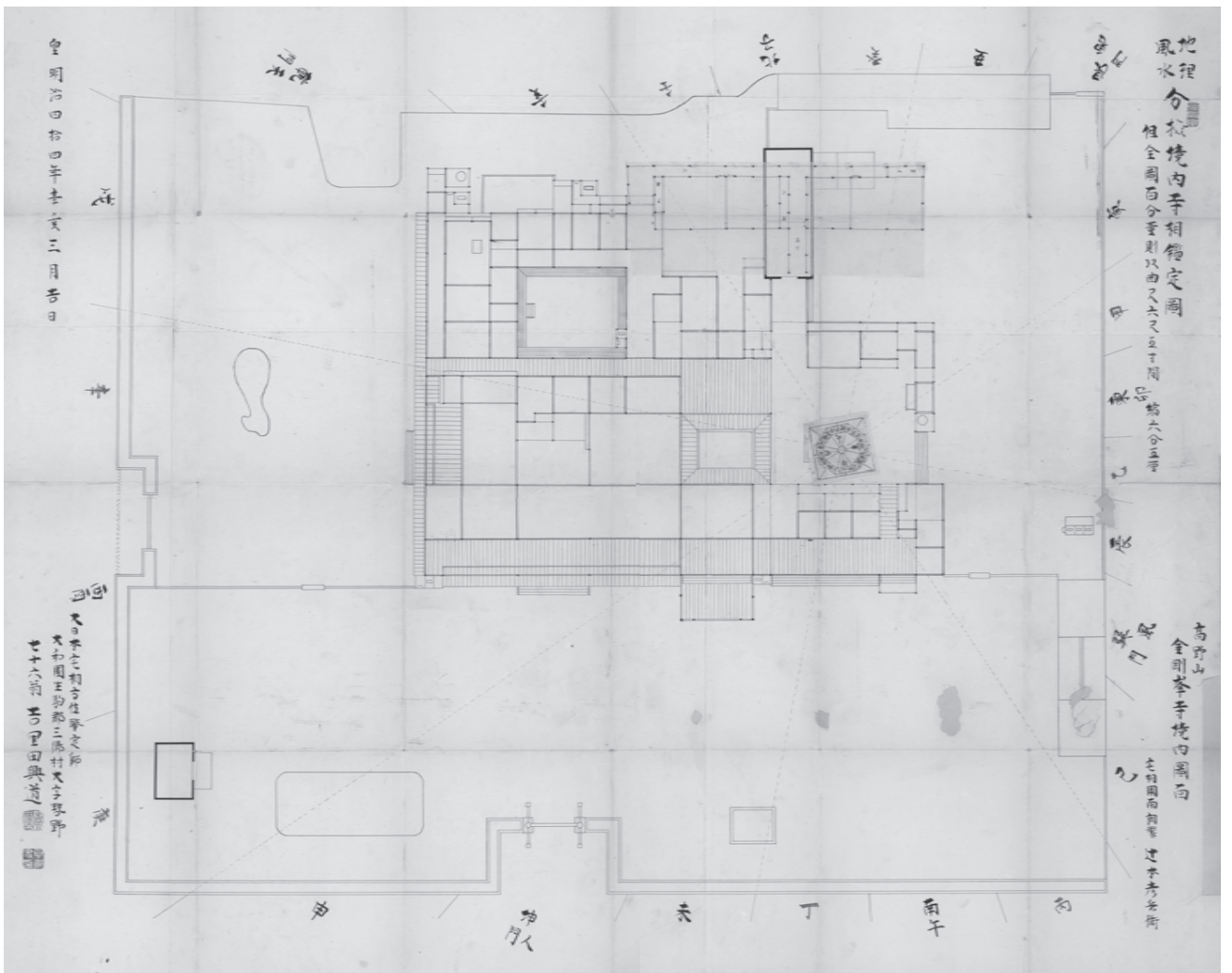
青巖寺差図総図（慶應元年=1865）（金剛峯寺蔵）



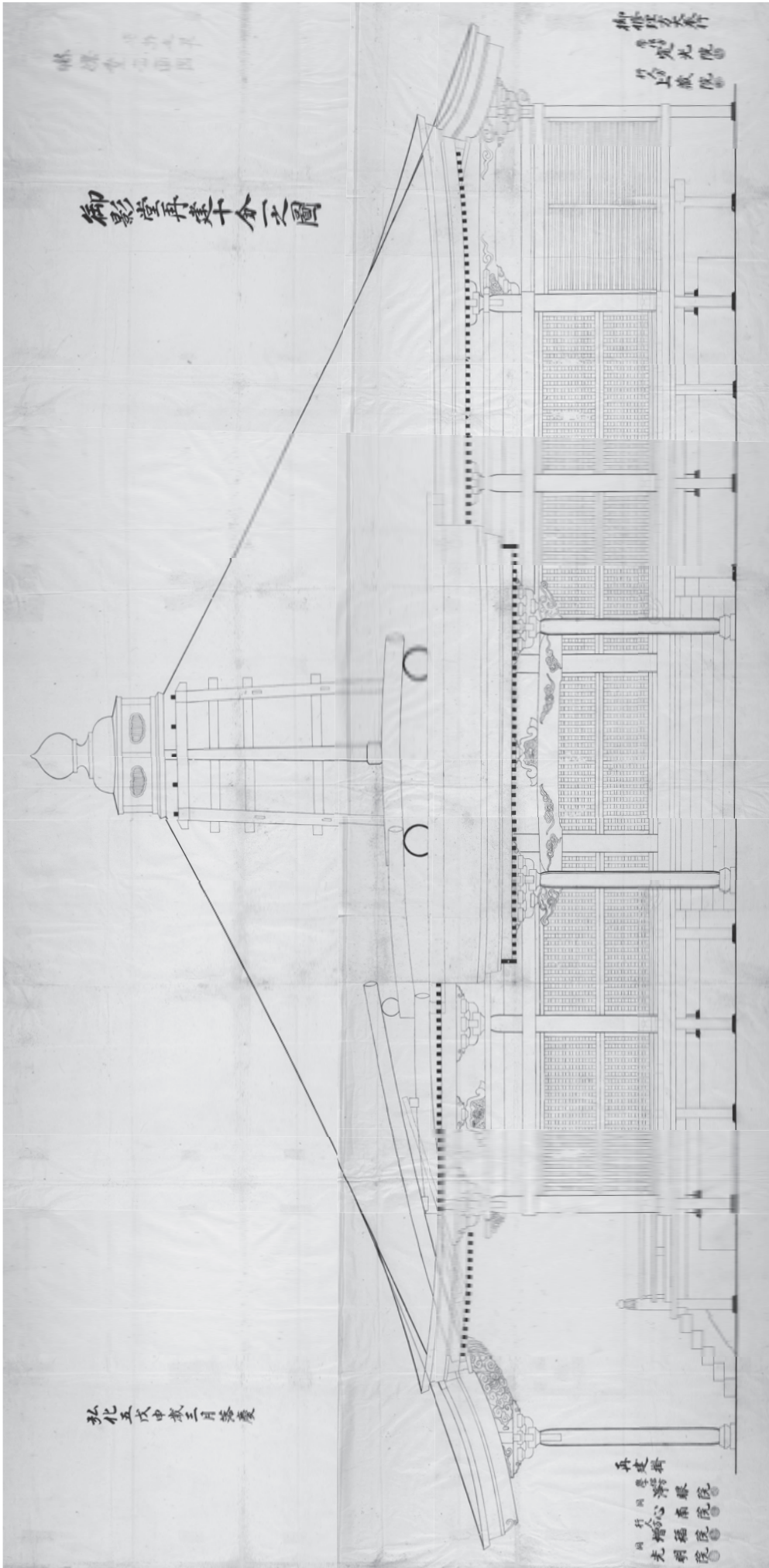
青巖寺建図本寺分（上：正面図、下：側面図）（慶應元年=1865）（金剛峯寺蔵）



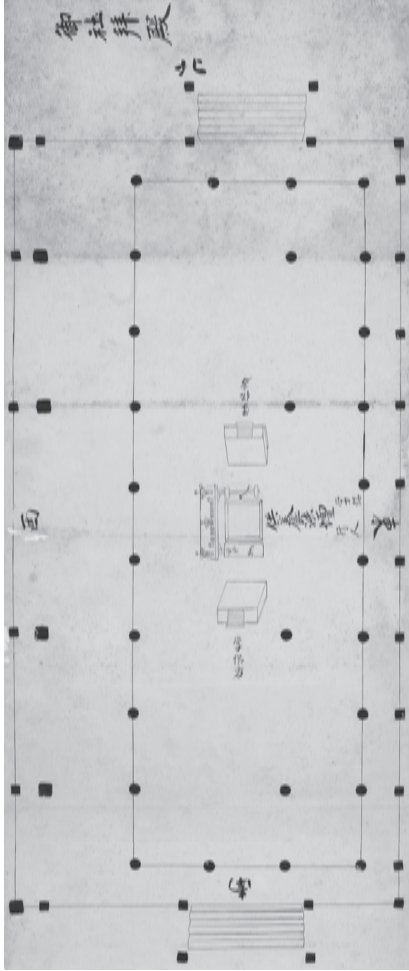
青巖寺建図下門（会下門）分（慶應元年=1865）（金剛峯寺藏）



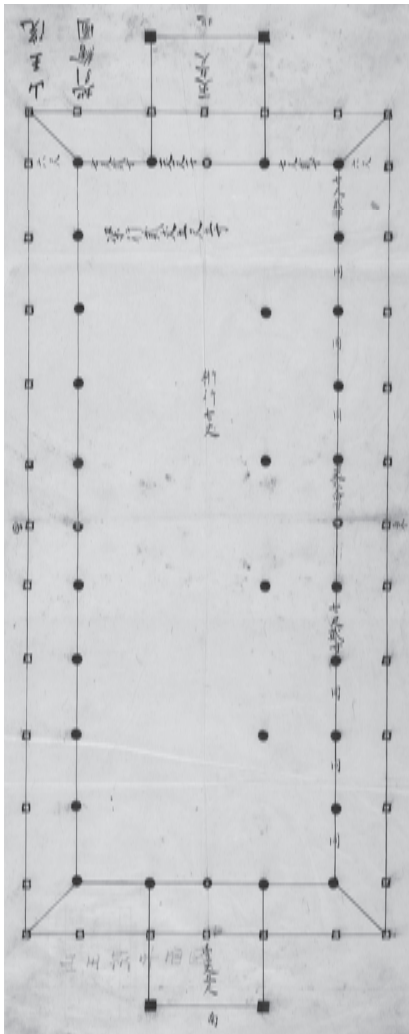
金剛峯寺建屋平面図（明治44年=1911）（金剛峯寺藏）



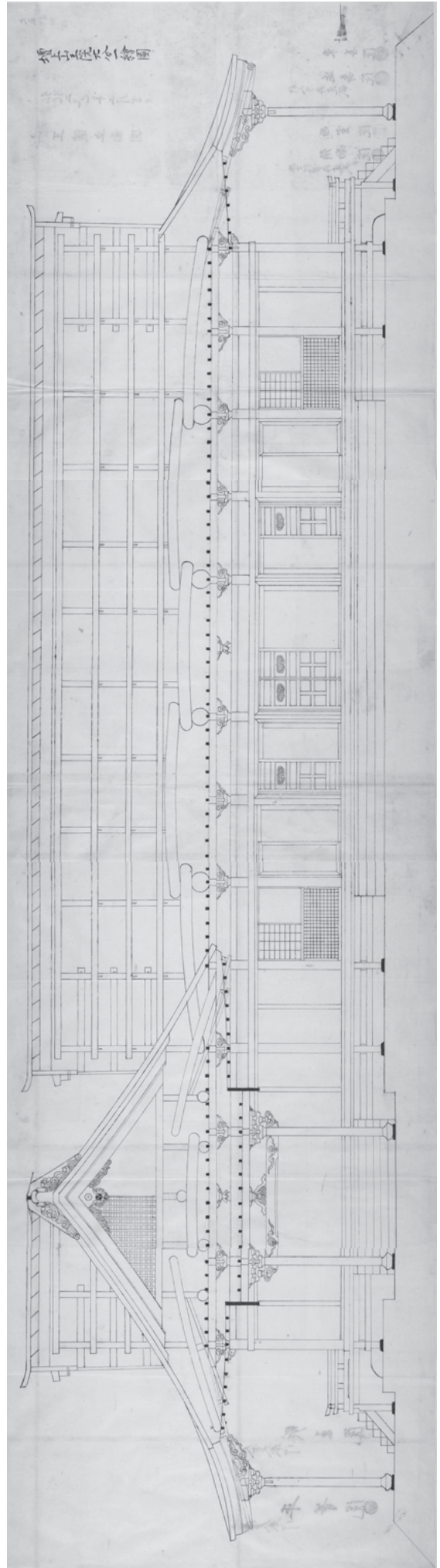
(壇上伽藍) 御影堂再建十分一之圖 (弘化5年=1848) (金剛峯寺藏)



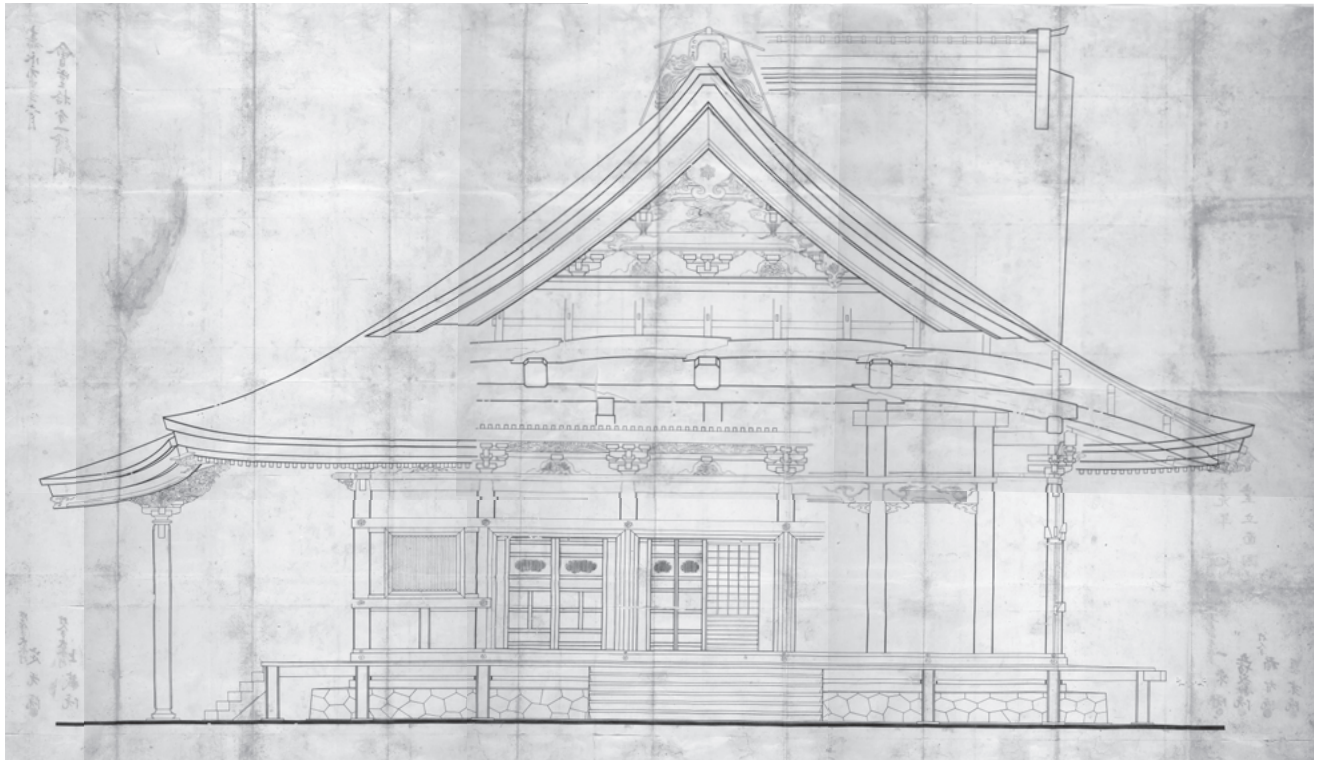
(壇上加藍) 御社拜殿地割図 (金剛峯寺藏)



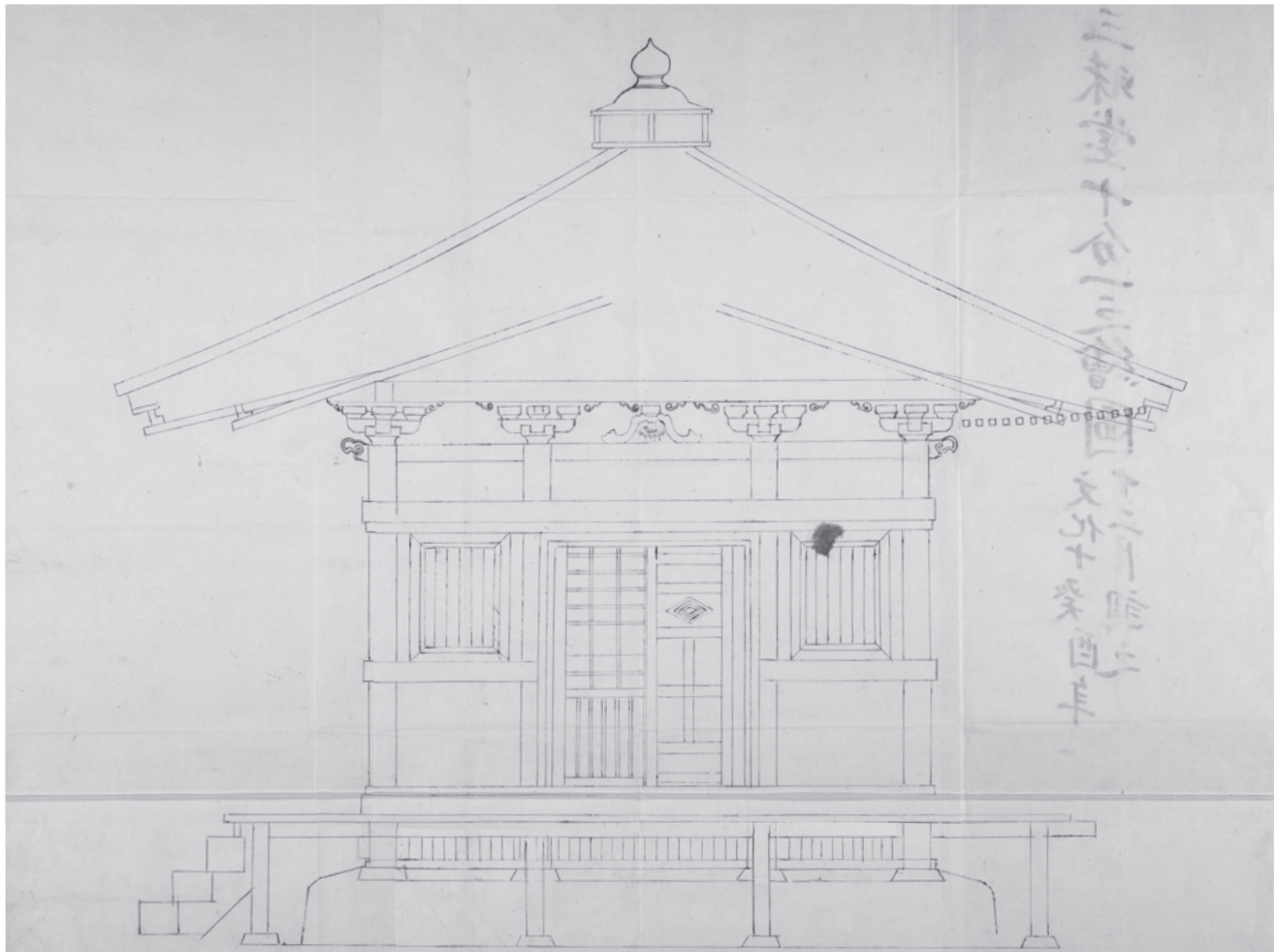
(壇上加藍) 山王院地引絵図 (弘化2年=1845) (金剛峯寺藏)



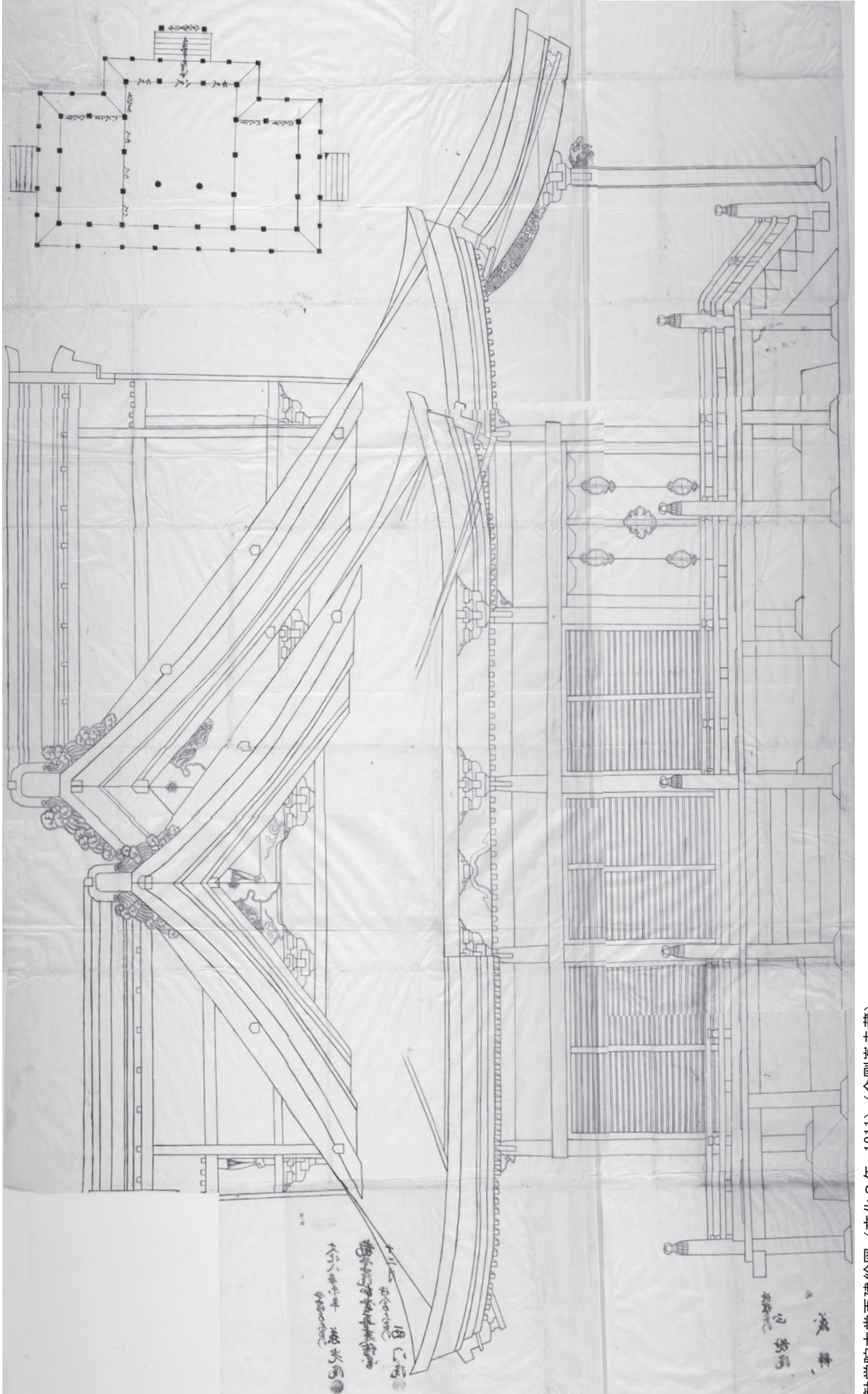
(壇上加藍) 山王院廿分一絵図 (弘化2年=1845) (金剛峯寺藏)



(壇上加藍) 会堂十分一絵図 (嘉永元年=1848) (金剛峯寺蔵)



(壇上加藍) 三昧堂十分一之絵図 (文化10年=1813) (金剛峯寺蔵)



勸學院本堂再建繪図 (文化8年=1811) (金剛峯寺藏)





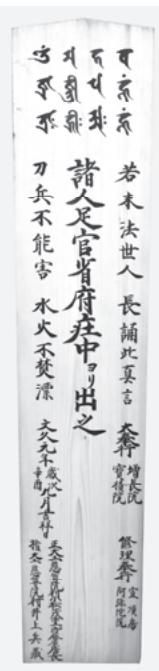
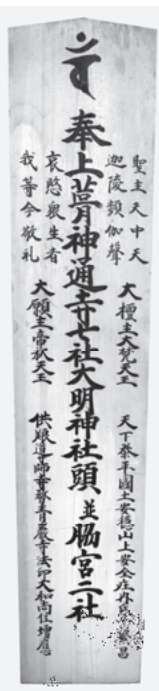
46 神通寺七社大明神社頭並脇宮二社文久元年（一八六一）上葺棟札 総高624mm 肩高664mm 上幅122mm 下幅126mm 厚さ7mm 檜 尖頭 釘穴なし

（表）（パン） 奉上帝釈天王 天下泰平國土安穩山上安全庄内氏子繁昌  
 聖主中天 大檀主大梵天王  
 迎陵頌伽聲 我等今敬礼

哀愍衆生者 大願主帝釈天王 供養導師寺務青巖寺法印大和尚位増應  
 我等今敬礼

（裏） 若未法世人 長誦此真言 大奉行 増長院 宣順房  
 諸人足官省府庄中ヨリ出之 實積院 修理奉行 阿弥陀院

刀兵不能害 水火不焚漂 文久元年 歲次 九月吉祥日 正大工慈尊院村小松茂重郎藤原房長  
 権大工慈尊院村井上兵藏



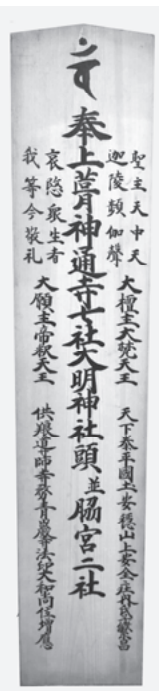
47 神通寺七社大明神社頭並脇宮二社文久元年（一八六一）上葺棟札 総高624mm 肩高664mm 上幅142mm 下幅126mm 厚さ7mm 檜 尖頭 釘穴なし

（表）（パン） 奉上帝釈天王 天下泰平國土安穩山上安全庄内氏子繁昌  
 聖主中天 大檀主大梵天王  
 迎陵頌伽聲 我等今敬礼

哀愍衆生者 大願主帝釈天王 供養導師寺務青巖寺法印大和尚位増應  
 我等今敬礼

（裏） 若未法世人 長誦此真言 大奉行 増長院 修理奉行 宣順房  
 諸人足官省府庄中ヨリ出之 實積院 阿弥陀院

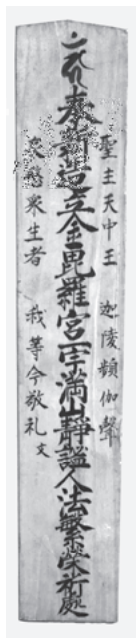
刀兵不能害 水火不焚漂 文久元年 歲次 九月吉祥日 正善師慈尊院村山西重治郎藤原安實  
 權善師九度山村森田文吉



48 金毘羅宮天明七年（一七八七）棟札 総高358mm 肩高354mm 上幅65mm 下幅60mm 厚さ9mm 檜 尖頭 釘穴なし

（表）（カーン） 奉新造立金毘羅宮一宇満山靜謐人法繁榮祈處  
 聖主中天 迎陵頌伽聲  
 哀愍衆生者 我等今敬礼

（裏）（ポロン） 大梵天王 天明七年歲次丁未九月九日  
 帝釈天王 寺務檢校兼大樂院靈信 一歳 敬白



49 封大師釈迦牟尼如来享保二年（一七一七）木札 総高558mm 肩高553mm 上幅118mm 下幅100mm 厚さ8mm 杉 尖頭 釘穴なし

（表）（ウン） 封大師釈迦牟尼如来 大檀主 征夷大將軍  
 參大行事 迎陵頌伽聲 文殊師利菩薩 護國天王  
 聖主中天  
 參小行事 哀愍衆生故 彌勒菩薩 鎮國八大天童  
 我等今敬礼

哀愍衆生故 彌勒菩薩 鎮國八大天童  
 我等今敬礼

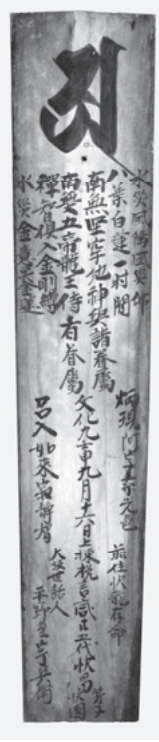




36 奥之院護摩堂文化九年（一一八二）棟札 総高738mm 肩高732mm 上幅138mm 下幅122mm 厚さ15mm 尖頭 角釘穴2

(表) 一切日皆善 一切宿皆賢 諸佛皆威德  
 奉再建護摩堂五間 宇于時文化九 申自五月十二日至七月十日造作事畢  
 羅漢皆斷漏 以斯誠實言 願我常吉祥

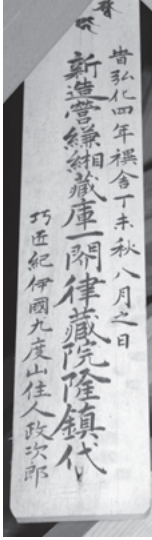
(裏) (ア) 水災風陸風災佛 炳現阿字素光色 前任快龍存命  
 八葉白蓮一財間 南無五帝龍王侍眷眷屬 文化九壬申九月十六日上棟祝言廿五代快昌 快圓  
 禪智俱入金剛縛 呂入如來寂靜智 大坂世話人  
 水災金意災金蓮 平野屋宇兵衛



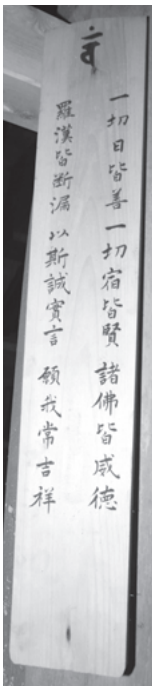
37 円通寺土蔵弘化四年（一八四七）棟札 総高772mm 肩高655mm 上幅240mm 下幅210mm 厚さ12mm 檜 尖頭 角釘2

(表) 行ち付郡 (ウ) 時弘化四年禪舍丁未秋八月之日  
 新造營繕細藏庫一閑律藏院隆鎮代  
 巧匠紀伊國九度山住人政次郎

(裏) (バ) 一切日皆善 一切宿皆賢 諸佛皆威德  
 羅漢皆斷漏 以斯誠實言 願我常吉祥



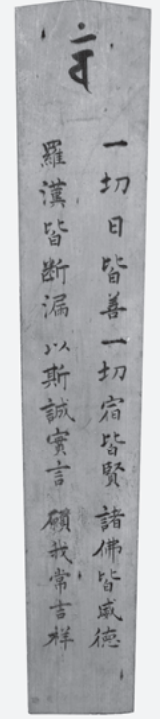
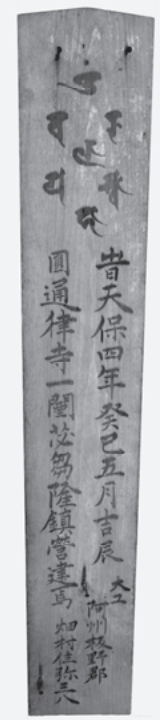
梁打ち付け



38 円通寺山門天保四年（一八三三）棟札 総高772mm 肩高663mm 上幅137mm 下幅120mm 厚さ14mm 檜 尖頭 角釘穴1 丸釘穴4

(表) (エ) (ウ) 天保四年癸巳五月吉辰 大工 阿州板野郡  
 (オ) (カ) 圓通律寺一闍苾芻隆鎮營建焉 畑村住弥三八

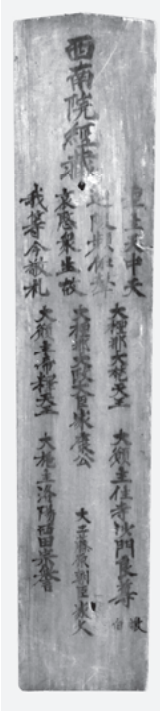
(裏) (バ) 一切日皆善 一切宿皆賢 諸佛皆威德  
 羅漢皆斷漏 以斯誠實言 願我常吉祥



39 西南院経蔵元和二年（一六一六）棟札 総高647mm 肩高640mm 上幅123mm 下幅132mm 厚さ6mm 杉 尖頭 角釘穴2

(表) 西南院経蔵 聖主天中天 大檀那大梵天王 大願主住持寺沙門良尊 白敬  
 迦陵頻伽聲 大檀那大政大臣家康公 大工藤原朝臣家久  
 哀愍衆生故 大願主帝釋天王 大施主洛陽西田宗譽  
 我等今敬礼

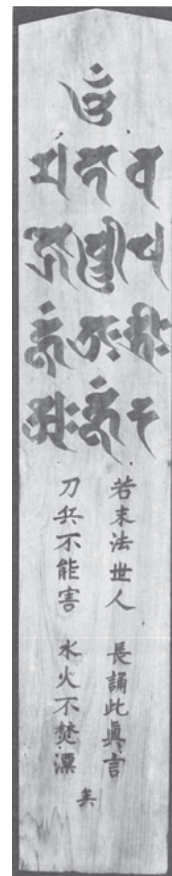
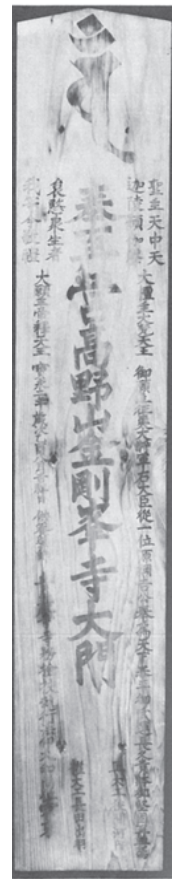
(裏) (ウ) キリク 若末法世人 長誦此真言 高野山西南院 良尊  
 (カ) タラク 元和二季辰之六月廿一日経蔵  
 (シ) シヤ 刀兵不能害 水火不焚漂 萬歳萬歳万万不朽靈  
 (テ) シュニ テク



31 金剛峯寺大門宝永二年（一七〇五）棟札 総高1539mm 肩高1513mm 上幅286mm 下幅260mm 厚さ34mm 杉 尖頭釘6 『重要文化財金剛峯寺大門修理工事報告書（図版編）』

（表）  
 聖主中天  
 大檀主大梵天王 御願主征夷大将軍右大臣從一位源綱吉公奉為天下泰平御武運長久貴跡御堅固再興焉  
 御慶願仰聲  
 寶永二年歲次乙酉八月吉祥日 供養導師 青巖寺寺務檢校執行法印大和尚位有兼  
 我等今敬礼  
 大願主帝釋天王 寶永二年歲次乙酉八月吉祥日 供養導師 青巖寺寺務檢校執行法印大和尚位有兼

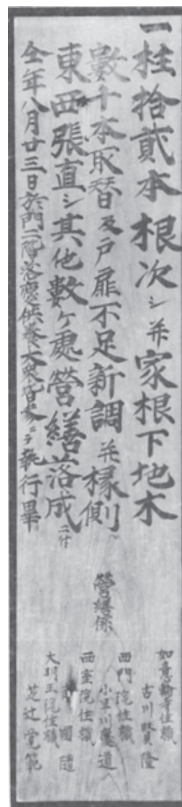
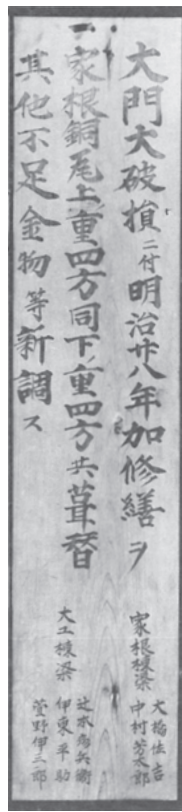
（裏）  
 若末法世人 長誦此眞言  
 刀兵不能害 水火不焚漂  
 矣  
 (ウ) (シ) (ニ) (タ) (ラ) (イ) (ク) (ン)  
 (ハ) (シ) (セ) (キ) (リ) (ク) (フ)  
 (メ) (ツ) (ロ) (ウ) (ン) (テ) (ク)



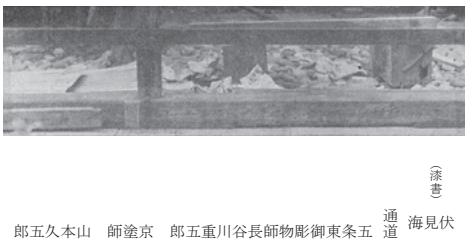
32 金剛峯寺大門明治二十八年（一八九五）修理棟札 総高1155mm 幅500mm 厚14mm 檜釘 『重要文化財金剛峯寺大門修理工事報告書（図版編）』

（表）  
 大門大破損ニ付明治廿八年加修繕ヲ  
 家根棟梁 大橋佐吉 大橋芳太郎  
 家根銅尾上ノ重四方下ノ重四方共替替  
 伊東平助 辻本珍兵衛  
 其他不足金物等新調ス  
 菅野伊三郎 大工棟梁

（裏）  
 一 柱拾貳本根次シ并家根下地木  
 數十本取替及戸扉不足新調并椽側  
 東西張直シ其他數ヶ處管繕落成ニ付  
 今年八月廿三日於門二階落慶供養大衆皆參ニテ執行畢  
 菅繕係 西門院住職 古川賢陸  
 西室院住職 小早川慶道  
 大明王院住職 〇 圓隨  
 芝辻寛範 如意輪寺住職



33 徳川家霊台秀忠霊屋瑞垣墨書 『金剛峯寺徳川家霊台家  
 康霊屋秀忠霊屋修理工事報告書』

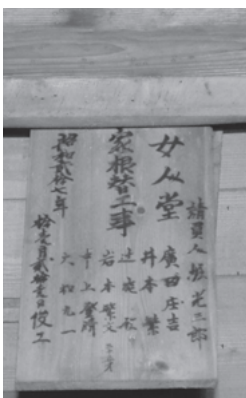


（漆巻） 海見伏 通道 郎五久本山 師塗京 郎五重川谷長師物彫御東条五

34 女人堂昭和二十七年（一九五二）屋根替棟札 総高730mm 肩高732mm 上幅135mm 下幅122mm 厚15mm 尖頭 角釘2  
 35 奥之院密厳堂寛文十一年（一六七二）棟札 尖頭 釘穴2

（表）  
 女人堂 請負人 堀光三郎  
 廣田庄吉 井本繁  
 岩本繁文 二五才  
 中上登晴 大和九一  
 昭和貳拾七年 拾壹月貳拾壹日俊工

（裏）  
 密厳堂一字爲分報供恩也 願主 夾派沙門敬白  
 辛 歲 寬文十一年  
 八月十有二日



小屋梁打ち付け



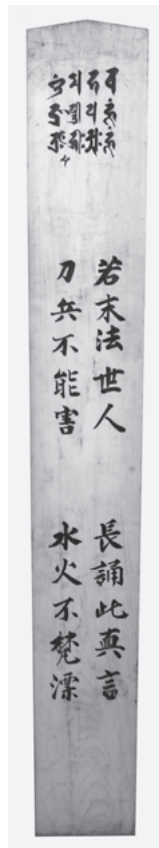
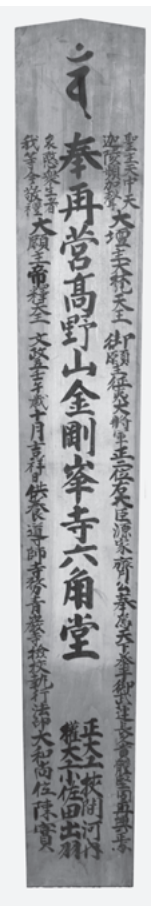
隅木打ち付け



25 壇上加藍六角堂文政五年（一八二二）棟札 総高1579mm 肩高1561mm 上幅240mm 下幅192mm 厚ヤ15mm 檜 尖頭 釘穴なし

（表）  
聖主天中天 大檀主大梵天王 御願主征夷大將軍正二位石大臣源家齊公奉為天下泰平御武運長久貴體堅固再興焉  
迦陵頻伽聲  
大檀主大梵天王 御願主征夷大將軍正二位源氏長者家慶公奉為天下泰平御武  
運長久貴體堅固再興焉

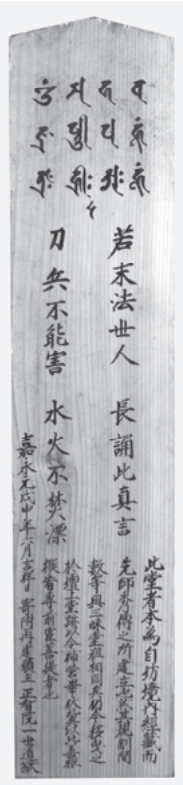
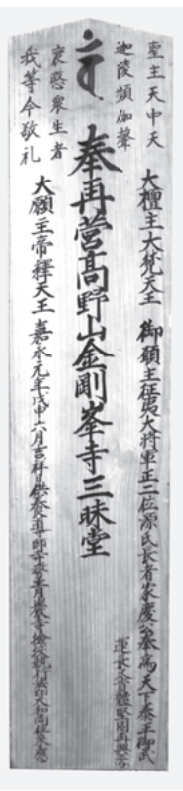
（裏）  
若末法世人 長誦此真言  
刀兵不能害 水火不焚漂



26 壇上加藍三昧堂嘉永元年（一八四八）棟札 総高607mm 肩高592mm 上幅130mm 下幅129mm 厚ヤ13mm 杉 尖頭 釘穴なし

（表）  
聖主天中天 大檀主大梵天王 御願主征夷大將軍正二位源氏長者家慶公奉為天下泰平御武  
運長久貴體堅固再興焉  
我等今敬礼 大願主帝釋天王 嘉永元年戊申六月吉祥日供養導師寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位來應

（裏）  
若末法世人 長誦此真言  
刀兵不能害 水火不焚漂



27 壇上加藍愛染堂嘉永元年（一八四八）棟札 総高762mm 肩高744mm 上幅142mm 下幅142mm 厚ヤ13mm 杉 尖頭 釘穴なし

（表）  
聖主天中天 大檀主大梵天王 御願主征夷大將軍正二位源氏長者家慶公奉為天下泰平御武運長久貴體堅固再建之  
迦陵頻伽聲  
大檀主大梵天王 御願主征夷大將軍正二位源氏長者家慶公奉為天下泰平御武運長久貴體堅固再建之

（裏）  
若末法世人 長誦此真言  
刀兵不能害 水火不焚漂

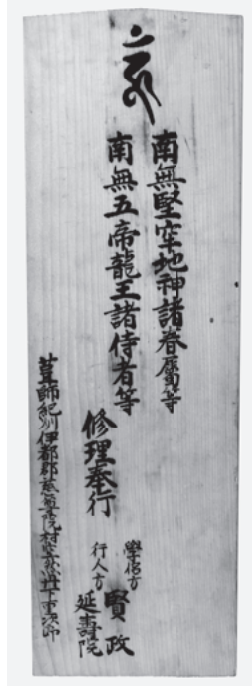
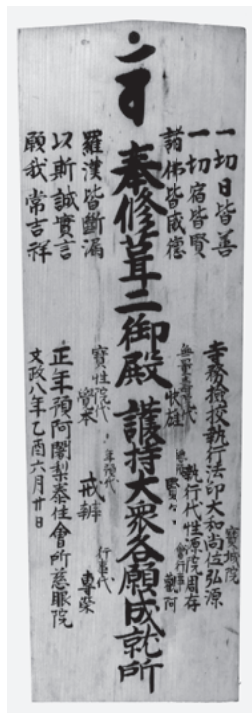


小屋束打ち付け

22 壇上加藍高野明神社文政八年（一八二五）修葺棟札 総高453mm 上幅153mm 厚×18mm 尖頭 釘穴なし

(表) (バン) 奉修葺二御殿 護持大衆各願成就所  
 一切日皆善 寺務檢校執行法印大和尚位弘源  
 一切宿皆賢 無量壽院代 執行代性源院周存  
 諸佛皆威德 快德 賢了 會行事 觀阿  
 羅漢皆斷漏 實性院代 年預代 行事代  
 以斯誠實言 覺本 戒辨 専榮  
 願我常吉祥 正年預阿闍梨泰住會所慈眼院  
 文政八年乙酉六月廿日

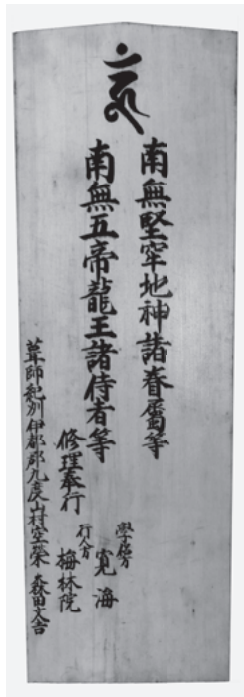
(裏) (ウン) 南無堅牢地神諸眷屬等  
 南無五帝龍王諸侍者等  
 修理奉行 學侶方賢 政  
 行人方 延壽院  
 葺師紀州伊都郡慈尊院村空然丹下重次郎



23 壇上加藍高野明神社弘化二年（一八四五）修葺棟札 総高453mm 上幅153mm 厚×17mm 尖頭 釘穴なし

(表) (バン) 奉修葺二御殿護持大衆各願成就所  
 一切日皆善 寺務檢校執行法印大和尚位弘源  
 一切宿皆賢 實性院代 執行代大聖院靈明  
 諸佛皆威德 覺龍 圓教 水起  
 羅漢皆斷漏 無量壽院代 年預代 行事代  
 以斯誠實言 證辨 真全 自證  
 願我常吉祥 正年預阿闍梨增球 會所慈眼院  
 弘化二年乙巳六月廿日

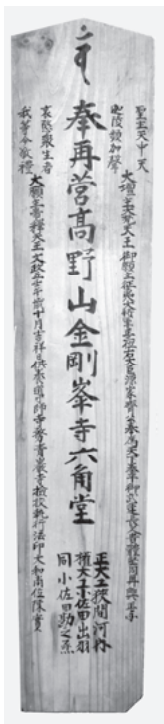
(裏) (ウン) 南無堅牢地神諸眷屬等  
 南無五帝龍王諸侍者等  
 修理奉行 學侶方 寬海  
 行人方 梅林院  
 葺師紀州伊都郡九度山村空榮 森田文吉



24 壇上加藍六角堂文政五年（一八二二）棟札 総高864mm 肩高841mm 上幅174mm 下幅154mm 厚×22mm 杉 尖頭 釘穴なし

(表) (バン) 奉再宮高野山金剛峯寺六角堂  
 聖主中天 大壇主大梵天王御願主征夷大將軍正二位右大臣源家齊公奉為天下泰平御武運長久貴體堅固再興焉  
 迎陵頻加聲  
 哀感衆生者 大願主帝釋天王文政五年壬午歲十月吉祥日供養導師寺務書巖寺檢校執行法印大和尚位陳實  
 我等今敬禮 同 小佐田勘之照

(裏) (ウチ) 若末法世人 長誦此真言  
 (カ) シヤ (ク) テク  
 (マ) シニキリシ  
 (メ) フラ (セ) フラ  
 若末法世人 長誦此真言  
 刀兵不能害 水火不焚漂



20 壇上加藍丹生明神社弘化二年（一八四五）修葺棟札 総高457mm 上幅153mm 厚×17mm 尖頭 釘穴なし

一切日皆善  
一切宿皆賢  
諸佛皆威德  
羅漢皆斷漏  
以斯誠實言  
願我常吉祥

寺務檢校執行法印大和尚位專修  
執行代大聖院靈明  
實性院代 會行事 總預 永超  
覺龍 國教  
無量壽院代 年預代 行更代  
羅漢皆斷漏 進辨 宜全 自證  
以斯誠實言 弘化二年乙巳六月廿日

(裏) (ウ)

南無堅牢地神諸大眷屬  
南無五帝龍王諸侍者等

學侶方 寬海  
修理奉行 行人方 梅林院  
葺師紀州伊都郡九度山村空榮 森田文吉

一切日皆善  
一切宿皆賢  
諸佛皆威德  
羅漢皆斷漏  
以斯誠實言  
願我常吉祥

寺務檢校執行法印大和尚位專修  
執行代大聖院靈明  
實性院代 會行事 總預 永超  
覺龍 國教  
無量壽院代 年預代 行更代  
羅漢皆斷漏 進辨 宜全 自證  
以斯誠實言 弘化二年乙巳六月廿日

南無堅牢地神諸大眷屬  
南無五帝龍王諸侍者等

學侶方 寬海  
修理奉行 行人方 梅林院  
葺師紀州伊都郡九度山村空榮 森田文吉

21 壇上加藍高野明神社文化二年（一八〇五）修葺棟札 総高457mm 上幅153mm 厚×12mm 尖頭 釘穴なし

一切日皆善  
一切宿皆賢  
諸佛皆威德  
羅漢皆斷漏  
以斯誠實言  
願我常吉祥

寺務檢校執行法印大和尚位專修  
執行代西南院隆本  
實性院代 總預 會行事 潭道  
乘如 修嚴  
無量壽院代 年預代 行更代  
羅漢皆斷漏 同阿 教盈 如實  
以斯誠實言 正年預阿達梨曇海會所普賢院  
文化二年乙丑六月廿日

(裏) (ウ)

南無堅牢地神諸眷屬等  
南無五帝龍王諸侍者等

學侶方 圓秀  
修理奉行 行人方 德藏院  
葺師紀州伊都郡九度山村空運 森田文吉芳房

一切日皆善  
一切宿皆賢  
諸佛皆威德  
羅漢皆斷漏  
以斯誠實言  
願我常吉祥

寺務檢校執行法印大和尚位專修  
執行代西南院隆本  
實性院代 總預 會行事 潭道  
乘如 修嚴  
無量壽院代 年預代 行更代  
羅漢皆斷漏 同阿 教盈 如實  
以斯誠實言 正年預阿達梨曇海會所普賢院  
文化二年乙丑六月廿日

南無堅牢地神諸眷屬等  
南無五帝龍王諸侍者等

學侶方 圓秀  
修理奉行 行人方 德藏院  
葺師紀州伊都郡九度山村空運 森田文吉芳房



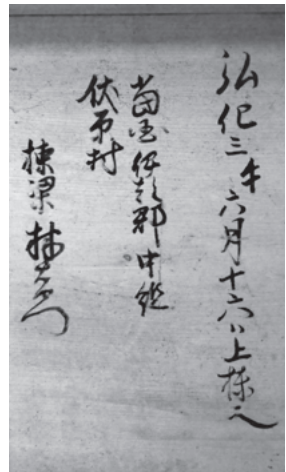
16 壇上加藍御影堂琵琶板弘化三年（一八四六）墨書

弘化三年六月十六日上棟之

当国伊都郡中組

伏原村

棟梁 林右衛門

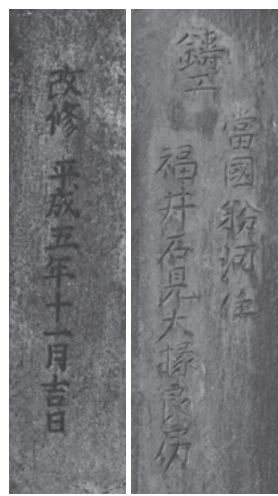


17 壇上加藍御影堂当初・平成五年（一九九三）宝珠露盤刻銘

鑄工 當国粉河住

福井石見大掾良房

改修 平成五年十一月吉日



18 壇上加藍丹生明神社文化二年（一八〇五）修葺棟札 総高458mm 上幅153mm 厚さ13mm 尖頭 釘穴なし

(表) (ア) 奉修葺一御殿 護持大衆各願成就所

一切日皆善  
一切宿皆賢  
諸佛皆威德  
羅漢皆斷漏  
以斯誠實言  
願我常吉祥

寺務檢校執行法印大和尚位義辨  
執行代西南院隆本  
實性院代 總預 俊藏  
會行事 源道  
無量壽院代 行事代 年預代 教盈  
同阿如實  
正年預阿闍梨兼海會普賢院  
文化二年乙丑六月廿日

(裏) (ウ) 南無堅牢地神諸眷屬等  
南無五帝龍王諸侍者等

修理奉行 學信方 圓 秀  
行人方 德藏院  
葺師紀州伊都郡九度山村空運 森田文吉芳房

19 壇上加藍丹生明神社文政八年（一八二五）修葺棟札 総高458mm 上幅150mm 厚さ18mm 尖頭 釘穴なし

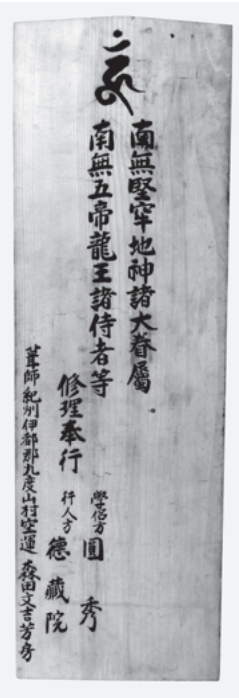
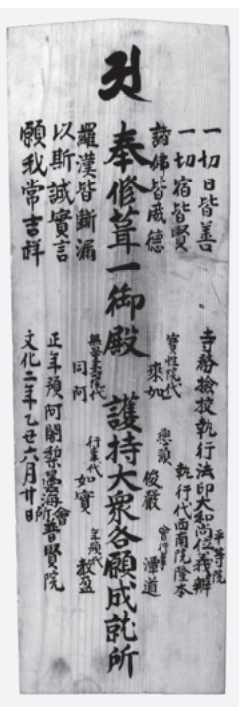
(表) (ア) 奉修葺一御殿 護持大衆各願成就所

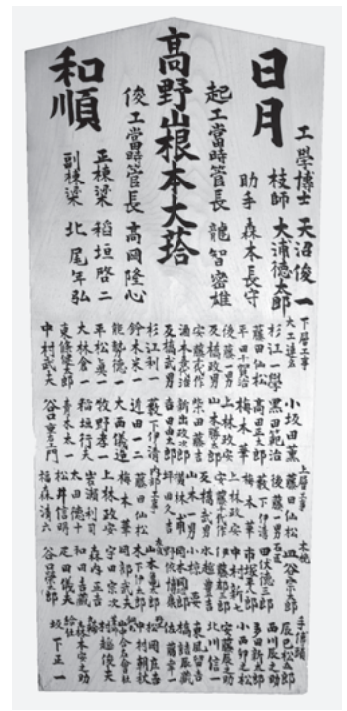
一切日皆善  
一切宿皆賢  
諸佛皆威德  
羅漢皆斷漏  
以斯誠實言  
願我常吉祥

寺務檢校執行法印大和尚位弘源  
執行代性源院隆存  
無量壽院代 總預 賢了  
會行事 觀阿  
實性院代 年預代 行事代  
覺本 戒辨 專榮  
正年預阿闍梨兼住會所慈眼院  
文政八年乙酉六月廿日

(裏) (ウ) 南無堅牢地神諸眷屬等  
南無五帝龍王諸侍者等

修理奉行 學信方 賢 政  
行人方 延壽院  
葺師紀州伊都郡慈尊院村空然丹下重次郎



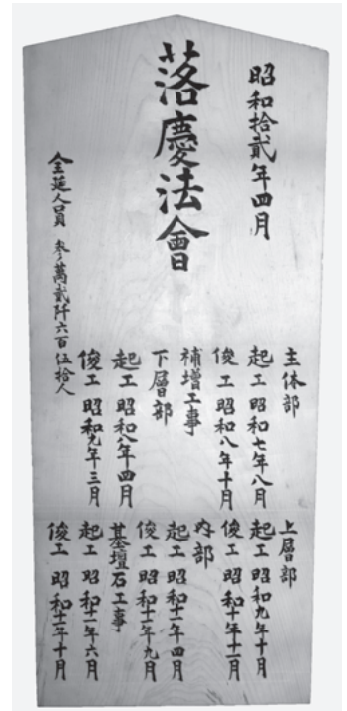


12 壇上加藍西塔心柱天保三年(一八三二)墨書

高野山小田原  
中口口口口口  
針渡口口口  
良天保三年  
庄口口口  
口口口  
口口口

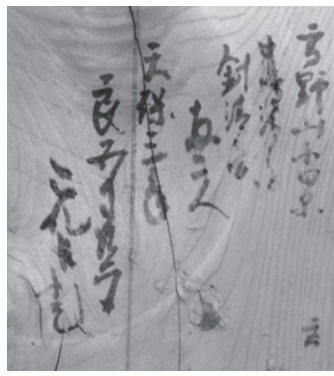
13 壇上加藍西塔四天柱添木墨書

江戸 本所石原外 手丁  
合口屋 磯吉  
口七月十二日入



14 壇上加藍西塔四天柱添木墨書

京都四条高倉  
彩色師 八幡屋嘉兵衛  
五ノ室谷大佛庄  
彩色師 喜三郎

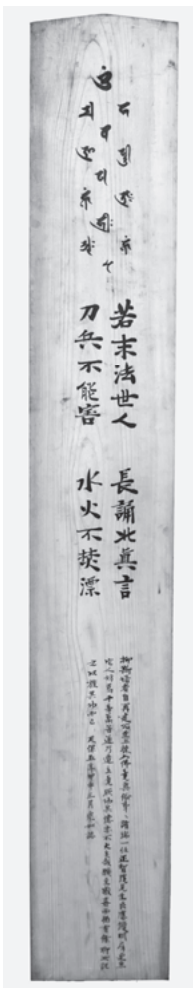
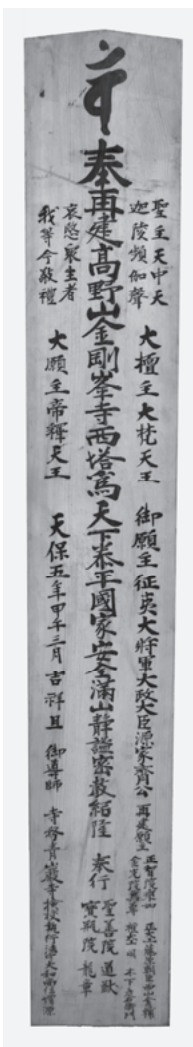


15 壇上加藍西塔天保五年(一八三四)棟札 総高1513mm 肩高1498mm 上幅235mm 下幅213mm 厚サ21mm 檜尖頭 釘穴なし

聖主天中天 大檀主大梵天王 御願主征夷大將軍大政大臣源家齊公 再建願主 正智院乘如 正大工藤原朝臣西山金輔  
迦陵頻伽聲 御願主征夷大將軍大政大臣源家齊公 再建願主 金光院眞導 權大工 同 木下彦右衛門  
(表(パン)) 奉再建高野山金剛峯寺西塔爲天下泰平國家安全滿山靜謐密教紹隆 奉行 聖善院 道猷  
哀感衆生者 大願主帝釋天王 天保五年甲午三月 吉祥且 御導師 寺務青巖寺檢校執行法印大和尚位増源  
我等今敬禮

(裏)  
(カ) (シユニ) (タラシ) (ウ)  
(チ) (ハ) (シヤ) (キリク) (ク)  
(マ) (ツロ) (ウシ) (アキ)  
若末法世人 長誦此眞言  
刀兵不能害 水火不焚漂

抑斯塔者自再建始至上棟入佛竟眞俗事ニ諸端一任正智院見主良應慶明房更無  
它人妨焉千辛萬苦遂乃造立竟厥功其德亦不大矣哉願主威喜而猶有餘聊此記  
之以旌其功而已 天保五年甲午三月乘如誌





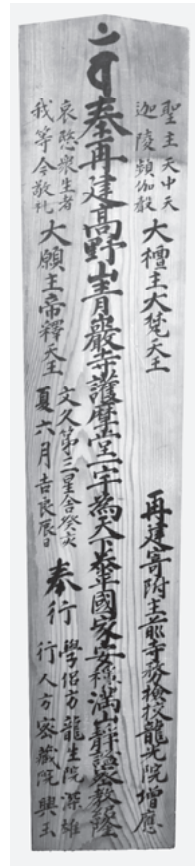
5 金剛峯寺護摩堂文久三年（一八六三）棟札 總高909mm 肩高897mm 上幅180mm 下幅156mm 厚さ14mm 杉尖頭 釘穴なし

（表）（バン） 奉再建高野山青巖寺護摩堂一字為天下泰平國家安穩滿山靜謐密教紹隆

聖主中天 大檀主大梵天王 再建寄附主前寺務檢校龍光院增應  
 迎陵願伽藍 大願主帝釋天王 文久第三星舍癸亥 奉行 學侶方 龍生院深雄  
 哀感衆生者 我等今敬禮 夏六月吉良辰日 密藏院興玉

（裏）  
 (カ) (シユニ) (タラーシ) (ワン)  
 (オン) (ハ) (シセ) (キリーシ) (タ)  
 (マ) (ソロ) (ワン) (アキ)

若末法世人長誦此真言 正大工當國伊都郡大野邑岡田元次郎光高  
 刀兵不能害水火不焚漂 助大工同國若山住吉町小田政右衛門重孝



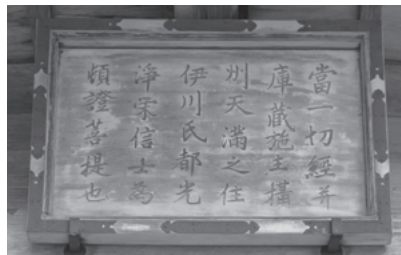
6 金剛峯寺護摩堂文久三年（一八六三）棟札 打ち付け

（表）（バン） 奉再建高野山青巖寺護摩堂一字奉為金輪聖皇玉體安穩大樹幕下貴靜堅固再興之

聖主中天 文久三癸亥一年六月吉良日 再建施主前寺務檢校善門主兼龍光院增應  
 迎陵願伽藍 大檀主大梵天王 普請奉行 學侶方龍生院深雄同□□人達方邑田中□□□□□  
 哀感衆生者 我等今敬禮 大願主帝釋天王 行人方密藏院興玉同□□人河□邑河□□□□□

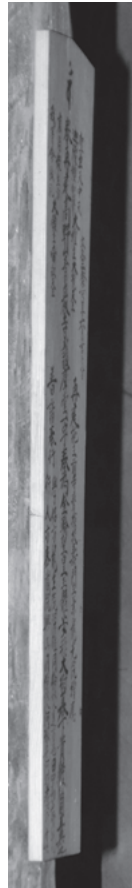
7 金剛峯寺經藏延寶七年（一六七九）額

（額刻銘） 當一切經并 庫藏施主撰 州天滿之住 伊川氏都光 淨栄信士為 頓證菩提也



（額裏面墨書）

額龍光院有筭書 延寶七己未年八月吉辰 都光淨栄信士 延寶七年七月四日入寂 一切經同庫藏淨栄信士就當時門主無量壽院 實秀闍梨望之是故從無量壽院老圖正 淨栄宿坊 安樂院



小屋梁打ち付け

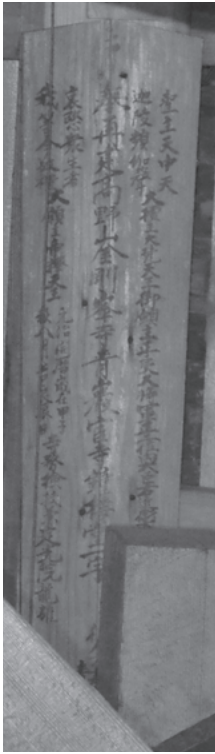
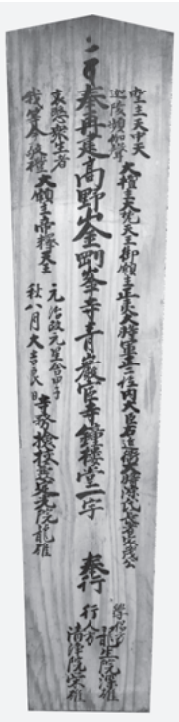
8 金剛峯寺鐘樓元治元年（一八六四）棟札 總高723mm 肩高709mm 上幅163mm 下幅132mm 厚さ10mm 杉尖頭 釘穴なし

（表）（バン） 奉再建高野山金剛峯寺青巖官寺鐘樓堂一字 奉行 龍生院深雄

聖主中天 大檀主大梵天王御願主正夷大將軍正一位内大臣右近衛大将源氏長者家茂公  
 迎陵願伽藍 學侶方 龍生院深雄  
 哀感衆生者 元治改元星舍甲子 寺務檢校兼定光院龍雄  
 我等今敬禮 大願主帝釋天王 秋八月大吉良日

（裏）  
 (カ) (シユニ) (タラーシ) (ワン)  
 (オン) (ハ) (シセ) (キリーシ) (タ)  
 (マ) (ソロ) (ワン) (アキ)

若末法世人長誦此真言 大工能登國鹿嶋郡秋森邑住藤田長五郎 平直光  
 刀兵不能害水火不焚漂



棟木打ち付け



棟札・墨書等

金剛峯寺

大主殿

1 金剛峯寺大主殿文久二年（一八六二）棟札

真然堂

2 金剛峯寺真然堂寛永十七年（一六四〇）棟札

3 金剛峯寺真然堂延宝三年（一六七五）上葺棟札

4 金剛峯寺真然堂昭和十四年（一九三九）修理墨書

護摩堂

5 金剛峯寺護摩堂文久三年（一八六三）棟札

6 金剛峯寺護摩堂文久三年（一八六三）棟札

経蔵

7 金剛峯寺経蔵延宝七年（一六七九）額

鐘楼

8 金剛峯寺鐘楼元治元年（一八六四）棟札

壇上伽藍

9 壇上伽藍金堂万延元年（一八六〇）棟札

10 壇上伽藍金堂昭和四年（一九三九）棟札写

根本大塔

11 壇上伽藍根本大塔昭和十一年（一九三六）棟札

西塔

12 壇上伽藍西塔心柱天保三年（一八三二）墨書

13 壇上伽藍西塔四天柱添木墨書

14 壇上伽藍西塔四天柱添木墨書

15 壇上伽藍西塔天保五年（一八三四）棟札

御影堂

16 壇上伽藍御影堂琵琶板弘化三年（一八四六）墨書

17 壇上伽藍御影堂当初・平成五年（一九九三）宝珠露

盤刻銘

山王院丹生明神社

18 壇上伽藍丹生明神社文化二年（一八〇五）修葺棟札

山王院高野明神社

19 壇上伽藍丹生明神社文政八年（一八二五）修葺棟札

20 壇上伽藍丹生明神社弘化二年（一八四五）修葺棟札

21 壇上伽藍高野明神社文化二年（一八〇五）修葺棟札

22 壇上伽藍高野明神社文政八年（一八二五）修葺棟札

23 壇上伽藍高野明神社弘化二年（一八四五）修葺棟札

六角堂（六角経蔵前身堂）

24 壇上伽藍六角堂文政五年（一八二二）棟札

25 壇上伽藍六角堂文政五年（一八二二）棟札

三昧堂

26 壇上伽藍三昧堂嘉永元年（一八四八）棟札

愛染堂

27 壇上伽藍愛染堂嘉永元年（一八四八）棟札

大会堂

28 壇上伽藍大会堂嘉永元年（一八四八）棟札

孔雀堂

29 壇上伽藍孔雀堂嘉永五年（一八五二）棟札

三宝荒神社

30 三宝荒神祠明和九年（一七七二）再建棟札

大門

31 金剛峯寺大門宝永二年（一七〇五）棟札

32 金剛峯寺大門明治二十八年（一八九五）修理棟札

徳川家霊台

33 徳川家霊台秀忠霊屋瑞垣墨書

女人堂

34 女人堂昭和二十七年（一九五二）屋根替棟札

奥之院

35 奥之院密厳堂寛文十一年（一六七二）棟札

36 奥之院護摩堂文化九年（一八一二）棟札

円通寺

37 円通寺土蔵弘化四年（一八四七）棟札

土蔵

38 円通寺山門天保四年（一八三三）棟札

山門

39 西南院経蔵元和二年（一六一六）棟札

40 西南院経蔵元禄七年（一六九四）棟札

西南院

41 金剛三昧院表門文政八年（一八二五）棟札

表門

42 普賢院本堂修復・屋根替棟札

本堂

43 蓮華定院本堂昭和四十八年（一九七三）増築莊嚴棟札

蓮華定院

44 蓮華定院山門万延元年（一八六〇）棟札（東）

山門

45 蓮華定院山門万延元年（一八六〇）棟札（西）

神通寺

46 神通寺七社大明神社頭並脇宮二社文久元年

（一八六一）上葺棟札

47 神通寺七社大明神社頭並脇宮二社文久元年

（一八六一）上葺棟札

その他

48 金毘羅宮天明七年（一七八七）棟札

49 封大師釈迦牟尼如来享保二年（一七一七）木札



---

## 高野町の歴史的建造物

令和5年(2023)3月31日発行

発行 高野町教育委員会  
〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町高野山486番地

編集 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所  
〒630-8577 奈良県奈良市二条町2丁目9番1号

印刷 能登印刷株式会社  
〒920-0855 石川県金沢市武蔵町7番10号

ISBN 978-4-909931-99-3

---

### Historical Buildings of Koya town

Edited by Nara National Research Institute for Cultural Properties

Koya town, 2023

ISBN 978-4-909931-99-3 Printed in Japan





